



# 埼玉県立史跡の博物館紀要 第6号

## Contents

緑泥片岩製石棒に見る需給システム — 縄文時代後晩期の石棒製品の生産と広域流通 —	栗島義明
縄紋時代前期の搬入土器 — 埼玉県内における北白川下層式 —	近江 哲
『埼玉の古墳出現』断章	利根川章彦
埼玉古墳群の構成原理	関 義則
装飾馬具は下賜品か — 「威信財説」への疑義 —	中村倉司
平成22年度 埼玉古墳群周辺確認調査の報告 — 埼玉8・9・10号墳の確認調査 —	佐藤康二
さきたま講座のアンケート分析	西口正純
《追悼》さきたま風土記の丘整備事業と柳田敏司氏	関 義則

## はじめに

「さきたま」「嵐山」の二つの「史跡の博物館」は、県民をはじめ多くの方々に、より質の高いサービスと効率的な運営を目指して、平成18年度の再編整備によってスタートしました。

「さきたま史跡の博物館」は埼玉古墳群、「嵐山史跡の博物館」は菅谷館跡を擁する埼玉を代表する国指定史跡を背景にして、過去の実績を踏まえながら、新たな博物館づくりを目指して様々な事業を展開しております。

本年度も「さきたま史跡の博物館」においては企画展「スローフードの考古学」、最新出土品展「地中からのメッセージ」、通史展「埼玉あの遺跡、この遺跡」などを開催し、企画展示室の活用と観覧に努力しております。さらに、埼玉古墳群の保存整備、さきたま体験工房の運営や県民に対する体験学習事業・さきたま講座・史跡探訪などの事業を実施しています。

一方、「嵐山史跡の博物館」では企画展「鎌倉街道をゆく」、巡回文化財展「比企のタイムカプセル」、ロビー展「堅香子俳句展」などを開催しつつ企画展関連シンポジウム・歴史講座・野外歴史教室などの事業を実施し、県民の皆様のご要望やご期待に添うよう積極的に活動しております。

本誌は、職員が日ごろの調査研究を踏まえ、自己研鑽に努めた成果を発表したものです。本誌が各地の博物館・図書館等で広く活用され、皆さまが史跡や考古・歴史資料に関する理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査や執筆にあたり御協力いただいた方々に対し深く感謝を申し上げますと共に、今後ともより一層の御支援と御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成24年3月

埼玉県立さきたま史跡の博物館長  
兼 埼玉県立嵐山史跡の博物館長

井上 肇

# 埼玉県立史跡の博物館紀要

## 第 6 号

### 目 次

#### 緑泥片岩製石棒に見る需給システム

—縄文時代後晩期の石棒製品の生産と広域流通— ……………栗島 義明 (1)

#### 縄紋時代前期の搬入土器

—埼玉県内における北白川下層式—……………近江 哲 (25)

『埼玉の古墳出現』断章……………利根川章彦 (45)

埼玉古墳群の構成原理……………関 義則 (53)

#### 装飾馬具は下賜品か

—「威信財説」への疑義— ……………中村倉司 (95)

#### 平成22年度 埼玉古墳群周辺確認調査の報告

—埼玉8・9・10号墳の確認調査—……………佐藤康二 (121)

さきたま講座のアンケート分析……………西口正純 (133)

《追悼》 さきたま風土記の丘整備事業と柳田敏司氏……………関 義則 (139)

# 緑泥片岩製石棒に見る需給システム

— 縄文時代後晩期の石棒製品の生産と広域流通 —

栗島 義明

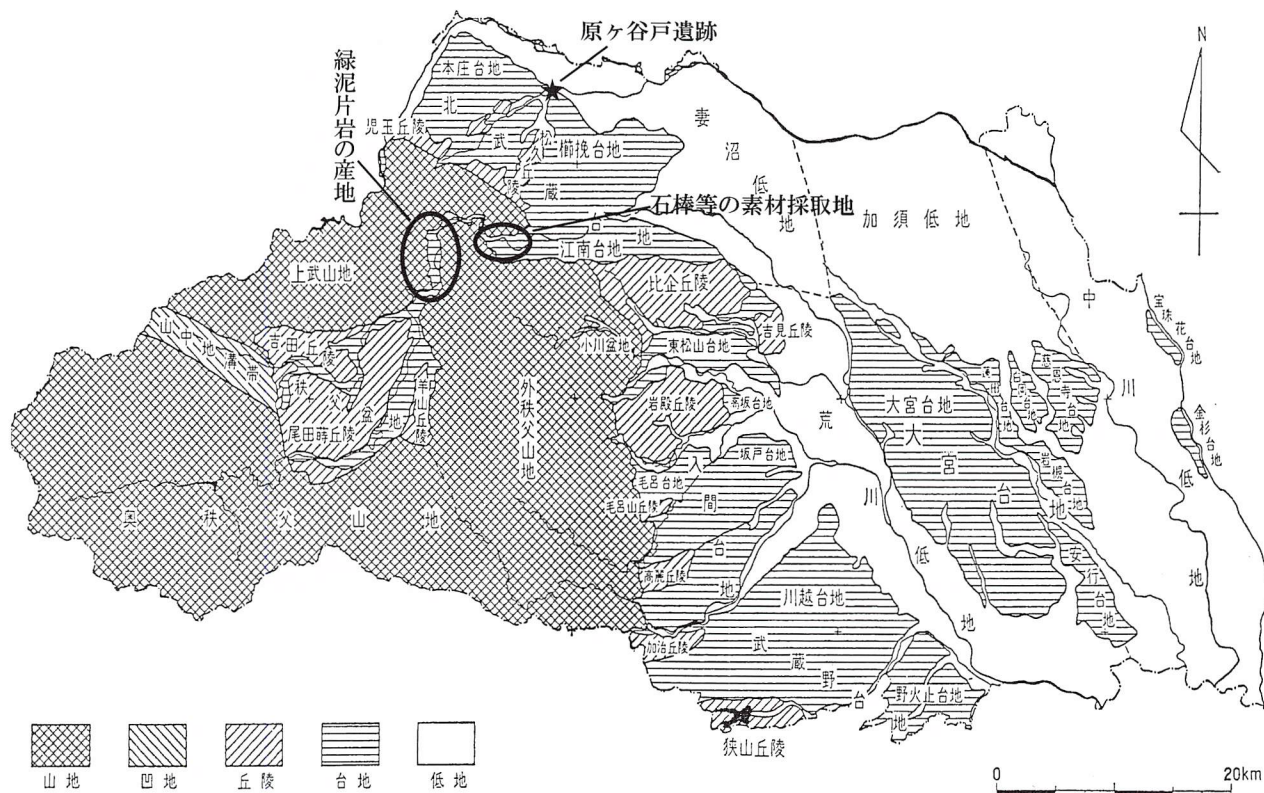
## 1 はじめに

考古資料の分析を通して地域社会の動向を探ろうとした場合、沿岸部地域と比較して内陸部地域では遺物分析の範囲・情報等に於いて大きなハンデを背負っていると言わざるを得ない。卑近な例を挙げるならば沿岸部地域にあっては、遺跡内に残された生活(食糧)残渣としての豊富な貝類の分析を通じたより多角的な考古学的検討が可能となる。貝種の特定やその分量、廃棄単位や成長線などと言ったマクロ分析から得られる情報が如何に大きいか、1980年代以降の一連の貝塚研究の成果を紐解くまでもなく一目瞭然である。宮城県里浜貝塚を端緒とした貝塚研究の方向性は、廃棄に見られる「単位性」をキーワードとして食料資源獲得と調理、加工、そして投棄等の時間軸特定の精緻化を推し進め資源調達内容や調理方法、廃棄方法や単位、その時期、加えて貝塚形成の要因のプロセスまでをも鮮明に浮き彫りとした(岡村1983)。近年ではこうしたアプローチは一層尖鋭化しつつ、同時に集落を越えた物資や遺物の流通・分配などと言った地域社会内での資源活用実体に迫る研究成果も得られつつある(阿部2010)。

新たな研究方針が内包する豊かな内容について疑問を挟む余地は無いものの、分析資料及び対象が欠落した内陸部遺跡群での同様な研究推進や検証研究は不可能とも言える状況下にある。貝類・魚骨等に代わる豊かな情報を併せ持つ考古資料の欠落が最も大きな要因であると言えよう。それ故に近年の貝塚研究で提示されている「地域連合型社会」とも言い得る、扶助的な相関関係の成立により有機的に結ばれた縄文時代後・晩期遺跡群の姿、更には地域社会どうしの結び付きについての追研姿勢や方向性が研究間で共有し得ていないのかも知れない。

さて、著者は以前より荒川流域の石材資源について眼を向けてきたが、特に埼玉県域を代表する石材資源である緑泥片岩<sup>(1)</sup>に注目し、その局所的分布の確認を含めた現地踏査を繰り返し進めてきた。既に古墳時代の横穴式石室構築に際しての緑泥片岩利用については、研究成果の一部を公表したところである(栗島2011)。その際には荒川中流域に分布する三波川変成岩帯中に於ける緑泥片岩相のミクロな分布・産状が把握されたと同時に、緑泥片岩相の様相が一律的ではなくて極めて多様であることを再認識することができた。要約するならば一口に緑泥片岩とは言いつつも、片理面や褶曲、断層などから利用目的によっては使用不可能なものも多く存在し、特に古墳時代の横穴式石室部材や石棺、中世の板石塔婆などに用いられた断層や褶曲が少ない所謂「スジが良く」て使い(加工)勝手の良い優良石材は、特定の箇所でのみ獲得されていた蓋然性が極めてたかいのである。

緑泥片岩は主に外秩父山地を形作るその母体でもある三波川帯中に貫入するかたちで見出され、岩帯は数十mから百m以上に及んでいるが、荒川本流に於ける河床面を除いては岩体露出箇所は極めて希であった。この為に板碑生産が本格的に開始される中世段階までは、緑泥片岩の利用は主に河床面や近接する段丘面に露呈した箇所限定されていたものと推察され、岩相の比較検討から古墳時代の横穴式石室の構築部材や石棺用材については、荒川中流の長瀨から



第1図 原ヶ谷戸遺跡の位置と緑泥片岩産地

親鼻橋下までの緑泥片岩が専ら利用されていたものと推察された。

同じ緑泥片岩という石材利用に関しても、時代や目的とした対象物によって必要とされた緑泥片岩の産状・形状が相違し、従ってその獲得場所や方法を違えていた可能性はたかい。今回は縄文時代の石棒・石剣を取り上げ、当該期に於ける緑泥片岩の利用形態とその流通を取り上げ、併せて縄文地域社会の動向とその相関的関連についても言及できたならばと考えている。

## 2 石棒製作遺跡の様相 〈原ヶ谷戸遺跡〉

原ヶ谷戸遺跡は埼玉県北部、深谷市岡部に位置する縄文時代後・晩期の加曾利B IIIから安行III bを中心とした遺跡である((財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団1993)。遺跡は櫛引台地の北端部付近に位置しており、寄居町を扇頂部とする櫛引台地が利根川(妻沼)低地を望む、まさに扇端部の崖線上に形成された遺跡と言える。国道17号バイパスの道路建設に先立った発掘調査では、台地上から斜面部にかけての調査区から住居跡や土壇群、そして包含層中から多量の土器・石器類が検出された。当該期の竪穴住居跡群と同様に本遺跡でも遺構掘り込みが黒色土中に見られ、壁面(住居輪郭)の確認されたものは11軒中僅かに3軒であり、他は柱穴や炉跡等の確認・検出を根拠に住居として認定されたものである。住居跡群の重複も著しいことから、各種遺物群の帰属問題についての詳細は不明と言わざるを得ない。

本遺跡を特徴付ける遺物群として石棒・石剣類が挙げられる。緑泥片岩を石材として用いた石棒類は図示されたものだけでも28点存在するが、注目すべきはその殆どが表裏面や両側面に整形時の敲打痕跡を明瞭に留めている点、即ちこれらの資料が製作途上の未製品であったことにある。前章でも触れたように遺跡は櫛引台地北端部に位置しており、遺跡の北側を東流する

小山川を含め一帯は総て利根川水系に属している。扇状地形とは言いつつも基盤礫層の構成は、荒川のものではなくて利根川や旧児玉町域から東流する小山川に由来していると判断して間違いない。つまり、遺跡周辺の河床面や段丘礫層中にて石器原材である緑泥片岩を得ることは不可能であったと判断されるのである。

原材料である緑泥片岩の確保が遺跡周辺で為し得ないにも関わらず、何故に原ヶ谷戸遺跡では同石材を用いた石棒製作がおこなわれているのか、先ずはその問題へのアプローチの為に出土した遺物観察を進めておこう。出土した石棒は調整・整形などの加工作業が進み、その表面に素材形態を留めていないものも存在するが、図示された資料の大半を占める22点(報告書図版第242図1・3・4、第243図1・2、第244図3～6、第245図1・3、第246図1～5、第247図1～4、第248図1・2)で素材状態を確認することができた。以下に各遺物の観察結果を基にその特徴を抽出してゆくこととしよう。

### 〈素材形状の復原〉

原ヶ谷戸遺跡から出土した石棒は、未製品であるうえに欠損品が大半を占めていることから何れを最終形態としていたのか断定できない。加えて一部の資料には石剣の破片等が含まれている可能性もあるが、両者を未製品や欠損品の姿をもって厳密に特定することは困難であるので、本論では一括して石棒と呼称して議論を進めていることを最初に断っておきたい。

石棒の未製品群は基本的に平坦な表裏面と直線、或いはやや彎曲する平行した両側面とによって構成されており、何れの未製品も左右両側面部には形態作出に関わる剝離と敲打、そして研磨痕跡等を留めているのが一般的である。こうした製作の初期工程の姿を留めるのが平坦な表裏面であり、当該箇所は最終工程である研磨段階まで素材状態を保持している場合が多く、その観察を通じてどのような素材形態が用いるのが一般的であったかを観察することが可能で



第2図 原ヶ谷戸遺跡出土緑泥片岩製石棒等

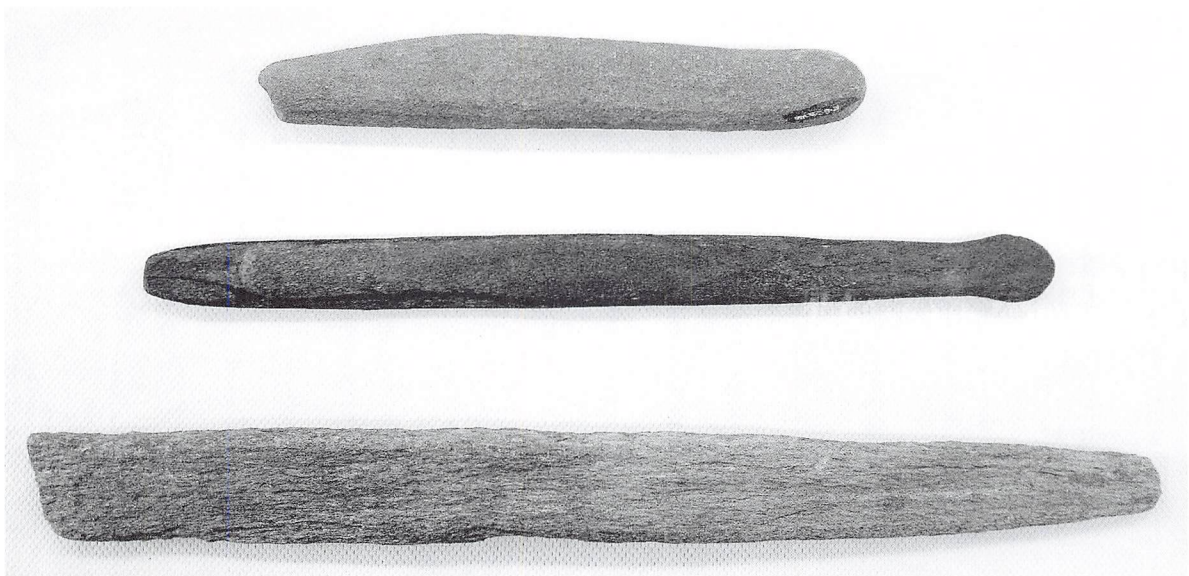
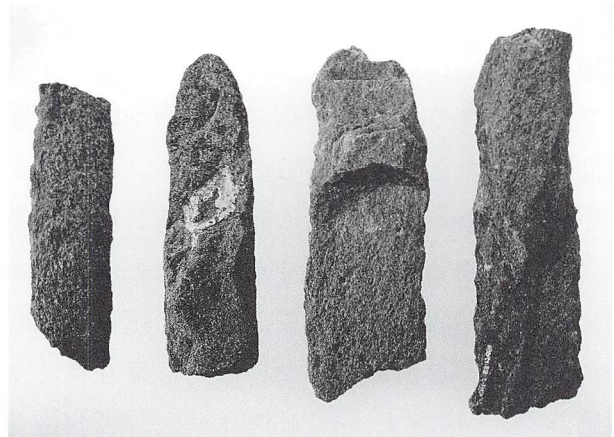
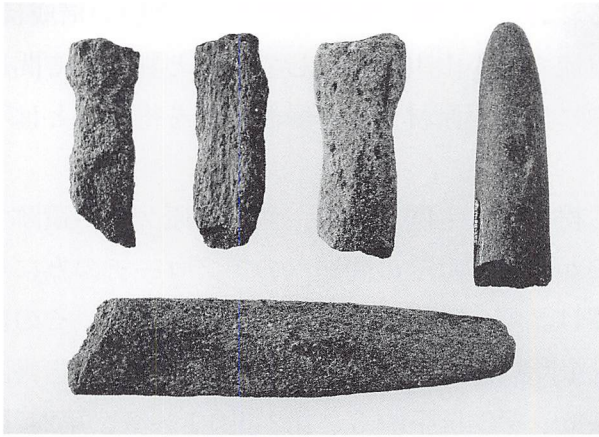


写真1 原ヶ谷戸遺跡出土緑泥片岩製石棒

ある。特に緑泥片岩は変成岩というその性質上、転石の場合と露頭採取された場合とでは表面状態が著しく異なることから、観察を通じて得られる情報はこれら石棒の素材獲得が何処でなされ、それがどのような状態のものであったかを知る手がかりとなり得る。石棒をその利用素材の復原という観点から改めて観ると、基本的には以下の二類別が最も妥当な分類と言うことができようか。

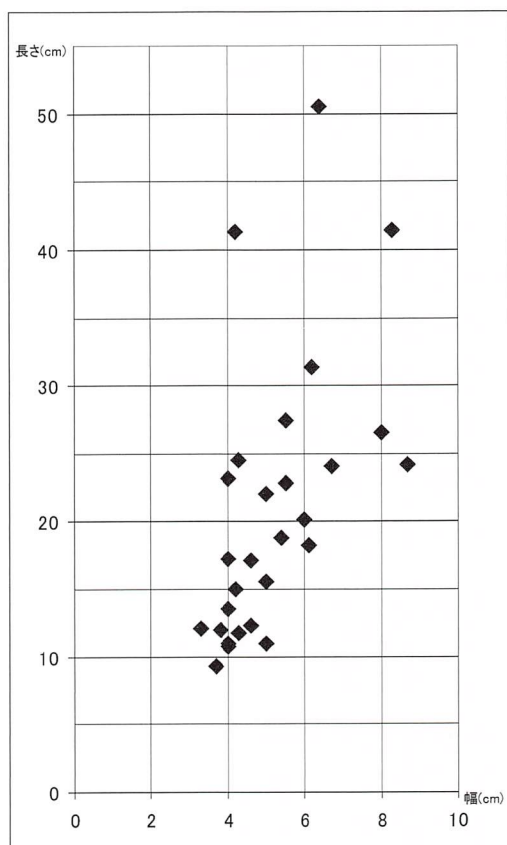
I 類 扁平棒状の緑泥片岩(礫)を用いたもの

II 類 板状に分割した素材を用いたもの

言うまでもなく前者が河床礫であり、後者は河床面の岩体や転石となった大型礫からの剝離や分割によって素材獲得をおこなっているものと考えられる。上記した遺跡出土の計22点の資料の大半はII類に類別されるものであり、I類とした河床面で採取されたと考えられる転石を素材としたものは僅かに第242図3、第243図1・2、第244図6、第248図2の計5点に過ぎなかった。これは板状に剝がれ易いという緑泥片岩ではあっても、石棒や石剣に適した狭長・扁平な素材礫の獲得・採取については、必ずしも容易ではなかったことを物語っているが、しかし、決してそれだけではないだろう。これらの資料は一部に自然面(礫表皮面)の残存が観察できた為に素材確認が可能となったが、形態作出・整形・敲打・研磨と言った一連の製作工程を考えると、他資料の中に工程途中で棒状扁平礫の表裏面が失われてしまった例も少なくないに違いない。

また、II類に該当すると考えられる第242図1・4、第244図2～5、第245図1・3、第246図3～5、第247図1～5など大半の資料については、その表裏が緑泥片岩の薄く板状に剝離された面そのものによって構成されている。これらが河床面に露出した岩体そのものから直接的に剝離されたとは考え難く<sup>(2)</sup>、寧ろ転石として河床面に点在する緑泥片岩の大型礫を分割し、それを素材として利用していた蓋然性の方がたかいことを示している。長さが50cm前後の緑泥片岩礫は現在でも寄居町内の荒川河原で簡単に確認することができ、石の目の走行方向を見極めて河原礫を打ち下ろせば、容易に石棒・石剣の板状素材獲得が適うのである。また河床面に転石として存在する緑泥片岩は一様に脆弱な部分を取り除かれ、総体的に均質で良質な箇所を含んでいる場合が多い。当然それらは当該石器で用いる石材としては申し分ない性質を持つと認識される。

改めてII類の資料を見ると第242図4や第245図1、第247図1を典型とするように、その表裏を分割(素材獲得)時の剝離面によって構成され、平行した両側縁については形態作出に伴う剝離面によって覆われた資料が存在する。何れの資料も剝離後の整形作業である敲打痕を留めているが、本遺跡ではこうした状態こそが一般的であることが伺い知れる。多くの資料がこのよ



第3図 原ヶ谷戸遺跡出土石棒長幅比



うに形態作出に伴う周辺加工を持つだけでなく、その剥離面を平坦にすべく敲打された痕跡が多数認められることは、遺跡搬入時の石棒・石剣の素材形態がこの状態であったことを示唆している。遺跡内で破片等が多量に出土している背景は、再調整と敲打作業とがここでおこなわれていた結果であろう。資料実体と運搬コストを考えるまでもなく、II類が遺跡搬入の素材形態を間接的に示唆すると理解して間違いあるまい。

### 3 緑泥片岩の特徴と産状

緑泥片岩は埼玉県域では縄文時代を通じて最もポピュラーな石材の一つであり、とりわけ荒川流域ではその傾向が強い。しかし当該石材の特徴を鑑みるまでもなく特定器種との結び付きが強固であり、特に緑泥片岩の石皿等への利用は前期以後に継続的に看取されている。一方で緑泥片岩と石棒の対応関係が本格的に成立するのは中期以後であったと考えられ、県内の後・晩期遺跡から出土する当該遺物はほぼ緑泥片岩製と言っても過言ではない。その背景として考えられるのは石棒・石剣等の形態的属性と緑泥片岩の特質とが見事に合致したからに他ならず、板状に剥がれ易い片岩の特徴が製作工程のなかで生かされるような工夫も多々認めることができる。恐らく最初は適度な厚さ(石棒・石剣各々の厚さ)に緑泥片岩を剥がすことから始める<sup>(3)</sup>。無論、扁平な棒状礫があれば言うことは無いであろうが、転石の場合では河川運搬の段階での衝撃等によりそうした特性が失われてしまうことが圧倒的に多かったに違いない。従って普通は大型礫や希に河床面に露呈した緑泥片岩岩体から直接、目的とする素材を剥離していたものと推察され、その際は褶曲や断層面の少ない片理面が水平方向に走る部分を狙って加撃すれば、比較的容易に目的とする片岩の剥離・獲得をおこなうことができたに違いない。加えて荒川の中流域の河床には敲打時に用いる硬質の花崗岩やホルンフェルス、チャートなどの円礫を労せずして確保でき、恐らく縄文人達もそれらを用い河床面にて母岩からの適度な素材剥離を進めていたのであろう。

ところで、原ヶ谷戸遺跡から出土した石棒未製品の重要な点は、それらが一律的に緑泥片岩という荒川中流域に於いて産出、或いは採取される石材を専ら用いていることにある。先に指摘したように原ヶ谷戸遺跡自体は利根川水系に属するものの、荒川水系の石材に限定して当該遺物を製作している背景は極めて興味深い考古学的事実であると認識される。しかも、荒川中流域には僅かに長瀨町大滝遺跡と花園町(現深谷市)橋屋遺跡の二箇所緑泥片岩を用いた石棒の製作跡らしき痕跡が確認されているのみであり、それ等の遺跡も本遺跡と比較した場合には遺物数量や遺跡範囲等が極めて小規模であり、何よりも製作工程品の出土が希少且つ不明瞭と言わざるを得ない。原ヶ谷戸遺跡では調査区が小規模であったこともあり、その数量は決して多いものとは言えないものの、製作途上の大型未成品が見出されること、そして報告書の中でも「緑泥片岩の小破片も多数検出されている」事実が述べられており、本遺跡内で整形に関わる作業工程が確実に、しかも集中的におこなわれていた点については疑問を挟む余地はない<sup>(4)</sup>。

ここで我々が思い浮かべるもっとも素直な疑問は、何故、緑泥片岩の獲得が容易な荒川中流域の長瀨町・寄居町周辺ではなく、何故に利根川低地を望む原ヶ谷戸遺跡に於いて緑泥片岩製石棒の製作遺跡が形成されたのか、という点に集約されてこよう。原ヶ谷戸遺跡出土の当該遺物はその幅については比較的ばらつきが少なく、大凡4 cmから8 cmの範囲に収まっている。製



写真2 長瀬町大滝遺跡出土緑泥片岩製石棒未製品

品の側縁部調整により失われた部分を加味しても、本来的には一回り大きな素材形状幅(6 cm～10 cm)であったと推察されるのである。一方でその長さの変位は大きくて最少で約10 cm、最長で50 cmを上回っており、恐らくそれぞれの個体(製品)によって大中小等のバラエティが存在した点も加味しなくてはならず、各個体の本来的な大きさは不明と言わざるを得ない。しかしながら、小型未製品等の多くがその両端部に欠損面を持つことを想像して、全長については平均して30 cm前後であったと推察しておこう。上記の想定が大きく誤りのない数値であったとすれば、石棒の素材形状は長さが30 cm～60 cm、幅が6 cm～10 cm、その厚さは2 cm～4 cm程の短冊形を呈した板状の緑泥片岩であったと考えることができる。

石棒等の素材形状がこのような概形であったと仮定するならば、当然の帰結としてこのような素材は原産地等で剥離して、周辺調整等の最小限の形状整形をおこなったうえで遺跡へと持ち込まれたと考えるべきであろう。これは二つの点で肯首されるべき仮説である。一つは原ヶ谷戸遺跡内からこうした素材を剥ぎ取った母岩が見つかっていないことである。遺跡内から出土した多数の緑泥片岩片は整形時の産物であり、大型礫等からの素材剥離、分割を示すものは基本的には見当たらない。第二点として素材獲得の効率性という観点に於いてである。片理面方向にのみ容易に剥がれる緑泥片岩であるが、そのまま(板状)の状態では決して石棒素材とはなり得ない。平坦な面に加えてその両側を分断するように調整を加えて狭長な形態に整形しなくてはならず、当然のことながら石の目に対して直交する加撃が必要となるこの加工時が最も素材破損の危険性がたかい。その為にも素材獲得は緑泥片岩が産出する現地でなされていたと考えられ、破損した場合には速やかに代替品を製作し、また現地にて素材を未製品段階にまで形状整形することで運搬に係わるコスト削減を図っていたものと推察されるのである。

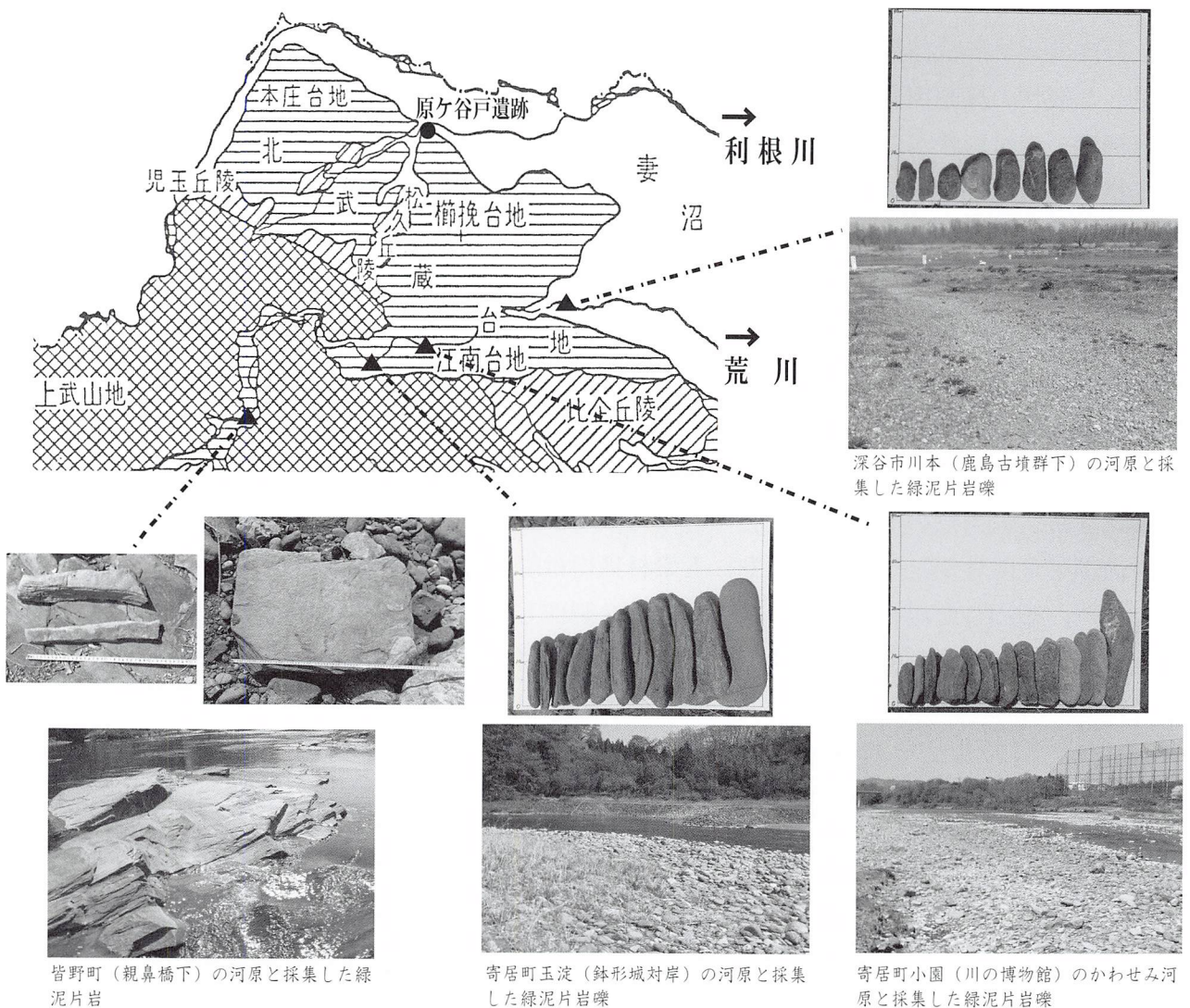
#### 4 何処で緑泥片岩を獲得したか

先に述べたように原ヶ谷戸遺跡出土の石棒未製品の中には、平坦な表裏面が緑泥片岩の分割・剥離面ではなく自然面(風化面)を有している例も確認できた。報告書の第242図3、第243図1・2、第244図6、第248図2の計5点が恐らく棒状の転石を素材としている可能性があり、特に第248図2はそうした棒状転石の素材形状を比較的良好に留めている。同様な棒状転石を実際の河床面から見出すことは希であったに違いない。そこで以下では実際の河床面に緑泥片岩がどのような形態でどの程度の密度で分布するのか、荒川中流域で実施した分布調査に基づ

き石材獲得の問題について言及してゆくことにしたい。

荒川河床に於ける緑泥片岩の転石としての分布状況は不明な部分が多く、しかも前述したように現在では中流域には玉淀ダムや堰が設けられてしまったことから、水量変化(減少)は著しく、それに伴う礫供給もほぼ停止した状況にある。現在の分布状況をどれだけ普遍化できるか否か心許ないものの、河床面に残された礫床や段丘崖からの礫の更新や供給は断続的になされていると考えられることから強ち無駄ではないと考えている。以前、著者は縄文時代前期の磨製石斧製作に於ける資源獲得に関して緑色岩の分布状況を調査したことがあったが、河床面で採取される礫素材と縄文時代遺跡から検出された石斧未製品には長さ・幅・重さ等に於いて一定の相関関係を見出すことが可能であった(栗島2008)。これは昭和30年代以降のダム建設や堰の構築による水量変化や礫供給が、それ程に大きく石材(転石等)環境を変えてはいないことを示唆していると言えようか。

さて、河床面での緑泥片岩分布は、長瀨町から熊谷市に至る荒川中流期の5箇所地点で実施した。最初に熊谷市の熊谷大橋下流部域での調査では、河床面一面に小礫が堆積しているにも関わらず、採集時間(大体30分)のなかで緑泥片岩製の礫は1点も見つけることができなかつた。そもそも河床面を構成する礫は5cm前後の小礫が殆どで、仮に緑泥片岩があったとしても



第4図 緑泥片岩製石棒を巡る石材環境

それが石棒や石剣の素材になったとはとうてい考えられない。次に採集地点として選んだのが深谷市川本の鹿島古墳群下の河床面であり、この地点は白鳥飛来地としても有名な場所で、一面に河床礫を確認することができる。しかしここでも緑泥片岩の分布はそれ程に多くはなく、やはり30分程度を費やして6点の緑泥片岩と2点の絹雲母片岩を採集しただけであった。その大きさも10cmを上回るのは僅かに3点であり、しかも大半は楕円形の礫形状を呈しており、棒状のものは見当たらなかった。これは供給地から離れるに従って河川運搬により礫形態が必然的に球状となることと関連している点は間違いなく、その運搬の過程で棒状礫はより角が取れて徐々に円形の形態へと近づいていった結果であろう。

その後採集地点として選んだのが県立川の博物館近くの「かわせみ河原」であり、この地点は外秩父山地を縫うように蛇行した荒川が流路を東方に定めて平野部へと流れ出る場所に相当し、その両側には広い河原が広がっている。ここでも同じく30分という時間を区切ったうえで緑泥片岩の採集を進めた。その結果、10cmから18cmまでの緑泥片岩礫が10点、大きなものとしては25cmのものが1点見られた。棒状の礫と共に楕円形状を呈した板状の礫も比較的容易に採取することができた。

「かわせみ河原」から更に上流に遡ったところに「玉淀河原」があり、鉢形城の眼下に広がるこの河原では沢山の緑泥片岩が採取された。ここでは30分程で15cmから25cmに及ぶ棒状・楕円形の礫を12点と、25cm以上45cm未満の緑泥片岩5点を採集することができ、その際の採集範囲は僅かに30m×40m程の河床面の範囲であったが、本区域では下流部に比べて緑泥片岩が安定的な分布状況を示していることが確認できた。また、こうした棒状や楕円形状の礫と共に大型の板状礫(40cm×20cm)も確認され、これなどは上手く分割すれば石棒の素材を複数獲得することが可能であろうし、また多少の整形を進めることで石皿等に転用することもできるとの印象を持った。何れにしても、ここ玉淀河原では、石棒や石剣の素材とする緑泥片岩の獲得・採集は比較的容易におこなえることが確認できた。

複数の産地を近くに抱えた長瀬から寄居にかけては意外にも礫分布の確認可能な河原が少なく、特に玉淀ダムの上流は河原が水没しており観察が不可能となっている。その為に長瀬町での採集は白鳥橋下流地点での分布状況を確認したのみに留まるが、しかし、予想に反して緑泥片岩の礫はあまり確認されなかった。これは河床面や河原が洪水や工事等で絶えず荒らされてしまっていることと関係していると思われるが、何れにしても緑泥片岩が河床面に露呈した箇所やその近くでは棒状や楕円形状の礫が殆ど見られない一方で、大型の板状礫の形態を持った緑泥片岩が存在し、この地点では50cmから100cmを越す例も決して希ではなかった。

こうした河川流域での緑泥片岩の分布状況と採取可能な礫形態と大きさ等を瞥見すると、幾つかの問題点について指摘することが可能となつてこよう。最も重要な点は原ヶ谷戸遺跡で確認されたように緑泥片岩製の石棒素材は、平均的には長さが30cm～60cm、幅が6cm～10cm、厚さは2cm～4cmであった。このサイズの緑泥片岩礫素材が採集可能な河床は、遺跡周辺の熊谷・深谷両市域を流れる荒川河床面では確認されず、少なくとも寄居町周辺の河原に限定されると断言して良いだろう。今回の踏査結果から判断するならば、棒状礫か楕円形礫、或いは板状の大型礫の何れかを問わず、その採集・獲得は玉淀河原より上流部でなされていた蓋然性がたかい。或いはより上流の河原に存在する緑泥片岩の大型礫、更には緑泥片岩の露頭面から直接、

石器素材を剥離していた可能性も否定はできない。少なくとも玉淀川原周辺でも十分に素材礫の確保が適う点だけは間違いない。しかも、先にも指摘したように原ヶ谷戸遺跡出土の石棒素材には、明らかに棒状礫を素材とした未製品が認められた。これらは間違いなく河床面の転石利用であると考えられ、I類素材の棒状・扁平礫をここで採集し、II類の素材についてはより上流域で獲得するという不合理な採取行動は考え難く、I類と共にII類の素材ともなる大型礫も存在する寄居町周辺の河原こそが、原ヶ谷戸遺跡に持ち込まれた緑泥片岩の獲得場所であったと理解して誤りないだろう。

## 5 生活圏を超えた石材確保

上記したように原ヶ谷戸遺跡から出土した石棒未製品に使用された緑泥片岩は、荒川中流域でも寄居町周辺の河原に分布する棒状礫や板状礫等を素材としていた可能性が最もたかい。この地域に於いても、河床面の礫を選択的に採集することによって石棒製作に十分耐えうる素材確保ができることから、上記したように上流部の長瀬方面へと素材獲得に赴く必要性は無かったと考えて良い<sup>(5)</sup>。原ヶ谷戸遺跡に於ける緑泥片岩採集・獲得の場所をほぼ推定し得たところで、無視し得ない当該期周辺地域の興味深い調査事例を紹介しておきたい。

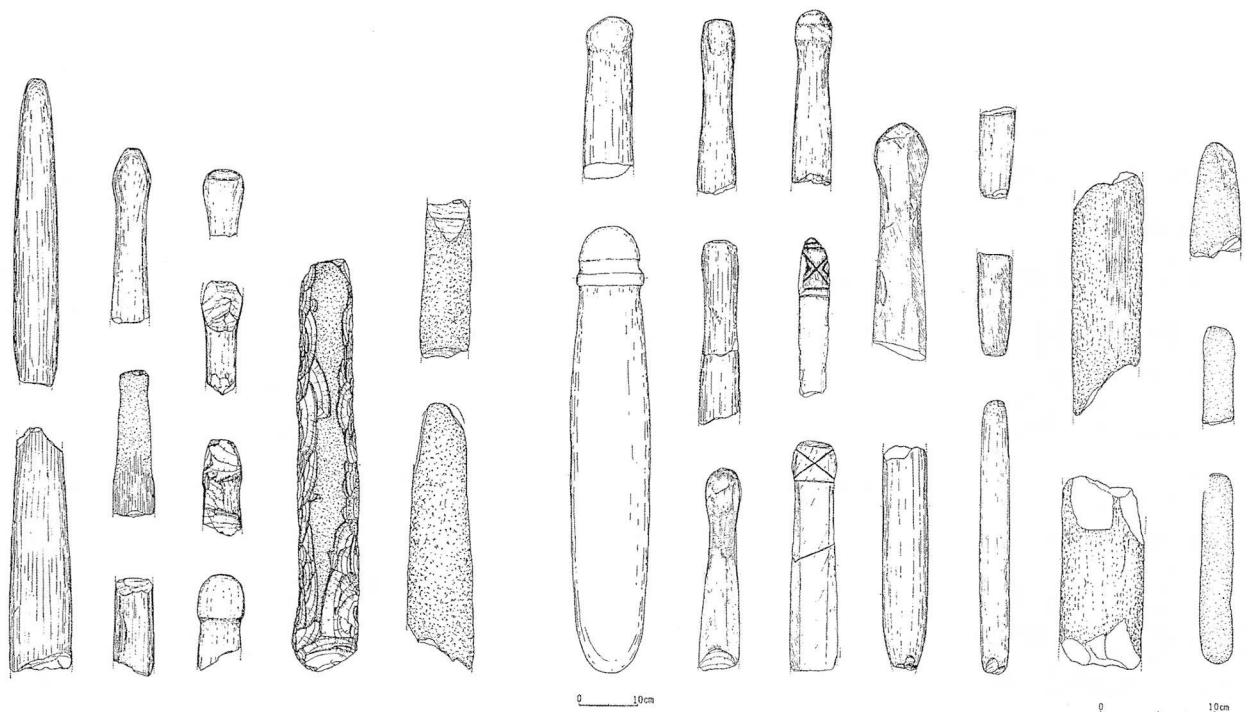
緑泥片岩産地の長瀬町野上に所在する大滝遺跡は、荒川右岸の段丘上に位置する縄文時代後期段階の遺跡であり、ここからは環状列石に混じって石棒未製品がまとまった状態で検出されている。この遺跡から出土した石棒は何れも通常のものよりも小型で、恐らく全長は30cm前後のものを最長としていたと思われる。小型で少量の石棒を保有した遺跡の眼下には豊富な転石ばかりでなく、良質な緑泥片岩の基盤岩が河床面及び段丘崖に露呈している。こうした恵まれた緑泥片岩利用環境にありながらも、この遺跡での石棒製作は極めて小規模であり、未製品の出土量も少ないうえに、製作工程品や敲石・磨石の類の石器は殆ど見られない。石材が豊富な原産地付近で石棒・石剣製作跡が明確でなく、しかも極めて規模が小さいものに限られている点は不思議な現象とも言えようか。

同様な状況は荒川中流域、川の博物館対岸に位置した深谷市(旧花園町)橋屋遺跡にも当てはまる。橋屋遺跡での正式調査は実施されてはいないものの中流域でも最大規模の後・晩期遺跡と考えられ、石棒類は表採品としては数量的にややまとまっていたものの、製作跡としての痕跡をそこに見出すことはできない。遺跡下の荒川河原や徒歩圏内に玉淀河原があることから、当該遺跡が緑泥片岩獲得に際しては極めて優位且つ良好な石材環境下に在ることは間違いない。しかし、ここでも製作痕跡は希薄なのは意外との印象も抱く。また、寄居町の玉淀河原に近接した段丘上には中期末から後期にかけての樋ノ下遺跡がある。比較的広範囲に調査されたこの遺跡からは13軒の住居跡や55基にも及ぶ土壌群が検出されているが、出土した石棒は僅かに10点に留まっている。緑泥片岩転石が豊富に見られる荒川の河原を眼前に見下ろす本遺跡でさえも、その製作が希薄という点は決して見過ごすことができない。

このように緑泥片岩原産地の周辺遺跡を概観すると原ヶ谷戸遺跡の特異性がより一層際立つと共に、この遺跡に於ける石棒製作が意図的・計画的であり、何よりもそれが集約的であり規模が大きかったことが再認識できよう。通常ならばこの種の製作遺跡は石材採取・獲得にかかるコストを削減する為に、石材原産地に隣接して形成されるのが一般的な筈である。また石棒・

石剣の素材となった緑泥片岩については、河床面や段丘崖等に露呈した岩体そのものから素材を剝離していたとは考えられず、原産地を東流する荒川によって運搬された転石利用が中心であったと推察した。しかし長楕円形や棒状、或いは大型礫の形状での緑泥片岩の採取・確保が可能であるのは寄居町付近までであり、それより下流の深谷市(旧花園町、川本町)や熊谷市を流れる荒川の河原での素材確保は不可能であったと判断される。必然的に素材確保は寄居町付近でなされていたものと思われるが、この地域に原ヶ谷戸遺跡のような緑泥片岩製石棒類の製作跡を認められないことは上記したとおりであった。

では何故、緑泥片岩製の石棒製作跡が榎引台地東端部の利根川を見下ろす崖線上に形成されたのであろうか？ 何よりも大きな疑問は、緑泥片岩を素材とした石棒・石剣等の製作跡でありながらも、素材となる緑泥片岩は遺跡近辺ではなく、最短でも10kmの距離を隔てた荒川中流域の寄居町内の河原でしか採取・獲得できない点にある。原ヶ谷戸遺跡がそうした原産地からは離れていることに加えて、そもそも水系を異にした利根川水系に面して営まれている事実は決して無視し得ない。水系を異にしているということは当然、採取した石棒素材については陸路を用いて運搬していた筈であり、加えて看過できない点は、仮に緑泥片岩の採取・獲得が荒川中流の寄居町周辺であったとするならば、原ヶ谷戸遺跡からは複数の同一時期遺跡を縫うようにして、素材を運搬しなくてはならなかったであろう点にある。或いは逆に荒川に面した集落に住む人々によって採取された緑泥片岩製の石棒素材が、原ヶ谷戸遺跡へと運ばれていたのであろうか。何れにしても、原ヶ谷戸遺跡に於ける緑泥片岩を素材とした石棒製作という活動が、一遺跡での生産活動に留まらずに複数集落によって容認された、或いは協力・協調の基に遂行・保証された、つまりは地域社会に於ける生産活動として位置づけられるものであったと理解されるのである。複数集落・集団で容認された石棒・石剣製作、特定遺跡での集中的なその製作という事実、その意義や背景は一体どのようなものであったのだろうか。



第5図 赤城遺跡出土緑泥片岩製石棒

## 6 緑泥片岩製品の広域流通

原ヶ谷戸遺跡が製作遺跡でありながらも、何故、緑泥片岩原産地から離れた場所に選地がなされたのか、その経済的なメリットと社会的な役割について考察を及ぼさない限り、この遺跡形成の理由を正当に評価することは適わないであろう。だがその点を追研してゆくならば、この遺跡の位置づけを通して後・晩期に於ける地域社会の生産活動や相互関係を考えるに際しての有効なモデルが構築される可能性もある。

さて、著者はこの利根川水系に属していること、そして利根川の形成した妻沼低地を見下ろす台地崖線上に立地していることに大きな意味と機能があったと考えている。荒川中流域で産出・採取される緑泥片岩を、河原にて荒割り等の初期加工をおこなった後にわざわざ櫛引台地東端部へと10km程の距離を陸路運搬し、そこで石棒や石剣などの未製品や製品へと仕上げた背景として考えられることは、利根川水系に於ける水運を利用してそれらの製品を広域的に流通させるという明確な目的があったからに違いない。利根川水系での緑泥片岩産地については不明な部分もあるが、例えば県境を流れる神流川の支流である三波川の上流域には緑泥片岩の産地が存在する。しかし、この場所やその下流域での生産・製作遺跡の存在は未だに確認されていない。この問題については今後の調査に負うところが大きいものの、新たに神流川水系にて当該期石棒・石剣製作遺跡が発見される可能性は低いと言わざるを得ない。その一方で原ヶ谷戸遺跡の石棒等の素材が神流川産という可能性も強ち否定はできないが、何れも陸路での運搬を前提とした場合、荒川流域からの搬入の方が距離が短いことなどからより効率的であった点は間違いない。

次に検討すべき課題は、緑泥片岩製石棒の空間的分布の様相にあり、その姿を通じてより一層、原ヶ谷戸遺跡自体の性格も鮮明となってくるであろう。

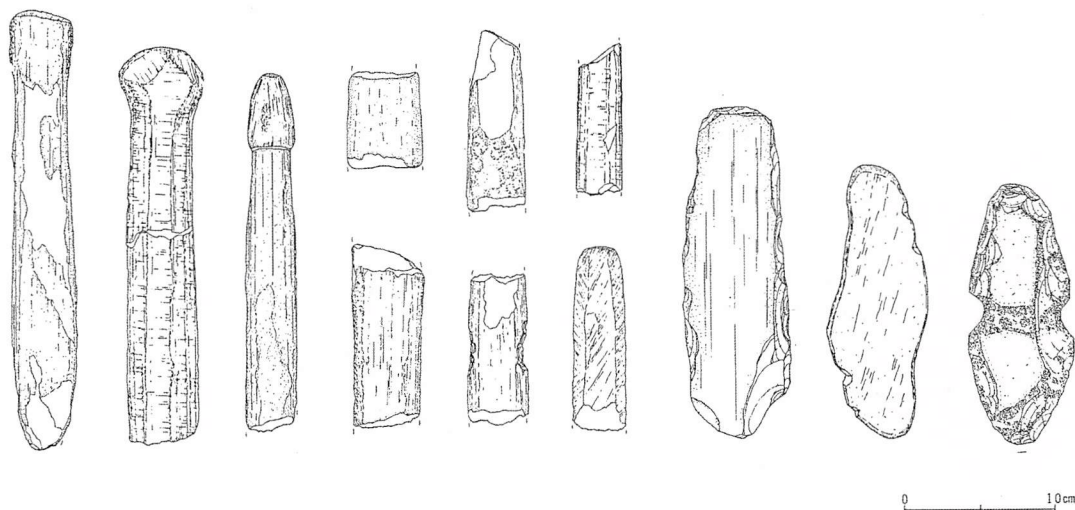
### 〈緑泥片岩製石棒の県内分布〉

周知のように埼玉県内に於いては大宮台地を中心として後晩期の遺跡が多数発見されている。それらの遺跡からは量的多寡は認められながらも、石棒・石剣の出土が例外なく認められており、更にこれらの遺跡で共通している点はその使用石材がほぼ緑泥片岩によって占められてる点にある。県内の緑泥片岩製石棒を出土した主だった遺跡だけを列挙しても諏訪ノ木、赤城遺跡、雅楽谷遺跡、久台遺跡、黒田田端前遺跡、ささらII遺跡、奈良瀬戸遺跡、後谷遺跡、高井東遺跡、小深草遺跡、東北原遺跡、石神貝塚、宮合貝塚などがある<sup>7)</sup>。これらの遺跡から出土した石棒と製作遺跡である原ヶ谷戸遺跡のそれとを比較してみると、顕著な相違点と共に相互に類似した様相も指摘することが可能となる。

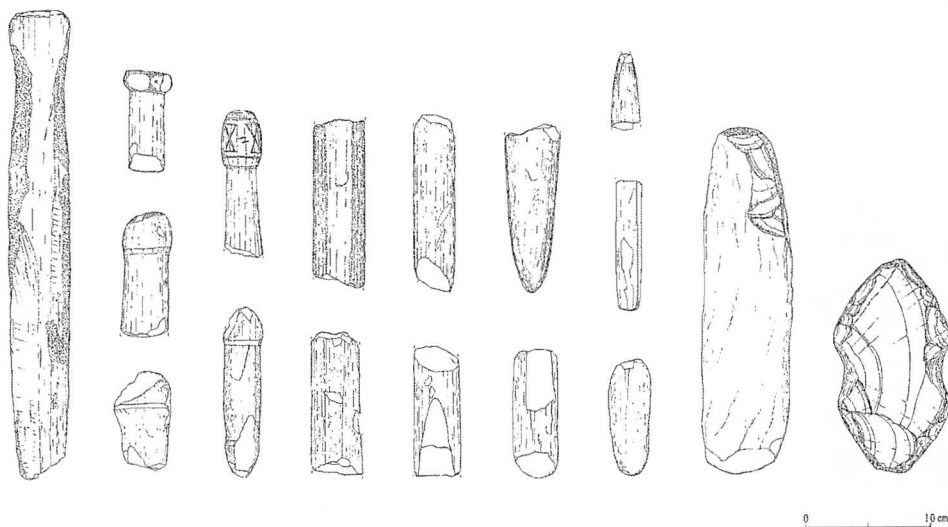
まず第一に注目すべき相違点として、原ヶ谷戸遺跡から出土した石棒はその表裏面が研磨された完成品は少数を占めているに過ぎない。また石棒の端部把手部には線刻や文様が刻まれている例が上記した大宮台地の各遺跡で確認されるが、原ヶ谷戸遺跡に於いてはそうした線刻資料は皆無であり、この点は完成品が希少であることと連動する様相として看過できない。特に原ヶ谷戸遺跡出土品では整形途上の工程品であることを明示する側縁部の剝離・敲打痕跡が顕著であり、その表裏面は研磨の施される以前の礫面であったり素材分割面等であったりする。このような様相に関しても他遺跡との比較を通じて、改めて原ヶ谷戸遺跡の製作遺跡としての特徴と再認識されてくるのである。

その一方で、原ヶ谷戸遺跡以外の上記した遺跡出土品の総てが完成品によって占められているかと言うと強ちそうとも言い切れない。石棒の形態作出に際してどの段階をもって未製品/完成品と区別できるか、その判断基準は極めて曖昧としか言いようがない。また、敲打や研磨などの作業工程を経たもの総てが完成品かというところでもなく、何れにしても石棒研究にあつては基礎的認識を再度問い直すことが不可欠であるが、明らかに未製品や素材状態の石棒と考えられる資料が、原産地や製作跡遺跡を離れた幾つかの遺跡で確認されている。例えば諏訪木II遺跡や雅楽谷遺跡II、ささらII遺跡などからは長形状の扁平な板状緑泥片岩が検出されており、また赤城遺跡、久台遺跡、宮合貝塚では側縁部の周辺加工がなされただけの石棒未製品が認められる。前者は石棒等の素材であり、後者はその未製品と解することができる。

こうした事例が何処まで普遍化できるか今後の資料増加に委ねたいが、恐らく多くの緑泥片岩製石棒は原ヶ谷戸遺跡から素材や未製品のままの状態で大宮台地の諸遺跡へと持ち込まれていたに違いなく、その後で遺跡を単位として製品へと仕上げられてゆくのが通例であったと推察される。いずれにせよ完成品での流通が支配的ではなかった点については注意しておく必要がある。一般的に緑泥片岩を用いた石棒製作の技術工程を考えた場合、素材分割や形態作出の

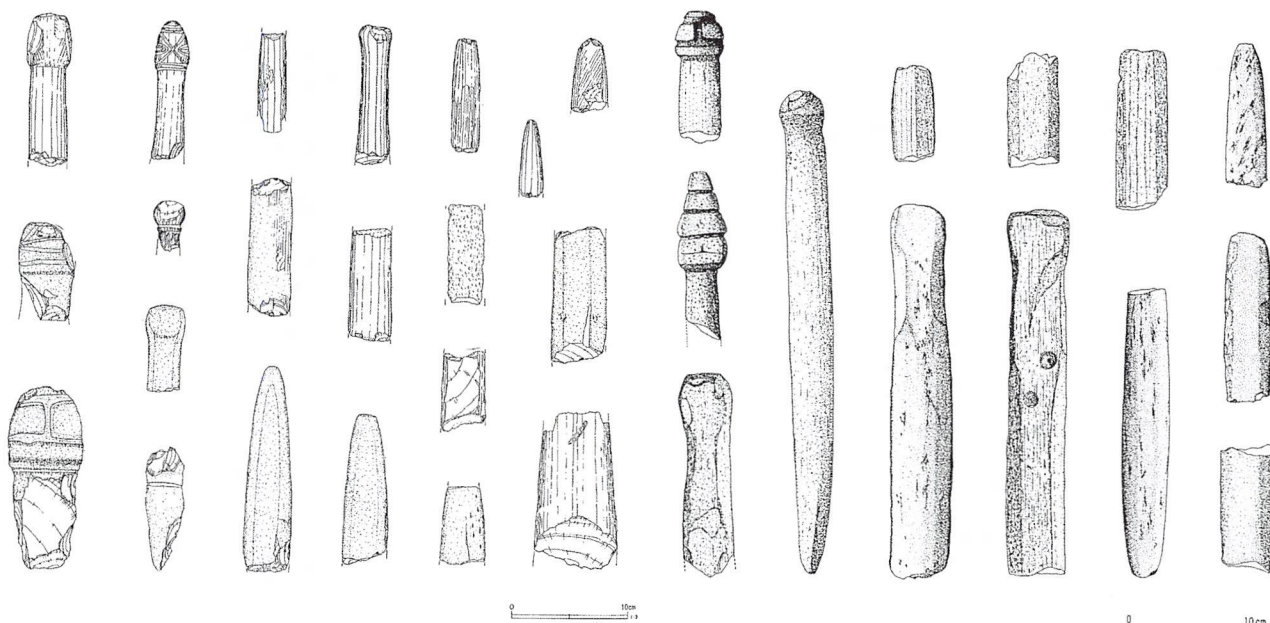


第6図 諏訪木遺跡出土緑泥片岩製石棒他



第7図 雅楽谷II遺跡出土緑泥片岩製石棒他





第8図 雅楽谷遺跡I出土緑泥片岩製石棒

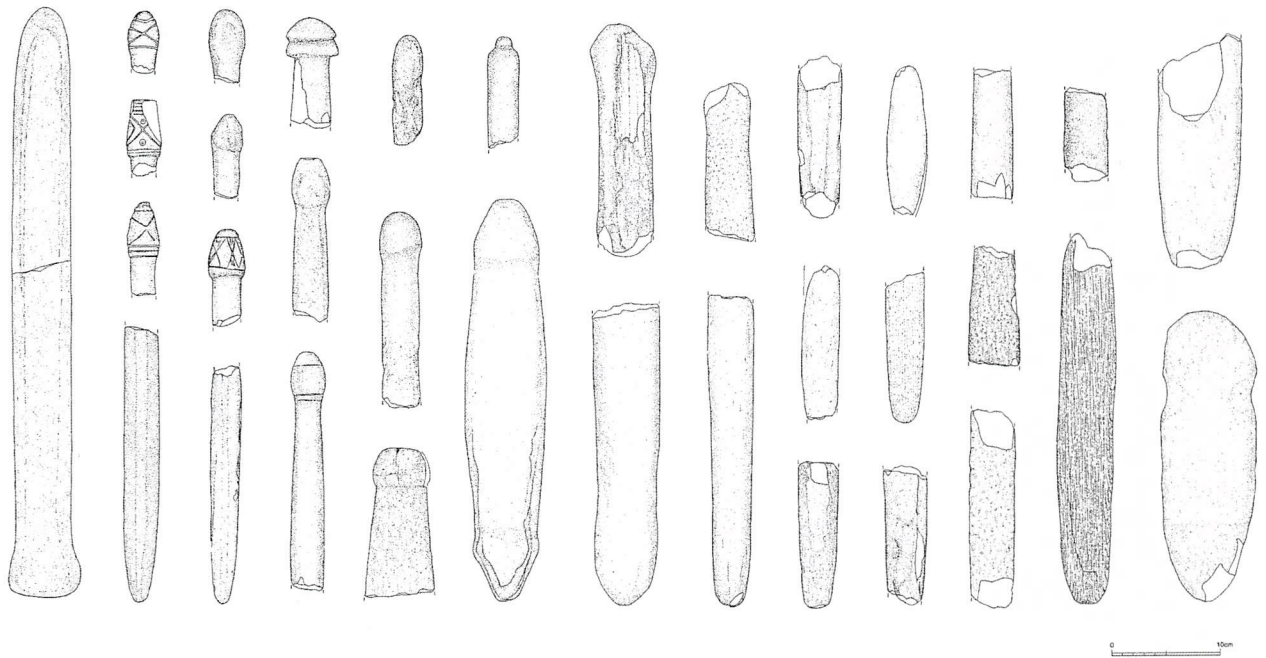
第9図 高井遺跡出土の緑泥片岩製石棒

為の周辺加工までは比較的多くの時間を要しないものの、その後の整形工程に位置づけられる敲打と研磨は最も時間・労力と慎重を要する作業工程と認識される。故に、この整形工程を経た石棒の完成をもって製作跡である原ヶ谷戸遺跡から持ち出されていたのではなく、ある程度の敲打や場合によっては素材(半未製品)段階の状態でも他遺跡へと持ち出されていたと考えておきたい。こうした想定を裏付けるように原ヶ谷戸遺跡からは一定量の敲石は発見されているものの、多量で集中的な石棒研磨を示唆する大型の置砥石や手持ちの砥石等の出土は確認されていないことである。製作工程の最終工程の器種が貧弱であるということは、遺跡からの搬出状態が未だに「未製品」であったことを強く示唆しているのである。

こうした現象に連動するように大宮台地の後・晩期遺跡での石器組成中には、例外なく砂岩製砥石の参入が見られる。砥石が直截的に石棒研磨に結びつくものではないことは無論であるが、各遺跡での最終工程としての研磨作業を各集落が独自に担えた状況が在った点については無視できない。また見落としてならない点は、石棒頭部や石剣柄部に見られる文様彫刻についての問題がある。文様やその地域的な差異については補稿で触れることになるが、これらの文様線刻は最終の作業工程として位置づけられるものであり、整形・研磨後に何らかの意味を付与させる為に文様を線刻していた可能性がたかい。しかも多くの事例では線刻(凹部)部に漆等で彩色していたと考えられ、文様の社会的な意味や意義、強いては石棒・石剣の機能性を考慮するならば、各地域集団は石棒等を素材や未製品の状態で入手して後にそれぞれの集団の流儀に従って形を整え、文様を刻印・彩色していったと考える方が寧ろ妥当であろう。

#### 〈緑泥片岩製石棒の県外分布〉

上記した現象を石棒製作及び流通を巡る姿として認識した場合、緑泥片岩製の石棒の分布は埼玉県内に留まるものではない。原ヶ谷戸遺跡から直線で約40km離れた栃木県藤岡神社遺跡からは実に多量の石棒・石剣が出土しているが、ここも明らかに利根川の水系で繋がった遺跡と言える。藤岡神社遺跡からは破片も含めて133本の石棒・石剣出土が報告されているが、その内67点が緑泥片岩製である。渡瀬川や鬼怒川水系には緑泥片岩が産出しないことから、これら緑



第10図 藤岡神社遺跡出土の緑泥片岩製石棒

泥片岩製石棒等が原ヶ谷戸遺跡から持ち込まれたものであった蓋然性は極めてたかい。ならば他の栃木県内の後・晩期遺跡から出土している緑泥片岩製石棒なども同じルートで搬入されたものと判断して良いのかも知れない。注視されるのが寺野東遺跡であり、ここでも石棒・石剣類の多くが緑泥片岩製(環状盛土遺構群内で39点中16点、谷東遺構群内で29点中7点)であることが報告書に記されている。遺跡は鬼怒川水系に位置していることを考えると、これ等の緑泥片岩製石棒は、藤岡神社遺跡などの地域的な拠点集落からの再分配品と理解すべきであろうか。何れにしても、原ヶ谷戸遺跡が利根川水系への緑泥片岩製石棒・石剣流通を目的として形成された遺跡であるとすれば、それらの流通は遺跡から遺跡へと順次運ばれるバケツリレー的なものではなく、地域社会の拠点的遺跡へと直接的に運ばれる効率的且つ目的的なものであった可能性がたかい。各地の拠点的な集落に流通・配分された希少遺物である緑泥片岩製石棒・石剣等は、さらに周辺遺跡へと再分配されていったのであろうか。こうした緑泥片岩製の石棒を巡る流通・配分は河川を下るという線的な形態に留まらず、時には同一水系の支流を遡上したり、更に陸路を運ばれたりすることによって面的な流通網を形成していたらしい。利根川上流部に位置した矢瀬遺跡からも緑泥片岩製の石棒が多数検出されているのは、そうした仮説を証左する具体例として見過ごすことができない。

原ヶ谷戸遺跡の立地を考えた場合、その主目的はこうした利根川水系を視野に入れた緑泥片岩製石棒・石剣の広域流通にあったと考えるべきであろう。基本的には栃木県南部地域や埼玉県の大宮台地周辺に所在する遺跡への石棒・石剣供給を担っていたものと考えて間違いない。だが、その流通の範囲は埼玉県内に留まったものではなかったようであり、我々が想像する以上に広範囲に緑泥片岩製石棒・石剣が分布している事実がある。例えば千葉県の下総台地上には後期から晩期にかけての遺跡群が点在するが、その中でも緑泥片岩製の石棒・石剣等が比較的安定的に検出されている遺跡が複数ある。管見に触れただけでも松戸市貝の花貝塚、我孫子市下ヶ谷戸宮前遺跡、市川市掘ノ内貝塚、千葉市内野第Ⅰ遺跡、市原市西広貝塚などを挙げる

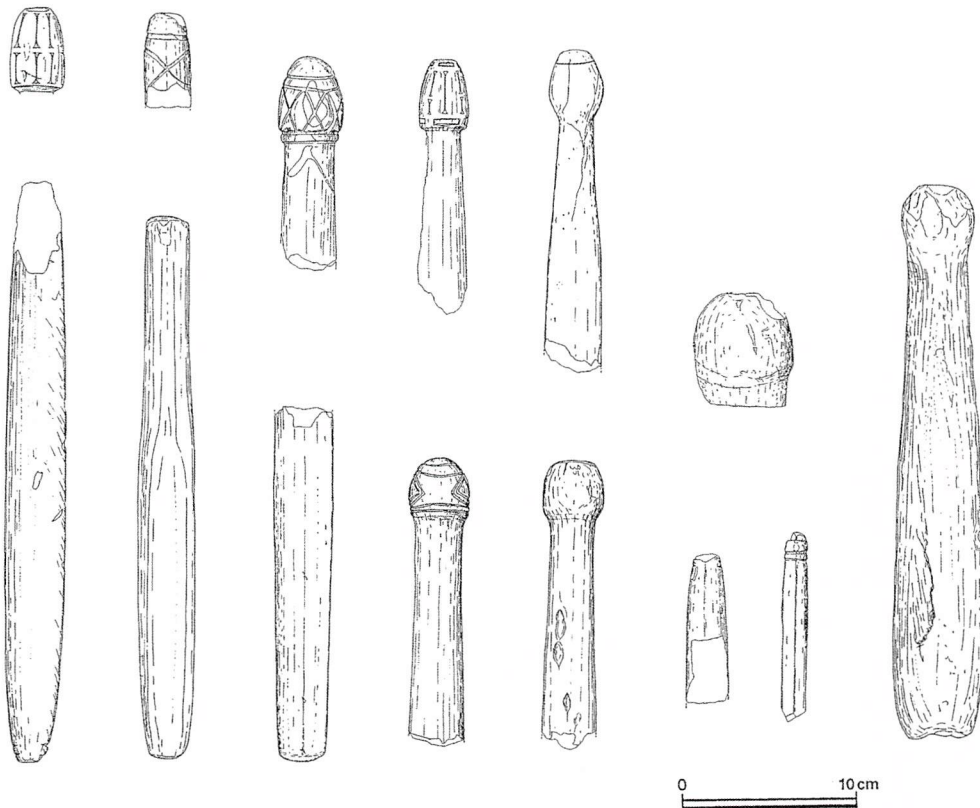


第11図 寺野東遺跡出土緑泥片岩製石棒

ことができる。一方、東京都側にも西ヶ原貝塚、下布田遺跡等に出土例があるが、こちらは遺跡自体が少ないことと関連して緑泥片岩石棒の出土は総じて少量に留まるようである。

ところで千葉県下での緑泥片岩製石棒・石剣の分布は極めて興味深い。上記した遺跡のなかで利根川水系に属する遺跡は、僅かに貝の花遺跡、掘ノ内遺跡の2箇所のみであり、他は鬼怒川水系であったり(下ヶ戸宮前遺跡)、印旛沼に注ぐ勝田川水系に属したり(内野第I遺跡)、更には何れの水系にも属さない東京湾岸に位置していたりする(西広貝塚)。報告書から判断する限り掘之内貝塚でも、表採資料等を含めて40点近くの緑泥片岩製石棒等を確認することができ、その殆どは緑泥片岩を石材としているらしい(市川市1992)。また貝の花貝塚でも出土石棒の半数近くに及ぶ10点以上の緑泥片岩製のそれを確認することができる。こうした諸事例が示すように、緑泥片岩製の石棒・石剣の出土遺跡は利根川水系に属する、或いは極めて近接した遺跡に於いてのみ確認されているだけではないのである<sup>(6)</sup>。

利根川水系とは下総台地の平坦な分水嶺を挟み、鬼怒川水系に属しているのが下ヶ谷戸宮前遺跡である。この遺跡からは100点近くの石棒・石剣破片が検出されているのだが、その半数近くの資料が緑泥片岩製であった。しかもこの遺跡では棒状・長楕円形の緑泥片岩礫も発見されており、数量的に極めてまとまった緑泥片岩製品を含む遺跡として注目される。同様な点での強い類似性を示すのが千葉市の内野第1遺跡であり、この遺跡も利根川水系ではないものの出土した石棒26点のうち12点の資料が緑泥片岩製であった。これらの事例から原産地・製作遺跡から遠く離れた下総台地の諸遺跡でも、安定的に緑泥片岩製の石棒等が入手可能な交易環境にあったことを伺わせている。



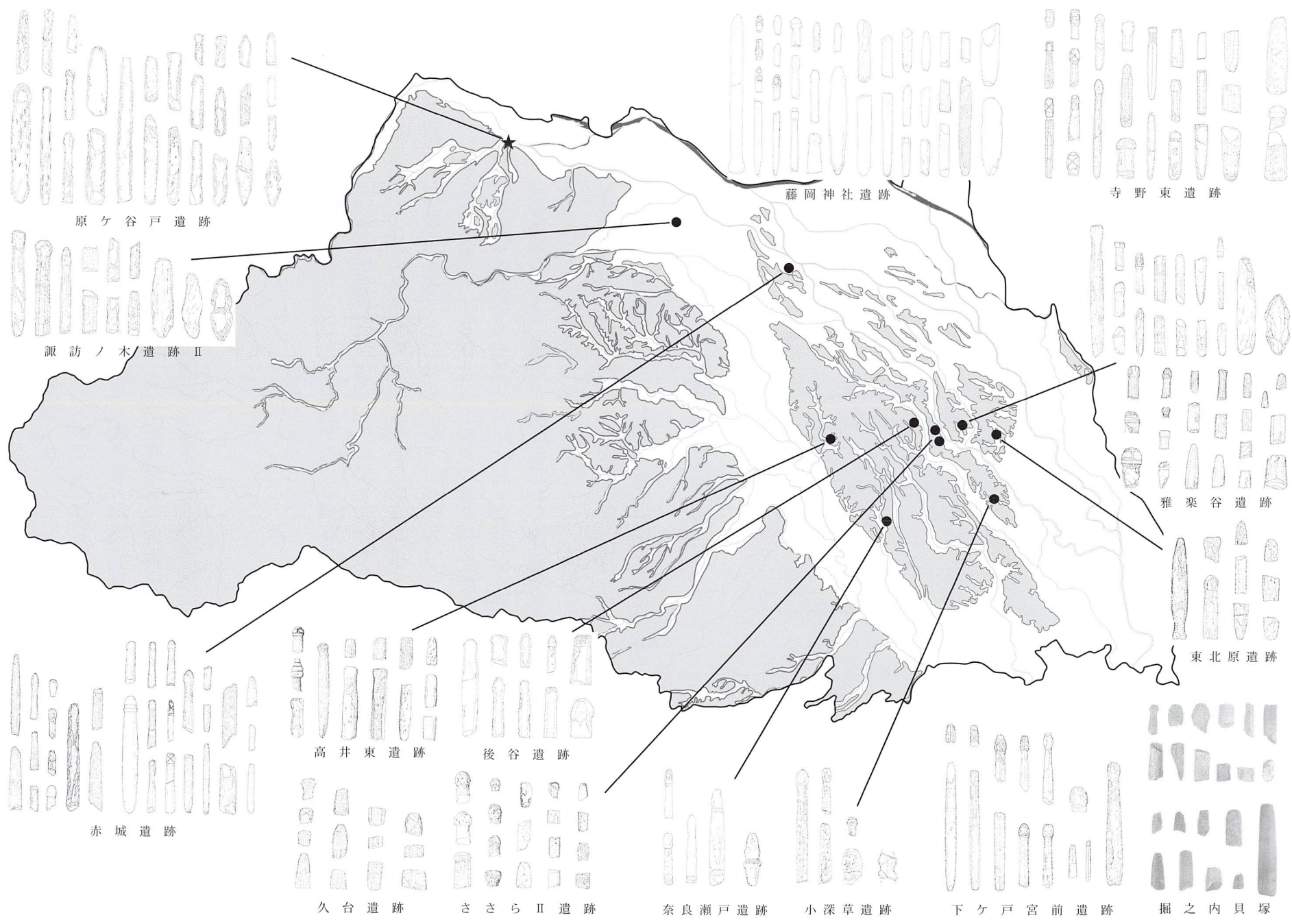
第12図 下ヶ戸宮前遺跡

そうした意味でも注目されるのが市原市西広貝塚であり、ここからは主に破片ではあるが165点もの石棒関連資料が検出されている。利根川を下って運ばれた緑泥片岩製石棒等は、その後は海浜部に添うようにして海沿の遺跡へともたらされていたのであろうか。この遺跡では簡易フルイを用いて貝層と共に、通常の発掘では検出困難な石棒小片までも回収した点で注目される事例であるが、その結果、総数の三分の一近くに及ぶ44点もの資料が緑泥片岩製であることが判明した。フルイを用いた資料回収率の高さもさることながら、石棒類が小片になるまで破砕した行為が顕著であった点も決して見逃すことができない<sup>(7)</sup>。同様な傾向は祇園原貝塚でも看取されており、100点を上回る石棒・石剣類の半数が片岩系とされており、その内の38点が緑泥片岩製と区別されている。東京湾岸に於けるこうした緑泥片岩製品の安定的出土は、利根川を介した石棒・石剣類の交易ルートが本流やその支流だけでなく、東京湾岸にまで及ぶ想像以上に広範なものであったことを改めて示しているのである。

## 7 まとめ

本論では埼玉県深谷市原ヶ谷戸遺跡に於ける緑泥片岩製石棒・石剣の製作跡としての評価、その形成背景、そして緑泥片岩製石棒等の流通問題について論じた。通常、製作跡遺跡とは原産地や採取地に隣接・近接して形成されるのが通例であり、特に大型の石棒等の製作に際しては効率性や経済的効果を考えてもそれが最も妥当な姿と認識されるのである。しかし、原ヶ谷戸遺跡の場合は明らかに違う。この点については、遺跡を見学した当初から抱いていた疑問であったが、周辺地域での緑泥片岩製品の発見が相次ぐなかでようやく著者なりの解釈がおこなえる見通しを得るに至った。

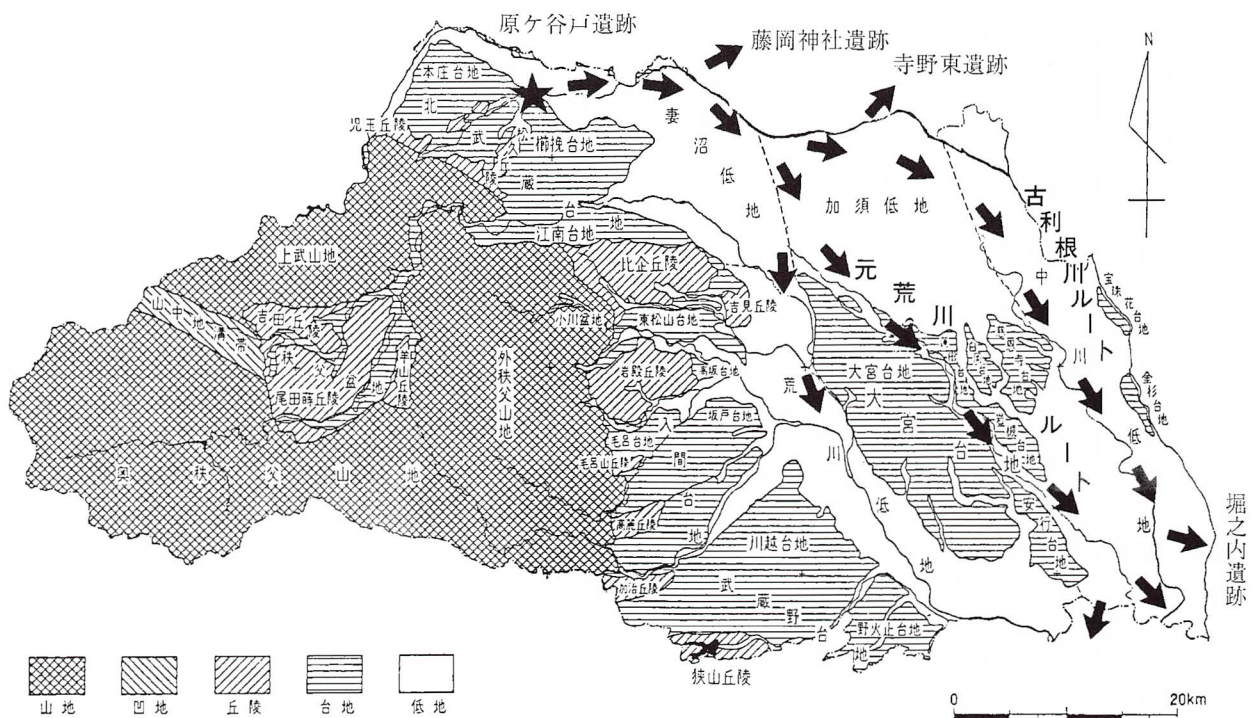
第13図 緑泥片岩製石棒分布図



原ヶ谷戸遺跡でおこなわれた石棒・石剣等の製作については、遺跡が立地する利根川水系ではなく荒川水系から原料となる緑泥片岩を入手していた点は間違いない。その獲得方法は河床面・段丘崖に露呈した露頭(母岩)面からの直接的な採掘・採取ではなく、原産地下流域の寄居町付近の荒川河床面に転石として存在する緑泥片岩を利用したものであったと考えられる。棒状や長楕円形状の礫をそのまま素材とするよりも、比較的大型の礫を母材としてそれを分割・剥離して素材としていた蓋然性が最もたかい。そのように石棒概形を形成した後に10km程離れた原ヶ谷戸遺跡へと持ち込み、周縁部を剥離して形を整え敲打を繰り返しつつ石棒・石剣としての形態作出をおこなった。遺跡から多量に出土した緑泥片岩の破片はこうした作業工程の存在を示す資料であろうし、反面で大型礫等の出土が認められない点は上記したような素材形態での搬入が一般的であったことを雄弁に物語っている。

原ヶ谷戸遺跡での石棒製作は、基本的に研磨作業が欠落した未製品状態までの仕上げを担っていたことを指摘した。それは遺跡内に研磨作業工程に不可欠な置き砥石や小型・手持ち砥石の類が欠落しているからに他ならない。出土した遺物の中にも研磨途上での欠損品は殆ど見受けられないこともそうした解釈を支持しており、未製品や素材状態の緑泥片岩製品をここに集積していた蓋然性が最もたかいと理解されよう。そもそも本遺跡が利根川の形成する妻沼低地を見下ろす段丘崖上に形成された機能的背景には、利根川という河川を媒介として緑泥片岩製石棒等を広範に流通させるという目的があったに違いない。それ故に、原産地に近接した荒川中流域ではなく、利根川水系を望むこの地を製作跡として選地専有したのであろう。

元来、石棒類については形態的特徴が為通常の石材での製作は不可能であり、その点で大型の素材剥離が容易であり、周縁加工もおこない易いうえに敲打・研磨が比較的容易な緑泥片岩は最も好まれた石材であった。しかし、その原産地は広く関東地方を見渡しても三波川変成帯に属する荒川中流域にほぼ限られてしまう。そこでこの地域での言わば「特産物」としての緑



第14図 緑泥片岩製石棒・石剣の流通

泥片岩を用いた製品を広く流通させる為に、河川での運搬に最も適した利根川を眼下に見下ろす原ヶ谷戸の地が選ばれたのであろう。他の石器類と比べて長大で重量のある石棒類については、丸木舟等を用いた河川運搬が最も効率的であり、流域の消費地を考えた場合でも効果的であった点は予想に難くない。無論、そのように河川運搬された物資は石棒・石剣だけではなくた筈であり、当該地域の特産品とも言うべき緑泥片岩自体や緑色岩を用いた石皿や独孤石、磨製石斧、石皿なども当然、そのリストに加えられるべきである。

また看過できない重要なことは、原ヶ谷戸遺跡から緑泥片岩採集地へと赴いて素材を持ち帰ってくるには、複数の集落を経由しなければならなかった点である。そこには原ヶ谷戸の集団が緑泥片岩石材を直接採取していたのか、それとも寄居周辺の集団から入手していたのか、といった別な問題も介在するがその判断は著者の力量を超えた研究課題である。何れにしても言えることは、そうした緑泥片岩の獲得・加工、そして流通・交易等の活動が原ヶ谷戸遺跡の集団のみが遂行したものではなかったという事実にあろう。石材の獲得、運搬・搬入、そして加工、交易等の活動は、製作遺跡集団で完結した生産活動ではなくて地域集団のそれとして位置づけられていたのであろう。当該期遺跡群がまとまった地域社会を形成していたことは間違いなく、互いの集落は基本的な生業活動に加えて特定遺物の製作・生産に特化した姿が看取される場合が多い。分散して集落を構えるメリットを生かし、相互扶助的な生活・生産形態を採用と同時に、対地域社会への流通(交易)品目を開発することで、自らの地域集団が必要とする生産・食料物資の効果的な獲得を目指していた可能性がある。

海浜部の地域社会では貝や魚、貝殻、塩など多様な資源、しかも他の地域では獲得し難い資源を独自に開発を進めていたことは明らかである。こうした地域社会動向が特定地域に限定された局所的なものであった筈はなく、後期社会全体の動向であったと認識すべきであろうか。即ち縄文中期以後は、地域社会が互いにそれぞれの生態系(生活圏)内での日常的な生活・食料資源に加えて、独自の地域的資源(=特産物)を新たに開発する動きへと大きくシフトしてゆく。地域的資源は他地域での生産・獲得が困難であることが重要な要件であり、そのハードルを越え得ない限りは交易品のリストに加えられる望みは無かった。地域社会が各々で独自の資源開発をおこなうことは、個々の集団(集落)では決しておこない得ない経済的、社会的なメリットがあったと推察されるし、そもそも地域社会が単位とならない限りは資源開発とその加工等に係わる労働力投下も適わなかったに違いない。

ただ、地域的な資源の開発・流通という問題を対外的なメリットだけで理解・解釈すべきではない。内陸部や山間部地域の集団がその入手を渴望したであろう貝や塩、貝輪などの地域資源、その獲得を集落単位で成し遂げるには多くの困難が想定されるが、地域社会を単位としてその入手・獲得を進めるならば格段に効果的且つ効率的であったと考えられるのである。他地域から生産資源(石材・道具)や食料資源(貝・塩)、嗜好品や奢侈品などを入手しようとした場合、当然のことながらその獲得に見合う等価の交易品を用意する必要がある。地域社会内の「特産物」とも言い得る有用資源の開発は、広域的な物資交流を成立させ且つ維持・発展させる為の原動力となっていた可能性もある。対外的な交易品となり得る地域的資源の開発、そうした縄文時代後期の社会経済学的な動きのなかでこそ、原ヶ谷戸遺跡の形成と機能を評価すべきというのが本論の結論とすべきかも知れない。(2011年12月20日脱稿、2012年2月14日稿了)

〈補稿：緑泥片岩製石棒に見る線刻文様〉

原ヶ谷戸遺跡へと集積された緑泥片岩製品は、この地で加工されて石棒未製品へと仕上げられていたと考えられるが、本文中でも触れたように持ち込まれた素材状態のまま県外へと運ばれた例も確実に認められる。藤岡神社遺跡や下ヶ戸宮前遺跡、寺野東遺跡などには自然の棒状礫に近いものや、周縁部の調整加工のみが施された明らかな片岩製石棒素材を見出すことができる。これらの資料を参考にするまでもなく、基本的には石棒なども生産遺跡での製品(完形品)化は考え難く、それを入手した地域の人々が敲打や研磨によって入念に形を整えて石棒等に仕上げていたのであろう。実際にこうした想定を裏付ける有力な考古学的証拠もある。石棒の頭部にはしばしば線刻により文様の刻まれることがあるが、それは精緻な線刻文様が施されることの多い粘板岩製石棒ばかりでなく、緑泥片岩製の例にもしばしば観察される。これまで検討してきた遺跡から出土した緑泥片岩製石棒の線刻文様を見ると、上記した仮説を裏付ける興味ある傾向を指摘することが可能である。

大宮台地の雅楽谷遺跡や久台遺跡、赤城遺跡などでは石棒頭部の線刻は、二本一組みの横線が上下に配され、その間に斜めの直線を交叉させたX状の線刻を配する例が圧倒的である。この線刻文様は石棒頭部の基本形らしく、何れの遺跡でも検出されているが、下ヶ戸宮前例ではX状の文様が表裏に一組みではなく連続するように配されている。類例が藤岡神社遺跡にも在る。群馬の矢瀬遺跡には格子目状に線刻した例があり、またそれは上下の横線刻が3本一組みとなっている。矢瀬遺跡には一見すると基本形に近いX字文様を持つ例があるが、しかしこれはX字状ではなく「く」の字形の線刻を合い向かい状態に配したものである。放射状に線刻した例も独特である。二本一組みの横線の間にはI字状の刻文を充填させる例は寺野遺跡、下ヶ戸宮前遺跡に見られるが大宮台地にはない。X状ではなく二重の円を配した例が内野第1遺跡に、また菱形の線刻を充填させた例が下ヶ戸宮前遺跡認められる。西広貝塚IIには二重の円を組み合わせて表裏面側から見るとX字状に見える効果を持つ例も存在する。

こうした例に見るように二重の横線刻を上下に配し、中央にX字状の直線刻を配する基本形は何れの地域に於ける緑泥片岩製石棒にも観察されつつも、そこに充填させる文様は一律ではなくて地域的な差異が観察される。恐らく、このような線刻は当初からなされていたものではなくて、先々の集団が独自の意味・機能を付与するかたちで線刻したものであろう。緑泥片岩製の石棒・石剣等が基本的には素材・未製品状態で流通し、その後それを入手した集団が最終的に敲打・研磨をおこない、文様を線刻したうえで彩色を施し製品化したと考えることができる。今後の当該遺物の比較研究を進めるなかで、こうした石棒文様については再度、追研してゆきたい課題と位置付けている。



第15図 緑泥片岩製石棒に見る線刻文様の地域性



## 《註》

- (1) 既に述べたところであるが、緑泥片岩は日本列島の骨格をなす三波川変成帯を構成する高圧低温型の広域変成帯に含まれており、地底深くに押し込められた泥や砂、火山灰などが高温・高圧の変成作用によって生成されたものである。一般的に片岩類は原石により碎屑性の堆積岩(黒色片岩、砂質片岩、石英片岩)と塩基性火成岩や火山灰を起源とするもの(緑色片岩、緑色岩、蛇紋岩)とに分けられ、さらに構成鉱物の種類や量によって細かく黒色片岩(石墨片岩、絹雲母片岩)、砂質片岩、石英片岩(赤鉄石英片岩、赤簾片岩、藍閃石片岩)、緑色岩(変斑れい岩、変玄武岩、角閃石岩、輝石)に区分されることも多い。我々考古学者が抱く最も単純な片岩類のイメージは、薄く剥がれやすいという岩石の性質そのものであり、この層理面にそって薄く剥がれやすいという特徴が故に、緑泥片岩は板状の大型石材を獲得することが極めて容易な岩石となっており、先史時代には石皿や石棒・石剣、古墳時代には石棺や石室の素材(特に天井石)として、そして中世に至っては塔婆の素材として極めて身近で重要な石材資源となっている。専らその特質と色調から考古学者や歴史学者は「緑泥片岩」と呼称し続けているが、実は地質学者の間では正式名称として「緑泥石片岩」という言葉で呼ばれている。本来ならば地質用語を優先し、且つ尊重すべきであろうが、しかし、これだけ周知化・一般化した緑泥片岩という呼称を変えることは決して適切とは考え難い。本論でも緑泥片岩と呼称する所以である。
- (2) 利根川水系にも緑泥片岩を産出する場所の存在することは知られており、著者も埼玉・群馬県境を流れる神流川水系で緑泥片岩を採取している。神流川水系での産状は下久保ダム等により不明となっているが、鬼石町で神流川に合流する支流(三波川)には緑泥片岩の露頭が各所に存在し、近年に至るまで緑泥片岩の採掘がおこなわれていた場所も存在する。このような状況を加味する限りは神流川流域からの緑泥片岩獲得についても否定する訳ではないが、恐らくそれは限定的なものであったと考えざるを得ないし、そもそも当該地域での産状が局所的であるうえに河床礫に占める緑泥片岩の比率は荒川水系が突出している点については疑いない。何れにしても古代や中世に於いても神流川水系の緑泥片岩利用は殆ど不明であり、今後の調査が望まれる点を指摘するに留めておきたい。
- (3) 荒川河床面に露呈した緑泥片岩体から直接、こうした石棒・石剣の素材獲得を想定することは現状では困難と言わざるを得ない。先ず最初に石棒・石剣と言えども、当初は長さが30cmから50cmの素材を用意しなくてはならない。細くて扁平な石器形態を考慮するまでもなく、これらの素材に層理面や片理面、石英脈などの混入があると壊れ易いし、実際にそのような緑泥片岩製資料は少ないのである。すると中世板碑や古墳石室用材と同様に、多数存在する緑泥片岩露呈箇所にあっても、その製作に見合う石材獲得箇所は限定されてしまう。荒川中流の白鳥橋上流と親鼻橋下の二箇所のみあり、何れも中流の溪谷中とその上流部に位置している。原ヶ谷戸遺跡から遠く離れた産地に赴いてまで、わざわざ緑泥片岩を剝離、獲得していたとは考え難く、河床面に点在する転石を用いたと判断しておきたい。
- (4) (助理蔵文化財調査事業団に収蔵されている原ヶ谷戸遺跡の資料(報告書未掲載)の中には土器の小片などと共に緑泥片岩の破片も多数存在する。これらは石棒・石剣製作時に生じた工程品と見て間違いないであろう。大型の緑泥片岩礫が存在せず、また台石や敲き石等が貧弱であることは、製作の初期工程が原産(採集)地でなされていたことを明示している。
- (5) 可能性としては再三に亘り指摘したとおり、荒川河床や段丘崖に露呈した緑泥片岩の岩体からの直接採取も考えられるが、幾つかの理由からその可能性は低かったと考えざるを得ない。
- 1、より下流部の河床面から十分な大きさの素材確保ができた。
  - 2、河床や段丘に露呈した岩体から緑泥片岩を剥がすより、棒状礫や板状礫を用いた素材獲得をおこなった方がより効率的である。
- 加えて、転石となった緑泥片岩の方が岩体から剝離したものよりも岩質が良好であったと考えられる。また、石棺や板石塔婆のように大型素材で大量の素材確保が必要であったとは考えられないことから、転

石を加工することで十分な素材確保がなされていた可能性がたかい。そもそも石棒や石剣に明確な大きさの規格性がないことも、素材である礫形態に左右されていたのかも知れず、岩体から素材を剥離していた場合には同一形態の量的生産が前提条件の一つともなろう。

また寄居町玉淀河原は荒川扇状地(櫛引台地を形成する基盤礫層)の扇頂部に該当し、一方の原ヶ谷戸遺跡は扇端部に相当し、両者の距離は10km程である。丘陵や山間部を越えて原産地へと素材獲得に赴くことなく、平坦な扇状地での緑泥片岩石材の獲得・運搬が適うのであれば、後者により経済的なメリットが存在していたことは言うまでもない。

- (6) 他にも数点の資料が出土している遺跡は多いと思われるが、今回の研究での集成は適わなかった。何れは県内資料も含めた広域的な緑泥片岩製石棒のリスト化を暫時、進めてゆきたいと考えている。

なお、現状にて緑泥片岩製石棒の最も北の資料は群馬県月夜野町の矢瀬遺跡であり、東は銚子市の余山貝塚のものである。特に後者の例は埼玉県内にも類例がない程の巨大(長さ83cm程)なものであり、恐らく河川を運ばれた資料であったことは間違いない。また、西広貝塚II遺跡には長さが56.2cm、幅4.8cm、重量が1.7kgにも及ぶ大型品があり注目される。東京都の下宅部遺跡にも同様に巨大な緑泥片岩製石棒が発見されているが、原産地から離れた地域にこうした大型品が運ばれている点は今後に追求すべき研究課題と考えている。

- (7) 石棒石材は広く関東地域を見渡してみても、緑泥片岩と粘板岩、安山岩の三種の石材によってほぼ占められていると言っても過言ではない。言うまでもなく石棒は短いものでも20cm、普通は30cmから50cm、そして大きな石棒となるとその長さが100cmにも及ぶ例もあり、そうした形態的属性を創出可能な石材となると上記した三種の石材に限られてくるのである。また、石棒製作用の石材が緑泥片岩(=緑)、粘板岩(=黒)、そして安山岩(=白)と、明確な色彩差となって顕在化する点も看過できず、それぞれの石材を用いた石棒は特定の色彩と強い結び付きを有している点も見逃せない。また、各種文様の彫刻等は粘板岩、緑泥片岩、安山岩の順に少なくなっており、色彩と共に文様の有無や形態などの違いも石材差と一体化していた可能性がある。石棒・石剣に施された文様は土版・石版、或いは土偶などと共通するものがあり、そうした遺物に共通した文様学研究はこれらの遺物の機能解明に不可欠となろう。

#### 《引用・参考文献》

- 阿部 芳郎 2010 「後期社会を考える」『移動と流通の社会史』 雄山閣  
岡村 道雄 1983 「松島湾宮戸島里浜貝塚における食料採集活動とその季節性」『考古学研究』 29-4  
我孫子市教育委員会 1998 『我孫子市史』  
市 川 市 1992 『掘之内貝塚資料図鑑』  
市原市教育委員会 1999 『祇園原貝塚』  
市原市教育委員会 2005 『市原市西広貝塚II』  
市原市教育委員会 2007 『市原市西広貝塚III』  
小山市教育委員会 1982 『乙女不動原北浦遺跡』  
栗島 義明 2008 「縄文前期の磨製石斧製作とその流通」『利根川』 30  
栗島 義明 2011 「緑泥片岩を用いた横穴式石室の構築」『さきたま史跡の博物館紀要5』  
栗島 義明 2011 「山から海へ/海から山へ ～縄文のダイナミズム：物資の交易」『企画展 スローフードの考古学』 さいたま県立さきたま史跡の博物館  
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1988 『赤城遺跡』  
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990 『雅楽谷遺跡』  
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993 『原ヶ谷戸・滝下』  
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993 『久台II』

- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993 『久台Ⅲ』  
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993 『ささら』  
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005 『諏訪ノ木遺跡』  
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005 『雅楽谷遺跡Ⅱ』  
埼玉県秩父郡長瀨町教育委員会 2004 『秩父・大滝遺跡2000』  
埼玉県 1980 「橋屋遺跡」『新編埼玉県史 資料編1』  
(財)千葉県文化財調査協会 2001 『千葉市内野第1遺跡発掘調査報告書』  
(財)栃木県文化振興事業団 2001 『藤岡神社遺跡』  
(財)とちぎ生涯学習文化財団 2001 『寺野東遺跡Ⅲ』  
(財)栃木県文化振興事業団 1997 『寺野東遺跡Ⅴ』  
(財)千葉県文化財調査協会 2001 『千葉市内野第1遺跡発掘調査報告書』  
月夜野町教育委員会 2005 『上組北部遺跡群Ⅱ 矢瀬遺跡』  
東京都埋蔵文化財センター 2011 『北区西ヶ原貝塚』

# 縄紋時代前期の搬入土器

— 埼玉県内における北白川下層式 —

近江 哲(越生町教育委員会)

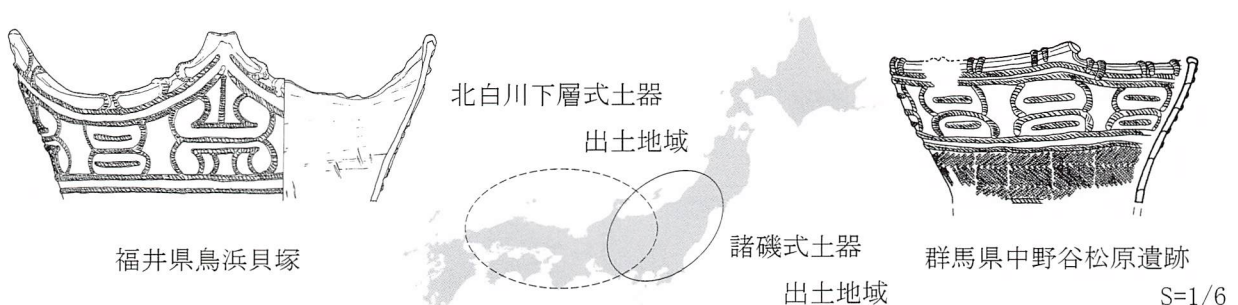
## はじめに

関東における縄紋時代前期の土器型式は、初頭の花積下層式にはじまり、後続する関山式、黒浜式、そして後半期の諸磯式、末葉の十三菩提式が実在する。一方で前期は他地域との交渉も盛んで、発掘においては非在地の異なる顔つきをした土器を見ることがある。埼玉県内で出土した事例を挙げれば、関西地方の北白川下層式、東海の木島式土器、信州の有尾式土器が最たる例であり、隣接する諸地域との交流が窺われよう。いつの時代も遠隔地に分布する土器は、在地化の変遷・土器移動の行路を指し示す存在であり、縄紋社会を語るうえで魅力的な存在である。しかし、突発的な出土であることがほとんどで、文様構成を把握出来ない小破片であることが多く、存在を認識しながらも要として併行関係を論じにくいのが現状である。

本稿では、そのような他地域の土器の一つとして北白川下層式に着目してみたい。北白川下層式は薄手で繊維を含まないことを特徴としており、関西地方を中心として広域に分布する縄紋時代前期を代表する土器型式の総称である。広義においては、前期初頭にあたる羽島下層II式、また前期末葉の大歳山式までを含んだ名称として用いられることもある。先述のように、関東では客体的な存在である。

様式圏としては、諸磯式と北白川下層式の両極に対比されることもあるが、中部・東海ではまた異なった土器様相を示している。北白川下層式の東限をどこにするか、接触地域を如何に捉えるかは現在でも相違が多い。関東で出土する薄手の土器を近畿地方の北白川下層式と即断することに疑問を呈する声もあるように(増子1999)、関東・西の境界圏となる中部地方の動向に注意が払われるべきであろう。だが、1片の土器の故地を追い求めるのは、難しい。継起的な研究が望まれるところである。本稿では東海・中部の編年に多くを触れられないこともあり、ひとまず関東における出土状況を示す例として、北白川下層式として議論を進めたい。

まずは関東でなじみの薄い北白川下層式の研究略史を中心に述べ、次に関東の土器型式との関連性から述べたい。表記については、現行編年案として敷衍している網谷編年案による北白川下層I a・I b・II a・II b・II c・III式を用いる(網谷1989)<sup>(1)</sup>。本来であれば、自らの編年を示すべきであろうが、ひとまず埼玉県内出土の北白川下層式の実態把握を主眼したい。



第1図 関東・関西出土の北白川下層式

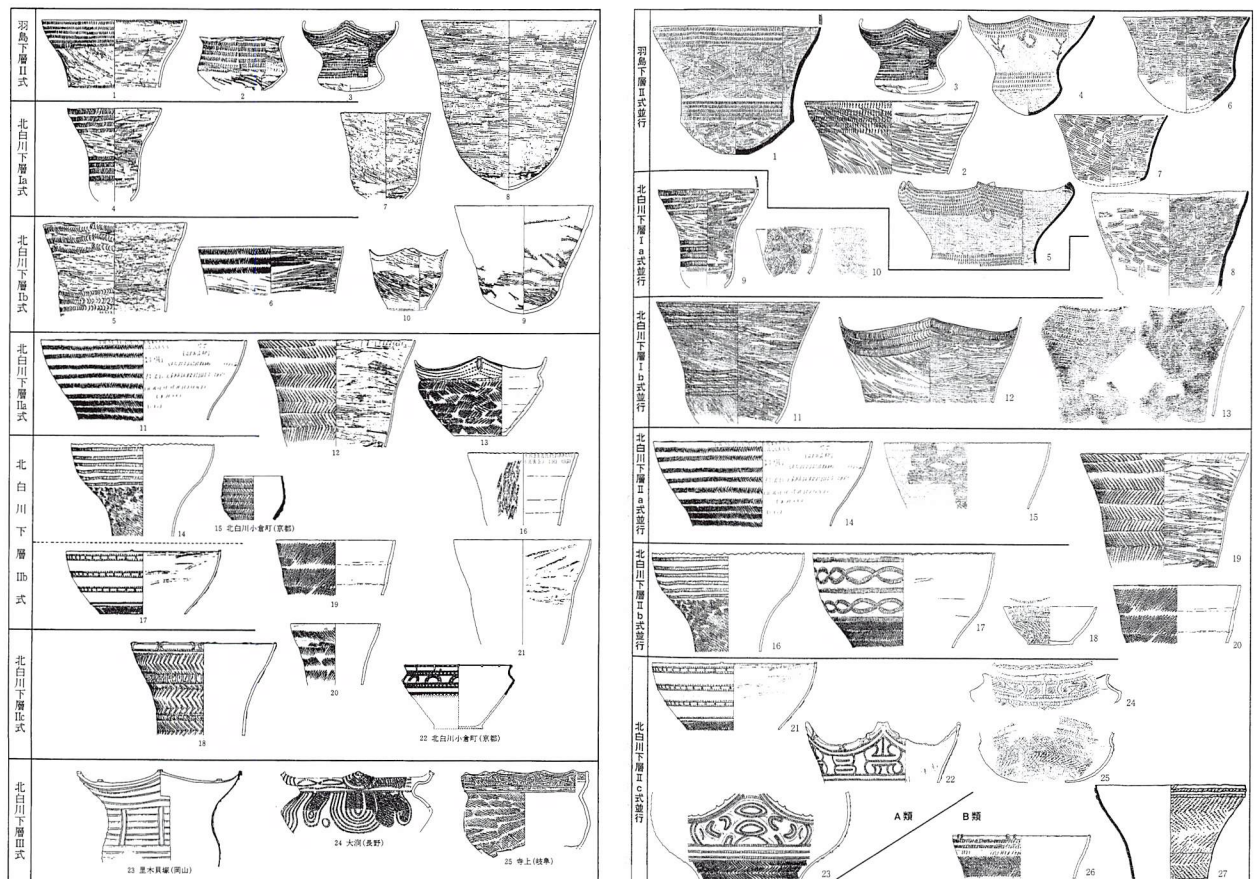
# 1 関東・関西の前期土器研究略史

北白川下層式に関する研究史は既に多くの優れた論考があり、そちらを参考にした(小野1989、縄文セミナー1999、南2002、鈴木2008a・b)(第1表)。

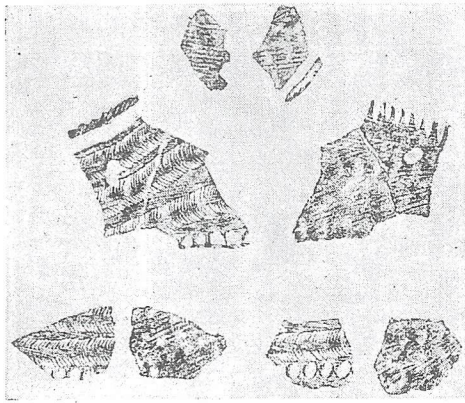
北白川下層式が初めて知られるのは、大阪府藤井寺市国府遺跡の発掘時である。その後、戦前の1934年に梅原末治らによって京都府左京区北白川小倉町遺跡が調査された(梅原1935)。層位的所見により「北白川下層式」「北白川上層式」が設定されており、標識遺跡である。報告には小林行雄による出土土器の考察があり、爪形文に着目して分類を行っている。その後、時間的關係を詳述していないものの、三森定男が北白川下層式を3類に分類しており(三森1938)、小林の分類を進め土器を説明したものとして注目されよう。

縄文時代の遺跡が希薄な関西において、前期の北白川下層式が良好な状態で確認されることは少ない。北白川小倉町遺跡、京都府志高遺跡、福井県鳥浜貝塚といった層位的に発掘されたと判断される一部の限られた遺跡を基軸に編年が進められてきたこともあり、これが地域的な様相を見るうえで指標でありながら弊害でもある。

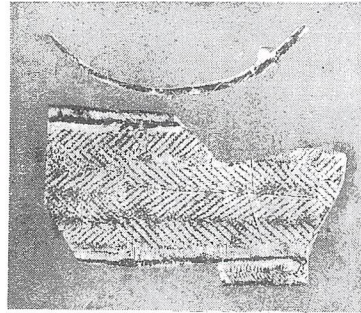
北白川下層式は北白川小倉町遺跡の発掘後、山内清男により「国府北白川1」として前期に位置づけられ、関東の諸磯a・b式と対比されているが、当時、諸磯c式はまだ設定されていない(山内1936、1937)。この分類についてはさらに後年となるが、佐原真が「私の誤解でなければ、山内先生は北白川下層を条痕のある類をI式、大歳山類似の梅原先生が、特殊凸帯文土器とよばれた類をIII式、それ以外をII式に分けられている」としている(佐原1956)<sup>(2)</sup>。



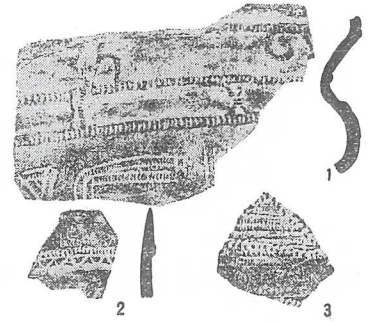
第2図 北白川下層式の編年案(左：網谷、右：鈴木)



埼玉県上福岡貝塚  
北白川下層1式



神奈川県横浜市下田町東貝塚  
北白川下層2式



東京都板橋区四枚畑貝塚  
北白川下層3式

第3図 江坂による関東出土の北白川下層式

1930年代の中部地方では、江馬修が江名子糠塚遺跡の調査を基に糠塚式を設定した(江馬1934)。諸磯式類似としながらも薄手の堅緻なことに注目し、全く北白川下層式と同型式と出来ない、として中部地方の差異化を示した点は当時において卓見であった。しかし、現在まであまり評価されるに至っていない。鈴木徳雄は中間的な類型を構成するものとして、「糠塚類型」としている(鈴木2002)。江馬の型式設定を受け、八幡一郎は北白川下層式を爪形文の分類から3段階に設定している(八幡1935)。

翻って関東の情勢を見よう。突発的な出土も災いしてか、関東での北白川下層式は出土こそ知られたものの、併行関係を論じるのに足る好例は少ない。この頃埼玉県ふじみ野市(旧：上福岡市)上福岡貝塚の発掘が行われ北白川1式が出土しており、江坂輝彌により紹介されている。江坂は「北白川下層1式が関山式文化後半より黒浜式文化の前半に併行するぐらいの時期の文化であるとの想定が正しいならば爪形文は先ず近畿地方に発達し関東方面へ伝播された文化」と捉えている(江坂1951c)。江坂の編年案として、坂詰とともに発掘した横浜市港北区下田町東貝塚の北白川2式、四枚畑貝塚から出土した北白川3式をもって、関東・関西における一応の編年を系統づけた点は注目されよう。また両地域の併行関係を重視した江坂は、中部山岳地域の諸遺跡を重視し、接触領域における重要性を指摘した点も高く評価される。ただし、上福岡貝塚の資料は後年に奈良国立文化財研究所によって山内清男考古資料として公表され、現在の観点からは北白川下層II式であることが看過されている(黒坂1992)。

その後、北白川下層式の細分を進めたのは鎌木義昌である(鎌木1959)。鎌木は、条痕調整に爪形文を施文するI式、爪形文と縄紋を併用するII式、縄紋地にいわゆる特殊突帯文を施す平底のIII式に分類した。

その後1960年代には、北白川下層式の現在の編年を位置づけるうえで重要な福井県鳥浜貝塚が調査された。調査を行った森川昌和は、鳥浜式I～IV式の設定を行っている(森川1963)。これを受けて北白川下層式の細分案を示したのは、岡田茂弘による追証であった(岡田1965)。特にII式については連続爪形文・C字形爪形文・突帯上に刻目文または縄紋を施す土器としてIIa・IIb・IIc式に細分している。

その後、組織的な発掘が開始され、1979年に調査された福井県鳥浜貝塚の資料から、鳥浜貝塚の成果を元に、現在に連なる北白川下層式の編年案を構築したのは網谷克彦である(網谷

1979、1982)。その後、『縄文土器大観』で見解を新たにし、編年案において従来のII b式・II c式の内容を修正しており、爪形文から凸帯文への変化をII b式(新)の段階とされ、凸帯文の内部自生の可能性を示唆している(網谷1989)。I a・I b・II a・II b・II c・III式の細分案を示し、第2図のような編年案を示した。

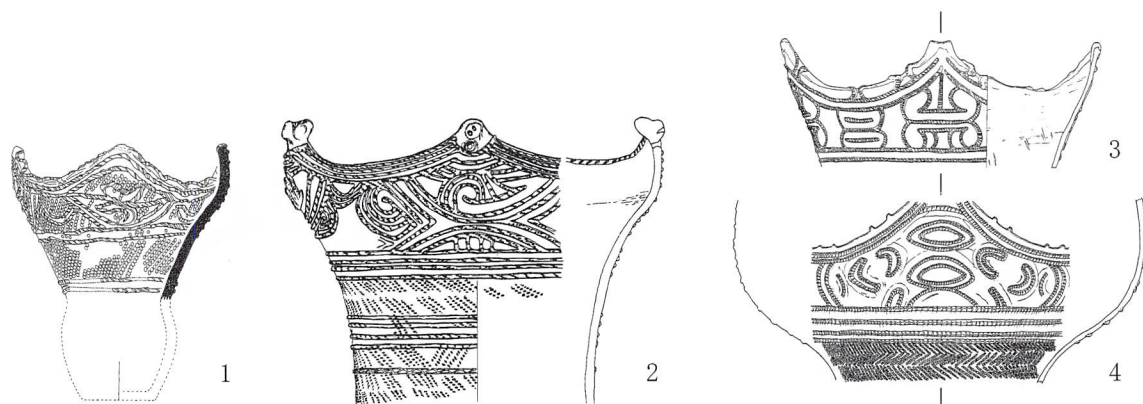
この頃、中部地方においても北白川下層式が注目されており、長野では『信濃考古綜覧』で北白川下層式の集成が示された。在地土器型式との差が述べられ、神ノ木式が北白川下層式の影響をされている点、有尾式との比較など、関東・関西をつなぐ準備が整いつつある時期である。市村勝己や小野正文は、甲信越地域における別々の立場から北白川下層式の問題点を学史の観点から再整理し、北白川下層式の問題を検討している(市村1984、小野1989)。

諸磯b式の浮線文の出自に関しては、未だ解決をみない。この問題が複雑なのは、浮線文が諸磯b式の内在的発展か、外的要因によるものか、という点である。この問題が本稿と関連深いのは、諸磯b式の浮線文が、常に北白川下層式と対比されてきた経緯による。

1980年代に諸磯式研究が盛んになる以前に、安孫子昭二による浮線文土器の出現に二つの仮説を立てた言及がある(谷口1980)<sup>(3)</sup>。一つは諸磯a式の爪形文から隆帯が出現する要因がなく、関東の北白川下層III式を模倣したとするもの。もう一つは諸磯a式の爪形文が多段に施文され、爪形文間に斜沈線を施したものが、浮彫化してそれまで爪形文が退化するというものである。この仮説は、多摩ニュータウン遺跡No.175遺跡の成果で、搬入された北白川下層III式の存在、折衷土器の存在から、安孫子自身は北白川下層式模倣説を採っている。また、中部地方の関わりを暗示しており、地域的な交渉を想定した点は注目すべき見解である。その後、谷口康浩は藤の台遺跡の整理において安孫子の説を推し、浮線文の出自に関して、北白川下層II c式の影響、つまり外的影響による変化を想定している(谷口1980)。

諸磯b式を論じるうえで北白川下層式の影響を説いた研究に鈴木敏昭の一連の研究がある(鈴木1980、1991など)。共通する文様要素である浮線を論じるにあたり、文様要素としての浮線と、その当時慣用的な呼び名であった浮線文土器の起源を別にしてしている点は傾聴すべき見解である。対し、鈴木徳雄は内在的発展による浮線の発生をみており(鈴木1996)、好対照である。

また北白川下層式と関東前期土器型式の併行関係を論じたのは、土肥孝である(土肥1982)。北白川下層2 b式が口縁部文様帯の構成において、肋骨文風をなす事、胴部文様に弧線文をと



諸磯b式：非対称

北白川下層式：対称

1：千葉県木戸場遺跡 2：千葉県北前貝塚

3・4：福井県鳥浜貝塚

第4図 土器における対称・非対称

梅原末治 1935	小林行雄 1935	八幡一郎 1935	山内清男 1936	三森定男 1938	江坂輝弥 1951	小島俊次 1956	佐原真 1956	鎌木義昌 1959	京大 1960	森川昌一 1963	岡田茂弘 1965	綱野克彦 1979	鈴木康二 2008				
一. 所謂 無文土器	1類 条痕ある ものを一 括	(I) 爪形小さく、整わ ない、間 隔が粗漫  (II) 爪形が中 形ないし 大形、爪 形は密接 し、両側 に溝線を 滞びる  (III) 爪形、ほ とんどす べての爪 形列の両 側に溝線 をもつ	国府北白 川1	北白川A 北白川B 北白川C	北白川 下層1	北白川 下層 I	北白川 下層 I	北白川 下層 I  羽島下層 Ⅱ式	北白川下 層Ia類	北白川 下層IA群 鳥浜 I	北白川 下層Ia	羽島 下層Ⅱ	羽島 下層Ⅱ 並行				
二. 狭義縄 文系土器	2類A 貝爪形文				北白川 下層Ⅱ	北白川 下層Ⅱ	北白川 下層Ⅱ  磯の森	北白川 下層Ⅱ  それ以外	北白川 下層Ⅱ	北白川 下層Ⅱ	北白川 下層Ⅱ	北白川 下層Ⅱ	北白川 下層Ⅱa	北白川 下層Ⅱa	北白川 下層Ⅱa 並行		
三. 爪形文 系土器	2類B 竹爪形文				北白川 下層2	北白川 下層Ⅲ				北白川 下層Ⅱ	北白川 下層Ⅱ	北白川 下層Ⅱ	北白川 下層Ⅱ	北白川 下層Ⅱ	北白川 下層Ⅱa	北白川 下層Ⅱa	北白川 下層Ⅱa 並行
	2類C 側線を有 する竹爪 形文				北白川 下層3	北白川 下層Ⅳ				北白川 下層Ⅱ	北白川 下層Ⅱ	北白川 下層Ⅱ	北白川 下層Ⅱ	北白川 下層Ⅱb	北白川 下層Ⅱb	北白川 下層Ⅱb	北白川 下層Ⅱb 並行
四. 凸帯 文系土器	3類 狭義縄文 に一部 凸帯文を 加えたもの				北白川 下層Ⅲ	北白川 下層Ⅳ	北白川 下層Ⅲ	北白川 下層Ⅲ	北白川 下層Ⅲ	北白川 下層Ⅲ	北白川 下層Ⅲ	E群 凸帯文 鳥浜Ⅳ	北白川 下層Ⅱc	北白川 下層Ⅱc	北白川 下層Ⅱc 並行		
六. 特殊凸 帯文土器	5類 竹管で修 正された 特殊凸 帯文	大歳山	大歳山 大歳山＝ 特殊凸帯 文	北白川 下層3	大歳山＝ 特殊凸帯 文	北白川 下層Ⅲ 特殊凸帯 文	北白川 下層Ⅲ 彦崎ZⅡ	北白川 下層Ⅲ	北白川 下層Ⅲ	北白川 下層Ⅲ 大歳山と 類似		北白川 下層Ⅲ 並行/ 大歳山 並行					

第 1 表 北白川下層式の編年対比表



北関東	南関東	南関東	中部	新潟	北陸	北白川下層			東海
関根	細田	松田	今福	中野	山本	山本	小杉	網谷	増子
b1				刈羽古				II b (古)	小御所 II
2	1	古	1						
3	2	中1	2		吉峰	II c	II c (古)	II b (新)	清水の上 I
4	3	中2(前)	3	中			II c (新)	II c	大麦田 I
5	4	中3(後)	4		蛭ヶ森 I				
6	5	新	5・6	新	蛭ヶ森 II	?	(+)	III	大麦田 II

第2表 縄文セミナーにおける編年案対比表

る土器があることから、諸磯a式に対比している。後続する諸磯b式では、口縁部に浮線をもつことから北白川下層2c式の凸帯文と対比している。また、塗り分け法による赤色塗彩土器の出現を北白川2b式に見出しており、関西地方が先行することに注目している。これは泉拓良が「突帯をもつ土器は東日本からの影響で生じた」としたのに対し(泉1979)、諸磯b式の前段階に浮線の要因が認められず、浮線とは異なる観点から言及しており特筆されよう。

鈴木敏昭と土肥孝が解いた文様構成の左右対称・非対称という違いは、諸磯式と北白川下層式の施文構造の違いという点において着眼されるべき視点である。しかし、こうした鈴木敏昭の「浮線文土器の採用も、諸磯b式の基本的な構造を壊さない範囲でとり行われた出来事なのであり、地域的には、以後も浮線文が盛行する中部山岳地方で実現された可能性が高い」という認識に対し、接触地域となる中部地方をはじめ、北白川下層式との関係性において答える見解は隆盛しなかった。その後1999年の縄文セミナーで前期後半が取り上げられ諸磯式と北白川下層式の関係性が問題となった。諸磯b式の細分もさることながら、北白川下層式の細分の違いも明白となり、併行関係に問題が生じている(第2表)。

また、北白川下層式と諸磯式を論ずるうえで忘れてならないのが、浅鉢の存在である。前期に増加する浅鉢は、特に諸磯式期において、所謂 UFO 型と呼ばれるような特殊形態をなすこともあり、注目されてきた。浅鉢において搬入・模倣の実態を把握したのは小杉康である(小杉1985など)。ただし、小杉の編年案の念頭には、北白川下層式と諸磯式の細分において時間差を認めており、相互の影響を考慮しながらも先後関係が確定している点には注意を要する。

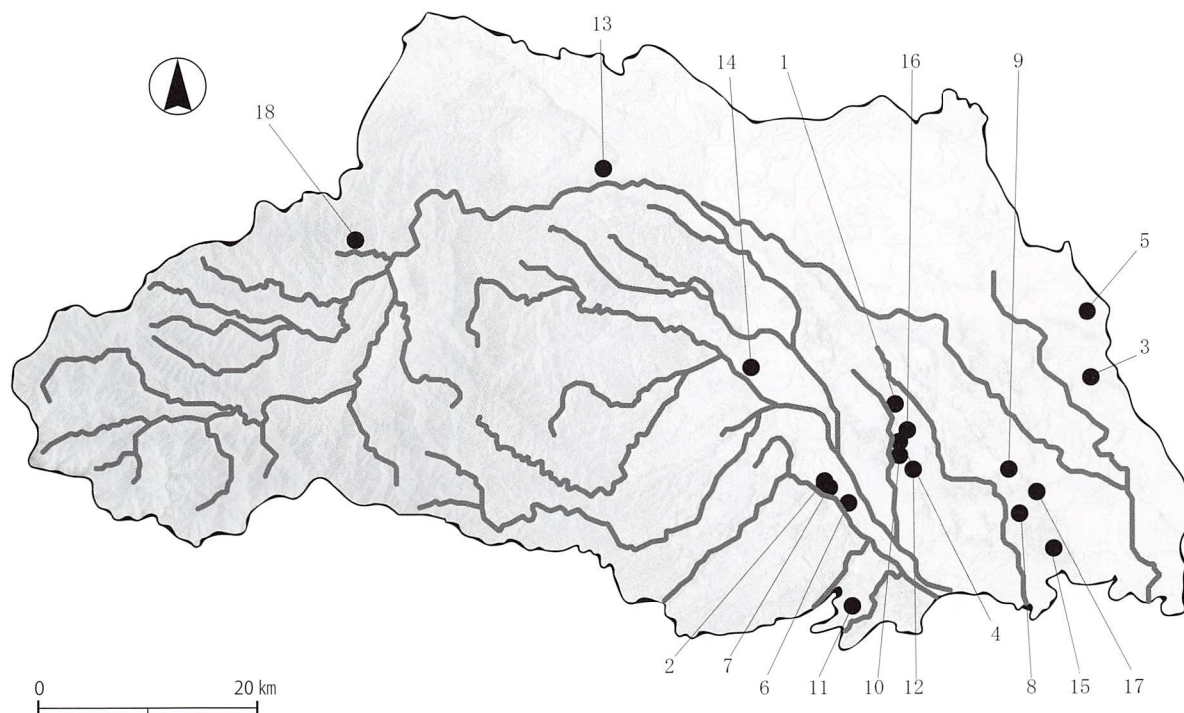
近年では、こうした北白川下層式と諸磯式の関係性と併行して、搬入土器に関する論考も増えてきた。最近では千葉県で房総における縄紋時代の非在地系土器の集成が行われ、14例の北白川下層式出土遺跡が報告されている(横山2009)。千葉県内における前期では、浮島式と諸磯式が拮抗する時期でもあり北白川下層式の出土例は散発的である。また胎土分析も行われているが、中部・東海・関西の違いが明確になっているようには思い難い。継続性が望まれる。

現状の問題点としては、関東・関西を二極化して捉える傾向があり、中部・東海を念頭とした広域編年網が必要となろう。発掘による遺構の共伴関係では充分でなく、型式間における変遷もまた指標の一つとして考察していかねばなるまい。

## 2 埼玉県出土の北白川下層式

関東の諸磯式に比較すると北白川下層式は薄手で堅く焼きしまり、堅緻であることを第一の特徴とする。これは土器の焼成が良く、灰白色を帯びた風合いをなすことにつながる。製作時において焼成に特徴があるのか、胎土によるものなのか、はたまた両方の作用で堅緻な灰白色の土器を作り上げるのか結論の出ぬところではあるが、そちらは胎土分析の進展を期待したい。

北白川下層式の縄紋は細かな繊細なものであり、装飾的な羽状縄紋をもつことが多い。これに対して、関東では黒浜式から羽状縄紋は少なくなり、諸磯b式では荒い無骨な縄紋が多い。いずれも装飾を意識した北白川下層式とは異なり、文様の展開に影響しているのかもしれない。



第5図 埼玉県内における北白川下層式出土遺跡

番号	遺跡名	所在	遺構	土器型式	文献
1	氷川遺跡	上尾市戸崎氷川氷川	住居跡	北白川下層II a 式	赤石・野村1981
2	上福岡貝塚	ふじみ野市(上福岡市)福岡	住居跡	北白川下層II a 式	黒坂1992など
3	米島貝塚	春日部市(庄和町)米島	住居跡	北白川下層II a 式	小林1965
4	下加遺跡	さいたま市(大宮)日進町1丁目	住居跡	北白川下層II c 式	田代治ほか1990
5	町道遺跡	春日部市(庄和町)西宝珠花	住居跡	北白川下層II c 式	長谷川・荻原2004
6	宮廻遺跡	富士見市勝瀬(第20地点)	住居跡	北白川下層II c 式	隈本・加藤2009
7	鷺森遺跡	ふじみ野市(上福岡市)駒林	住居跡	北白川下層II c 式 北白川下層III 式	笹森1987
8	木曾呂遺跡	川口市木曾呂	包含層	北白川下層II a 式	吉田1991
9	惣持院西遺跡	さいたま市(浦和)南部領辻惣持院	探査	北白川下層II a 式	高野1972
10	下手遺跡	さいたま市(大宮市)西区三橋5丁目	遺構外	北白川下層II a 式	大宮市1968
11	内畑遺跡	新座市片山	住居跡	北白川下層II a 式 北白川下層II b 式	谷井1970
12	御屋敷山	さいたま市(与野)中央区円阿弥2丁目	トレンチ	北白川下層II b 式	今井1986
13	舟山遺跡	大里郡川本町本田	遺構外	北白川下層II c 式	小澤・柳田1980
14	木曾免遺跡	坂戸市小沼	包含層	北白川下層II c 式	篠田2008
15	天神山遺跡	川口市赤井	遺構外	北白川下層II c 式	斉藤ほか1978
16	上加遺跡	さいたま市(大宮)北区日進町2丁目	遺構外	北白川下層II c 式	田代治ほか1999
17	梶谷遺跡	さいたま市(浦和)緑区大字大門	グリッド	北白川下層II c 式	青木・高山1976
18	彦久保岩陰	秩父郡吉田町阿熊	トレンチ	北白川下層II c 式	小林1966

第3表 埼玉県内における北白川下層式出土遺跡

以上の点を踏まえて、県内から出土した北白川下層式を集成した。網羅的に見る事が叶わず遺漏も多いことと思われるが、ご寛恕願いたい。遺構出土の場合は遺構と土器、遺構内出土の代表的な土器を、包含層出土のものは土器のみを図示した。番号は第3表と対応する。

(1) 遺構出土

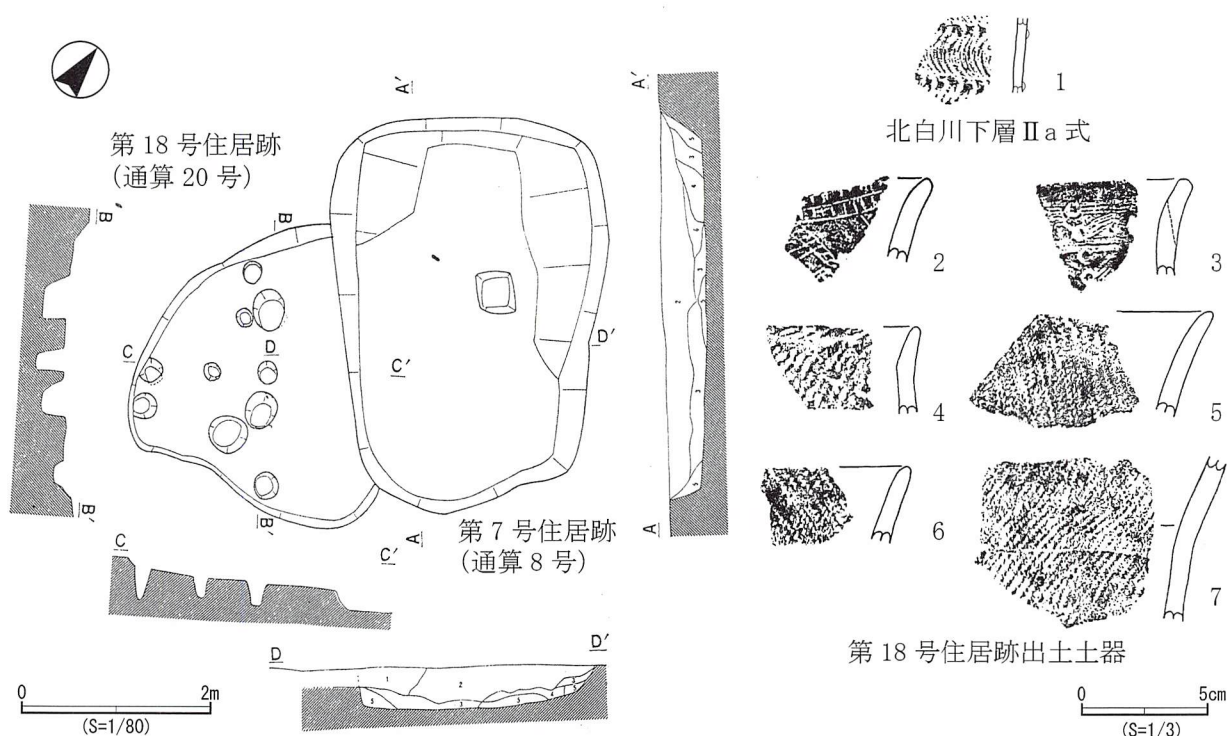
1. 氷川遺跡(赤石・野村1981、小宮山1996)

上尾市の大宮台地に位置する。これまで3次の調査がなされ、1979年に行われた1・2次調査で、竪穴住居跡23軒、土壇32基を検出している。北白川下層式が出土したのは1次調査時の18号竪穴からである。18号竪穴住居跡は7号住居跡と切り合っており、平面図では7号の方が新しいように見えるが、断面図を見ると18号が新しくなっている。この点については3次調査で小宮山も指摘している(小宮山1996)。

7号住居跡では遺構内出土で花積下層～諸磯a式の土器が出土し、18号住居跡では床面から一括出土の関山式期所産の土器が認められたとある。北白川下層式についての記述は、報告中では記述がなかったが、3次調査報告において、横位に施文された棕櫚状爪形文とされ、諸磯a式との共伴と紹介された。ただし諸磯a式は覆土中からの出土であり、検討の余地があろう。

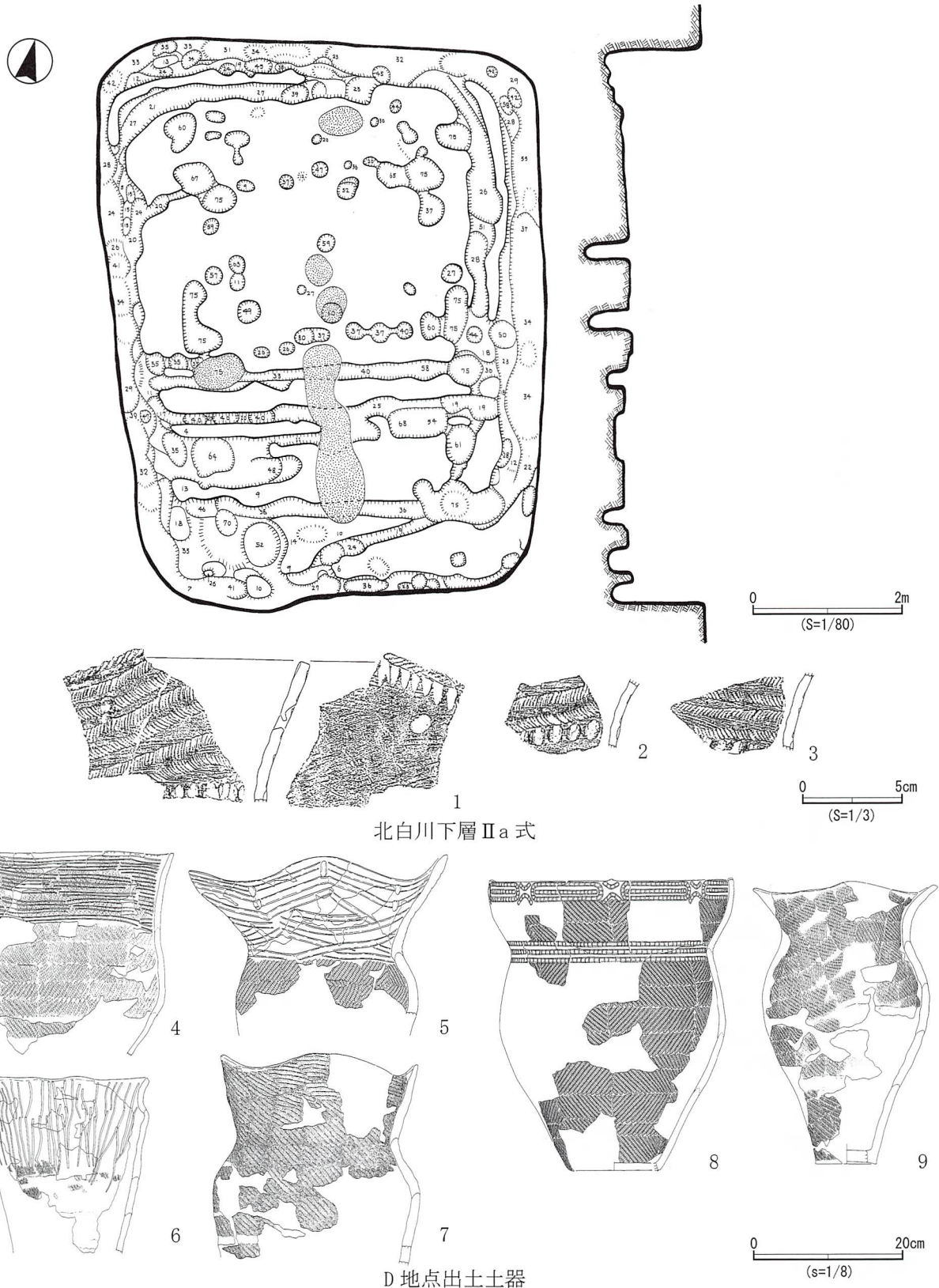
2. 上福岡貝塚(黒坂1992、笹森・編1994など)

旧上福岡市に所在した上福岡貝塚は山内清男によって発掘され、その略報が示されている。上福岡貝塚は関山式の片口深鉢が注目されたこともあり、前期前半を主体とする遺跡のように捉えられていたが、奈良文化財研究所の山内清男資料の報告によって、黒浜式を主体とすることが判明している。D地点では住居跡が検出されており、黒浜式中～後半段階までの土器が出土している。住居跡は数度の拡張が確認されている。早くから縄文前期における竪穴住居跡の研究に寄与した遺跡で、当時の発掘調査を考えるうえで重要な遺跡である。



第6図 氷川遺跡

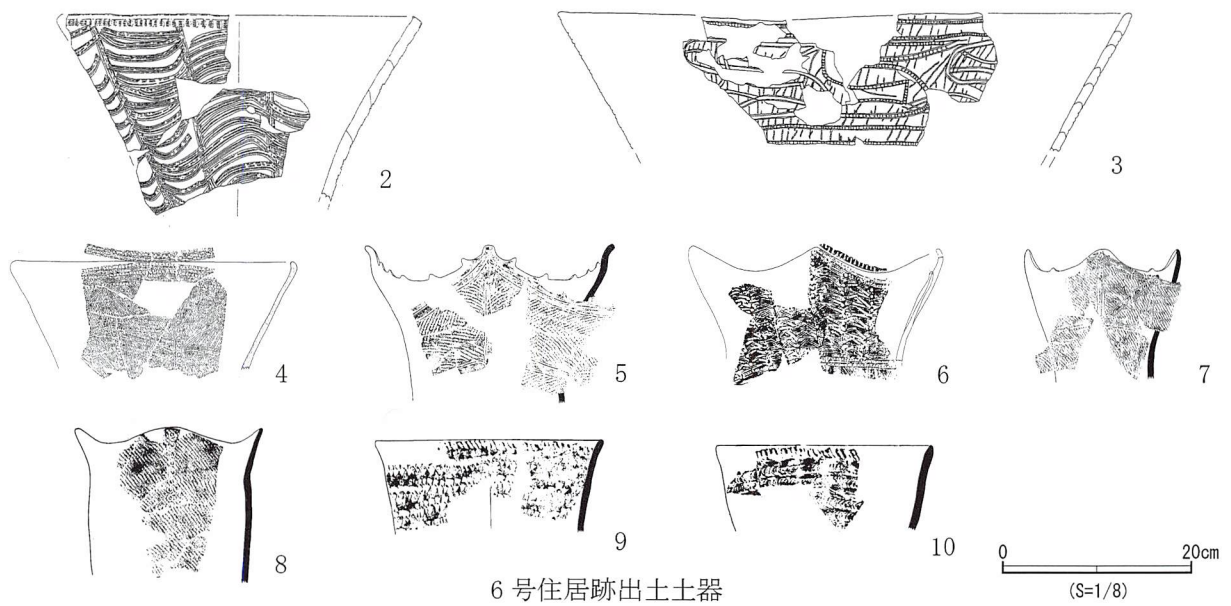
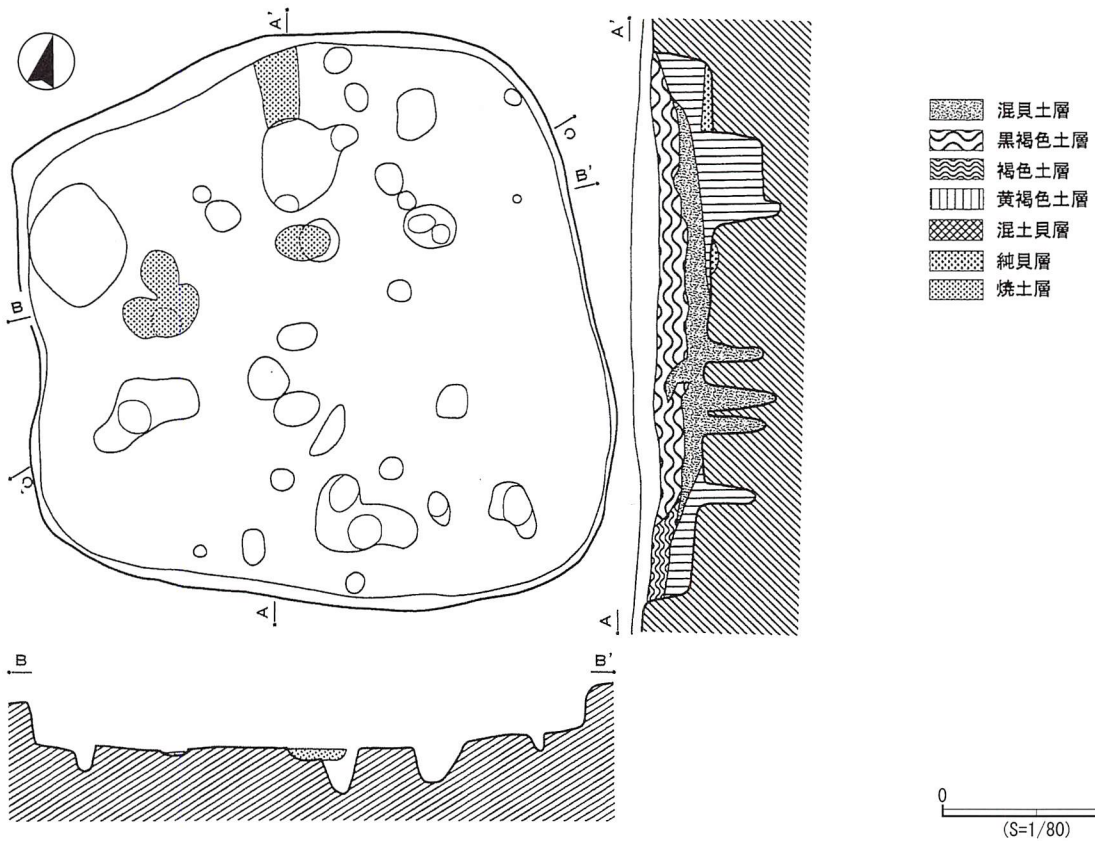
D地点から出土した3点の北白川下層式は江坂が紹介した資料で、波状口縁を呈する同一個体と考えられている。口縁部に幅広い連続爪形文が施され、文様帯を区画する刺突列がみえる。口唇部には縄紋が施されており、該期における北白川下層式の特徴をよく示している。



北白川下層Ⅱa式

D地点出土土器

第7図 上福岡貝塚



第8図 米島貝塚

### 3. 米島貝塚(小林1965、金子2007)

昭和36・37年にわたって2回の発掘が行われ、黒浜式の細分が唱えられた著名な貝塚である。古くから北白川下層式が出土したことが注目されていた。貝層の下にある土層から出土したようで、住居跡から出土した黒浜式でも新しい段階に対比されていた。報告者の小林は、既に中部地方における出土例との関係性を考察しており、「輸入品」という言葉を用いてはいるが搬入を想定しており、特筆すべき個体として取り上げられている。

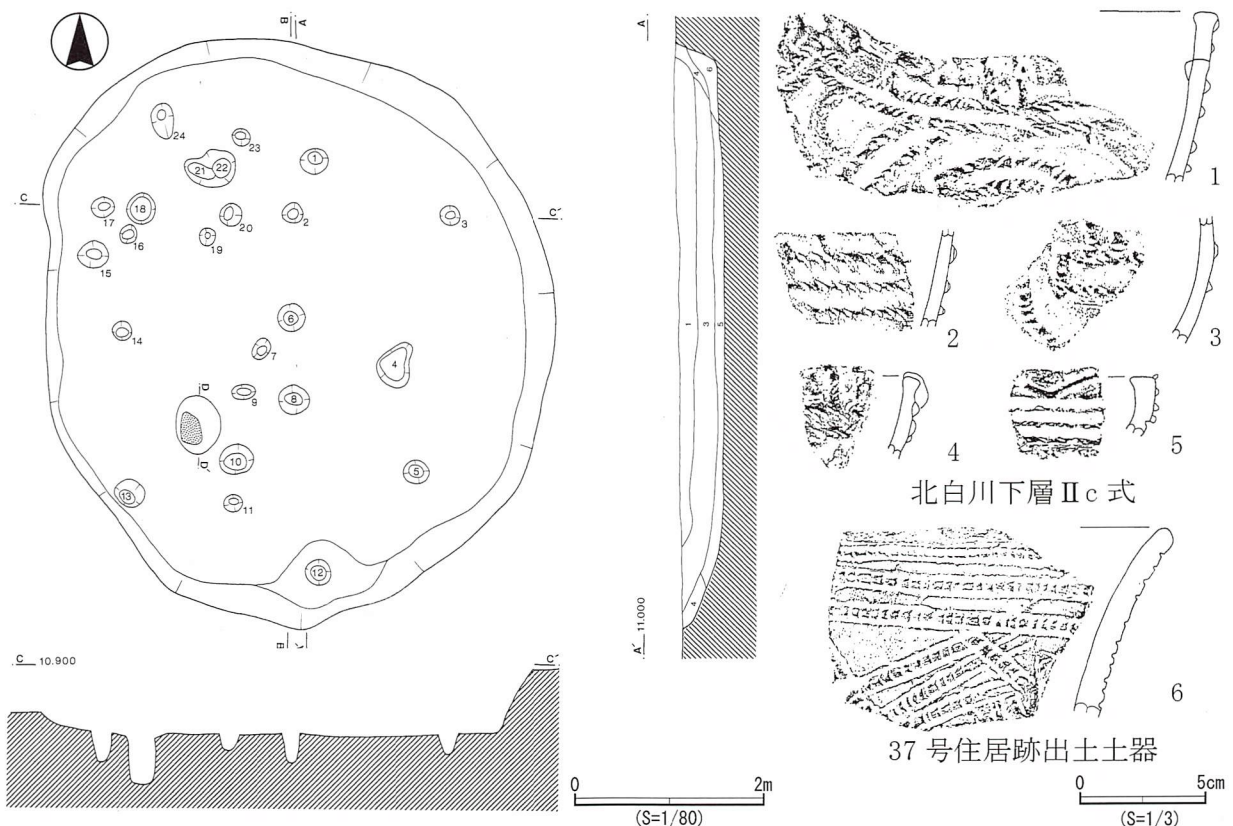
当初は平縁と考えられていたが、その後緩やかな波状縁として図上復元されている。棕櫚状の爪形文で、器壁が3mm程度の極めて薄手な作りである。灰褐色に堅く焼きしまっている。

### 4. 下加遺跡(田代・山形1990)

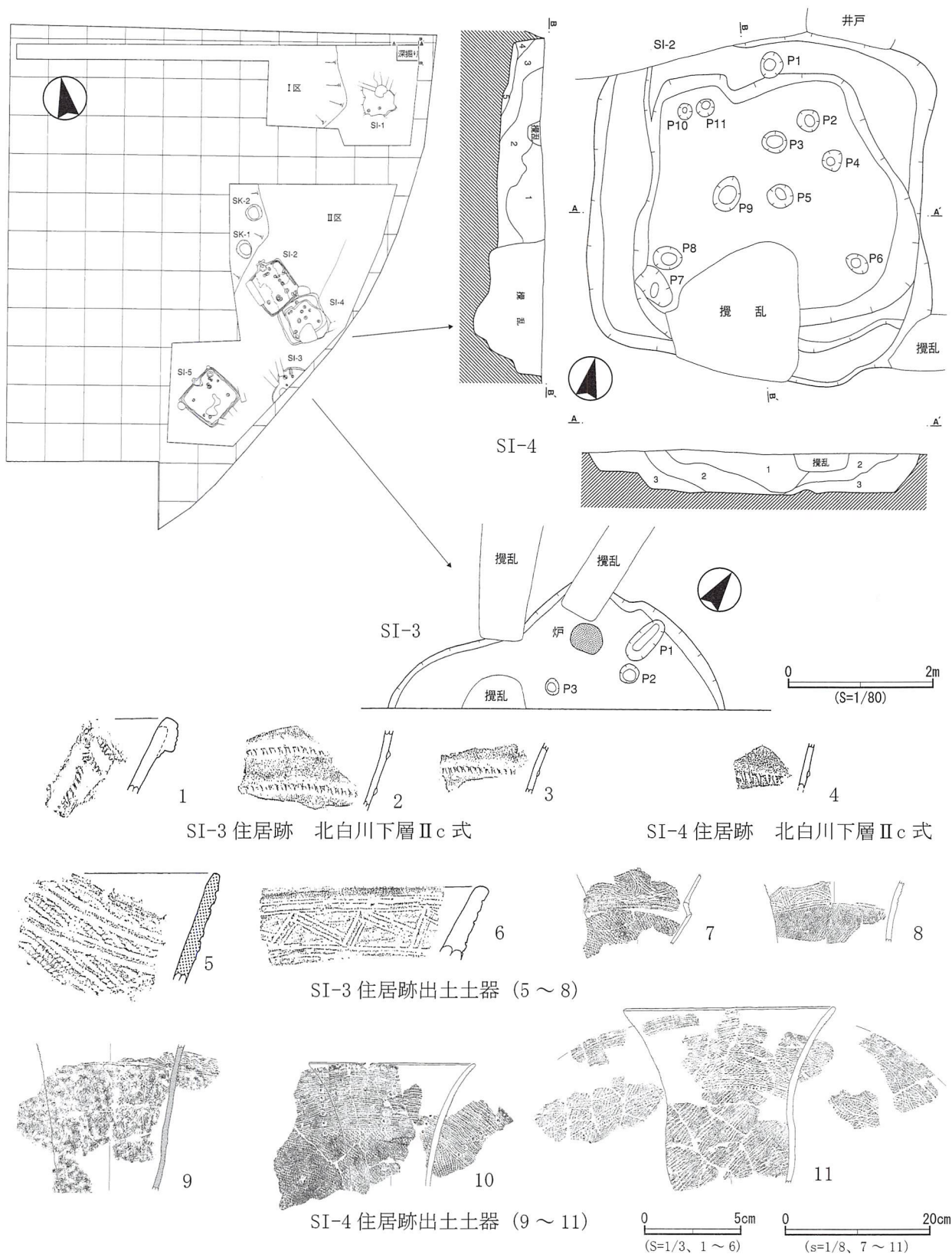
37号住居跡から出土している。遺物は覆土から出土しており、諸磯a式～b式までが出土している。北白川下層式との記述はなく、薄手で焼成の良い土器で、また文様から北白川下層式と判断した。第9図1～3は同一個体と考えられる。5は器壁が厚く諸磯b式かもしれない。住居跡から出土した諸磯b式は爪形文施文のものが多い。

### 5. 町道遺跡(長谷川・荏原2004)

春日部市(旧：庄和町)の下総台地西端に位置する。庄和町教育委員会によって調査がなされ、3軒の縄紋時代前期住居跡が検出されている。SI-3、SI-4住居跡は隣接する位置にあり、諸磯a式を主体とするが若干の時間差を思わせる。SI-3住居跡から3点、SI-4住居跡から1点の北白川下層式土器が出土した。断面三角形の低い隆帯には、丁寧なキザミが施されている。報告者である荏原は、キザミには先端の尖った工具を想定し、いずれも搬入品を考慮している。また、いずれの住居跡からも少量の浮島式土器が出土している。



第9図 下加遺跡



第10図 町道遺跡

6. 宮廻遺跡(第20地点)(隈本・加藤2009)

富士見市の遺跡として調査され、前期の住居跡は7軒検出されている。19Jと20Jは入れ子状になっており、20J・21Jより19Jは新しい。遺物は早期～前期までの遺物が出土しており、諸磯b式が主体を占める。多条のRL縄紋とLR縄紋による羽状縄紋が施された第11図1～3

は、「早期末？」としているが、19 J から北白川下層式が出土しているとある。色調については記載がないが、同時期に比して薄手の作りであり、こちらが該当するのだろう。

### 7. 鷺森遺跡(笹森1987)

ふじみ野市(旧：上福岡市)駒林に所在する鷺森遺跡は、小学校建設のため昭和55年に発掘された。武蔵野台地縁辺部に形成された遺跡であり、標高7mの立川段丘面上に位置している。縄紋時代の遺構は住居跡15軒、土壇689基余りを数え、諸磯式期の集落跡である。特徴的な二単位波状縁の浅鉢が出土したことで知られる。

隣接する8号・9号住居跡から、同一個体と見られる北白川下層式が出土している。8号住居跡は覆土からの出土のみで、床面からは遺物が確認されていないようである。諸磯a式～b式までの土器片が出土し、2片の北白川下層Ⅲ式が出土している。9号住居跡では、3回の住居拡幅が想定されている。3片の黒浜式土器を除けば、9号住居跡では諸磯a式～b式を主体としており、8・9号住居跡が近接する時期であることが考えられる。9号住居跡から出土した北白川下層式は、搬入品と見られる北白川下層Ⅱc式と、8号住居と同一個体と考えられる2片の北白川下層Ⅲ式である。

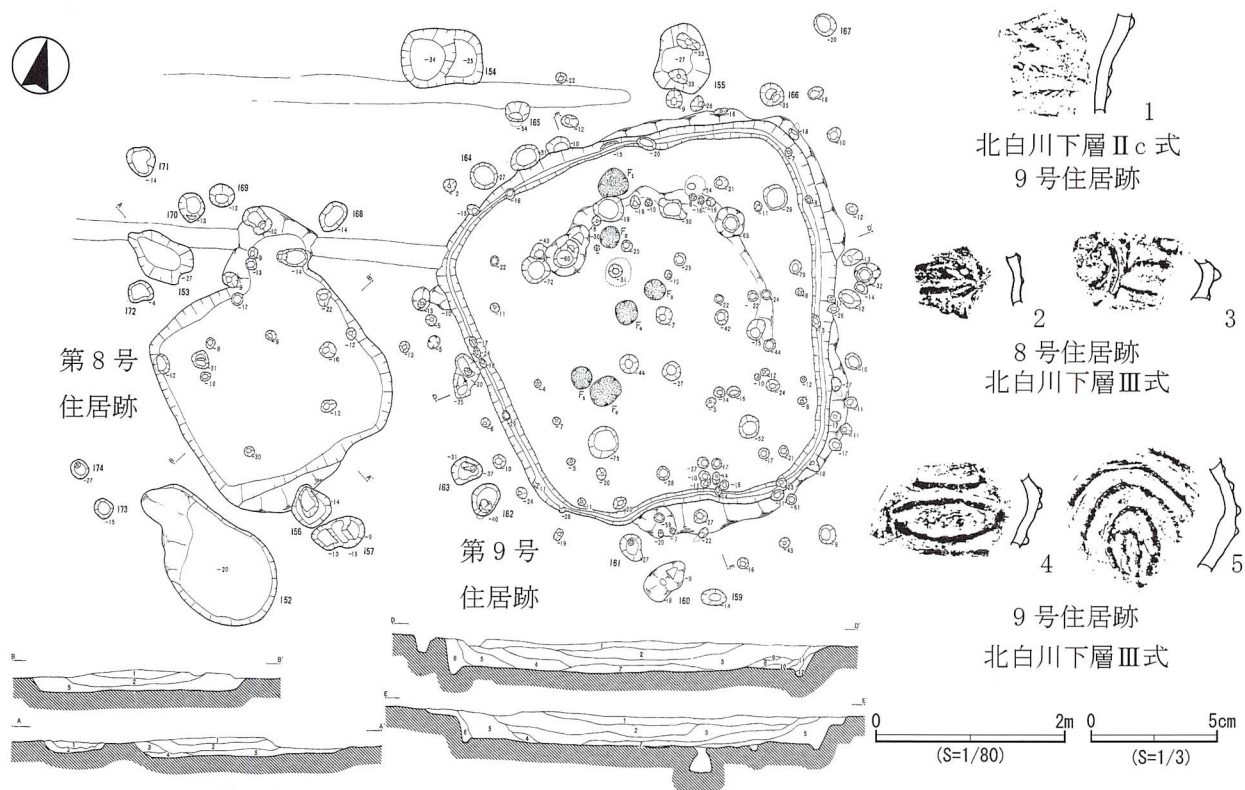
北白川下層Ⅱc式は、薄手の外面灰褐色を呈するもので、刻みを施した凸帯文を矢羽根状に横位に施している。北白川下層Ⅲ式も薄手の作りで灰褐色を呈しており、結節をもつ特殊突帯文に加えて、湾曲部の内面や突帯文の下位に爪の生跡を残すとある。同心円文の文様は北白川下層Ⅲ式の一つの特徴であるが、全体の文様構成を把握するまでではない。

また、384号土壇からは北白川下層Ⅱ式の影響を受けたとされる梯子状浮線文を有する個体が出土している。



第11図 宮廻遺跡 第20地点





第12図 鷺森遺跡

## (2) 遺構外出土

### 8. 木曾呂遺跡(吉田1991)

弥生時代を中心に縄紋～江戸時代までの複合遺跡である。縄紋時代では時期が判然としない炉穴2基・土壇39基が検出された。包含層からは早期条痕文・前期花積下層式などを中心に、早期～後期までの土器が散見される。前期は、花積下層式～黒浜式が認められ、1点の北白川下層式が出土した。

非常に薄手の作りとされ、口唇内面にも刻みを有する。口縁直下には、半截竹管状工具の刺突が連続する。細い隆帯が横走しており、隆帯間には細い連続爪形文が施文される。

### 9. 惣寺院西遺跡(高野1972)

高野博光によって報告された遺跡で、諸磯式とともに浮島式土器も出土している。棕櫚状爪形文を施文し、隆帯には刻み目が施されている。薄手の土器で、焼成も良好とある。

### 10. 下手遺跡(大宮市1968)

大宮市下手遺跡で大宮市史に記載がある。2号住居跡からは繊維を含む黒浜式土器と、若干の諸磯式が認められる。北白川下層式が見つかったのは遺構外からである。構成は棕櫚状爪形文と刻みのある隆起帯からなるが、全体の文様は不明である。

### 11. 内畑遺跡(谷井1970)

新座市の武蔵野台地北部、標高30mに位置する内畑遺跡は、埼玉県遺跡調査会により発掘されている。早くから北白川下層式が出土した遺跡として知られていた。検出された遺構は黒浜式住居跡3軒、諸磯a式5軒、諸磯b式1軒である。北白川下層式は8・9号住居跡よりそれぞれ出土している<sup>(4)</sup>。

第13図一内畑1が北白川下層II a式に比定されるもので、幅広い爪形文が連続的に押捺されている。下位の棕櫚状爪形紋は逆方向に施文される。薄手の土器で色調は灰褐色を呈する。焼成は良好で、緊緻な土器である。

3～5は同一個体の破片とされ、2連の間隔の広い爪形文が施文される。爪形文は浅い平行沈線を残している。色調は灰褐色を呈した薄手の土器である。

6・7は北白川下層III式に近いものと同定されるが、6は北白川下層II c式であろう。胎土・焼成ともに良好な土器である。7は器面に幅広い爪形文を密に施し、その上からタガ状の浮線文(梯子状浮線文)を施している。浮線が粗雑で北白川下層式とするにはいささか躊躇がある。

#### 12. 御屋敷山(今井1986)

嵐山史跡の博物館(旧：歴史資料館)で進めた中世城館調査において試掘・測量調査を行った際に出土した。御屋敷山は、京浜東北線与野駅西方約2.5kmに位置する。

出土した土器は縄紋中期の資料が大半であり、わずかではあるが前期は関山式・黒浜式・諸磯a式が認められた。報告した今井宏は北白川下層II b式に比定しており、口縁部がほぼ直立した器形を想定している。器厚約4mmと薄く作られており、焼成も焼きしまっている。口縁部に爪形文、胴部に左右異った撚りの縄紋原体による羽状縄紋が施されてる。平行沈線区画のないC字状爪形文、口唇部には5mm間隔の小さな刻みが見られる。

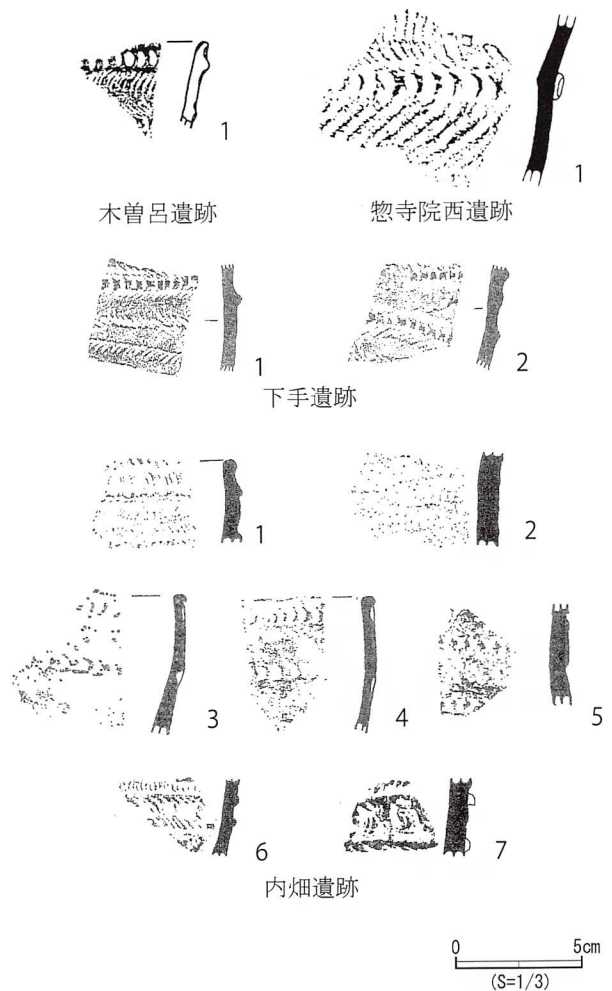
#### 13. 舟山遺跡(小澤・柳田1980)

深谷市(旧：川本町)に位置し、縄文前期関山式、中期の竪穴住居跡が検出されている。該当の土器はトレンチ出土の土器で報告時は第7群花積下層式とされていたが、梯子状浮線紋があり、北白川下層II c式と判断した。1は表面の風化が著しく不明瞭であり、2と胎土が異なる。2は焼成が良く堅緻だが、茶褐色を呈する。

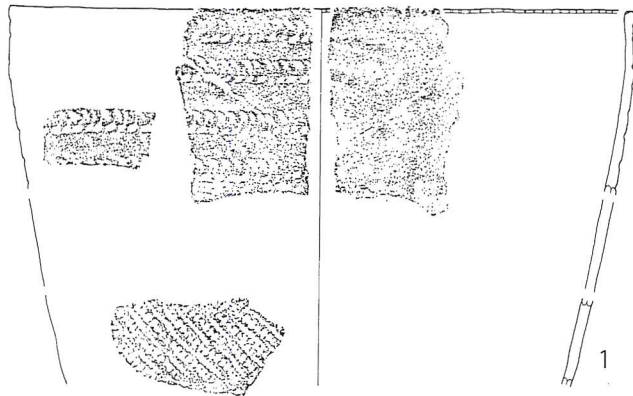
#### 14. 木曾免遺跡(篠田2008)

坂戸市の越辺川低地を臨む入間台地の北東端に位置する。主体は弥生時代中期の環濠集落であるが、東斜面部に関山式を主体とする早期撚糸紋期～前期末葉諸磯c式までの包含層、時期を隔てて弥生時代中期の包含層があり、合わせて2層の遺物包含層がある。出土した北白川下層は、弥生時代包含層に流入・堆積したものであり、層的な出土状況ではない。

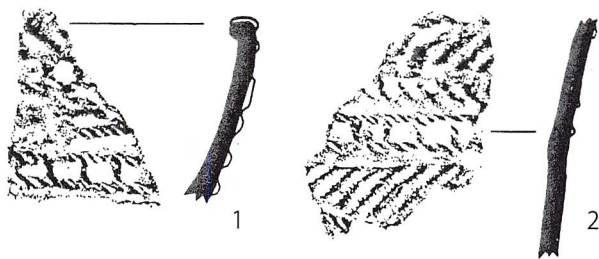
包含層Y層には、弥生時代中期を中心として、前期の関山式のほか、少量の諸磯a式～c式、前期末～中期初頭の土器が認められる。出土した土器は2点である。浮線を基調として細い爪



第13図 遺構外出土北白川下層式(1)



御屋敷山出土



舟山遺跡



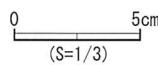
木曾免遺跡

天神山遺跡



上加遺跡

栢谷遺跡



彦久保岩陰

形文を加えられるもので、4単位で口唇上に渦巻浮線が加えられることを想定されている。薄く作られている。2はいわゆる梯子状浮線文であるが、器壁はさほど薄くなく、模倣を思わせる。

### 15. 天神山遺跡(斉藤1978)

大宮大地南端に位置する遺跡で、前期初頭の住居跡が5軒検出された。出土土器には他に木島式が認められており、この地域への搬入を考えるうえで興味深い。出土した土器は梯子状浮線文を有しており、胎土に砂を含むが焼成は良好で黒褐色を呈する。報告者によると、「文様は北白川系のものと見られるが、胎土・焼成がやや趣きを異にし、中部系土器と思われる」とある。

### 16. 上加遺跡(田代ほか1999)

大宮市遺跡調査会による第2次調査次に出土している。遺構は縄紋時代前期の住居跡1軒、中期～後期の土壌9基である。諸磯a式を主体とした包含層から黒浜式～称名寺式までの土器が散見されており、北白川下層式も包含層からの出土である。器厚が薄く、丁寧な浮線文が施される。

### 17. 栢谷遺跡(青木・高山1976)

さいたま市(旧：浦和市)の大宮台地上にある遺跡である。遺構が検出されなかったh25グリッドから出土した。浅鉢であろうか。調査者は「諸磯b式にあたるもの」としながらも、中部地方(山岳部)にしばしば見られる土器としている。同グリッドからは前期の土器は出土せず、早期・中期の土器が多い。

### 18. 彦久保岩陰(小林1966)

花崗岩質砂岩で形成された岩陰の遺跡で、早期～中期の土器が出土している。写真の掲載であるが、北白川下層式に特徴的な杵状浮線文をもつ土器が出土している。埼玉県塚屋・北塚屋遺跡(市川1983)でも同

第14図 遺構外出土北白川下層式(2)

様の構成をもつ土器が見つまっている。群馬県中野谷松原遺跡(第1図)出土のI文様帯に着目した場合、地文に縄文をもつ土器は模倣と考えるべきかもしれない。

以上が埼玉県内に点在する北白川下層式の状況である<sup>(5)</sup>。散発的ではあるが、北白川下層IIc式の出土数が多い。これは北白川下層式の範囲が広がり、中部・東海に似た土器が見られるようになる延長線で捉えられる。少数の出土とはいえ諸磯b式の中段階と混在する状況は、関東前期の土器型式に対し、北白川下層式の影響を無視することは出来ないであろう。

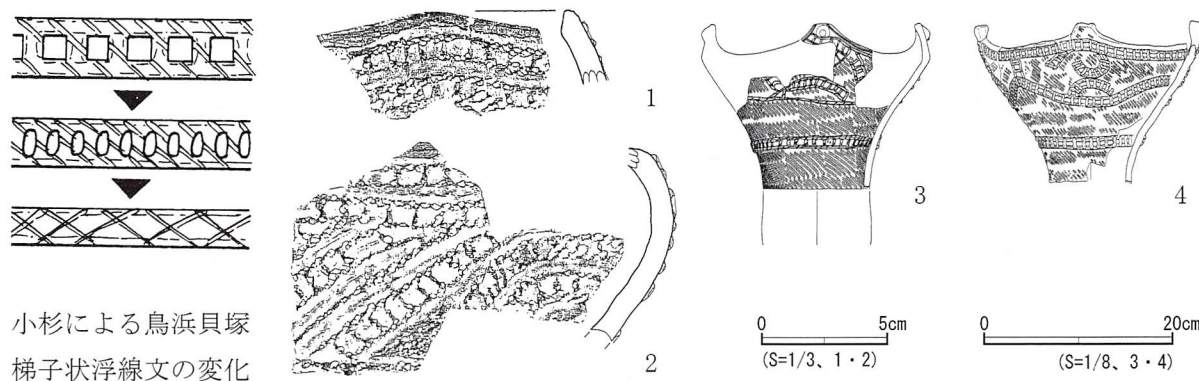
一方、諸磯式と北白川下層式は相互的な影響が認められる一方で、文様展開など多くの違いがある(鈴木1991)。装飾的な羽状縄紋を有する点、胎土・焼成の違いなども最たる例である。

加えて梯子状浮線文の存在はどうであろうか。梯子状浮線文は、I文様帯における上下に区画する廻線として北白川下層IIc式の特徴である。しかし、いずれも横位にのみ直線的に展開する。旧来より、諸磯式の梯子状浮線文は北白川下層II式の影響(川名1987)との見解があり、体部に施す例は東海地域や中部高地南半に比較的多い(鈴木2002)とも捉えられている。北白川下層式と諸磯式の接触地域にみられるものである。

しかし、諸磯式では梯子状浮線文を借用して横位に張り巡らされるだけでなく、多くはないが梯子状浮線文によって文様を描くものがある。埼玉県塚屋・北塚屋、群馬県愛宕山遺跡などで、その例がみられる(第15図)。北白川下層式の梯子状浮線文が梯子を一体としてキザミが施されるのに対し、諸磯式では横位の浮線1本ずつにキザミが施されたり、浮線上に施文しない場合が多い。諸磯が借用とされる規範になるのだろう。加えて、諸磯式では梯子状に連結する浮線文が粗雑で、施文の新旧関係が追えるのも違いの一つである。この相違は、両者の影響を考えるうえで否応なく西から東を想起させるうえで、留意しなくてはならない点である。

## 終わりに

以上、埼玉県内出土の北白川下層式について概観してみた。本稿では北白川下層式の集成とその概要を示したに過ぎない。先述の通り、埼玉県内における北白川下層式の出土状況は散発的であり、良好な共伴関係を示す資料はない。いずれも近接する時期からの判定となる。型式間において、弛まぬ編年網の構築は考古学の醍醐味であるが、容易なことではない。細別型式の併行関係を探るうえでの本稿を序として、今回は擱筆としたい。



1・2：埼玉県三ヶ谷戸遺跡 3：埼玉県塚屋・北塚屋 4：群馬県愛宕山遺跡

第15図 関東における梯子状浮線文

平成21年度 埼玉県立川の博物館企画展『埼玉圏の原始・古代人』が開催され、臨時的任用職員として微力ながらも携わることとなった。展示には、前任である中村倉司氏から熱い思いを受け、展示に臨むこととなった。企画展は埼玉県内に運ばれた多用な器物を展示するもので、展示資料の一つに御屋敷山出土の北白川下層式があった。縄紋時代前期の諸磯式との明らかな違いを感じ、灰白色の土器はどこから作られるのだろうか、堅緻な焼き上がりにはどのような工夫がされているのだろうかと疑問に感じたのが本稿執筆の契機である。報告者である今井宏氏からも多々ご教授頂いた。本稿執筆の契機を頂いた御二人に心から感謝を表したい。

思えば、自然の博物館・さきたま史跡の博物館での学芸員生活は、充実した時間であった。初めての業務に不平不満もこぼしたが、上司の岩本克昌氏・田中英司氏に叱咤激励され、また多すぎて書ききれないが博物館の多くの方々に支えられてきた。加えて、前期土器研究の先駆である前館長の鈴木敏昭氏からは日ごろから多大なご教示を頂くことが出来た。記して感謝したい。一方で、遅筆で編集の西口正純氏にはご迷惑をおかけしてしまった。深謝したい。

本稿執筆において、資料の実見では君島勝秀、栗岡潤の両氏にご協力頂いた。第5図作成では石井克彦氏に情報を提供して頂いた。文献の収集は石川久明、松嶋沙奈、近江美和の各氏からご協力を得た。記して感謝申し上げたい。

#### 《註》

- (1) ただし、研究史において研究者が用いる型式名は研究者の見解を重視し、用いられている用語を記述する。諸磯式の浮線文と北白川下層式の凸帯文の用語に関しても同様である。  
II b 式の細分案に加え、網谷編年への異論はあるが、自説の編年案を示すことなく型式名を列挙すれば、要らぬ混乱を招くのみである。自説の編年案を開陳して後に、詳細な併行関係を追うことを今後の課題としておきたい。
- (2) 山内博士は、その後もローマ数字ではなく、アラビア数字を用いている。ここでのローマ数字は、佐原が北白川下層 I 式……を用いて論述していることが関与している。加えて、当時までの発掘状況を吟味してこの発言を捉える必要があるだろう。
- (3) 谷口が自説の展開で引用してあるが(谷口1980)、原典(安孫子1970)については筆者未見。
- (4) 報告書中では、「住居址内出土土器を1時期の一樣相としてつかみ得るものではなかったため、住居址内出土土器は住居跡の時期決定の際、検討するに留めて」分類を行ったとある。今回、埼玉県埋蔵文化財調査事業団にて実見し、それぞれ注記があったので、今後の参考までに住居跡を付しておく。  
第13図一内畑1は報告書中で口縁部が下になって掲載されていたので修正した。表裏面に赤彩と思われる痕跡があり注目される。
- (5) このほかに寄居町むじな塚遺跡、吉田町わらび沢岩陰、嵐山町山根遺跡などでも梯子状浮線文をもつ土器が見られるが、実測図・写真のいずれかの掲載であり、また実見出来ていないために模倣・搬入の判断が出来ない。現在のところは遺跡名を挙げるにとどめておきたい。また、今回は紙数の都合で取り上げなかったが、塚屋・北塚屋遺跡出土土器には、北白川の文様要素を持ちながら、諸磯的手法で施文している典型が多い。

#### 《引用・参考文献》

- 青木義脩・高山清司 1976 『東北自動車道浦和市内遺跡発掘調査報告書』 浦和市遺跡調査会  
赤石光資・野村侃司 1981 『氷川遺跡—1・2次調査—』 氷川遺跡調査会  
安孫子昭二 1970 「No.175遺跡」『多摩ニュータウン遺跡調査概報』(筆者未見)  
網谷 克彦 1979 「土器」『鳥浜貝塚』 福井県教育委員会  
網谷 克彦 1982 「北白川下層式土器」『縄文文化の研究』 3 雄山閣

- 網谷 克彦 1989 「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観Ⅰ』 小学館
- 泉 拓良 1979 「西日本の縄文土器」『日本原始』 世界陶磁全集1 小学館
- 市川 修ほか1983 『塚屋・北塚屋』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第25集
- 市村 勝巳 1984 「中部地方出土の北白川下層式・同系土器群について」『信濃』 第36巻第4号
- 今井 宏 1986 「与野市御屋敷山出土の北白川下層式土器」『也加多』 7号 埼玉県立歴史資料館
- 今関 久夫 1990 『むじな塚遺跡群』 寄居町文化財調査報告 第8集
- 江坂 輝彌 1938 「東京市麻布區本村町貝塚調査概報」『考古学雑誌』 第28巻第10号
- 江坂 輝彌 1951 a 「縄文式文化について(8)」『歴史評論』 30 第5巻5号
- 江坂 輝彌 1951 b 「縄文式文化について(9)」『歴史評論』 31 第5巻6号
- 江坂 輝彌 1951 c 「縄文式文化について(10)」『歴史評論』 32 第5巻7号
- 江坂 輝彌 1957 「前期縄文文化に対する一考察」『史想』 7号 京都教育大学
- 江馬 修 1934 「飛弾における古式縄文土器」『石冠』 第2年第3号 飛騨考古學會
- 小野 正文 1989 「中部地方における北白川下層式土器の研究(北白川下層式土器の研究史)」『國學院大學考古学資料館紀要』 第5輯
- 大 宮 市 1968 「下手遺跡」『大宮市史』 大宮市
- 岡田 茂弘 1965 「近畿」『日本の考古学』 II 縄文時代 河出書房
- 金子 直行 2007 「縄文時代 前期」『原始・古代資料 一考古一』 春日部市庄和町史編さん資料(十四) 春日部市教育委員会
- 鎌木 義昌 1959 「縄文前期文化」『世界考古学大系』 第1巻 平凡社
- 川名 広文 1987 「縄紋前期後半の土器について」『鷺森遺跡の調査』 郷土資料 第33集
- 京都大学文学部考古学研究室 1991 『先史時代の北白川』 京都大学文学部博物館
- 隈本健介・加藤秀之 2009 『市内遺跡発掘調査』 富士見市文化財報告 第61集
- 黒坂 禎二 1992 『上福岡貝塚資料 山内清男考古資料3』 奈良国立文化財研究所史料 第33冊
- 小杉 康 1985 a 「木の葉文浅鉢形器形土器の行方」『季刊考古学』 12号 雄山閣
- 小杉 康 1985 b 「鳥浜貝塚における搬入土器、模倣土器の研究(1)」『鳥浜貝塚』 5 福井県教育委員会
- 小杉 康 2003 『縄文のマツリと暮らし(先史日本を復元する3)』 岩波書店
- 小林 茂 1966 『秩父・彦久保遺跡』 埼玉県吉田町教育委員会
- 小林 達雄 1965 『米島貝塚』 庄和町文化財調査報告 第1集
- 小宮山克己 1996 『氷川遺跡 一第3次調査一』 上尾市遺跡調査会報告書 第16集
- 斉藤悟朗ほか1978 『天神山遺跡』 川口市埋蔵文化財調査報告書 第8集
- 笹森 健一 1987 『鷺森遺跡の調査』 郷土資料 第33集 上福岡市教育委員会
- 笹森健一編 1994 『考古文献資料(1)上福岡貝塚』 市史調査報告書 第5集
- 佐原 真 1956 「土器面における横位文様の施文方向」『石器時代』 第3号
- 篠田 泰輔 2008 「木曾免遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第352集
- 縄文セミナーの会 1999 『第12回 前期後半の再検討』 記録集
- 鈴木 康二 2002 「縄文土器の研究1 一前期後半の近畿地方を中心に一」『紀要』 15号 滋賀県文化財保護協会
- 鈴木 康二 2008 a 「北白川下層式土器」『総覧縄文土器』 アムプロモーション
- 鈴木 康二 2008 b 「特殊凸帯文土器」『総覧縄文土器』 アムプロモーション
- 鈴木 敏昭 1980 「諸磯b式土器の構造とその変遷(再考)」『土曜考古』 第2号 土曜考古学研究会
- 鈴木 敏昭 1991 「土器郡の変容一例え、諸磯b式浮線文土器の場合一」『埼玉考古学論集 一設立10周年記念論文集一』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木 徳雄 1989 「諸磯a式土器研究史(1)」『土曜考古』 第13号 土曜考古学研究会
- 鈴木 徳雄 1994 「諸磯a式の文様帯と施文域」『縄文時代』 第5号
- 鈴木 徳雄 1996 「諸磯b式の変化と型式間交渉」『縄文時代』 第7号

- 鈴木 徳雄 2002 「諸磯 b 式期における型式間関係と構造」『日々の考古学』 東海大学考古学研究室開設20周年記念論文集
- 関根慎二・大工原豊 1998 『中野谷松原遺跡』 安中市教育委員会
- 谷井 彪 1970 『内畑遺跡発掘調査報告』 埼玉県遺跡調査会報告 第7集
- 谷井 彪ほか1980 『舟山遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告書 第9集
- 谷口 康浩 1980 「縄文時代前期後半の土器」『藤の台遺跡』 III 藤の台遺跡調査会
- 高野 博光 1972 「浦和市惣持院西遺跡出土の土器について」『浦和考古学会研究調査報告』 第5集
- 田代 治・山形洋一ほか 1990 『下加遺跡—大宮住宅建設に伴う発掘調査II—』 大宮市遺跡調査会報告 第30集
- 田代 治・新井和之・笹森紀己子・小峰智仁・山形洋一 1999 『上加遺跡(第2次調査)・中野林袋遺跡・茗花遺跡・指扇下戸遺跡(第2次調査)』 大宮市教育委員会調査報告 第65集
- 土肥 孝 1982 「近畿地方」『縄文土器大成』 第1巻 早・前期 講談社
- 中村 倉司 2009 『平成21年度特別展 埼玉圏の原始・古代人』 埼玉県立川の博物館
- 長谷川清一・荏原 淳 2004 『町道遺跡 町道中遺跡』 庄和町文化財調査報告13集
- 増子 康眞 1982 「北白川下層式土器の再検討」『考古学研究』 第29巻第1号
- 増子 康眞 1999 「東海地方の諸磯 b 式平行段階の様相」『前期後半の再検討』 記録集 縄文セミナーの会
- 松田光太郎・羽鳥政彦 1994 『愛宕山遺跡』 富士見村教育委員会
- 三森 定男 1938 「先史時代の西部日本」『人類学先史学講座』 2巻
- 南 久和 2002 「鳥浜貝塚の前期土器群」『石川県考古学研究会々誌』 第45号 石川考古学研究会
- 宮内慶介・富元久美子 2011 「三ヶ谷戸遺跡 第1次調査」『飯能の遺跡(38)』 飯能市教育委員会
- 森川 昌和 1963 「福井県鳥浜貝塚をめぐる2、3の問題」『物質文化』 1
- 八幡 一郎 1935 「爪形文ある土器」『ひだびと』 第3年第10号 飛騨考古土俗學會
- 横山 仁 2009 「前期の非在地系土器」『研究紀要』 26 千葉県教育振興財団
- 吉田 健司 1991 「篠谷ツ・木曾呂北・木曾呂」川口氏遺跡調査会報告 第14集
- 山内 清男 1936 「古式縄紋土器研究の最近の情勢」『ドルメン』 4巻1号
- 山内 清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』 第1巻第1号
- 山内 清男 1964 「縄文式土器」 日本原始美術 1 講談社

## 図版典拠

各遺跡の掲載にあたり、レイアウトを変更し、方位・スケールを統一している。遺物は北白川下層式土器を1/3、その他の型式では拓本を1/3、復元個体を1/8とした。また遺構を1/80、遺構配置図を1/600とした。写真については任意である。

- |                                |                                 |
|--------------------------------|---------------------------------|
| 第1図 (関根・大工原1998)、(網谷1979)      | 下手(大宮市1968)、内畑(谷井1970)          |
| 第2図 (江坂1951c)                  | 第14図 御屋敷山(今井1986)、舟山(谷井ほか1980)、 |
| 第3図 (網谷1989)(鈴木2008a)          | 木曾免(篠田2008)、天神山(斉藤1978)、上       |
| 第4図 (鈴木1980)レイアウト変更            | 加(田代ほか1999)、櫛谷(青木・高山1976)、      |
| 第5図 カシミール3Dにより筆者作成             | 彦久保(小林1966)                     |
| 第6図 氷川(赤石・野村1981、小宮山1996)      | 第15図 浮線紋の変遷(小杉1985b)、三ヶ谷戸(宮     |
| 第7図 上福岡貝塚(笹森・編1994、黒坂1992)     | 内・富本2011)、塚屋・北塚屋(市川ほか           |
| 第8図 米島貝塚(金子2007)               | 1983)、愛宕山(松田・羽鳥1994)            |
| 第9図 鷺森(笹森1987)                 | 第1表 (縄文セミナーの会1999)レイアウト変更       |
| 第10図 宮廻(隈本・加藤2009)             | 第2表 (小野1989)の対比表を(市村1984)(鈴木    |
| 第11図 町道(長谷川・荏原2004)            | 2008a・b)により加筆修正                 |
| 第12図 下加(田代・山形ほか1990)           | 第3表 各報告書より筆者作成                  |
| 第13図 木曾呂(吉田1991)、惣寺院西(高野1972)、 |                                 |

# 『埼玉の古墳出現』断章

利根川章彦

## 1 はじめに

日本考古学において、「古墳の出現」は古くて新しい問題である。ここ30年くらいの研究によって、奈良県桜井市箸中山古墳(箸墓、大市墓)が「最古の古墳」の位置づけをされるものとしてほぼ確定してきたと言ってよい。ただし、この古墳が「陵墓」であるがために、古墳周囲の断片的な出土品情報と、『書陵部紀要』に示された墳頂部採集の埴輪・土器しかなく、周堀の形態さえも詳細が知られているわけではなく、ややまとまった面積の調査が行われるたびに、周堀の形態の想定案さえも変化してきた。したがって、最古の「定型化された前方後円墳」という評価も含めて、十分な吟味が必要であろう。

こうした調査・出土品情報の僅少さについては、各地域の初期古墳においても同様についてまわる問題である。それが古墳出現の様相の認識や比較検討を困難にしている、と筆者は考えており、意外と研究が進展しない原因の一つである。

筆者は、古墳時代に移り変わる時期前後について、二重口縁壺・高坏・北陸系装飾器台などの土器群を検討してきた。そこで学んだことの一つは、関東においては、墳墓出土土器群の器種が細かく共通するものがあまり多いとは言えず、時期確定がむずかしいということである。

本稿で考えてみたいのは、埼玉県域で古墳時代初期の「古墳」・「墳墓」から出土した土器から考えられる時期の確認であり、もっと具体的に言えば、筆者が埼玉最古と考える、吉見町山の根古墳の年代の認識を現在も維持できるのかどうかである。

## 2 県内初期古墳等の最近の調査・研究について

ここ20～30年くらいの間に、埼玉県においては、遺跡詳細分布調査や県史・市町村史などの編纂に伴って実施される確認調査によって、初期古墳・古墳時代初期の墳墓の、それまでわかっていなかった考古学的情報が追加され、各地の「古墳出現」認識を少しずつ変更している。代表的な調査例をあげておくと、埼玉県古墳詳細分布調査事業で調査された吉見町山の根古墳・東松山市根岸稻荷神社古墳、『新編埼玉県史』編さん事業の一環で実施された「埼玉県古式古墳調査」で調査された東松山市諏訪山29号墳・東松山市雷電山古墳・川越市三変稻荷神社古墳・桶川市熊野神社古墳の資料が新たに判明した。各市町村においても、圃場整備・土地改良事業にかかって緊急調査された吉見町三ノ耕地遺跡、保存目的の調査で前方後方墳・前方後方形墳墓が確認されたふじみ野市権現山墳墓群・熊谷市塩古墳群・本庄市鷲山古墳など資料の蓄積が進んできた。

さきたま史跡の博物館においても、平成21～22年度に実施した企画展『稻荷山出現以前の古墳』において、これらの古墳・墳墓から出土した土器群や埴輪の一部を展示し、古墳出現期から前期後半の県下の古墳の築造状況についての現状認識を考察し、展示公開した。

筆者は、本誌の前身である『調査研究報告』誌上で、吉見町山の根古墳出土土器を検討し、古



墳の年代を想定した(利根川1995)。1995年当時は日本考古学協会新潟大会のシンポジウム『東日本における古墳出現過程の検討』の資料集により提示された所謂「新潟シンポ編年」がかなり信頼性の高い基準のような扱われ方をしていた。そこでの段階設定に合わせて、山の根古墳の年代は7期に相当し、4世紀初頭、場合によっては3世紀末葉に遡及する可能性もあることを指摘した。しかも、埼玉最古の古墳であると考えた。

その後の研究として、まず最初に小坂延仁氏のものを取り上げておきたい。小坂氏は2009年の第14回東北・関東前方後円墳研究会大会「前期古墳の諸段階と大型古墳の出現」の埼玉県域を対象にした報告の資料に示されている(小坂2009)。

この報文で、小坂氏は和田晴吾氏の古墳編年(以下「和田編年」と呼ぶ)・前方後円墳研究会の「共通編年」(小坂氏は「集成編年」と呼ぶ)・赤塚次郎氏の「廻間編年」・寺沢薫氏の弥生後期～古墳時代中期の土器編年(いわゆる「矢部編年」)・田嶋明人氏の「漆町編年」を対比する編年表に「県西」という枠を加えたものを提示している。小坂氏の「県西」I期は、寺沢氏の「庄内3式」、赤塚氏の「廻間II式前半(II-1～2段階)」、田嶋氏の「漆町5・6群」に対応し、「和田編年」・「共通編年」の1期より古い段階とされている(第1図)。この段階に東松山市「根岸稻荷神社古墳」を置き、「埼玉最古」の含みを残しつつ、柿沼幹夫氏の「墳丘の遺存する大型方形周溝墓」説(柿沼1996)を紹介している。この報告での問題点は、かつて坂本和俊氏がより古く編年していた南志渡川遺跡第4号墓のパレススタイル壺を含む土器群より、「根岸稻荷神社古墳」の土器群の方を古く見ていること、及び、吉見町三ノ耕地遺跡の3基の前方後方形周溝墓を、丘陵上の山の根古墳の土器群より古く見ていることである。これらの土器群の編年上の序列については、少し個別に考え、小坂氏の認識が信頼に足るものか検討する。

三ノ耕地遺跡の「2号墳」・「1号墳」と山の根古墳の出土土器で、唯一共通するのは坏部の大きな東海系高坏だけである。土器全体のプロポーションから考えるなら、最も坏部が深い三ノ耕地「2号墳」が「欠山式」の高坏に近い形態を保持しており、「1号墳」は坏部がやや浅くなっており、確実に1段階新しい。一方山の根古墳の高坏は、坏部がかなり深身に作られているが、脚部が裾広がり「元屋敷式」の形態に変わっている。坏部・脚部の変遷の序列は、「2号墳」→山の根古墳→「1号墳」と考えるべきではないか、と筆者は考えている。また、三ノ耕地「1号墳」・「2号墳」は、一般的な意味で供献土器ばかりになっているのに、山の根古墳は、甕・鉢のような、飲食器・煮炊具をやや多く含んでいる。

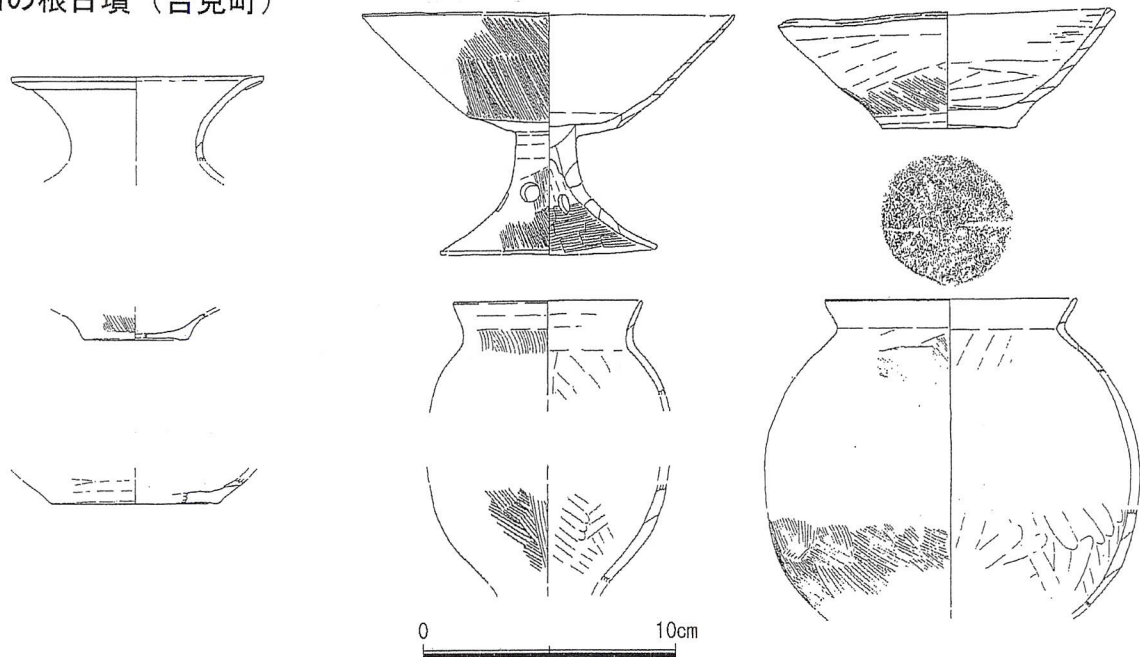
しかも、「1号墳」は二重口縁壺・小型高坏、「2号墳」は小型埴形土器・小型壺のような近畿地方の布留1式に含まれそうな器種を伴う。これは山の根古墳より、むしろ三ノ耕地遺跡の周溝墓群の年代を新しく考える根拠になる。もう一つ気になるのは、山の根古墳には、幅狭の折り返し口縁を持つ壺があるのに二重口縁壺がないことである。調査範囲の関係で出土しなかった可能性もあるが、三ノ耕地「1号墳」に平底・焼成後穿孔の二重口縁壺があることを比較すると、山の根古墳より「1号墳」を古く見る根拠は弱いと考えられる。筆者の見るところでは、三ノ耕地遺跡の3基の前方後方形周溝墓は、山の根古墳より間違いなく古くなりそうなのは「3号墳」のみである。しかも、三ノ耕地遺跡は低地帯にあり、各墳墓の墳丘の高さも3m以下の低墳丘と考えられる。

やや類似した環境にある「根岸稻荷神社古墳」も低墳丘で20m代の主軸長しかないことを考え

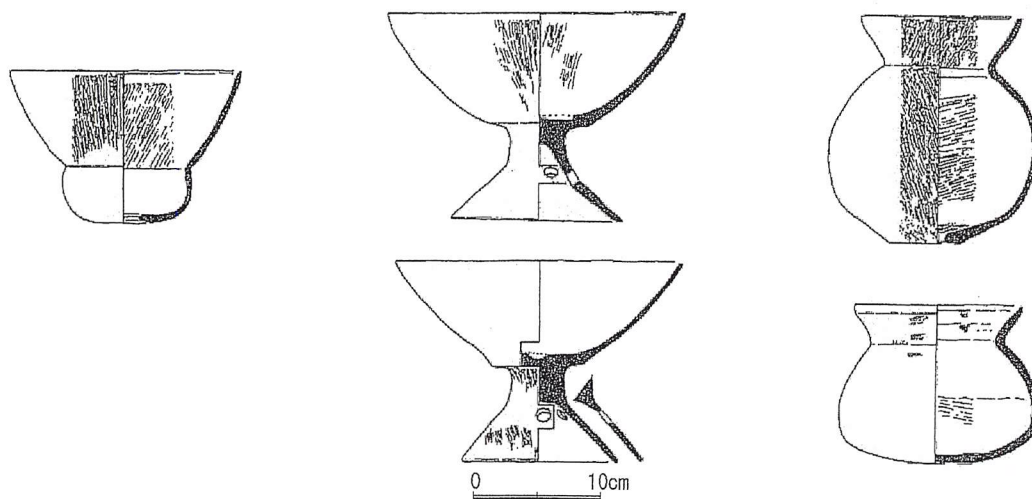
畿内土器編年 寺沢 1986	廻間編年 松河戸編年	漆町編年	県西	集成編年	和田編年	北武蔵			南武蔵		
						比企(入間)	児玉・本庄	大宮台地			
庄内3式	前II式	5・6群	I期	1期	一期	根岸稲荷神社古墳					
						三ノ耕地2号墳					
布留0式	II式後半 III式1	7群	II期	2期	二期	三ノ耕地1号墳	権現山2号墳	南志渡川4号墓	塚本山33号墓		
						山の根古墳	広面S Z 9	南志渡川5号墓	石薙B遺跡8号墓		
布留1式	III式1・2・3	8群	III期	3期	三期	諏訪山29号墳	塩7号墳	権現山7号墳	南志渡川1号墓	石薙B遺跡2号墓	塚本山14号墓
						天神山古墳	塩1号墳	中耕S R 42	南志渡川2号墓	石薙B遺跡2号墓	塚本山14号墓
布留2式	III式1・4	9群	IV期	4期	四期	諏訪山古墳	三変稲荷神社古墳	村後遺跡周溝墓	熊野神社古墳	白山古墳	稲荷前16号墳
						塩2号墳		鷺山古墳	高福荷古墳	宝来山古墳	観音松古墳
布留3式	松河戸I	10群	V期	5期	五期				江川山古墳	龟甲山古墳	砦中学校7号墳
									長坂聖天塚古墳	石薙B遺跡1号墓	川輪聖天塚古墳
布留4式		11群	VI期	6期	六期	雷電山古墳					
									志渡川古墳		殿山古墳

第1図 小坂氏作成の埼玉県初期～前期古墳編年図

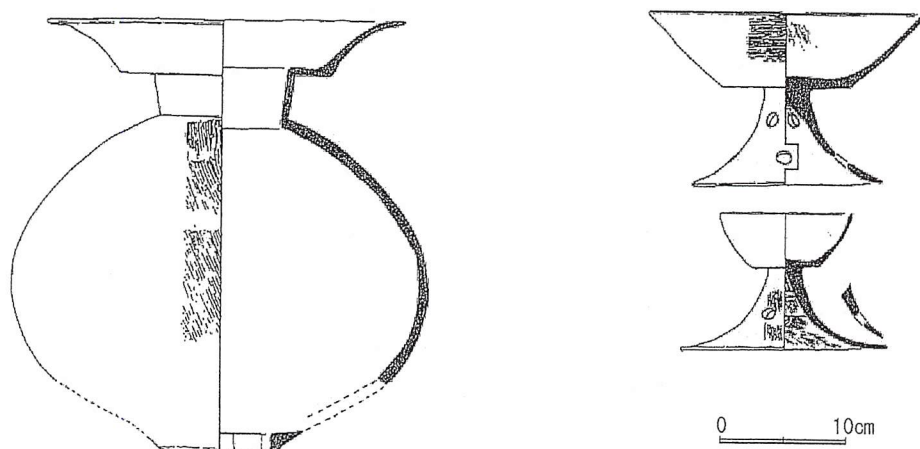
山の根古墳（吉見町）



三ノ耕地遺跡 2号墳（吉見町）



三ノ耕地遺跡 1号墳（吉見町）



第2図 山の根古墳・三ノ耕地遺跡土器比較図

ると、主軸長30m代までの小規模低墳丘墓群の造墓活動が松山台地周辺・吉見丘陵南方の低地帯や微高地上で、古墳時代初頭前後頃に活発化しているようである。その継続期間中に何らかの契機で丘陵上に主軸長50mを越える古墳を築くようになった、と理解すべきではないか、と考えている。

ちなみに、「根岸稻荷神社古墳」からは単純口縁の小型壺が出土している(君島2010)。この土器の胴部は布留式に特有の横方向の入念なヘラミガキが施されており、年代が布留1式併行期まで下降する可能性も出てきている。この点については稿を改めて考えてみたい。

山の根古墳の年代は「廻間Ⅲ式第1段階」である、という理解は変更の必要を感じていないので、むしろ三ノ耕地遺跡の墳墓群の年代を小坂説より新しく考えるべきであると提案しておきたい。

次に、小坂氏が依拠していた石坂俊郎氏の見解について考える。小坂氏の説のうち、三ノ耕地遺跡の「3号墳」→「2号墳」→「1号墳」の継起的築造の後に、山の根古墳が造られるという発展段階的ストーリーは石坂氏の描いていたものであった。以下、少々長くなるが引用したい(石坂2006)。

「……①～③の各遺構からは多くの土器が出土しており、パレス壺の存在など、東海系との関連が瞥見しただけでも目を引く。総量は当地としては圧倒的といえ、精密な編年的分析が期待される。前方後方墳についてあえて推測を進めるなら、最南に位置し規模最小、田中分類B2・3型とみられる3号墳が最古、1・2号墳は位置ばかりでなく時間的にも近接するとみられ、前方部の規模が3号墳に近い2号墳が1号墳に先行、そして1号墳の次には、山の根古墳が自然堤防を離れ北方の尾根上に造営されるという、3世紀後半から4世紀前半にかかる前方後方墳4代の発展的展開が想像される。その間後方部は遺構ごとに順次拡大するが、前方部は2号墳と1号墳の間で飛躍的に発達し、1号墳は他の古墳と立地をともにしながら、規模では山の根古墳に一段と近づいているといえようか。……(後略)……」

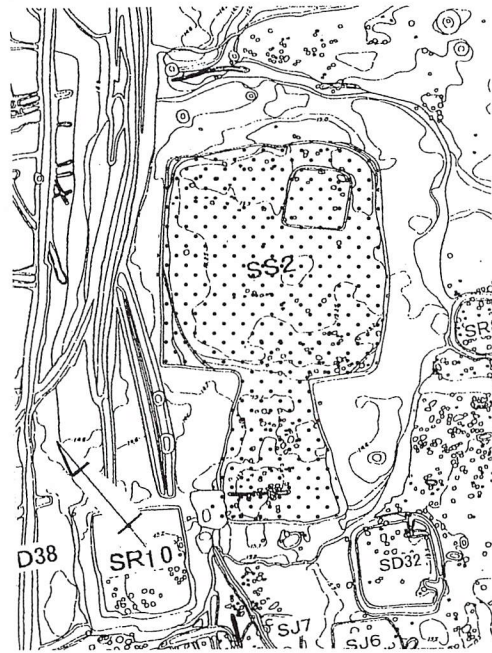
石坂氏は、三ノ耕地遺跡にかなり大量の東海系土器、特にパレススタイル壺が出土していることを根拠に、山の根古墳より古いと見ているようである。しかしながら、「1号墳」に関しては、十分吟味しなければ山の根古墳に先行するかどうかはわからない土器のセット(二重口縁壺・小型高坏・坏部の浅くなった高坏)を有しているのに、それは問題にしていない。小坂氏は、石坂氏が描いたストーリーが一見納得しやすい流れになっているため、そのまま依拠してしまったようである。

しかし、三ノ耕地遺跡のパレススタイル壺は、尾張や伊勢で出土する定型的なものとは異なり、在地化したために本来の装飾領域や施文手法を逸脱した胴部文様帯を有するものが多い。一見古く見えるものでも、廻間Ⅱ式前半期まで遡るものはほとんどないと考えられる。したがって、土器群に新旧の時間差があると想定したとして、たとえその中の古い一群を比較の対象として考えたとしても、山の根古墳出土土器群の年代との時間差はあまりない、と考えた方がよいし、新しい一群は山の根古墳より古くできるかどうかについては論証する必要がある。

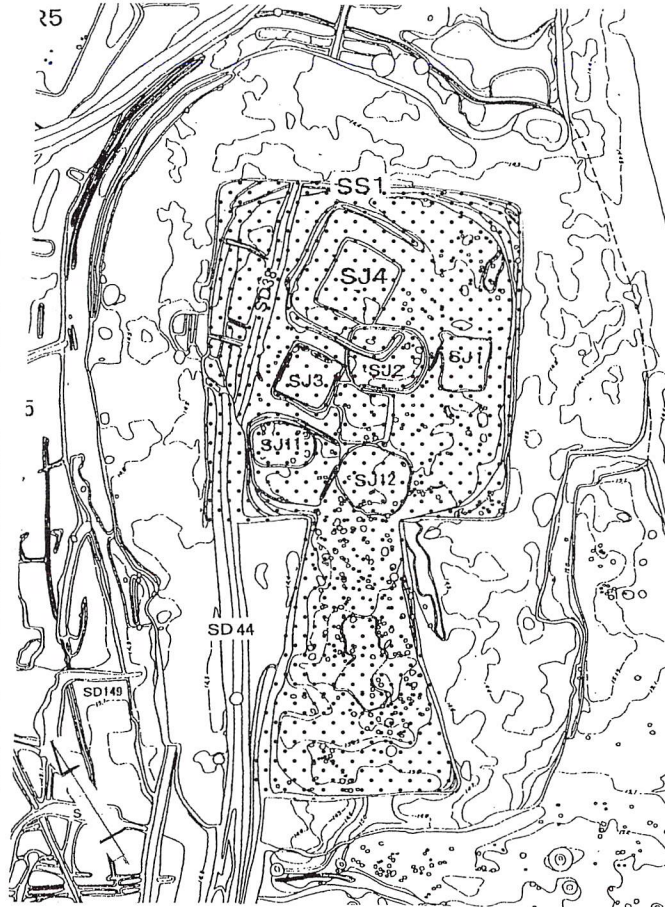
さらに、「前方部の発達」にも疑問がある。三ノ耕地「1号墳」は、前方部の長さだけでなく幅も拡大している。山の根古墳は前方部の幅は小さい。もし、後方部と前方部の平面積比の比較を行ったなら、山の根古墳と三ノ耕地「1号墳」の違いはけっこう大きく、「1号墳」の前方部の

三ノ耕地遺跡1・2号墳(埼玉県吉見町)

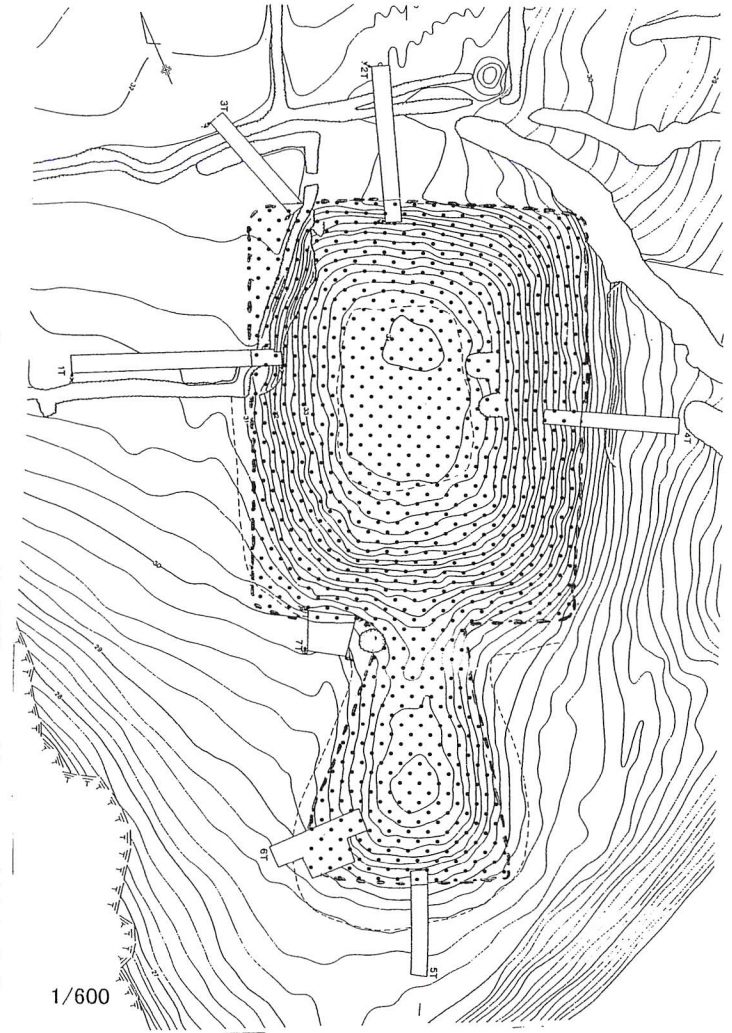
山の根古墳(埼玉県吉見町)



2号墳 1/600



1号墳 1/600



第3図 山の根古墳・三ノ耕地遺跡墳形比較図

方がやや発達している、と言ってよい。

ゆえに、小坂説だけでなく、石坂説を考慮したとしても、三ノ耕地「1号墳」が山の根古墳に先行すると考えるのは根拠が薄いと考えるをえない。

小坂説・石坂説の検討の結果、利根川旧説の山の根古墳の築造時期を「廻間Ⅲ式第1段階併行」とみたことは今のところ変更の必要はないと考えている。また、三ノ耕地遺跡の3基の墳墓も「根岸稲荷神社古墳」も「古墳」と考えるより前方後方形墳丘墓のカテゴリーで考えるべきで、「古墳」の領域をはずれるものであるため、山の根古墳が埼玉最古の古墳であるという位置づけも維持できるのではないかと考える。

### 3 その他の問題

さて、ここまでで本稿の目的を達してしまっただけであるが、今後、「埼玉の古墳出現」を考える際に大きな課題となってきそうなことのいくつかに触れておこう。

まず、東松山市反町遺跡とその周辺である。反町遺跡は、東松山市南部の高坂台地を北に下りた低地帯にある。古墳時代前期に形成された水路跡と堰跡が検出され、竪穴住居群の中には水晶を加工した玉造り工房も含まれていた。種々の検討の結果、この水晶は山梨県方面からもたらされたと考えられている。2011年になって、東松山市教育委員会の調査により、反町遺跡所在地のやや西方の台地上の宅地造成に伴う発掘調査で、だ龍鏡・管玉・水晶製勾玉等を出土した古墳が検出されたが、どうやらこれは4世紀後半頃の小型前方後方墳になりそうである。高坂古墳群と呼ばれる古墳群の中の1基である。さらに、この古墳に隣接して築造されたい古墳から出土したとされる三角縁二神二獣鏡が出土した。こわれていたが、11点ほどの破片が出てきて、全体が残存していたことがわかった。埼玉県で初めて出土した三角縁神獣鏡である。この古墳群の近傍に、古式古墳調査の行われた諏訪山29号墳(前方後方墳)、古式な墳丘形態と考えられている諏訪山1号墳(前方後円墳?)を含む諏訪山古墳群もある。古墳時代前期の集落遺跡・生産域・墓域を一括して理解できる地域となってきた感がある。「埼玉の古墳出現」を考える際、この遺跡群について、今後は、吉見町の三ノ耕地遺跡・山の根古墳付近の遺跡群とともに重要視する必要があるだろう。

ところで、同じ小地域エリアの中に埼玉県屈指の大型前方後円墳である、野本將軍塚古墳がある。金井塚良一氏は、この古墳の年代の位置づけを「5世紀後半から6世紀前半」と考えていた(金井塚1979)。しかし、かつて墳丘上や古墳周辺から埴輪が採集されることがないということであり、坂本和俊氏によって、埴輪が伴わない時期の古墳として、共通編年6期以前か10期という想定をされていた(坂本1990)。

1978年に東松山市史編纂事業の一環で、野本將軍塚古墳後円部墳頂の中央部分において、埋葬施設存否の確認のため、ハンドオーガーという土層堆積確認の掘削具によって、直径10cmほどの小穴を合計4か所あけて確認するという作業に携わったことがある。4か所のうち2か所から、深さ1.5mほどの深さの位置にかなり粘性の強いきれいな白色粘土が堆積していることを確認した。厚みもかなりありそうなことから、横穴式石室天井石と考えることはできそうもなく、「粘土槨」の天井かな、とも考えた。残り2か所でも礫まじりの強粘質粘土層に到達し、天井石の一部に到達するという状況にはなかったため、それだけの調査で終了した。しかしなが

ら、当時、甘粕健氏による古墳時代前期説(甘粕1976)が出ていたことを考えると、その時点で「竪穴式石室」ということも考えてしかるべきだったかもしれない。

後円部墳頂は、利仁神社という神社の境内であるため、発掘することは将来を含めてもまず考えられない。そのため、やはり埋葬施設は不明である、とせざるをえない。

周辺から確認される考古学的情報も古墳時代前期に偏ったものが多いのはなぜか、と誰もが考えている。筆者としては、漠然とはしているが、野本將軍塚古墳は4世紀半ばから5世紀初頭くらいまでのどこかの時期に築造された、と考えている。埋葬施設も、その上面より上の位置にやや分厚く白色粘土を積む、という状況から考えるなら、竪穴式石室か、入念に造られた古い段階の粘土槨のどちらかと考えるべきではないか、と思っている。

#### 4 おわりに

ここまで、ややとりとめもなく記述してきた。山の根古墳の年代をめぐるの話は、平成22年度のさきたま講座「埼玉における古墳の出現」の中で講じたことの一部であるが、本稿と細部まで一致しているわけではない。野本將軍塚古墳情報は、もっと後になってから言うべきこととも考えたが、次第に高坂台地周辺の古墳時代遺跡の情報が蓄積されつつあり、それならこの際、微々たる情報であっても出しておこう、と思っただけのことである。

今後、機会があったら、まさに「埼玉における古墳の出現」を列島の視点から解明したいと考えているが、土器の編年論・年代論に関しての最近の各氏の見解の蓄積は、筆者の理解力を大幅に越えている。いつになったら、書くことができるのかは漠としていて申し上げることはできそうもない。

それでも、講座の中で話したことの一端だけでも見解表明して、大方の判断に委ねたいと思う。それが執筆の動機であって、それ以上でも以下でもない。タイトルを「断章」とした所以である。

#### 《引用・参考文献》

- 甘粕 健 1976 「三千塚古墳群に関する覚書」『北武蔵考古学資料図鑑』 校倉書房
- 石坂 俊郎 2006 「南関東の様相—埼玉・千葉・東京・神奈川—」『第11回東北・関東前方後円墳研究会大会《シンポジウム》前方後方墳とその周辺』(発表要旨資料) 東北・関東前方後円墳研究会
- 柿沼 幹夫 1996 「『方形周溝墓』出土の土器 北関東 ①埼玉県」『関東の方形周溝墓』 同成社
- 金井塚良一 1979 「野本將軍塚古墳の謎」『歴史読本』1979年5月号 新人物往来社
- 君島 勝秀 2010 『企画展 稲荷山出現以前の古墳』(展示図録) 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 小坂 延仁 2009 「埼玉県における前期古墳の諸段階と大型古墳の出現」『第14回東北・関東前方後円墳研究会大会《シンポジウム》前期古墳の諸段階と大型古墳の出現』(発表要旨資料) 東北・関東前方後円墳研究会
- 坂本 和俊 1990 「武蔵」『前方後円墳集成 東北・関東編』 山川出版社
- 利根川章彦 1995 「吉見町山の根古墳の年代について」『調査研究報告』第8号 埼玉県立さきたま資料館

## 埼玉古墳群の構成原理

関 義 則

### はじめに

古墳時代後期を通じて大型墳が継続的かつ密集して造営されているという点で、埼玉古墳群は東国の大規模古墳群の中においてもひととき特徴的である。

それ故、この古墳群は古く江戸時代の地誌類にしばしば登場し、明治年間には早くも武蔵国造一族の奥津城に擬せられるなど多くの研究者・好事家の注目を集めてきた。戦後には『日本書紀』安閑天皇元年の条にみえるいわゆる武蔵国造の争乱の記述と関連づけられて議論が展開されるなど、古墳の被葬者や性格論に関心が集まり<sup>(1)</sup>、さらに1978年に古墳群中の稲荷山古墳から出土していた鉄剣から115文字の金錯銘文が発見されて以降は、銘文の解釈を巡る議論がそれに加わり稲荷山古墳や埼玉古墳群の性格についても新たな視点をもとに多岐にわたる議論が展開されている。

その一方で、1966年の「さきたま風土記の丘」の整備に着手以降、継続的な学術調査によって、大型墳における方形二重周堀の画一的採用や主要古墳における後円部及び中堤の造出しの存在、さらには形象埴輪群や供献土器に代表される出土遺物の様相など、各古墳にかかわる情報も相当程度に蓄積されてきている。しかしながら被葬者論とは対照的に、これらの考古学的な情報にもとづく古墳群そのものの分析ということになると必ずしも十分に組み込まれているとはいえないように思う。とりわけ、大型墳の主軸方位の統一性と密集性というこの古墳群の景観を決定づけている古墳配置については、多くの研究者によって埼玉古墳群の特質としてしばしば言及されるものの、その要因や背景については未だ十分に合理的な説明がなされるには至っていない<sup>(2)</sup>。

埼玉古墳群の古墳配置構造に関する先行研究は決して多くは無いが、増田逸朗氏が1980年代初頭に前方後円墳の主軸方位を基準として古墳間相互に有機的な関係が認められるとするいわゆる連関規制論や埼玉古墳群の主軸方位が周辺地域の前方後円墳に対して特定の方位を排他的に独占しているとする方位規制論を唱えた一連の論考は、遺跡や遺物に則してこの古墳群をとらえようとする優れた研究であった(増田1980・1981)。増田氏の視点は、古墳の配列や主軸方位に一定の企画性を見出し、そこに被葬者間の質的な格差や政治的な意味を読み取ろうとしたもので、後に増田説に追従した見解や(山本1991)、啓蒙書等にも紹介されたことから(高橋2005)、この説は広く周知されることとなり、半ば通説化している感もある。しかしながら、古墳主軸方位の在り方を埼玉古墳群の造営主体による政治的な規制行為と結び付けることにまったく疑問がないわけではない<sup>(3)</sup>。もし、権力構造の表現手法のひとつとして一定領域内における古墳主軸方位による築造規制というようなものが存在したとするならば、古墳の性質から考えて同様の現象が日本列島内で普遍的に確認されてもよいはずであるが、実際には各地の古墳群にそうした様相を見出すことは難しい。

このような古墳存在意義の根幹に関わる観念が北武蔵地域のみが存在したとするのは合理的





第1図 埼玉古墳群全景

とはいえないであろう。また、方位規制の及んだ範囲を首長の政治的・経済的支配領域として把握しようとする立場も、後に述べるように大首長層の支配領域や経済圏をどのようにとらえるかという根本的な問題があり、またそもそもこの考え方ではこの地域の政治構造が埼玉古墳群の存続する期間にわたり大首長と地域首長の間で整然としたピラミッド構造を成していたこ

とを前提とするものであるが、それは既応の研究成果に裏付けされたものではなく、いわば未証明のことがらであって無条件で肯首することはできない。さらに主軸方位の僅かな差異が古墳被葬者の系列の視覚的表示ととらえることそれ自体も、当時においては地上で見上げるしか適わなかった古墳について、今日の詳細な測量図や上方からの航空写真によってようやく認識可能な振幅が古墳被葬者の系列差別化の手法として現実に機能していたのであろうかという素朴な疑問もある。

このような理由から、筆者も埼玉古墳群における古墳配列は偶然の産物ではなく造営主体の意思が反映しているとする立場に拠りつつも<sup>(4)</sup>、古墳主軸方位を基準とした築造規制論は受け入れ難く、それとは異なる古墳配置構造を決定する要因となった何らかの築造原理がこの古墳群に存在していたものとする。それをこれまでに蓄積された考古学的な情報の中から読み解くことはできないであろうか。

列島各地の古墳群が、その形成に当たり将来にわたる古墳配置について事前に計画決定されていた、あるいは将来にわたる古墳の造営それ自体が既定事項であったという状況は、これまでの古墳研究の蓄積からみる限り認めることはできない。埼玉古墳群でいえば稲荷山古墳を造営する際に、半世紀以上後の鉄砲山古墳の造営場所がその時点で既に予定されていたとは到底思えない。古墳造営の契機はなお定かではないものの、造墓の決定や造墓地の選定は造営主体たる生前の被葬者もしくは後継者の意思に基づいて、その都度に決定されたものであることは、ある程度信頼性における7世紀の墳墓造営に係る記紀の記述を参考にしても疑い得ないことであろう。

古墳の築造に際し、あらかじめ墓域内における造墓地点が定められていなかったとするならば、造営主体は墓域内における造墓可能な空間の中から古墳築造が要請された時点で任意の地点を選択しているということであり、選定に際しては与条件として地形等による一定の制約を受けつつも、モニュメントとしての古墳が最大限にその効果が発揮できるよう、築造時には築造条件の相対的に優れた地点を選択していたに違いない。つまり、古墳群における各古墳の配置状況が示すものは、あらかじめ定められた配置計画の結果ではなく、時系列に沿って何らかの基準や判断に従って造墓地点が選択された結果の累積なのであり、造営主体が築造の時点で常に最良の地点を選択しようと心掛けたとすれば、時間的に先行する古墳ほど相対的に適地を占めているという前提が成り立つ<sup>(5)</sup>。造墓場所の選択基準が、古墳群の形成を通じて不変であったという保証はないけれども、埼玉古墳群のように古墳群中における各古墳の配置に一定の偏在性や企画性が全体的な傾向として明確に窺えることは、それが事前に配置が決定されていたものでないかぎり、各古墳の造営を担った造墓主体の間に古墳造営に関して墳形や構造ばかりでなく立地についても共有する規範や意識が通時的に存在し現実にそれが機能していた、つまり選地の選択基準が古墳群の形成期間を通じて不変だったからにはほかならない<sup>(6)</sup>。従って、埼玉古墳群では、古墳の造営地点を時系列で追うことで、各古墳が築造時に何が最優先されたのか、彼らが有していた規範や共通意識を窺い知ることが可能になるものとする。

本稿では、こうした立場からこれまでの考古学的な調査成果を踏まえた各古墳の構造の分析を手掛かりに、築造のプロセスと各古墳の選地という視点から、埼玉古墳群が今日のような景観を呈するに至った造営主体の築造意識や築造原理を探り、その意味するところについて考察

を加えることとしたい。

## 1 大型古墳の築造時期

古墳群の造営傾向を把握するためには、この古墳群の各古墳がどのような時系列に沿って造営されたのかということをおおきく確認しておく必要がある。

埼玉古墳群は8基の前方後円墳を含む11基の大型墳と多数の小円墳で構成されている(第1図)<sup>(7)</sup>。大型墳のうち、主体部の内容が調査等によって判明している古墳は、稲荷山古墳と將軍山古墳の2基の古墳に限られている。しかしながら、これまでの整備に伴う発掘調査の所見や出土した土器や埴輪等によって、主体部が不明な古墳についても、ある程度の年代を絞り込むことが可能となった。特に円筒埴輪の分析は近年とみに精緻化しており有効な指標のひとつとなっている(城倉2011)。さらに、この地域では出土遺物以外に、降下火山灰の痕跡もまた古墳造営の先後関係を割り出すために有効な指標となっている。すなわち群馬県榛名山は古墳時代後期に2度大噴火したことが判明しており、その際の火山噴出物について、6世紀初頭頃と推測される一度目の噴出物は榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)、6世紀の中頃に大量の軽石が噴出された二度目の噴出物は榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)と呼ばれている(石川他1979)。いずれも火口の東方向に噴出され榛名山東麓では厚く堆積しているが、Hr-FAは、より広範囲に拡散し埼玉県北部地域でもかなりの降灰を確認することができる。坂本和俊氏によってHr-FAが県北の遺跡・遺構間の先後関係に活用できることが喚起されて以降、次第に研究者の注意が向けられるようになった(坂本1981)。なお、Hr-FAの降下時期は従来ほぼTK47型式とMT15型式の端境期とする理解が大勢であったが(坂本1996)、最近になってHr-FAの直下にMT15型式の須恵器が存在する事例がいくつか確認されるようになり、降下時期は従来の想定よりもやや下ってMT15型式の新しい段階とする意見も提出されており、降下時期の実年代を含め多くの問題を孕んでいる(酒井2002、藤野2009)。ここでは、大づかみであるがMT15型式内にHr-FAの降下があったとみなしておく。

各古墳の年代については今なお確定できない部分もあるが、こうした指標をもとに以下、既往の成果を踏まえつつ各古墳の年代を改めて確認しておこう<sup>(8)</sup>。

稲荷山古墳の後円部造出し付近から出土した須恵器群は、坏蓋、有蓋高坏、甕があり、TK23型式もしくは後続するTK47型式の古段階とみなされている<sup>(9)</sup>。須恵器と主体部の関係についてはいくつかの組み合わせが想定されているが、調査された礫礮や粘土礮から出土した遺物の年代と須恵器の年代は矛盾しないものと考えている<sup>(10)</sup>。検出された円筒埴輪には胎土・色調や調整が異なる4種類が認められるが、その中に半円形窓を持つものがあり、特定の種類にはB種ヨコハケを部分的に残すものも存在する。この4種類の埴輪を樹立の時期差としてとらえようとする見解(若松2007)と同時期の所産であり生産地の違いを示すものとする意見(城倉2011)が対立しているが、時期差と考える立場においても最古段階に位置づけた埴輪A類を他古墳との比較検討からTK23型式期頃とみているので、遺物から導き出された年代観と大きな齟齬はない。周堀底から60cmほど浮いた位置でHr-FAと推定される粒子が堆積していたことも矛盾しない。なお、この古墳では未知の主体部を想定する見解もあり(白石1985)、その存在の有無によって古墳の築造年代が若干変動する可能性が残されているとしても、稲荷山古墳が埼玉

古墳群で最初に築造された大型墳であることは動かない<sup>(11)</sup>。

二子山古墳から出土した須恵器には、壺、甕、甗、器台、提瓶、高坏等があり、いずれも細片であるが長脚化傾向にある大型の高坏の破片や提瓶の存在から判断すれば MT15型式に位置づけられるものであり TK47型式以前に遡るとみなせるものは存在しない。その一方で周溝底からやや浮いた位置に薄く堆積している暗灰色土層に含まれるテフラ粒子は Hr-FA と推測されている。先の降下時期を勘案すれば古墳の築造年代は MT15型式新段階以前ということになり、須恵器の示す年代とやや微妙な関係になる。また、方形窓が残る 5 条 6 段構成の円筒埴輪は稲荷山古墳の前方部に近接する小円墳で TK47型式の須恵器蓋坏が出土した梅塚古墳(埼玉 2 号墳)出土埴輪よりも古相であるとする見解もあり(坂本1996)、須恵器の示す年代とはかけ離れている。今のところ、二子山古墳出土の須恵器の大半は細片で表採資料も含まれる不安定な資料であることを踏まえ、埴輪を重視して二子山古墳の年代を TK47型式期まで上げる意見が有力である。

丸墓山古墳では、主体部が未調査であるものの周堀の範囲確認調査によって土器や埴輪片が若干確認されている。このうち土器はいずれも須恵器甕や土師器などの細片のみで年代の決め手に欠ける。埴輪については、細部の特徴から二子山古墳の埴輪よりも先行するという見解(杉崎1978・城倉2011)と二子山古墳の埴輪よりも後出するという見解(坂本1996・若松2007)が対立している。その中で、城倉正祥氏は丸墓山古墳出土の埴輪 3 種類のうち、A・B類が稲荷山古墳出土例に酷似すること、C類は稲荷山古墳から二子山古墳へとつながる過渡的な特徴を有していること、さらに三本突帯の残存的な三稜突帯の個体が存在することなど埴輪自体の系統的な変遷を根拠に丸墓山古墳を稲荷山古墳と二子山古墳の間に位置づけており、生産遺跡での動向も踏まえたもので説得力に富む見解である。しかしながら、丸墓山古墳では墳丘裾に入れたトレンチ調査によって、古墳築造前の旧地表面に Hr-FA と推定される薄い灰色層が確認され築造時期は Hr-FA 降下後であることが報告されており(田中1994)、二子山古墳周堀内の堆積物が Hr-FA で正しいとすれば、丸墓山古墳との先後関係は動かし難く、城倉氏の唱える埴輪の先後関係とは整合しない。このように古墳の年代をめぐって埴輪と降下火山灰との関係に不整合が生じているのは、埴輪の生産と樹立段階の時間差の議論に加えて<sup>(12)</sup>、決定的な物証に思える降下火山灰についても、群馬県域と異なり降下火山灰の堆積が少ない当地域では肉眼観察による同定に限界が生じていることに起因する。二子山古墳や丸墓山古墳の Hr-FA と推定される層について理化学的な分析が実施されていない現状では、降下火山灰もまた絶対的な拠り所にはなりえず、結局のところ先後関係の決め手に欠けると言わざるを得ない<sup>(13)</sup>。筆者の見解は後述することとし、ここでは両者を TK47型式期～MT15型式期の時間幅の中でとらえておく。

瓦塚古墳では、長脚一段三方透の無蓋高坏、大型器台、提瓶、横瓶、脚付壺、大小の甕等の須恵器が造出し周辺からまとまって出土している。須恵器には若干の時期差があり、MT15型式の新相から TK10型式期に相当する(利根川2004)。これは出土埴輪の年代観とも矛盾しない。

奥の山古墳は、最近の調査で後円部の造出し付近から須恵器がまとまって出土している。それらは手持装飾付甗を含む、大型器台、壺、長脚一段透の高坏などで、在地産を主体とするもののおおむね TK10型式新段階に位置付けられるものである<sup>(14)</sup>。やはり、出土埴輪の年代観とも矛盾しない。

將軍山古墳では、墳丘造出し付近から須恵器甕及び無蓋高坏、壺、甕、土師器坏など豊富な土器が出土しており、いずれも TK43型式の古相に収まるものである(岡本1997)。この甕の一部は MT85型式に相当するという見解もあるが(坂本1996)、そもそも両型式の区別は微妙な問題であり、MT85型式を採用しない研究者もいる。本稿でも酒井清治氏に提言の従い TK43型式と TK10型式の狭間の型式には TK10型式新段階の表現を暫定的に当てている。將軍山古墳の後円部の石室から出土した副葬品はやや新しい段階のものを含んでいるが、石室の構造や石室内から出土した須恵器高坏と造出し出土土器との間には大きな時間差は認められない。

鉄砲山古墳は、調査範囲が限定的で土器類の出土はほとんど認められずその位置付けは不安定である。微細な須恵器坏の破片を検討した利根川章彦氏は、概ね TK43型式から TK209型式と比較的幅広くとらえている(利根川2004)。しかしながら、後で述べる埴輪を有さない中の山古墳が TK209型式古段階に位置づけられることからすれば、埴輪を有する鉄砲山古墳が TK209段階まで下がるとは考え難く、TK43型式の中に収まるものとみてよいであろう。この古墳は従来から奥の山古墳と將軍山古墳の間に位置付けられていたが、最近では検出された円筒埴輪は突帯が扁平化したもので埴輪が検出された大型古墳の中ではもっとも新しく位置づけられ、將軍山古墳に後出するものとする見解がある<sup>(15)</sup>。生産地との対応関係を整理した城倉氏も鴻巣市生出塚埴輪窯において鉄砲山古墳に埴輪を供給している窯が愛宕山古墳や將軍山古墳に供給された窯である21・22号窯を切っていることから、鉄砲山古墳の時期はそれらの古墳よりも後出すると位置づけている(城倉2010)。その一方で、古墳築造企画からみると、稲荷山古墳、二子山古墳、愛宕山古墳、鉄砲山古墳、瓦塚古墳、奥の山古墳の各古墳がいずれも後円部径が全長の2分の1となる大山古墳型に属するのに対して、將軍山古墳は全長に比べ後円部径が小さくなっており、中の山古墳も將軍山古墳と同企画とする分析もある。しかしながら、鉄砲山古墳や中の山古墳など墳丘部分が未調査の古墳では後世に墳丘が改変されている有無を確認することができず、現状では古墳築造企画に大きな信頼を置くことはできない。ここでは埴輪分析の結果に基づき、將軍山古墳が鉄砲山古墳に先行するとしておく。

中の山古墳では、長脚二段三方透の高坏、甕、器台等の須恵器が出土しているがそれらは細片であり詳細は不明である。ただし、この古墳では赤焼焼成の埴輪は認められず、代わって須恵質の埴輪壺が樹立されており、同工の製品が大里郡寄居町に所在する末野遺跡の第3号窯から出土しており、供給窯のひとつであることが判明している。末野第3号窯では、埴輪壺に長脚二段三方透の高坏や口径のやや大ぶりの蓋坏等が伴出していることが報告されている(福田1998)。従って、末野窯跡を介して、長脚二段高坏の三方透と三方透が共存することが確認される中の山古墳の時期は TK209型式の古段階に位置づけてよいであろう。中の山古墳は、須恵質埴輪壺の存在から埴輪消滅直後の古墳とみなしてよく、埼玉古墳群ではその前段階である TK43段階で埴輪の樹立が停止し、次期中の山古墳の築造をもって前方後円墳の造営を終了したとみることができる。

円墳である浅間塚古墳と方墳の戸場口山古墳の両古墳では、埴輪が認められず中の山古墳に後出する前方後円墳消滅後の古墳とみてよい。両古墳ともデータが少ないが TK209型式期中段階～新段階頃ということになる。

なお、調査範囲が限定的で遺物の出土が少ない愛宕山古墳の位置付けは不安定であり、方形

透窓の円筒埴輪片の出土を重視して二子山古墳と略同時期とする見解があるが(杉崎1986)、城倉氏は上記の細片を除く愛宕山B群を生出塚遺跡 DE 地点21・22号窯の一括焼成品とみなし、生出塚編年II期後半として奥の山古墳～将軍山古墳の間に位置づけられるとした(城倉2011)。調査所見によれば、方形透窓を有する埴輪片は細片であり同種の埴輪片も合わせて全体で3点ほどしか確認されていないこと、さらにこの埴輪が出土した後円部内堀際では埴輪の細片のみがまとまって出土していることを勘案すると、やはり方形窓を有する個体破片は二次的な移動によって混入した可能性が大きいとみるべきであろう。埼玉古墳群では、昭和初期に大型墳の墳丘を除き一面にわたり大規模な土取り工事が施工されて水田化が進められた経緯があり、その際に多量に埴輪が移動したことが窺える。また愛宕山古墳に隣接して江戸時代には寺院が建立され、古墳の東側はその門前にあたり現在でも住宅が密集している地点であり、後世にたびたび整地されたことが窺えるのである。愛宕山古墳における埴輪片の混在は、こうした状況を反映したものであろう。

以上の年代観に従えば、埼玉古墳群の形成は、二子山古墳と丸墓山古墳の間で先後関係が確定しない部分があるが、おおよそ須恵器の型式に換算すると稲荷山古墳(TK23～47型式期)から開始され、二子山古墳(TK47～MT15型式期古段階)、丸墓山古墳(TK47型式～MT15型式期古段階)、瓦塚古墳(MT15型式期新相～TK10型式期段階)、奥の山古墳(TK10型式期新段階)、愛宕山古墳(TK10型式期新段階前後)、将軍山古墳(TK43型式期古相)、鉄砲山古墳(TK43型式期)、中の山古墳(TK209型式期古段階)、戸場口山古墳と浅間山古墳(TK209型式期中段階以降)の順で築造されたものとみられる。

埼玉古墳群では、出土遺物からみる限り各々僅かな時間差を持ちつつ各古墳が継起しているが、その時間差は必ずしも均等ではない。奥の山古墳、愛宕山古墳、将軍山古墳、鉄砲山古墳の4基の古墳が造営されたTK10型式期新段階～TK43型式期段階は、前後の古墳と比較してもかなり近い時間幅の中で古墳が相次いで築造された時期にあたる。後述するように二重周堀の形状から奥の山古墳と鉄砲山古墳の造営時期には重複していた期間が存在していたらしいことからその想定を傍証している。また、これらはいくまでも各古墳が築造された時間順を示すもので、そのまま首長墓の系列を示すものではないことはいままでもない<sup>(16)</sup>。

## 2 古墳の形態的特徴

最近の確認調査の結果、埼玉古墳群ではこれまで古墳群中の前方後円墳で唯一の盾形一重周堀とみなされていた奥の山古墳について他の大型墳と同様に方形の二重周堀であることが確認された<sup>(17)</sup>。その結果、8基の前方後円墳及び方墳である戸場口山古墳の9基の古墳の全てで方形二重周堀という同一企画性を有することが判明した。このような方形二重周堀以外にもこれまでの確認調査の結果によって、いくつかの構造上の特徴や共通性が明らかにされている。とりわけ、墳丘及び中堤の造出しは県内においても埼玉古墳群内の古墳にしか存在せず、この古墳群を特徴づける最大の要素と見てよい。

埼玉古墳群の各古墳の造出しについては既に詳細な検討が行われているが(高橋2005)、後に述べるように、造出しが古墳の構造や配置を規定する上で深く関わっていると考えるので、改めてここで検討を加えることとしたい。

### (1) 墳丘の造出し

埼玉古墳群の8基の前方後円墳のうち稲荷山古墳・二子山古墳・瓦塚古墳・奥の山古墳・鉄砲山古墳・将軍山古墳の6古墳において、墳丘の一方に造出しが付設されている<sup>(18)</sup>。残り2基の前方後円墳のうち、愛宕山古墳については造出し付近の調査が未了であるが、現地地形でみ限り造出しの明確な痕跡は認められない。中の山古墳においてもトレンチ調査では造出しの遺構は検出されていない。ただし、この古墳では調査範囲が限定的であり、トレンチ調査では墳丘括れ部において須恵器片が比較的まとまって検出していることから、その付近に何らかの施設が存在した可能性は排除しきれない。

また、各古墳の造出しの設置場所は、南北方向を墳丘の主軸方位とみた場合、その西側に限られており<sup>(19)</sup>、墳丘の東側や両側に造出しを有するものは現在までのところ確認されていない。さらに稲荷山古墳・奥の山古墳・将軍山古墳の3古墳の造出しは一般に造出しが付設される括れ部もしくは括れ部に近い前方部側ではなく後円部に作出されている。こうした特徴を有する造出しの状況をさらに詳しく検討してみよう。

稲荷山古墳では、後円部西側のやや前方部寄りに造出しが付設されている。後円部に造出しを付設する事例は類例が極めて少なく、この古墳群の特徴のひとつとなっている。稲荷山古墳の造出し部分は後世の根切り溝等による攪乱が著しいがおおよその形態が判明しており、それによれば墳丘側で幅14m、先端部の幅が17m、奥行10m程の扇形を呈し墳丘から内堀に向かって緩く傾斜している。造出し上面は既に削平されていたが造出しの基部隅にあたる堀底から須恵器や埴輪が出土した。出土した埴輪には人物埴輪や馬形埴輪などの形象埴輪の細片も僅かに含まれるが、報告にあるとおり他からの流入の可能性が大きく、本来この造出しには人物埴輪や馬形埴輪は樹立されてはいなかったとみられる。

二子山古墳の造出しは、括れ部に近い前方部側に設置されている。部分的な調査で全体は確認されていないが、推定で幅20m、奥行9m前後で、周辺の周堀内から円筒埴輪や須恵器大甕、大型器台の脚部片等が出土しており、本来は造出し上に置かれていた可能性が大きい一方で、やはり稲荷山古墳同様に造出し周辺で形象埴輪の出土は認められない。

瓦塚古墳では、古墳の西側で前方部の括れ部に近い辺に造出しを設けている。調査の結果、幅8m、奥行6.5mの隅丸方形で、造出し上及び造出しの北側の周堀内から甕、器台、高坏、提瓶等多数の須恵器や土師器坏が出土し、接合関係から本来は造出し上に据え置かれていたものと推測されている。やはりここでも形象埴輪は確認されていない。

奥の山古墳は、近年再調査された際に稲荷山古墳同様に後円部に造出しが付設されており、その付近から大型器台や器台に乗る子持装飾付甕、壺、高坏などの須恵器が集中して出土した。

将軍山古墳でも奥の山古墳同様に後円部に造出しが付設されている。推定で墳丘側幅11.5m、先端部幅14m、奥行12m前後の扇形で、北隅も前面内堀が中堤に向かって周囲の内堀と比較して高まっていることから土橋状の進入路(渡り堤)があった可能性もある。造出し斜面から円筒埴輪と靱などの器材埴輪が出土しており、土器類は造出し上面及び周辺の堀底から須恵器の壺、甕、提瓶、甕、土師器の坏が出土している。特に須恵器の甕は造出しと墳丘の付け根付近の堀底に4個体まとまって検出されたことから、これらの甕は造出しの上面ではなく本来この位置

に置かれていた可能性もある。近年、古墳造出し脇から導水施設を模した埴輪や船形埴輪など水と関わりの深い遺物が出土する事例が増加しており、そのことと関連するのかもしれない。

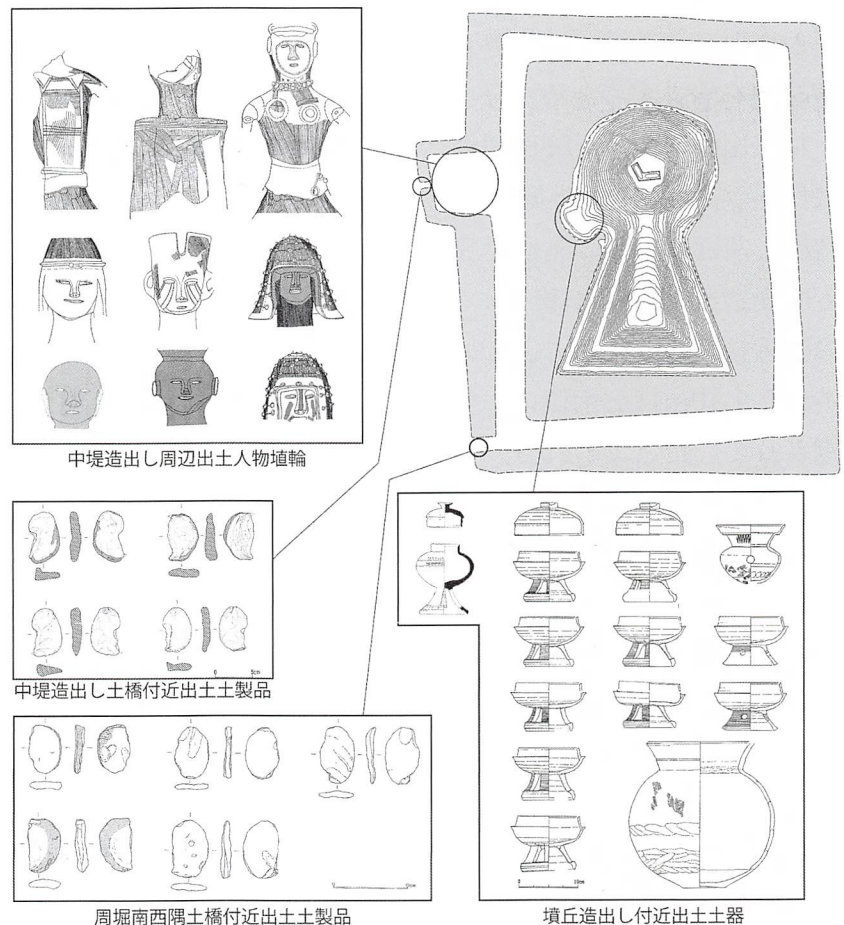
造出しについて各古墳に共通するのは、稲荷山古墳の土橋入口部を除けば、墳丘造出し以外からはほとんど土器類が出土しないことである。このような状況から、埼玉古墳群の各古墳では、墳丘の造出し上において須恵器や土師器の坏、高坏、甗等の飲食器を中心に、大型の器台や壺、甕、さらに装飾付土器等によって構成された土器を使用した儀礼が造出しに集中して挙行されているのであり、しかもそこに樹立された埴輪は円筒埴輪及び盾形・靴形等の器材埴輪類に限定されていて、人物埴輪や馬形埴輪等が樹立されていた積極的な状況は認められないことがわかる。

## (2) 中堤帯の造出し

稲荷山古墳・二子山古墳・将軍山古墳の3古墳では、墳丘の造出しと別に中堤の一角に外堀に向けて張り出部を設けている。それらは中堤造出しあるいは方形区画、中堤張り出し、外区などさまざまに呼称されているが、二子山古墳と将軍山古墳では墳丘の造出しと相似形を呈しており、これを造出しの一種とみなして差し支えないであろう。ここでは調査報告書に従い中堤造出しと呼称しておく。

稲荷山古墳では、中堤の西側で後円部に近い個所に26m×26mの方形区画が外堀に向かって張り出していた。この張り出しのため外堀は方形区画を巡るようにクランク状に外側に回り込み、さらに造出し前面の中央

付近で外側と繋がる通路となる土橋が取り付けられている。調査の結果、この方形区画の上面は既にかなり削平されていたものの、区画の周囲の外堀には転落した状態で人物埴輪が多数出土し、区画内には人物埴輪を中心とした形象埴輪が樹立されていたことが判明している。その一方で、稲荷山古墳ではこの場所以外では墳丘覆土中などから人物埴輪は細片が断片的に出土しているのみで、まとめて人物埴輪を樹立していた痕跡は認められない。従って、この中堤造出しは人物埴輪や馬形埴輪などの形象埴輪を樹立するために特に設えた施設と考



第2図 稲荷山古墳



えてよいであろう。稲荷山古墳では、中堤造出しから土器類の出土がほとんどみられないことからすれば、人物埴輪を中心とした形象埴輪による祭儀と土器や土製品によるそれが別々の場所に用意されていた公算が大きい。なお、この古墳では古墳の進入口に当たる中堤造出し前面の土橋付近と前方部西南隅の土橋付近の2か所から餅状の土製品が土師器片とともに検出されており、本来は土器に盛られて置かれたものと推測されている。これらは古墳の進入部における何らかの祭儀の痕跡であり、古墳における祭儀全体の一部を構成するものではあっても、その内容は中堤上の埴輪儀礼や造出しにおけるそれとは一線を画するものであろう。また、後円部東南側の内堀隅においても土師器の高坏や坏がまとまって検出されており、土器等を用いた祭儀の跡が確認されている(第2図)。

このようにみると、稲荷山古墳で举行された祭儀の痕跡は、なお不明な点が多いものの、墳丘造り出し部における須恵器を中心とした供献儀礼、中堤造出しを舞台とした人物埴輪等による儀礼、土橋部における食物形土製品の供献儀礼、周堀隅における土師器飲食器を用いた儀礼、というようにそれぞれ地点と内容が異なる儀礼が存在したとみることができる。

二子山古墳では、中堤西側に西向きに外堀に突出するように中堤側幅30m、先端部幅40m、奥行25mほどの台形の区画を設け、造出しの先端部の外堀は細く掘り残して土橋としている。この古墳では稲荷山古墳のように外堀がクランク上に回り込むかわりにこの部分の堀幅全体を押し広げて外堀の中に造出しを収めている。そのため、二子山古墳の外堀は他の二重堀の古墳と比較しても突出して幅広となっている。中堤造出しは形状を確認するトレンチ調査のみしか行われておらず全面を確認したわけではないが、人物埴輪や馬形埴輪の大半は中堤造出しの斜面から堀底にかけて検出されており、二子山古墳においても稲荷山古墳と同様に中堤造出しは埴輪列を樹立するために設けられた施設であることがわかる。

将軍山古墳では、後円部の造出しと相似形の台形区画が中堤から西側の外堀に突き出すように作出されている。外堀は突出部を回り込まず、造出しの側線に沿って外側に突出するだけで、造出し前面は外堀の外側と完全につながっている。埴輪は、円筒埴輪を含めて古墳全体でも中堤造出し付近に集中して出土しており、特に形象埴輪では盾を持つ人物埴輪などがほぼこの付近に限られている。この古墳では中堤造出しの前面に外堀が回り込まないにも関わらず、造出しの10mほど南側に土橋が別に付けられており、中堤への出入りと造出し区画が機能上区別されていたとみられる。

これら中堤造出しが設けられた3古墳以外では、瓦塚古墳の西側の中堤中程で中堤と外堀とつなぐ土橋が設けられており、土橋南側の中堤上で形象埴輪列が良好な状態で検出されている。これらの形象埴輪列は中堤の幅全体ではなく、外堀際にまとまって樹立されていたことが調査の結果判明しており、近年調査された大阪府の今城塚古墳における古墳側面の中堤に外堀に面して帯状に張り出しを設け、そこに列状に形象埴輪列を設置している事例から類推して、瓦塚古墳の事例は今城塚古墳のような構造を簡略化したものとみなすことができる。このような中堤上の外側に寄せて埴輪を配置する行為は、外部からの埴輪の視認性と無関係ではないであろう。島状や出島状遺構に形象埴輪を並べることも、埴輪を外部にみせるための工夫としてとらえられている(森田克行2008)。そうだとすれば、先述の3古墳にみられる中堤に外側に向けて突出した区画を設け、そこに形象埴輪群を集中して配置している状況もまた同様に、外部か

らの視認性を意図したものにとらえてよいであろう。

瓦塚古墳では墳丘西側造出し周辺から集中して須恵器が出土しており、中堤造出しの有無にかかわらず西側に向けて埴輪儀礼と須恵器・土師器の儀礼が同一方位に重なるように設置されていることがみてとれる。また、外堀に設けられた土橋も墳丘造出しの延長上に位置している。従って、稲荷山古墳と比較すれば、中堤に突出した造出しを設けるか否かの違いはあっても、各古墳は埴輪配置に関して同じ意識を共有し、同様の祭儀を挙行していたとすることができるであろう。後出する將軍山古墳においても、後円部造出しや中堤造出しをみる限り忠実に稲荷山古墳を継承していることからすれば、この古墳群においては最初の稲荷山古墳で執行されたある一定の型の儀礼をその後の古墳においても踏襲し続けていたことが窺えるのである。

なお、中堤帯造出しの存在が未調査の鉄砲山古墳を含め、このような施設は埼玉古墳群中でも全長100m級の大型墳のみに認められるものであることから、こうした施設について首長権を継承した古墳に限定されたものとする見解がある(高橋2005)。けれども、周辺他地域の100mを超えるような二重周堀を備えた大型墳に今のところこうした中堤造出しが現在のところまったく認められないことからすれば、むしろ埼玉古墳群の個性として理解することが適当であろう。

### (3) 造出しのもつ機能

土器類を供献したり埴輪列の樹立される場としての造出しの具体的な機能は、どのようなものと推測することができるのであろうか。

造出しは、一般に古墳の祭儀を執行する場として創出されたものと理解されており(上田1951)、最近では、墳頂の埋葬主体部に至る墓道上に設置された墳丘出入口部における祭祀の場として把握されている(和田1996)。

近年調査された兵庫県加古川市の行者塚古墳では、前方部とは別に後円部に4つもの方形～扇形の突出部が作出されており、造出しの機能に関わる重要な情報が提供された。すなわち、括れ部に設けられた造出し上には、土器類とともに魚・鳥・餅・アケビ・ヒシの実と推定される供物を模した土製品、そして家形埴輪が原位置のわかる状態で検出されたのである(加古川1997)。このような状況を踏まえ、造出し上の祭儀の具体的な内容について、古墳の墳頂部における埋葬施設の周囲に設置される方形区画の埴輪列の成立を契機に、そこで執行されていた現世の人々が加わる飲食としての守魂・鎮魂儀礼と死者のための飲食物供献儀礼とが分離し、後者が墳頂部から離れて括れ部に造出しに移動したものとする見解が小浜成氏によって示されている<sup>(20)</sup>。中井正幸氏も墳頂部から土師器高坏や小型丸底壺とともに笊形土器や食物形土製品が出土している昼飯大塚古墳と行者塚古墳の比較検討から、「もともと後円部で行われていた性格の異なる儀礼が、5世紀前半を境に造出しへの儀礼と場を移すことが推測できる」と述べ、埋葬観念の変化を背景に墳頂部における複合的な葬送儀礼が分離したことを想定している(中井2005)。

一方、場所を異にする墓上儀礼と墓前儀礼の分離は認めつつも、両者の具体的な関係は不明であるとし、「出土遺物から見る限り両者は食物供献を中心とした内容のもの」で、共飲・共食儀礼というよりも死者の靈魂に対する奉納的な儀礼とみる見解や(和田2009)、造出し上の飲食物供献儀礼は禁忌の場とする意識の顕在化によって墳丘上に立ち入ることが困難になったこと

に対する代替機能とみる考えもある(高橋2005)。このように墳頂部の儀礼の分離なのか移動なのか、あるいは共飲・共食儀礼か否かといった解釈上の論点はあるものの、いずれにしても造出しは葬送儀礼のうちでも飲食物供献儀礼を執行する場所として新たに創出されたものという点では異論はないであろう<sup>(21)</sup>。奈良県島の山古墳では、後円部と造出しが接する地点から植物性の編み籠が4点並んで出土しており、実際の食物を供献する儀礼が原型として存在した可能性を示している。埼玉古墳群についても、各古墳から出土している土器の分析を通じて、同様に墳丘の造出しで飲食物供献儀礼が執り行われたことが想定されている(高橋2005、杉崎2009)。

行者塚古墳の造出しについては、出土した家形埴輪群の様相から現実の居館を意識した配列となっているという見解があり(若狭2007)、造出しと墳丘の間隙の谷部分に導水祭祀施設が設置されている状況からもその可能性は大きい、しかしながら造出し自体は豪族居館の復元それ自体の明示を主たる目的としたものではないことは家形埴輪に各種食物形土製品が伴っていることから明らかであろう。高橋一夫氏も豪族居館の表示説を排し、造出し上の儀礼については他界思想の出現にその契機を求めている(高橋2005)。筆者も家形埴輪がまず墳頂部に出現し、後に造出し上に移動すること、埴輪の出入口の扉がいずれもあけ放たれていることから、やはり家形埴輪自体は被葬者の霊の依り代とみなすことが妥当であると考え、さらに造出し上では墳丘に向かって奥に家形埴輪群が置かれその手前に飲食器や供物としての食物形土製品が並べられているという両者の配置関係から類推すれば家形埴輪と土製品には、霊前における奉納的な関係が成立する余地は大きく、家形埴輪もまた単に居館を復元したものとみるよりも供献儀礼の一部を構成するものとみる。そして、ここで執り行われる儀礼は、その配置からみて墳丘を背にして前方を正面とし、祭儀に参列する人々は造出しの前面に位置して古墳と相対していたとみるのが自然であろう。

ところが、造出しの正面観についてはまったく異なる見解も提示されている。三重県宝塚1号墳の造出し上及び周辺の形象埴輪の検討をもとに松田度氏は造出し脇の埴輪群では壺形埴輪列のくい違い部が墳丘側に向けられていることやヒレ飾りのある入母屋高床の家型埴輪の出入口の表現も墳丘側に存在していること、さらに兵庫県行者塚古墳や奈良県乙女山古墳、大阪府の心合寺山古墳においても同様の埴輪配置にみるくい違い構造が認められることなどを根拠に「当該時期の古墳の造出しとは、被葬者側が正面となる場」であり、造出し部の形象埴輪群も墳丘側を正面観としていたとする、本論と相反した解釈を提示している(松田2007)。しかしながら、埴輪の出入口の方向が必ずしも他の遺物群を含めた全体の正面観を示すものとみるのは早計であろう。宝塚1号墳等で認められた形象埴輪の配置状況や家形埴輪の扉の方向は、墳裾に造出しを設けることによって生じた墳頂部と墳裾の造出しとの空間を繋ぐ、いわば靈魂の通路を示すものと考えるのが妥当であり、古墳の内と外という関係においては、家形埴輪と供献された食物形土製品の位置関係からこれを祭壇の様相と理解して良ければ、現世の人々が関わる飲食物供献儀礼の正面観としては、やはり造出し前面が正面であることを明示しているとみるべきである。

一般に、前方後円墳における前方部は「墳丘墓における葬送祭祀の場として重要な意義をもった墓道部分が特殊に発達を遂げた祭場」(都出1992)に由来するとすれば、本来の前方後円墳の正面は前方部前面であったことは疑いないであろう。やがて、前方部の発達とともに前方部隅角

が後円部の埋葬主体へ通じる墓道として位置づけられるようになったことで(近藤2000)、早い段階から前方部前面と正面とする観念が薄れていったことが窺える。古墳時代前期前半に位置づけられる奈良県西殿塚古墳では墳丘を盆地側に向けて築造されており、隣接する東殿塚古墳では、前方部側面の裾部分に造出し状の張り出しを設け、鱗付円筒埴輪や土器類が集中して配されていることが確認されている。その位置は前方部側面とはいえかなり前方部前面寄りであることから、直接後円部の埋葬主体に対応するものかどうかはなお明確ではないが、このような事例から少なくとも前方後円墳の創出の早い段階から前方部前面を正面としない古墳が存在したこともまた確かなことであろう。

古墳正面観の変化については、前方部の発達とともに側面形としてのふたつの高まりが強く意識され側面が古墳の正面と認識されるに至り、その中心の括れ部が正面観の中心として意識されるようになったとする見解もあり、傾聴すべきであると考え(吉村1999)。

ただしかし、古墳時代前期では丘陵等の裾部に立地する古墳で前方部を平野側に向けている古墳も多いことから、前方後円墳の正面観については前期前半段階ではなお錯綜状態にあり、それが収斂して前方後円墳の側面を正面観とする意識が定着するのは、前期末の造出しが創出された時期になってからではないかと推測する。古墳時代前期後半には、交通網や物流の結節点となる「津」や「市」などを見下ろす地点に景観の構築を主眼に置いて前方後円墳が築造されるようになるという指摘があり(北條2010)、この時期に古墳の景観に対する観念が大きく変化しつつあることが窺えるからである。

造出し出現期の古墳であり、括れ部や前方部側面ではなく後円部に造出しを備えた三重県石山古墳では、造出しのある墳丘の南西側のみに主墳丘の段築に追加する形で基底基壇が作出されており、この基底基壇が作出された側が古墳の正面とみなされていることは(穂積2005)、造出し創出時における造出しと古墳の正面観の関係に重要な示唆を与えるものであろう。

埼玉古墳群では外周から中堤への進入路である土橋が全て造出しと同じ西側に設けられ、なおかつ造出しに近接して設置されている事例が多い点も、造出しが設置された方向を古墳の正面とする見方を補強するものであろう。

つまり、初期の造出しの状況を勘案すれば、造出しはその当初から古墳そのものの正面観と密接な関係にあり、定形化した古墳の成立による前方部の発達とともに前方部における祭場や墓道としての機能や意識が喪失し、さらに墳頂の祭儀の全部もしくは一部が古墳の墳裾の埋葬施設登坂路入口に移行してゆく過程の中で、古墳の景観に対する観念の変化と相俟って、新たに墳丘出入口部分に古墳の正面を示しつつ葬送儀礼を執行する場として創出されたものとみなすことができる。

造出しは、創出段階では片側のみに設けられているが時代が下がると両側に設けた古墳が出現する。両側造出しは特に大王墓と想定されるような大型墳に認められることが多い。造出しが設置された側を古墳の正面とした場合、括れ部の両側に造出しが設けられた古墳では両側がともに正面として機能していたのであろうか、といった疑問が生じる。その点について、和歌山県井辺八幡山古墳は極めて示唆的である(松田2010)。この古墳では括れ部の両側に造出しが設けられており、原位置を保った状態で多数の形象埴輪が検出されたが、西側造出しの埴輪群では向き合う中心人物以外は全て外側を向いているのに対して、東側造出しの人物埴輪群は概

ね墳丘側を向いている。また東西の造出しの埴輪群は異なったグループで構成され全体としてひとつの群を成しており、その主題となる場面が西側造出し上の対面する人物群であることを勘案すると、やはりこの古墳では西側を古墳の正面とみるのが妥当であろう。このように両側に造出しを有する古墳においても、そこにおける埴輪配置は線対象を示していないものが多く、従って両者は等質ではなく、古墳の側面観が重視されたとしても埋葬主体部への進入を考慮すれば古墳の両側がともに正面であったとは考え難いのである。

井辺八幡山古墳のように造出しに形象埴輪が樹立されている事例も多いが、初期の人物埴輪が出現する大山古墳(伝仁徳天皇陵古墳)や太田茶臼山古墳など5世紀中葉を前後する頃の古墳では、人物埴輪は中堤上に樹立されていたと推測されており(小浜2007)、それに先立つ5世紀初頭頃の造出しの出現期に中堤上において人物埴輪群像を樹立する堤上儀礼も成立したとみる見解は妥当であろう<sup>(22)</sup>。このような造出しの在り方は、人物埴輪を含む一群の群像と供献土器とは一連の繋がりのある葬送に関わる祭儀を構成していたとしても、本来その設置・執行場所は異なっていたということを示すものであろう。

稲荷山古墳等にみられる、後円部の造出しに須恵器や土師器等の飲食器と甕を置き、中堤に方形区画を作出して形象埴輪樹立の場とする構造は、中堤から外側に突出する方形区画の有無を別とすれば、まさに畿内中枢の大王墓で施行された葬送祭儀の在り方をモデルとしてそれを踏襲したものであり、埼玉古墳群で横穴式石室を導入した6世紀後半頃の將軍山古墳においてもなお、飲食物供献儀礼と人物埴輪群像による儀礼とが墳丘と中堤のふたつの造出しに明確に分離されていることに着目すれば、この古墳群では稲荷山古墳以来の祭儀の伝統が強固なまでに連綿と踏襲されていたといわざるを得ない。このことは埼玉古墳群の性格を規定する重要な指標となるものであろう。

### 3 古墳の正面観と築造の原理

#### (1) 古墳の正面観

造出しは、本来飲食物供献儀礼を執行する場所として創出され、その位置は前方部に替って古墳全体の正面を示す方向に付設されたことを確認したが、注目すべき点はこれまでみてきたように、埼玉古墳群の各古墳ではそうした墳丘造出しは全て古墳の西側の一方のみに付設され、さらに人物埴輪を集中的に樹立するために造られた中堤造出しの位置も墳丘造出しの方向と一致しているという点である。中堤造出しを設けていない瓦塚古墳においても形象埴輪列が墳丘西側の中堤上に確認されており、しかも先に述べたようにこの埴輪列は中堤上中央部ではなく外堀際に寄せて配列され、埴輪配置に際して外部からの視認性が強く意識されていた公算が大きいことからみれば、中堤造出しの有無にかかわらず、この古墳群では西側からの眺望が強く意識されていたことがわかる。

また、遺骸を納めた棺を搬入するための墓道に使用されたと推測される外堀から中堤への土橋についても、稲荷山古墳・二子山古墳・瓦塚古墳・將軍山古墳では全て西側だけに設置されており現在までのところ東側には確認されていない。さらに、周堀をみると二子山古墳の外堀の東辺の長さが約220mに対して西辺の長さは約250mと30mほど長く、西側の堀が東側よりも明らかに幅広く長大に掘り込まれていることが判明している。瓦塚古墳でもコーナー部の確認

が未了であるが、南北方向の外堀の傾きを見ると西辺の長さが二子山古墳同様に東辺と比べ相対的に長くなりそうである<sup>(23)</sup>。均整のとれた墳丘に比べて周堀や中堤が大きく歪められた理由を縄張りの杜撰さといった土木技術力の不足に求めることは適当ではなく、こうした周堀形態の不均整もまた何らかの理由にもとづいて意図的に造作されたものとみるのが妥当であろう。西側の堀幅を幅広く長大にすることは周堀の均整さを損なう一方で、西側方向から見た場合の古墳の荘厳さを増幅することに貢献したに違いない。二子山古墳の周堀の変形については、付近に所在する小円墳を意識的に避けたためとする見方もあるが(杉崎1987)、先行する小円墳を避けるのであればあらかじめ全体の縄張りを南に移行すれば解決する問題であり、その時点で二子山古墳の南側は大きな空間地であった。従って、多大な労力を用いて堀幅を歪める必然性に乏しく、やはり小円墳の存在は周堀の形態とは直接の因果関係はなく大形墳それ自体の問題であると考えられる。

このように、埼玉古墳群では構造の判明しているいずれの古墳においても祭儀を挙げる造出しや墓道となったであろう土橋、形象埴輪列など葬送儀礼に関わる一連の諸機能・施設が各古墳の西側に集約して設けていることに加え、周堀の形状などにも西方向を強く意識している様相が窺える。このような諸状況の示すところは、これらの古墳が西側からの眺望を明確に意識し、西側を古墳の正面とする観念に支えられて築造されたものと理解することがもっとも合理的な解釈であろう<sup>(24)</sup>。重要な点は、西側に古墳の正面を向けて築造するという観念が、最初に築造された稲荷山古墳から鉄砲山古墳に至るまで連綿と遵守されていることであり、後に述べるように調査データの少ない中の山古墳や墳形の異なる丸墓山古墳や戸場口山古墳もおそらく同じ観念が共有されていたと考えられることである。

また、このような傾向は大型墳に限らない。埼玉古墳群では、稲荷山古墳と二子山古墳の間に小円墳が10基ほど所在しているが、調査された古墳の周溝には陸橋を有するものが多く、それらもまた基本的に西～南方向に設置されており(白井1983)、西側と正面とする観念や意識の共有化は小円墳の造営にまで及んでいた。

この古墳群で埋葬主体部として最初に横穴式石室を導入したのは、TK43型式期古段階頃の築造と考えられる將軍山古墳であり、群馬県などの東国の先進的な地域よりもほぼ半世紀ほど遅れている。一般に古墳に横穴式石室が導入されると、石室の入口を南側に向ける傾向が強まることから、必然的に古墳の主軸は東西方向となることが明らかにされている(吉井2010)。しかしながら、將軍山古墳では新たに横穴式石室を導入してもなお古墳の主軸方位はやや東西に振るだけで完全な東西方向に向かわずに、それまでの古墳と近似する方位を採用している。坂本和俊氏は、將軍山古墳の主軸方位が他の前方後円墳よりもやや東に振れている理由について、「横穴式石室の開口方向を南に向けることと墳丘主軸と石室主軸をほぼ直交させることを両立させるため」(坂本1996)ととらえており妥当な見解であると考えられる。

このことは、先の造出しの取り付け方位の問題を含め、この古墳群では石室方位一般の規範よりも古墳の西側を正面観とする伝統的な観念のほうがなお勝っていたということを端的に示しているといつてよいであろう。

## (2) 古墳群周辺の地形

西側を正面観として南北方向に主軸を据えて築造されている埼玉古墳群の古墳配列は、古墳群周辺の地形とどのような関係性を有するのであろうか。次に埼玉古墳群の周辺地形を確認してみよう。

埼玉古墳群周辺の地形環境については近年に詳細な分析がなされており(杉崎2004・井上2007)、また最近の継続的な範囲確認調査によって新知見も得られているので、それらを参考に以下検討する。

埼玉古墳群が乗る台地は、現在では荒川と古利根川の挟まれて県北の行田市付近から県南の川口市までのレンズ状を呈する独立した台地であり、大宮台地と呼称されている。大宮台地は、本来は館林方面から南に向かって伸びた大きな舌状の台地が利根川の浸食作用といわゆる関東造盆地運動によって館林台地と切り離されたもので、台地内部は北側から東側にかけての沈降が著しいため多くの独立した支台に分離している。埼玉古墳群はこの大宮台地の北端に位置する仮称埼玉台地と呼ばれる小さな独立した台地の北端に立地している(杉崎2004)。

平成18年度から開始された史跡さきたま史跡の博物館による埼玉古墳群の範囲確認調査は、周辺の地形について多くの新知見をもたらした。

まず、古墳群の最も南に位置する奥の山古墳の南側は、平成18年度に行われた確認調査によって、ローム層が深く落ち込んだ低地となっていることが判明しており、古墳群西側の低地が奥の山古墳の南側に回り込んでいることがわかる。奥の山古墳の前方部外堀際にこの台地の稜線があり、奥の山古墳の外堀の一部は台地の縁から低地へ落ちている可能性もある。この稜線はそのまま南へと続き、樋上地区と埼玉台地を区画している。奥の山古墳のさらに南側地点には、江戸時代の古記録によれば小円墳群が一直線上に並んでいることから台地の連続を推測させるが、現在の知見ではその地点は低地を挟んだ自然堤防上に位置し、埼玉台地とは明確に区別されるものである。また、これらの小古墳についても古墳がどうかの確証も得られていない(杉崎2007)。

稲荷山古墳の北側には現在、旧忍川が流れている。この河川は江戸時代享保年間の開削による人工の堀割といわれているが、稲荷山古墳の東側で北に向かって開く谷状地形が確認されたことや対岸の万願台地側でも北から南の忍川に向かって緩やかに傾斜する地形を呈することが確認されているので、旧忍川の付近は既に古墳時代当時から谷状地形が形成されていて北東の万願台地との間は区画されていたことが窺える。旧忍川が江戸時代に開削されたことが事実であるとすれば本来あった谷状の地点をさらに拡幅して堀割としたのであろう。この谷状地形を境界として、埼玉古墳群は白山神社古墳など北側の古墳群とは区画されている。

丸墓山古墳の西側は、平成20年度に確認調査が実施され、古墳西側の周堀の立ち上がりが明確には確認されずもともと低地部であったことが判明した。天正18年(1590)に石田三成が忍城攻めを行った際に水攻めのために湛水用の土塁を忍城の周囲に構築しており、それらは俗に石田堤と呼称されているが、その土塁は丸墓山古墳のほぼ南北方向の中軸線上に取り付き、古墳から南に向かって伸びる土塁の痕跡が現在も高まりとして残存している。土塁は湛水の性格上、台地の縁辺に沿って構築されたと考えられるので、石田堤の構築された位置を台地の端部とすると丸墓山古墳のほぼ半分は台地から低地に落ちている可能性が大きい。

瓦塚古墳の西側で、現在さきたま史跡の博物館が設置されている地点は、昭和55年頃に浄化槽が設置された際に掘削され、2 m以下までローム層が検出されなかったことからもともと低地であったことが判明している。従って、博物館と台地上に位置する瓦塚古墳の間に台地縁辺の稜線が存在することになり、瓦塚古墳はかなり台地の際近くに立地していることになる。

愛宕山古墳の西側の古墳公園新駐車場付近は、造成に伴う確認調査が実施され、全面低地であったことが確認されており、新駐車場と愛宕山古墳の間にある旧駐車場の付近に台地の稜線が存在することが想定できる。愛宕山古墳の西側の外堀の位置は不明確であるが、石田堤の延長線を考えると、かなり台地縁辺に近いところに位置していることが予想される。

一方、古墳群の東側では、前玉神社の北東側には小さい谷が入り込み、付近に谷頭部が所在した可能性が大きい。埼玉古墳群の南方には、利田と呼ばれる付近から大きな谷が南から北へ屈曲しながら入り込んでいることがわかる。その谷頭部がどの付近に到達しているのかこれまで明確でなかったが、鉄砲山古墳前方部と奥の山古墳後円部の間には外堀にかかるように小さな谷頭部が確認されたことから、前玉神社の北東側には小さい谷が前玉神社の東側を回り込んでここまで伸びているのかもしれない。

また、將軍山古墳の東側には目立たないが南北に小さな細い谷筋が入り込んでいる。トレンチ調査のため詳細は不明であるが旧忍川に向かって開析する谷筋の可能性がある。

二子山古墳の東側には、伝承では「シャングリ」山古墳と呼ばれる円墳が所在したとされるが、範囲確認調査の結果では古墳跡は検出されなかった。従って、この地点は現在では平坦面に見えるが、当時は墓域を区画する何らかの境界が存在していた可能性もある。

戸場口山古墳の東側は現在宅地化が進行していて旧地形が良くわからないが、先に述べた南東側もしくは南側から大きな谷が入り込んでいたようであり、この古墳の東側は東に向かって緩傾斜していたものと思われる。

埼玉古墳群の西側で、佐間地区に所在したとされる前方後円墳である大人塚古墳をどのようにとらえるかということは埼玉古墳群の範囲を考える上で大きな問題である。1997年に行田市教育委員会が佐間字野合地点の試掘調査を実施し、削平された大人塚古墳の周堀と想定される遺構を確認した(門脇1997)。それは従来推定されていた武蔵水路の下ではなく、それよりもやや西寄りの地点であった。調査は試掘であり、また古墳は完全に削平されていたため詳細は不明であるが、全長40mほどで東西に主軸を向ける前方後円墳と推定されている。この大人塚古墳は埼玉古墳群と地形的なつながりが認められるであろうか。

この地域周辺では河川の氾濫・浸食と地盤沈降現象が相乗的に作用し、埋没ローム台地の上に自然堤防が形成されているため、遺跡形成時にその場所が自然堤防上であったのか埋没ローム台地上であったのかの判断を困難なものにしている。埼玉古墳群から3 kmほど南に位置する築道下遺跡は古墳時代後期初頭頃から集落が形成される自然堤防上に位置する遺跡であるが、奈良・平安期の遺構が砂質シルト層上に形成されているのに対して、古墳時代の遺構はその下のローム層上の暗褐色シルト質土壌が確認面であった(吉田1997)。従って、この地点では古墳時代後期初頭には、河川の開析により切り離された埋没ローム台地の上に既に自然堤防が形成され、その自然堤防上に集落が占拠していることがわかる。さらにまた、この自然堤防の形成はその後も断続的に進行していたことも同時に判明している。築道下遺跡よりも北側で佐間に



隣接する下忍の自然堤防上に位置する鴻池・武良内・高畑遺跡においても、遺構は厚いシルト質の土壤に覆われていた。そのうち古墳時代前期に遡る鴻池遺跡も遺構の確認面はローム層上面であるが、遺構の深度を考慮すればさらにその上のシルト層から掘り込まれている可能性が大きく、ローム台地上ではなく自然堤防上に形成された遺跡とみなすことができる(栗原1977)。このように、佐間の地点の自然堤防では、縄文中期の遺構がローム面から形成されているのに対して、古墳時代初頭の遺跡はローム上に堆積した土壤上から掘り込まれており、従って現在佐間台地や下忍台地と呼ぶ高まりは沈降した台地上に縄文時代中期以降に旧利根川が形成した自然堤防と理解するべきであり<sup>(25)</sup>、古墳も当然、自然堤防上に築造されていることになる。

先に述べたように奥の山古墳の西側から南側にかけて埼玉台地の稜線がめぐむることを考慮すれば、大人塚古墳は、埼玉台地とは切り離された自然堤防化した微高地上に立地していることになり、埼玉古墳群と近接する位置に立地してはいるものの同古墳群とは区別される古墳とみてよいであろう。

これまで述べたような地形を前提に考えると、埼玉古墳群は、北西側から東南側に低地を望む西側に張り出した半円形の台地で、北側や東側も幾筋かの谷が南北に入り込み、あたかも四方が区画され独立した様相を呈する台地上に立地することを想定することが可能である。自然の谷や低地に囲まれたおよそ南北800m、東西500m程度の範囲が、この古墳群の墓域として認識されていた範囲としてよいであろう。埼玉古墳群の墓域が地形的に独立性が高い点は既に井上尚明が指摘しているとおりでである(井上2009)。

杉崎茂樹氏は、古墳群の周辺地形を詳細に検討し、埼玉台地と佐間台地、万願台地、長野台地はおのおの繋がったひとつの台地であり、埼玉台地の西側には三方がそれらの台地によって囲まれた入江状となった地形を想定しており、後に述べるように古墳群の北西側の状況を検討する上で極めて注目すべき見解といえる(杉崎2004)。ただ、筆者は既述したように、佐間台地は比較的早くから沈降し古墳時代には自然堤防化していたこと、また奥の山古墳の南側や稲荷山古墳の北側には谷筋が入り込んでいる状況から判断して、埼玉台地の西側は完全な入江状ではなく、埼玉台地と佐間の自然堤防や万願台地との間には、入江の湛水の逃げ道となった細い水路が存在したのではないかと推測している。

### (3) 古墳の築造順にみる古墳群の築造原理

埼玉古墳群の各古墳が西側を古墳の正面観とするという規範に強く規制されて順次築造されていったとして、今述べてきたことを実際に古墳に当てはめ、この台地上における古墳群の形成過程をトレースしてみよう。

埼玉古墳群の中で最初に築造された大型墳は稲荷山古墳である。従って、この地点がこの墓域内で最良の場所であったに違いない。稲荷山古墳が立地する地点は北西側に緩く傾斜する台地の北側の縁辺付近に位置し、西側及び北側に低地を望む場所であり、それらの方向からの眺望性に優れている(第3図1)。この古墳群が立地する台地は先に述べたように緩やかな起伏が認められるものの、総体的には南西から北東方向に向けて緩傾斜しており、一番南に位置する奥の山古墳付近の標高がもっとも高い。それにもかかわらず、台地上で標高が低い位置に当たる北寄りの縁辺に最初の古墳が築造されたということは、標高という地形的な条件以上に南よ



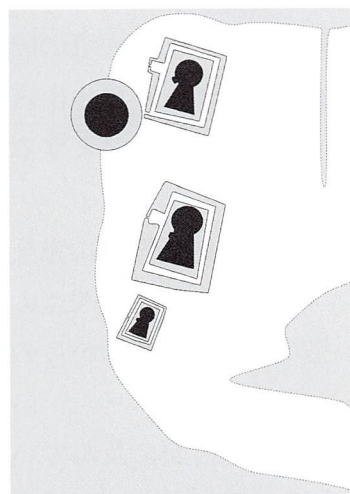
1 稲荷山古墳



2 二子山古墳



3 丸墓山古墳



4 瓦塚古墳



5 奥の山古墳



6 将軍山古墳・愛宕山古墳・鉄砲山古墳



7 中の山古墳



8 浅間塚古墳



9 戸場口山古墳

### 第3図 埼玉古墳群の築造変遷

りも北側のほうが立地優先度の点において勝っていたことを端的に示している。

稲荷山古墳の次に二子山古墳が稲荷山古墳の南側に築造された(第3図2)。稲荷山古墳に後出する二子山古墳が稲荷山古墳の南側に占地していることも、南よりも北側のほうがより優位な地点であったことを示すひとつの証拠となろう。稲荷山古墳の外堀と二子山古墳の外堀は100mほど離れており、外堀を含めて200m級の稲荷山古墳に隣接して、外堀まで含めると250mに

達する古墳を築造してもなお十分に余裕のある距離が保たれている。稲荷山古墳の南側には小円墳が8基ほど密集して築造されており、この地点は小円墳の築造空間だったようである。二子山古墳は小円墳に配慮しながら、その南側に選地したことが窺える。二子山古墳の立地も稲荷山古墳と同様に西側に低地を望む地点であり視認性に優れた場所を占めているといえる。

二子山古墳と相前後して、稲荷山古墳の西側に丸墓山古墳が築造された(第3図3)。二子山古墳に先行して丸墓山古墳が築造された可能性もあり、二子山古墳との先後関係については議論の余地があるが、立地からみた築造優先度という視点で見れば、丸墓山古墳が先に存在した場合、二子山古墳はもっと南側に選地する余地が可能なことを考慮し、立地の視点からは二子山古墳が丸墓山古墳に先行する可能性が大きいと考えておきたい。二子山古墳・丸墓山古墳の次に、二子山古墳の南側に瓦塚古墳が築造され(第3図4)、さらにその南側に奥の山古墳が相次いで築造された(第3図5)。このように古墳の造営する地点は台地の縁辺に沿って時系列に従い北から南へと規則的に移動してゆく。位置的にみると、奥の山古墳と二子山古墳の間に挟まれた瓦塚古墳の東側、つまり奥の山古墳の北側には瓦塚古墳と並列するように奥の山古墳よりも時期的に新しい鉄砲山古墳が所在しており、北から南へと順に選地していったとする北優位の原則と矛盾するかもしれない。

しかしながら、西側からの眺望性という視点で見れば、西の方角からは瓦塚古墳に完全に遮蔽されてしまう鉄砲山古墳の位置よりも西側からの視界が開けている奥の山古墳の地点のほうが立地上優れていたものであり、奥の山古墳が先行してこの位置を占めたことは西側からの眺望が最優先されたことを如実に示している。

奥の山古墳はこの台地の南限に占地しており、前方部の周堀の隅は台地斜面に及んでいる可能性もある。北側から順に西に面して築造してきた古墳も奥の山古墳の築造をもって、西に面してこれ以上古墳を築造できる余地がなくなってしまった。台地上で残る大きな空間地は二子山古墳の北側と南側だけとなり、その2か所にそれぞれ鉄砲山古墳と將軍山古墳が築造された(第3図6)。

奥の山古墳の次に位置づけられる鉄砲山古墳と將軍山古墳の築造時期は近接しており、その先後関係は先に述べたとおり微妙である。ここで述べる北優位の原則が遵守されたとすれば、將軍山古墳のほうが鉄砲山古墳に先行する可能性が大きいと考えておきたい。この点は城倉氏の埴輪分析や岡本氏の円筒埴輪突帯の分析と整合する。問題は鉄砲山古墳と奥の山古墳の周堀が相互に干渉している点であり、このことはこれら3基の古墳の造営が極めて時間的に近接し、一部造営期間が重複する可能性のあることを示している。また、將軍山古墳の築造に際して稲荷山古墳と二子山古墳の間に位置するように占地していることが認められることは、少しでも西からの眺望を得られるように配慮した結果とみることもできる<sup>(26)</sup>。

なお、二子山古墳の西側で丸墓山古墳の南側にあたる地点には多少空間地があるように思えるが、ここには二子山古墳とほぼ同時期に天祥寺裏古墳及び天王塚古墳と呼ばれる径30mほどの円墳が既に築造されているので、新たな古墳を築造する余地は無かった<sup>(27)</sup>。將軍山古墳の築造前後に愛宕山古墳も築造された。愛宕山古墳が二子山古墳の西側で眺望の開けた台地縁辺に占地できたのは、埼玉古墳群の前方後円墳の中では最も規模が小さい古墳であり、それが幸いして二子山古墳の西側で天祥寺裏古墳及び天王塚古墳の南側に築造可能な余地が存在したとい

うことであろう。愛宕山古墳の周堀の調査は部分的にしか行われていないが、西側に隣接する現在の駐車場の状況から判断すると古墳の西側の周堀はその一部が低地部に掛っている可能性もあり、台地縁辺際に立地していることが窺える。

将軍山古墳と鉄砲山古墳の築造によって、西に面した土地は完全に無くなったため、やむを得ず奥の山古墳の西側に中の山古墳が築造された(第3図7)。中の山古墳の造営に際し、将軍山古墳の東側が選定されなかった理由は、その付近に南北に小さな谷が入り込んでいて、墓域境界となっていたことに加え、この地点は稲荷山古墳・丸墓山古墳・将軍山古墳が重なり、西側からの眺望を完全に遮蔽していたためと推測できる。また、二子山古墳の西側が選地されなかったことも、二子山古墳が墳丘長138mとこの古墳群中の最大規模で、その東側地点は西側からの眺望性が決定的に劣っていたからであろう。奥の山古墳は、埼玉古墳群中で愛宕山古墳に次ぐ規模の小さい古墳であり、相対的には西側からの眺望性が良い。中の山古墳の築造によって、この縦列も南の端部に到達してしまったので、その次の古墳はさらにその東側に移り浅間塚古墳(第3図8)、戸場口山古墳と続いて築造されて、この台地における古墳の築造は終焉を迎えた(第3図9)。浅間塚古墳と戸場口山古墳の先後関係は出土遺物がほとんど知られず明確にはできないが、これまでみてきた北優位の原則に従えば、浅間塚古墳が戸場口山古墳に先行することになる。戸場口山古墳の外堀が中の山古墳の堀に交錯するほど近接して造営された理由は、古墳の東側の地形がいまひとつ明確ではないが、古墳群の最後の段階においても西側を正面観とする意識が明確で、極力西側に寄せて古墳を築造しようとする意識が息づいていた可能性も考えられる。このように、埼玉古墳群では古墳の造営を西側からの眺望性という視点から整理すると古墳の配置構成について極めて整合的に理解することができるのである。

なお、稲荷山古墳の西側で二子山古墳との間に築造されている小円墳群は、おおむね稲荷山古墳～二子山古墳・丸墓山古墳の造営時期に平行して築造されたものであることが調査によって判明している。そのうち、もっとも西側に位置する梅塚古墳(埼玉2号墳)や埼玉3号墳がTK47型式期頃の築造と想定され相対的に古く、稲荷山古墳とほぼ同時期であるのに比べ、東寄りの埼玉5号墳や6号墳は、それらよりもやや新しく二子山古墳に近いMT15型式平行期に下るものである。このことから、小円墳の築造もまた西側が時期的に先行し、時間軸とともに東に造墓地を順次移動しつつ築造されていることがわかる。つまり、埼玉古墳群では大型墳のみならず小円墳まで含めて、西側からの眺望性が貫徹されているとみることができる。

従って、埼玉古墳群の主軸方位の企画性や古墳立地の密集性は、政治的な支配力を古墳方位の差異によって視覚的に表現しようとした政治的な築造規制というようなものではなく、その実態は今の述べたような地形上の制約のもとに、西側からの眺望を第一義的に、そして次に南よりも北に優位性を有するという選地意識や立地規範が各古墳の造営を通じて一貫して踏襲された結果であると考え(28)。そうした立地観念に対する造営主体の強いこだわりがこの古墳群の景観的な特徴を際立たせたといつてよい。

さて、問題は古墳群中でも最も西側に位置する丸墓山古墳と愛宕山古墳である。この2基の古墳は埼玉古墳群に通底する東よりも西側、南よりも北側という優先意識からは外れて築造されているのであろうか。愛宕山古墳の選地は、先に述べたように古墳が築造可能な空間地さえ存在すれば、少しでも西側からの展望に優れた地点に築造したいという意識の表れとみるべき

であり、むしろ築造規範の強固さを示すものと解釈するべきであろう。それと同時に愛宕山古墳の規模の小ささも幸いしたとみるべきかもしれない。愛宕山古墳は二子山古墳の西側に位置しつつも、二子山古墳の位置よりもやや南に下がっていることもあり、二子山古墳の眺望にはほとんど影響を及ぼしていない。

しかしながら、丸墓山古墳の場合には、この古墳が築造された稲荷山古墳の西側地点は、推定墳径105m、周堀の外径160mに及ぶ大円墳を築造する空間はまったく存在していなかった。この地点に丸墓山古墳が築造された結果、丸墓山古墳の外堀と稲荷山古墳の西側外堀の間隔は8mほどしかなく、もし外堀の縁に外堤のような何らかの周堤帯が存在したとすれば両古墳はほぼ接するような状況になったに違いない。しかもそれでも丸墓山古墳は台地上にはまったくおさまりきらず、16世紀末に築かれた石田堤の位置から推測すれば、古墳の西側半分は完全に台地斜面から低地にかけて位置している公算が大きい。このように立地的にみると丸墓山古墳は、墓域である台地上からはずれてまで、相当な無理を承知で築造地点をここに選定していることになる。

埼玉古墳群におけるこのような古墳の眺望性に強く固執している意識からみれば、丸墓山古墳は結果的に稲荷山古墳の西方向からの眺望性を大きく遮っている上に、丸墓山古墳の周堀は稲荷山古墳の西側に付設された古墳進入部のひとつである土橋に極めて近接しており、物理的にもそこへの立入を不便なものにしている。

従って、丸墓山古墳の築造主体は稲荷山古墳よりも眺望的に優位な地点に古墳を造営する目的のために劣悪な立地環境を無視しても敢えてこの位置を選択して築造したのではないかと推測することが可能である<sup>(29)</sup>。なお、二子山古墳と丸墓山古墳は、先に述べたとおり先後関係は確定的ではなく逆転する可能性もある。仮にそうした場合でも、ここで想定した稲荷山古墳と丸墓山古墳の関係の解釈は変わることはない。むしろ、丸墓山古墳が二子山古墳に先行する場合には、二子山古墳の占拠した地点が空間地であったはずであり、そこに丸墓山古墳を築造せずに敢えて現在の地点を選択した理由としてここで述べた仮説を一層補強するものといえる。

以上を整理すると、埼玉古墳群は、第1列 稲荷山古墳、二子山古墳、瓦塚古墳、奥の山古墳、第2列 将軍山古墳、鉄砲山古墳、中の山古墳、第3列 浅間塚古墳、戸場口山古墳、というように基本的には西から東へと展開する3列の配置構成として把握することが可能であり、それぞれの列は北から南へと順に台地の端部の形状に沿うように極めて整合性をもって築造されていることが看取される。そして、第1列よりも西に位置する第0列とも言うべき丸墓山古墳と愛宕山古墳のふたつの古墳は、第1列が形成中あるいはそれ以降に僅かな空間地を活用して、立地的には無理をしつつ築造された古墳と位置づけることができる(第4図)。

このように一見計画的に見える古墳配列は、既に述べたように予定配置の結果ではなく、ある共通観念のもとに一定の築造規範に則り、時系列で古墳を順次築造していった結果の産物とみることが正しい理解であろう。換言すれば、埼玉古墳群における大型墳の主軸方位の統一性と古墳の密集性という現象は、古墳に対して西側からの眺望性を絶対視するというひとつの観念に基づくふたつの結果であるとみることができるのである。

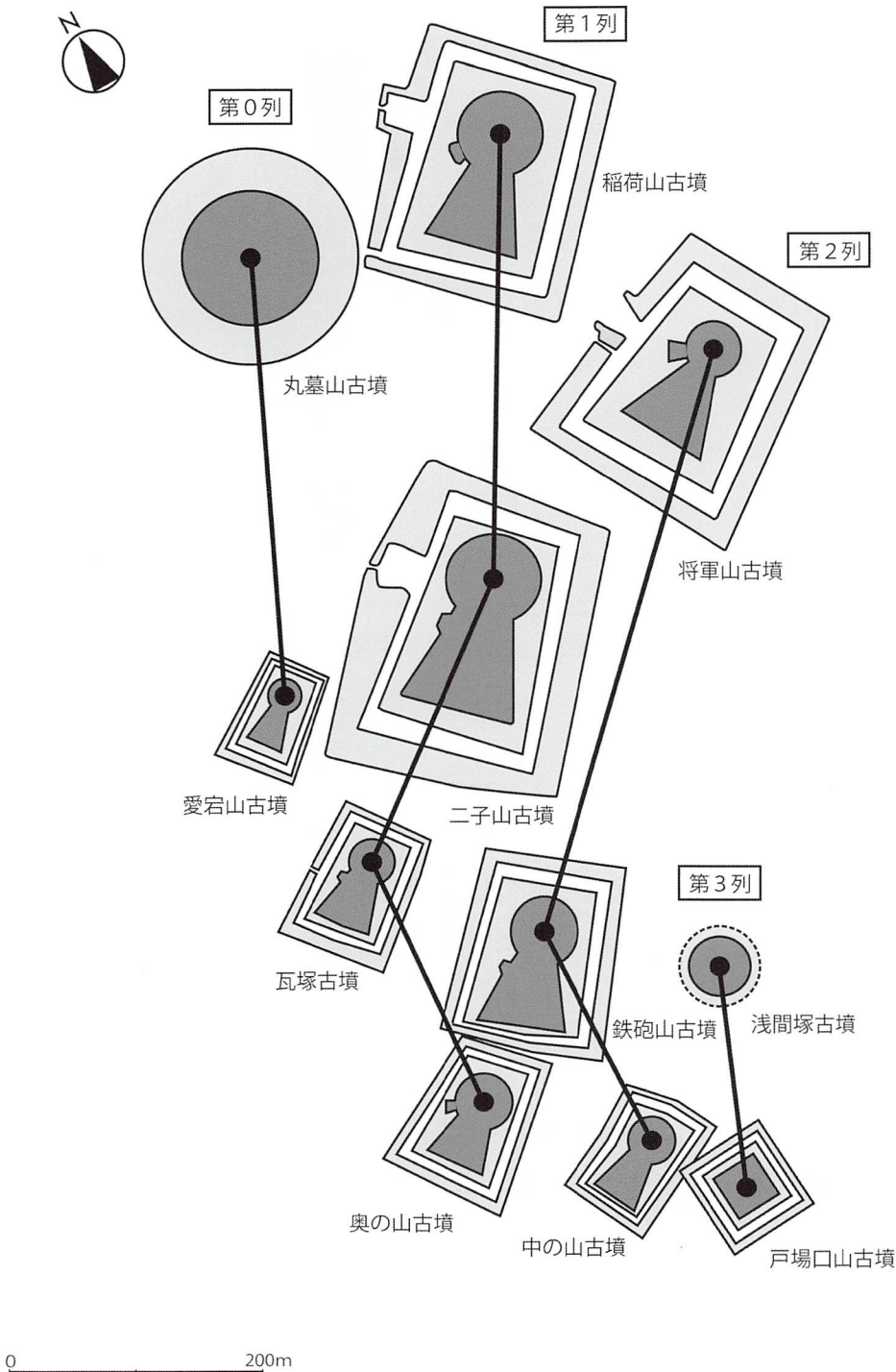
埼玉古墳群については、墳丘規模や樹立された円筒埴輪の規格差によって主系列・副系列というような2ないし3系列の区分が多くの研究者によって提唱されている(増田1991、高橋

2005、城倉2011、若松2011)。

確かにこの古墳群の継起した時間幅と造営された大型古墳の数を勘案すれば、一地域の単一大首長としての一世代一古墳の数を遥かに上回っている。複数系列の意味するところについては、首長とそれに従属した同族、あるいは国造職を継承したものとそうでないものといった解釈も具体的に提示されているように多様な解釈が可能である。しかしながら、これまで見てきたように、少なくとも各々の古墳の立地には系列や規模の差にもとづく配慮は基本的には認められない。この古墳群では墳丘規模にかかわらず、基本的に共通するひとつの原則に従って順次造営されているのであり、その意味では古墳間の格差は量的な差ではあっても、主

系列墳が好地を優先的に選択する、あるいは主系列墳が他と異なる特定の条件で造基地を選定しているといった選地上からみた優先性を示すような質的な差は認め難いのである。愛宕山古墳が二子山古墳の西側に築造することが許容されている例がその良い例である。

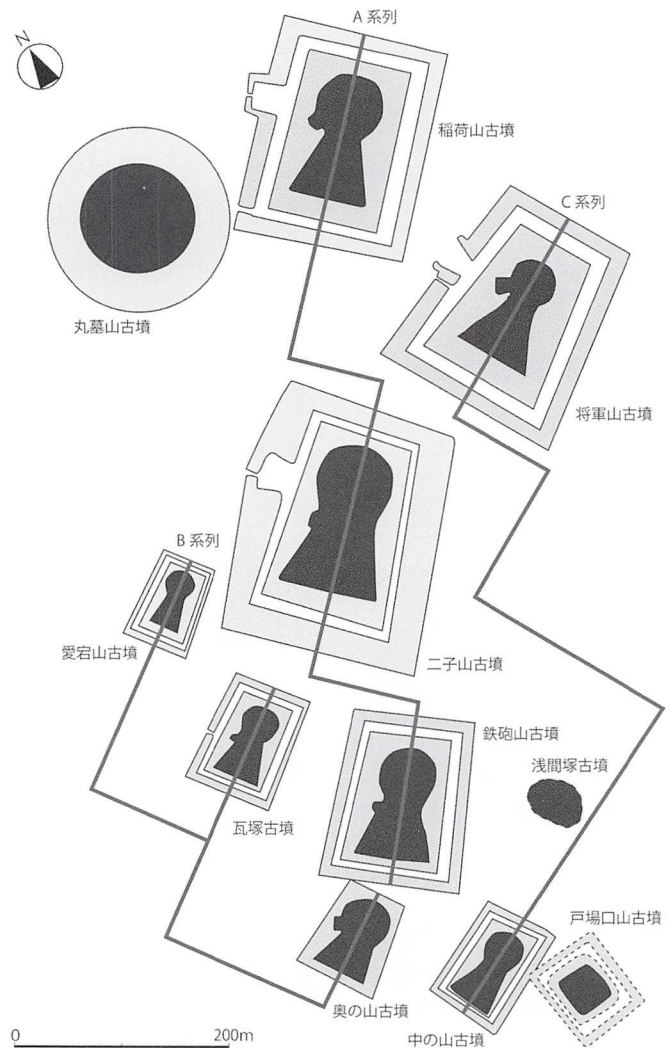
また、一世代一古墳というような発想は直系的な父子相続を前提とするが、古代の宗主権が兄弟を中心に傍系を含む広い範囲での相続を基本としていたことは記紀などの文献を参考にしても明らかであり、実在の信憑性は残るものの記録では5～6世紀代の大王の在位が10年に満たないものも少なくない。5世紀代の大王墓と認められる古市古墳群や百舌鳥古墳群をみても、一世代よりも短い間隔で大古墳が造営されており、埼玉古墳群の場合も古墳築造間隔が短



第4図 築造順による古墳配列

いことを根拠に複数の系列を想定する従来の発想は基本的に正しくないであろう。また、少なくとも主軸方位の差異による系列区分については、各古墳の選地を見る限りその有意性は認め難く、再考が必要であろう<sup>(30)</sup>。

誤解のないように付記すれば、筆者も埼玉古墳群全体が一系列の首長墓であると主張しているわけではない。稲荷山古墳・二子山古墳・鉄砲山古墳が埼玉古墳群の中でもその規模からみて中心的な古墳であることを否定することは難しい。ここでは、見かけ上で中央に位置するようにみえる上記3古墳が選地に際して他に古墳に優先された形跡は認められないと述べているのであり、また古墳の築造時期が近接している状況が必ずしも複数系列を想定しなければならない根拠とはなり得ないと述べているのである。むしろ各古墳の企画や各古墳の構造における他の古墳群に対する排他的な同質性こそ重視すべき視点であると考えている。



第5図 主軸方位による系列区分(高橋2005)

#### 4 古墳の眺望性の史的意味

前章で述べたように、埼玉古墳群は一貫して西側からの眺望性あるいは視認性といった外部からの景観を重視した配置構造を志向している。しかもそれが一世紀以上に渡り貫徹されていることからみれば、このような志向は本質的な意味の喪失した形骸的・伝統的な規範などではなく、実質的な意味や現実的な意義がそこに存在していたであろうことを推測させる。それでは、その要因となった造営主体の立地観念を生み出したところの古墳の眺望性あるいは視認性の意味するところは何であろうか。ここでは、その意味について検討を加えることにしたい。

##### (1) 古墳とその立地志向

古墳の立地志向については、前期古墳では「丘陵の先端や尾根上あるいは傾斜面または独立丘陵上に立地する傾向が高い」(大塚1966)というように時期による特徴が早くから指摘されている。近年では、より具体的に古墳の立地が耕地やその他の施設との関係性において注意されるようになっている。

若狭徹氏は、群馬県域の大古墳の消長から、大前方後円墳の築造地は開発指向領域と一致し耕地開発と古墳の築造場所は相互に関連するとみなした(若狭2002)。また、北條芳隆氏は若狭氏の見解を支持しつつもその一方で、大規模耕地開発と直接連動して築かれる前方後円墳とは

別に、古墳時代前期後半(4世紀後半代)には、交通網の整備に伴い交通網や物流の結節点となる「津」や「市」などを見下ろす地点に、景観の構築を主眼に置いて前方後円墳が築造されるようになると考えた(北條2010)。

このように古墳立地には古墳やその地形のみならず周辺施設との関係性において、ある志向性が認められるようであるが、埼玉古墳群の場合にはどのような立地志向を示しているといえるであろうか。

## (2) 古墳とその経済的基盤

古墳の北西側には現在行田市の市街地が広がっているが、そのさらに北西には妻沼低地と呼ばれる利根川中流域の広大な氾濫原が展開している。妻沼低地では5世紀の後半頃から自然堤防上に集落が増える傾向が窺えることから、吉川國男氏や中村倉司氏等によって、これらの集落をもって埼玉古墳群の経済的基盤として想定されている。吉川氏は、稲荷山古墳の被葬者を「利根川・荒川水系の河川工事に着手し、流域の耕地拡大を成功におさめ、それを足場に下流域・周辺地域を開発」した豪族と推察した(吉川1998)。一方、中村氏も妻沼低地の城北遺跡や上敷免遺跡などの大集落は、埼玉古墳群とほぼ同時期にしかも突然出現したもので「ヤマト王権との関わりの中で北武蔵の空闲地が選定され、利根川や荒川の対岸を意識した政策に基づく事象である」と述べ、集落の出現に埼玉古墳群を結びつけるとともに、そこに畿内中枢勢力が介在したことを想定している(中村1999)。

妻沼低地における集落動向をみると、5世紀後半以降に新たな大規模集落の出現が顕著に認められると同時に土師器の器種組成の変化や竈の出現など新出の生活様式の導入を伴う現象が確認され、確かに古墳時代前期からの自律的な発展とは認めがたい部分が多い。また、その時期は埼玉古墳群の成立期と符合しており、児玉地域などの近隣地域にもこの時期の有力な古墳群は見当たらない。その中で現利根川対岸の群馬県太田市に所在する東矢島古墳群が近年再評価され、割地山古墳(110m)、観音山古墳(100m)御嶽神社古墳(120m)九合村60号墳(111m)をはじめ沢村野104号墳、105号墳、九合村57号墳などの70m～80m級の前方後円墳が群在しており、埼玉古墳群と遜色ない規模の大古墳群であることが判明している(加部2009)。

この古墳群は現利根川を挟んで妻沼低地と至近距離に位置し、直線距離からみれば埼玉古墳群よりも遥かに妻沼低地と近い位置関係にある。この古墳群の形成時期は埼玉古墳群よりも遅れて6世紀以降と想定されており、妻沼低地の集落の形成期とは直接結びつかないが、集落の形成に遅れて古墳群が形成される状況も想定できないわけではない。このように妻沼低地の新興集落群が無条件で埼玉古墳群と結び付けられるわけではない。

また、妻沼低地に展開するそれら新興大集落群は低地の北部に集中しており、むしろ本庄台地中央部地域とのつながりが強く、埼玉古墳群に近い妻沼低地中央部から南部にかけての地域では相対的には古墳時代前期の集落が発達しており、後期の集落が前期と比べて相対的に卓越するとはいい難い状況にある。仮に妻沼低地北部の大集落群が埼玉古墳群の形成と有機的な関係を有していたとしても、妻沼低地北部は埼玉古墳群とは直線距離でも15km～20km以上離れており、立体構造物の少ない当時においても少なくとも集落や可耕地からの直接的な視認性という点で見ればまったくといってよいほど無い。埼玉古墳群からは妻沼低地に主体的に分布する



有段口縁坏や高坏等が供献されている事例がみられることから、こうした新興集落群が埼玉古墳群と何らかの関係性を有するとしても、少なくとも両者を眺望性の観点から耕地・集落と墳墓という関係において結び付けることは難しい。

何より、耕地・集落と古墳を有機的な関係においてとらえる発想には基本的な点で注意が必要であると考えられる。古墳時代の日本列島全体をみわたすと、沓岐の島や瀬戸内海の小島に代表されるように耕地としてまったく適さない小さな離島にも古墳群が形成されている事例が少なからず存在している。こうした事例は、そもそも古墳被葬者や築造者の経済的な基盤を先験的に農業生産力とみなす危険性を教えてくれる。新たな開発が進んだ古墳時代中期後半以降の豪族の経済的基盤は、農業生産や漁撈などの第一次産業に限らず、窯業生産に代表される各種手工業生産などの製造業や牛馬の生産・生育を含む牧の管理・運営などの専門的な集団が関わる新来の各種産業が導入され定着し、さらにそれら生産物の流通を担う舟運、港湾管理等の物流産業などが生起したと考えられる。古墳時代中期末以降は、それ以前と比べても経済構造がより一層多様化し、相対的に複雑で高度な産業構造を呈するに至っていたはずである。田中広明氏は、埼玉古墳群の経済的基盤として、秩父・長瀬に産し、横穴式石室の石材に多用されている緑泥石片岩の石材差発権を想定している(田中1989)。

大型墳に埋葬された大首長の農業生産基盤を無論否定することはできないが、大型墳被葬者のその全てについて耕地や集落との関係で面的な支配領域を個々に想定してゆくことはこの地域における大型墳の集中度からみても適当とはいえないであろう。

後の武蔵国の領域においては、古墳時代後期の前方後円墳に限った場合、墳丘長60m以上の大型墳は各郡1～3基程度であるのに対して、埼玉郡のみ16基も所在し、武蔵国内の過半数の古墳が集中している傾向が指摘されている(白石1992)。しかもこれらの古墳は埼玉郡内に均一に分布しているのではなく、特に行田市周辺に集中しており、彼我の距離関係でみるとそれら



第6図 埼玉古墳群と周辺の古墳

の大半はおおよそ直径5kmの範囲に収まる過密さを示している(第6図)。田中広明氏が想定するように小針型環の分布範囲が埼玉古墳群の直接的な支配領域であったとすると、直径5km以内に所在する、埼玉古墳群に匹敵する規模の他の古墳の支配領域はどこに求めたらよいのであろうか。

こうした密集事象は、これらの古墳被葬者の経済的な基盤を単に周辺地域の農業生産力に求めるだけでは到底説明が困難であって、密集する古墳の被葬者あるいは集団がそれぞれ多種多様な経済的基盤・経済活動に錯綜して関わっていたと想定して初めて理解できる現象であろう。埼玉古墳群に供給していたことが確実な鴻巣市生出塚埴輪窯や須恵器生産を担った寄居町末野窯、あるいは石材の産地である長瀨町周辺には、直接に生産や採掘に関与した集団の長を埋葬したと考えられる古墳群が存在する。例えば、生出塚遺跡では埴輪窯周辺に窯操業時と同時期の群集墳が形成されており、これらが埴輪生産工人に関わる墳墓であることは確実であるが、ここでは全長42.5mの前方部に短いいわゆる帆立貝型の前方後円墳である新屋敷60号墳の築造を端緒として群集墳の形成が始まり、その後も20mに満たない円墳が密集して継続的に造営されている。しかしながらその一方で、こうした職能集団を統括していたと想定される大型あるいは中規模の前方後円墳は、この古墳群の内部にも周囲にもまったく存在していない。

6世紀初頭頃には操業を開始し、6世紀後半以降埼玉古墳群にも製品を供給している寄居町末野窯の経営主体は旧花園町の小前田古墳群と想定されているが(高橋1991)、ここでもやはり30m程度のいわゆる帆立貝型の前方後円墳である小前田2号墳を含む20m前後の円墳が密集して継続的に造営されているのみで、大型あるいは中規模の前方後円墳は、付近の荒川両岸には存在していないのである。

石材の採掘場所となった長瀨町周辺も同様であって、付近には極めて小規模な群集墳しか存在していない。こうした職能集団が南関東地方に及ぶ広域の製品流通を独自に直接担っていたというモデルを想定することは難しく、生産や流通機構を統括すべき首長が別に存在していたであろうことは想像に難くない<sup>(31)</sup>。それを大型前方後円墳が集中しているこの地域の古墳に求めることは無謀であろうか。

さらに、集中する大型墳の中には白石太一郎氏が想定するような名代・子代の地方管掌者も含まれていたことも推測される(白石1991)。そうした地方管掌者としての立場も任命された地域豪族にとってはひとつの政治的・経済的基盤であったに違いない。彼らはこぞって埼玉古墳群を含む行田市周辺にその墳墓を造営していたと考え、この地における大型墳の過密さが合理的に説明できるのではないであろうか<sup>(32)</sup>。

### (3) 交通路からの眺望性と古墳群

それでは、なぜかくも行田周辺に密集して墳墓を造営する必然性があったのであろうか。そのことを考える際に、先に述べたとおり北條芳隆氏が古墳時代前期後半になって交通網が整備されたことに伴って前方後円墳の築造が「市」や「津」などのからの景観の構築を主眼としたものへと変化したと述べていることは重要な指摘である。こうした動きはいわばモニュメントとしての古墳の眺望対象が、共同体内部の成員からより広範な人々、すなわち共同体外の人々へと拡大もしくは変化したことを示唆するものであろう。さらに岸本直文氏は、五色塚古墳や相模

の長柄桜山1号墳など交通の要衝に築かれた古墳の存在から、この時期に佐紀古墳群に本拠を移した倭王権による海上や河川沿いなどの主要ルートを押さえる政策の推進が読み取れると述べて、眺望対象の転換の背景に畿内中枢権力の関与が存在したことを想定している(岸本2010)。また、広瀬和雄氏も京都府丹後地域の網野銚子塚古墳、神明山古墳、福岡県苅田町の石塚山古墳、同御所山古墳、行橋市の石並古墳、あるいは関東地方では神奈川県逗子市から葉山市にかけての長柄・桜山古墳群や千葉県富津市の内裏塚古墳群などを例示し、いずれも周辺に生産域が望めない立地をしており、政治権力の伸長と生産基盤が必ずしも一致しないことを指摘する一方で、長柄・桜山古墳群や内裏塚古墳群の築造地点は、畿内方面から相模を通り上総など房総方面へ向かう海路の道筋を望む場所にあたることや、兵庫県神戸市五色塚古墳の立地する場所は瀬戸内海から大阪湾に至る海上交通の要と考えられているなど、それらの古墳の多くが当時の交通網の要衝に位置していることを明らかにし、前方後円墳は総体として「共通性や階層性を見せる墳墓であり、そこを往来した大勢の人びとに勢威を見せつけるための政治的記念物だった」と結論づけている(広瀬2003・2010)。

このように古墳時代前期のある段階から認められるモニュメントとしての古墳の顕現化とそれに伴う選地意識の変化は多くの論者の指摘するところとなっている。

ところで、広瀬氏の取り上げた内裏塚古墳群は5世紀中頃から7世紀にかけての継続的に築造された大古墳群である。さらに、大阪府堺市の百舌鳥古墳群や古市古墳群は日本最大級の大古墳群であるが、古市古墳群は「ヤマト王権の政治的中枢が存在する奈良盆地東南部の“やまと”と大阪湾を結ぶ水陸交通の要衝に位置し」、また百舌鳥古墳群も「すぐ西側に後の堺の大津や石津といった重要な港津を望む台地上に位置している」と指摘されているように(白石2009)、こうした志向をもつ古墳群が古墳時代前期後半に限られるものではないことは明らかである<sup>(33)</sup>。また、内陸部においても、例えば吉備地方には5世紀に畿内の大古墳と肩を並べる大古墳である造山古墳が所在するが、この古墳の古代幹線道である吉備路の脇に築造されていることは良く知られているところである。さらに継体天皇陵に擬せられている大阪府高槻市の今城塚古墳もわずか南方100mほどの至近距離に古代の山陽道が東西に走っている。このような事例は枚挙に暇がなく、交通網の実態が不明な地域においては古墳の立地と交通路の具体的な関係性が把握できない古墳も多く存在していると思われるので、古墳時代を通じて交通路からの眺望性を意識して造営された古墳は数多く存在するとしてよいであろう。

埼玉古墳群もまた西側に低地を控えた台地縁辺に立地し、西側からの眺望性あるいは視認性を極めて重視して造営された古墳群であるとすれば、その眺望は支配領域の耕地や集落というよりも、交通路もしくは交通に関わる施設からの視認性であるとは考えられないであろうか。そして、古墳群の西側に何らかの交通機能や関連施設を想定する場合、当時の関東平野の状況からみて河川を利用した内水面交通をまずは想定しなければならないであろう。

#### (4) 関東平野の河川流路

埼玉古墳群が、利根川と荒川に挟まれた交通の要衝に位置しているという指摘は比較的早くからなされているところであるが<sup>(34)</sup>、それらは現在の河川流路を念頭に置いたもので、関東地方平野部の河川が時間の経過とともにその流域を大きく変えていることにあまり考慮されてい

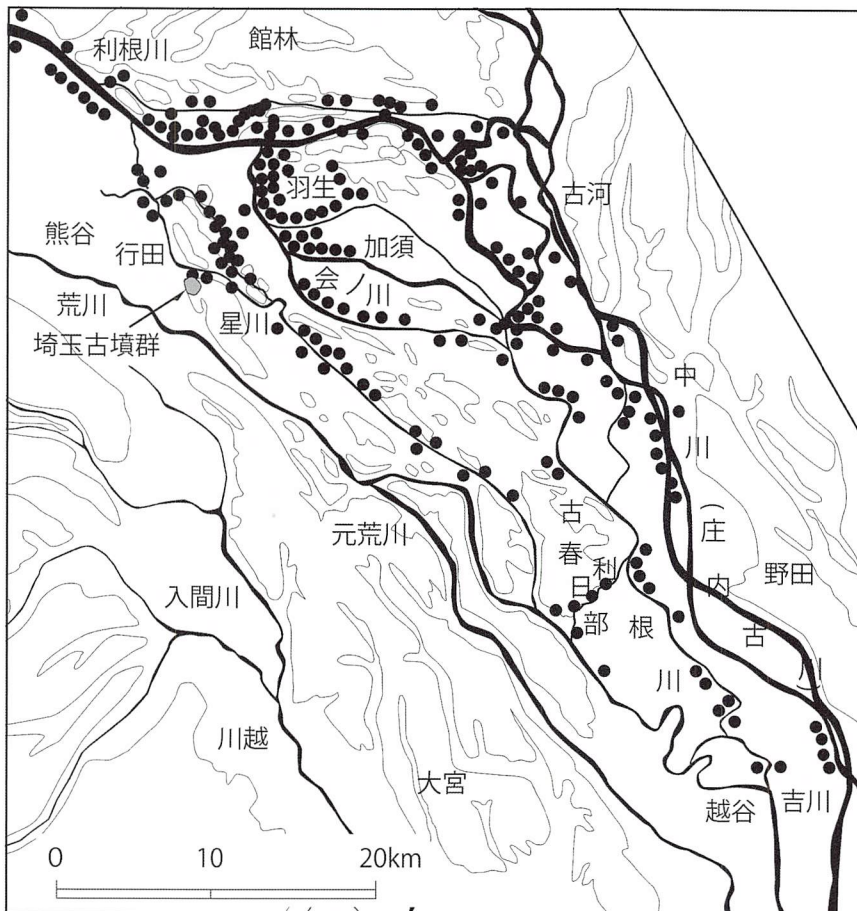
ない。特に平野部において河川と古墳との関係を考える場合、古墳造営当時の河川流路を復元しておかなければならない。

近年では、具体的に秩父長瀬に産出する緑泥石片岩の分布や埼玉將軍山古墳の石材に使用されているいわゆる房州石の流通から埼玉古墳群が内水面交通を深く関わっていたことが想定されるようになり(高橋・本間1994)、さらに古墳群近傍の築道下遺跡が古代の港湾施設と想定されるなど(井上2011)、埼玉古墳群と河川との関わりについてより具体的な検討も進められつつある。

本稿で問題としている古墳の眺望性を議論する場合、岡本健一氏の述べるような観念的な方位論ではなく(岡本1997)、古墳そのものの具体的な可視性こそが鍵となる。はたして、埼玉古墳群について目視可能な範囲に内水面交通を想定することが可能であろうか。次に古墳群周辺の当時の河川流路について検討してみよう。

利根川と荒川の流路変遷については、地質学・地理学の分野で相当量の研究蓄積がある。現在の利根川は、群馬県と新潟県境の大水上山を水源として群馬県域の水系を東ねて南流してゆくが、烏川との合流後には向きを変えて群馬と埼玉の県境を東流し、再び南に向きを変えつつ茨城と千葉の県境を流下し、銚子で河口に至る大河となっている。現在の流路でみると埼玉古墳群の直近位置は、行田市斎条付近で古墳群の北方6 kmほどの地点にあたる。しかしながら、関東地方の平野部を流域とする利根川や荒川は、堆積作用と地盤沈降作用とによって時間軸に沿ってその流路が大きく変遷しており古代の流路は現在のそれと同じではない。菊地隆男氏は、荒川低地の埋没谷の状況から、かつての利根川は中川低地ではなく、現在の荒川筋を流下していたと推察した(菊地1979)。荒川西岸にあたる比企郡川島町付近には古い時代に形成された自然堤防が良好に残存しており、河川跡のボーリング調査によって堆積している砂礫について利根川水系の砂礫であることが確認され、菊地氏の想定が立証された。清水康守氏等は、川島町内の自然堤防上の形成された集落変遷から、この場所に利根川が流下していた時期は縄文時代後期に遡ることを明らかにするとともに(清水2010)、自然堤防などの地形を手掛かりに県内を流下した当時の利根川の流路を具体的に復元した(清水2011)。それによれば、往時の利根川は、県北の本庄市から深谷市を通って行田市に至るまでの間は、現在の利根川の南側を大きく蛇行しながら東流し、行田市斎条付近から南に向きを変えて現在の星川筋を流れ、途中で東流してきた荒川と合流し、新荒川扇状地の扇端部に沿うように行田市市内の下忍から樋上に沿って現在の忍川筋や古忍川筋を蛇行しながら南下し、旧吹上町と旧鴻巣市西部地域を通って吉見町～川島町へと至る流路であったと推定している。その流路は埼玉古墳群が形成された埼玉台地にもっとも近い下忍や樋上地区では、僅か0.5kmほど西側という至近距離にあたる。

また、利根川とともに当時の荒川も自然堤防の状況から新荒川扇状地内を東流していたと推定されている。清水氏は、新荒川扇状地内に形成された自然堤防跡から4本の荒川旧流路を想定しており、南から北へと順に流路が遷っていったと推測している(清水2011)。5～6世紀の段階で荒川がどの流路を流れていたかは定かではないが、これらの流路は清水氏の示す一番南側の第Ⅰ流路が埼玉台地のほぼ真西の下忍自然堤防付近で旧利根川に合流し、それ以外の第Ⅱ～Ⅳ流路跡は埼玉台地の北側で南流する旧利根川と合流している。つまり、いずれの流路を取ったとしても当時の荒川は現在よりも遥かに北側を東流し、群馬県境から南流する利根川に流れ



第7図 県内の角閃石安山岩の流域分布  
(秋池2000第2図を加筆修正)

込む一支流となっていたことになる。従って、地理関係からみれば埼玉古墳群の立地する台地は利根川と荒川が合流した直後の下流側に位置していたのであり、この時点では「利根川と荒川に挟まれた」わけでも「利根川と荒川の間」に位置していたわけでもない。利根川と荒川が水系として分離するのは、星川や忍川に利根川の水が流入しなくなって以降のことである。

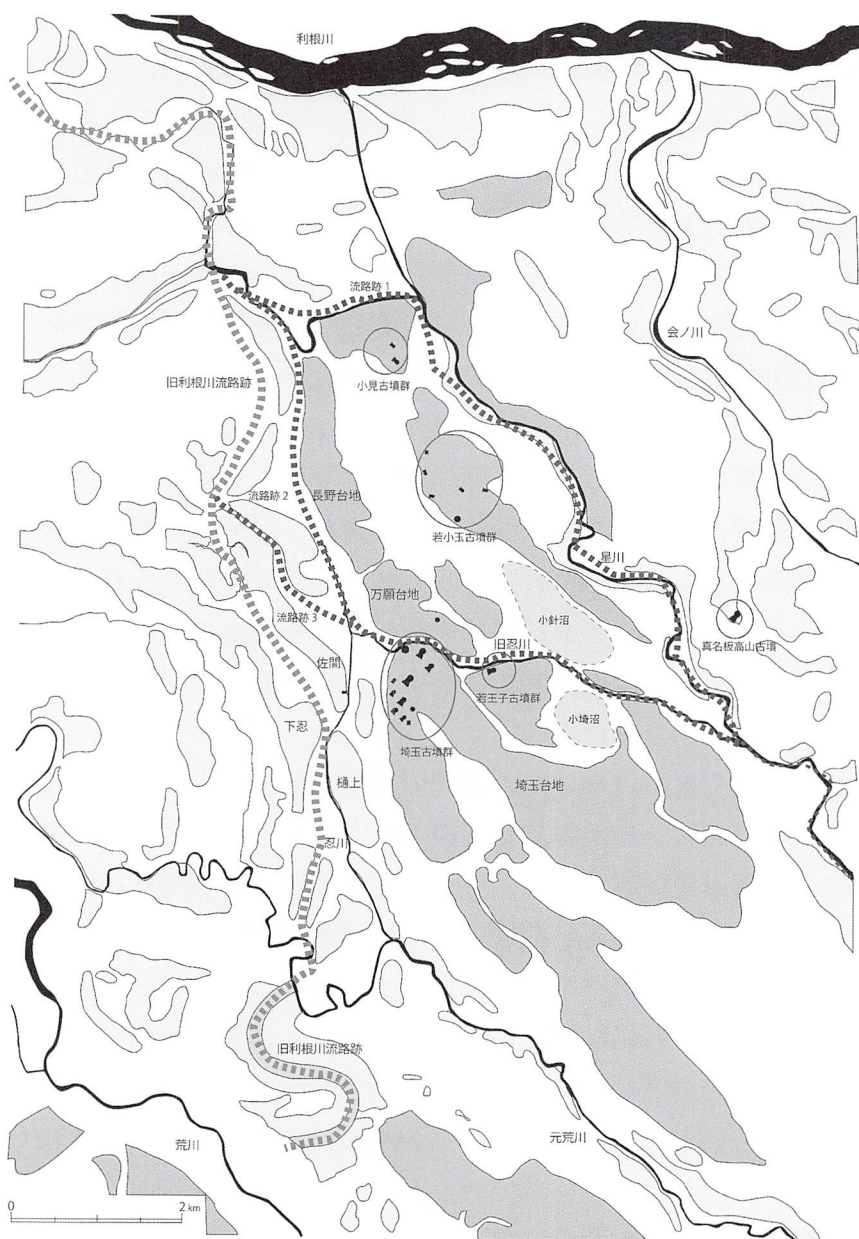
やがて利根川は、主に西から荒川が運び込む土砂の堆積作用と関東造盆地運動による加須～羽生付近を摺鉢の底にした広域の沈降作用による地盤沈下によって、次第に東寄りに流れを

変えてゆき、ついに館林から延びる台地を立ち切って大宮台地として分離独立させ、星川筋をそのまま流れて大宮台地の東側へ流れ出した。その結果、利根川と荒川は別の水系となるとともに、近世初頭の鬼怒川流域への瀬替えが行われるまで、利根川は渡良瀬水系と思川水系をも併せ、鬼怒川水系を除く北関東全域の水系を集めて東京湾に注がれる大河となっていた。利根川の星川筋への流路変遷、つまり埼玉台地の東側に回り込む遷移がいつ頃に生じたかについては、秋池武氏による角閃石安山岩質軽石に分析が極めて有効である。すなわち、榛名山二ツ岳は、6世紀の中頃に大噴火し、その際に噴出した大量の角閃石安山岩質の軽石が当時の河川流路に流れ込んで下流に運ばれた。その分布を調べた秋池氏は、熊谷以西では現在の利根川流域である館林と羽生の間から現在の中川流域あるいは羽生市上新郷付近で分岐した会ノ川流域に点々と分布していることを確認し、その分布域こそ当時の利根川の流路であったとした。それによれば、当時の利根川は、南河原付近で南下して星川に入る流路、会ノ川の流路、中川の流路の3川を中心に、さらにそれらの流路が分岐を繰り返しながら、最終的には古利根川や庄内古川に収斂し、加須低地を南流して東京湾に注がれていたことになる。また、星川が角閃石安山岩の分布する最も西側の流路に当たり、それより西側の荒川・入間川・元荒川流域には基本的に角閃石安山岩の転石は認められないことが指摘された(秋池2000)。このように秋池氏の調査によって、6世紀の後半代には利根川は大宮台地の東側を流れていたことが明らかにされたと同時に、平野部においては分流や合流を繰り返す錯綜する複数の流路をたどることもまた明

らかとなったのである。ここで転石の分布を示した秋池氏の図に注目してみると、星川の流路は行田市北東部で複数の流路に分岐し、埼玉古墳群のすぐ北側を流れる旧忍川沿いにも数か所で転石の分布が認められることがわかる(第7図)。旧忍川は江戸時代の開削による人工の運河とされているが、江戸時代の開削以降に利根川が旧忍川に流入したことはないので、この角閃石安山岩はそれ以前に旧忍川が利根川の一支流であったことを示しており、齋条付近から分岐して南下した利根川の一部が行田市北部で星川と合流後さらに分岐し、その一方が南下して行田市街地付近で忍川の流れと合流し、長野台地の西側に沿って南流し、現在の旧忍川筋である埼玉古墳群のすぐ北側を抜けて、旧川里村付近で再び星川に合流する流路が存在していたことがわかる<sup>(35)</sup>。あるいは、自然堤防の状況からみて行田市街地で利根川から分流して左間台地の東側を抜ける流路も存在したかもしれない。ただし、旧忍川筋は後に人工的に掘削されたことからみても、当時から主たる流路ではなかったと推測できる。また、行田市桜町付近から分岐して長野台地の東側を抜けて小針沼を通り星川に合流する流路も存在したかもしれない。このようにいくつかの流路を推定することが可能であるがいずれにしても秋池氏の調査によって、少なくとも6世紀の中頃以前に利根川の分流のひとつが埼玉台地の東側の星川筋や旧忍川筋に流路を変えていたということが明らかにされた。

その流路変遷時期がどこまで遡るかは明確ではないが、佐間の自然堤防上に古墳時代初頭頃から集落が形成され始めることは重要である。自然堤防が形成されつつある時期に集落を営むことは考え難いとすれば、縄文時代後期以降に形成され始めた自然堤防が、古墳時代初頭に一旦形成が止まっていることが推測され、流路の変遷時期は古墳時代初頭頃まで遡る可能性がある。現段階では、古墳時代初頭～中期にかけて流路の遷移があったと推測しておきたい。ただし、角閃石安山岩の分布でもわかるとおり、6世紀代においても平野部では利根川は幾筋もの流路に分れ、合流と分岐を繰り返しながら錯綜して流下していた様子を示している。利根川の遷移もある時点で大きく流れを変えたというよりも自然の営為の中で幾筋もの流れが隆盛したり途絶したりと盛衰を繰り返しながら、次第に東へ移っていったとみるべきであろう。5世紀代に埼玉台地の北で分岐した流路が台地の両側を流れていたということも無碍に否定することはできない。

いずれにしても、当時の利根川は現在よりも遥かに埼玉古墳群に近く、古墳群から数百メートルの至近距離を流れていたことは確実と思われるが、仮にその流路が佐間や下忍の自然堤防の西側や埼玉台地東側の星川筋でも万願台地の東側であったとすると、至近距離とはいえ、その位置では古墳群の眺望性には難があるという見解が提示されるかもしれない。しかしながら、「津」などの港湾施設は、主要河川に直接面するのではなく、そこにつながる細い水路沿いに形成されることが多いといわれている<sup>(36)</sup>。埼玉古墳群の西側だけをみても、佐間と下忍の自然堤防、埼玉台地と樋上の自然堤防の間は狭隘な低地帯となっており、杉崎茂樹氏の想定するとおり、何らかの水路となっていたことは容易に推測できる(杉崎2004)。埼玉古墳群のすぐ西側が台地に囲まれた入江状となっており、長野台地と佐間の自然堤防の間の低地帯にも水路が所在していたと推測すれば、その位置は埼玉古墳群の眼下であり、古墳を仰ぎみることが十分に可能な位置であるといえる。



第 8 図 埼玉古墳群周辺の主要古墳群と当時の推定河川流路

### (5) 内水面交通と埼玉古墳群

東国では交通の要衝地に大型墳が集中する傾向にあることは既に早くから指摘されているところである。白石太一郎氏は、霞ヶ浦北部の沿岸部に 6 世紀の大型墳が集中する現象について、この地域が「常陸各地やそれ以北の陸奥と畿内を結ぶ交通の要衝」に位置していることを指摘し、またやはり後期の前方後円墳が集中する下伊那地方の飯田市周辺についても、そこが神坂峠の麓で東山道の最も重要な中継地であると述べている(白石1991)。同じく後期の大型墳が継続的に造営された内裏塚古墳群が所在する木更津周辺の河口付近も、古東海道を東進し、三浦半島を廻って東京湾を横断した最初にたどりつく地点にあたり関東地方から東北地方への繋がる入口にあ

たる海上交通の要衝に位置する。

これまで述べてきたとおり、当時の利根川や荒川は現在よりも遥かに埼玉古墳群の近傍を流れていたと推定され、埼玉古墳群は利根川のもっとも西側を流れる支流が荒川と合流したそのすぐ南側に位置することになる。ここは、旧利根川を介して東京湾東岸地域を直接連絡しているとともに、利根川本流や荒川水系を利用して、上毛野西部地域や秩父地域などに連絡することが可能である。また、分流や合流する河川を利用することで、渡良瀬水系や思川水系など利根川に合流する主要な支流を伝って、上毛野東部地域や下野南西部地域などに連絡することも可能である。このような地政学上の特長を考慮すれば、この古墳群もまた列島各地で見受けられる物流の要衝を見下ろす地点に立地する古墳や古墳群と共通し、内水面交通の要衝をおさえる地政学上の重要地点にその眺望性を重視して造営された古墳群とみなすことができるであろう。

東国における大型墳の偏在性について、畿内と地方を結ぶ交通の要衝地が畿内政権やそれを構成する畿内豪族にとって、きわめて重要な地域として重視されたためとする評価があるが(白石1991)、これを在地の立場からみれば、関東平野中央部の平坦な地形にあって、水系が山岳や丘陵等で明確に区分されず分岐や合流を繰り返すような錯綜する地域においては、毛野地域や上総地域と異なり自然地形による領域区分が明確にし難いという地形環境を背景として、多種多様な経済的基盤を有する有力者が各地に分散せずに物流の要衝に地域拠点を形成し、そこに古墳の眺望性を求めて競って古墳を造営したものと推測することができるであろう。

古墳時代後期の東国の豪族層が倭国の重要な軍事的・経済的基盤となっていたことは古墳時代後期に東国に大型の前方後円墳が多数造営される状況や副葬品の在り方等からたびたび指摘されているところであり、実際の軍事動員という意味でも「津」のような内水面交通の要衝に地域の拠点が形成されることは合理的なことに違いない。

埼玉古墳群内で6世紀後半に築造された埼玉将軍山古墳では、十文字心葉形鏡板轡を伴うセットのような馬具に加えて、三葉文環頭大刀、蛇行状鉄器や馬冑など半島系遺物の副葬が顕著である。これらには奢侈品にとどまらず身分表象と不可分の品を含んでいることから高位者の往来を想定している意見や(太田1994、内山1992、2011)、あるいは具体的に国造軍の指揮者として半島出兵を想定する考えも示されている(塚田1992、若松1993)。その実態はなお不明といわざるをえないものの、そのような活発な交流活動を通じて物や人が往来する際に、埼玉古墳群の威容は視覚的な効果を十分に発揮したに違いない。

## むすび

埼玉古墳群を含めたこの地域における大型古墳の集中を内水面交通と結び付けて理解しようとする、ただちに万葉集に謡われた「さきたまの津」との関連が連想されると思う。文献史学を中心に埼玉古墳群と「さきたまの津」を関連づける議論は古くから数多いが、それらは学術的な根拠に裏打ちされたものというよりは、「埼玉の津は、武蔵国造一族によって古利根川の川筋か、埼玉沼の岸辺に整備された河港と考える」(藤倉2010)というような漠然とした憶測にもとづくものであった。

その所在地についても、埼玉古墳群の東方に位置する小埼沼周辺とする見解が確固たる根拠がないままに通説化していた。万葉集に採録されたさきたまの津の東歌が実際に詠まれた時期については定かではないが、高橋連虫麻呂が東国周遊の際に収録したとする説(藤倉2010)が有力であるとすればやはり8世紀代を大きく遡ることは考えづらい。「埼玉の津」の所在地を小埼沼とみる説が後世に有力視されるに至った経緯は、学術的な検討以前に同じ万葉集に採録された「小埼沼」の歌と関連させる発想が多分に影響を与えているように感じられる。

最近では、小埼沼は中世に沼沢化した場所であり、「さきたまの津」はそれよりやや北寄りの小針遺跡周辺と推測する見解も提示されている(中島2010)。いずれにしてもそこは古墳群の東方に位置しており、本論で述べた埼玉古墳群の志向した方向性とは正反対の方角に当たることから、本稿の趣旨とは相容れないという意見が出るかもしれない。

しかしながら、「さきたまの津」の所在地にかかる物証は今日においてもまったく確認されていないのであり、古代の「さきたまの津」が埼玉郡の郡津として存在し、なおかつ現在推定され



ている地点で仮に正しいとしても、既述したように河川の流路変遷が著しいこの付近ではそれをそのまま5世紀にまで遡及させる保証は何もない。むしろ河川流路が時間の経過とともに変遷していることを想起すれば、それに伴って港湾施設も移動しているとみるほうが自然であり、津のような施設が長期にわたり特定の場所に固定していたとは思えない。通説に対する考古学の立場からの批判は既に繰り返しなされているところである(井上2007・2010・2011)。

埼玉古墳群については、古墳群と歌謡のそれぞれの成立期に時間的に大きな懸隔があるにも関わらず、万葉集の「さきたまの津」の記事とその津の推定地に影響されて、古墳群の東側の方角が注視されてきた。しかしながら、これまで述べたように埼玉古墳群中の大型墳が略同一主軸方位でかつ密集して造営された理由は、古墳の西側側面をその正面観として、西側からの古墳の眺望性をなにより最優先にして古墳が造営され続けられたことにほかならないからであり、西側を正面観とする築造原理は同じ墓域上に所在する小円墳にまで貫徹されている。このような埼玉古墳群の形成過程とその基底にある築造意識から窺う限り、5世紀から6世紀にかけては埼玉台地の西側で佐間の自然堤防と万願台地との間に挟まれた入江状の地形こそが、この古墳群にとって極めて重要な意味を有していたものと推測できる。

おそらく、古墳群の西側には埼玉古墳群の威容を仰ぎ見るような交通に関わる設備もしくは施設が所在しており、そこからの眺望性を第一義的に優先して継続的に古墳を造営したことが、埼玉古墳群がこのような配列となった歴史的な意味ではないかと考える。

(平成23年7月25日脱稿)

埼玉古墳群における大型墳の主軸方位の統一性と密集性というこの古墳群の景観を特徴づける古墳配置について、考古資料に拠りつつどのように理解したらもっとも整合性がある説明となりうるか。本稿はそうした問題意識がもとになっている。その結果、各古墳の施設の構造や配置から西側からの眺望性を強く意識し、それを主眼とし遵守して各古墳が順次造営されたためであると結論づけた。そして、その解釈として従来の主軸方位に基づく地域政権規制論や山岳信仰と結び付けるような観念的な論説を排除し、具体的に古墳群の西側に内水面交通路や港湾施設の存在を想定し、そこからの眺望を意図したものと想定した。それがこの古墳群の終焉まで貫徹されていることは、西側からの眺望がこの古墳群にとっていかに重要事であったかを示して余りある。

ただ、河川の流路も関連施設の位置も古墳時代後期を通じて不変であったわけではない。埼玉古墳群が長期にわたり継起した間には、古墳群の被葬者の地位や性格の変質と同時に、利根川水系の流路変遷に伴う水路や港湾施設の位置関係など古墳群の周辺環境の変化も大きく作用していると推測している。それについては次回に論じることにしたい。

筆者はこれまで古墳出土遺物に関心を持ちつつも、いくつかの理由で古墳の分布論や遺跡論を意識的に避けてきた。しかしながら、史跡埼玉古墳群については平成19年度に世界遺産暫定登録候補の提案書を提出したところであり、その事務の一端に関わった立場から選考結果における古墳群の学術的な研究が不十分という指摘は、個人的にも大きな課題として受け止めざるを得なかった。アジア全体における比較研究もさることながら、当該資産そのものの分析や研究もとても十分とはいえない状況にある。今年度に当館に異動したことを機会に、埼玉古墳群

の解明に取り組むことで少しでもその責めを果たしたいと思う。

なお、本稿は平成22年12月6日に行った岡山大学創立60周年シンポジウム「巨大古墳の世界」の発表要旨及び平成23年2月5日に当館で行った世界遺産関連講座「埼玉古墳群から東国の古墳文化を考える」の発表要旨が素地となっている。埼玉古墳群に関する研究は埼玉稲荷山古墳から出土した鉄剣から金錯銘文が発見された以降に限っても膨大な量にのぼる。逐一の明記はしないが引用した以外にも既往の個別研究の成果を多く活用させていただいた。

古墳時代の河川流路については、熊谷市史研究第3号の所収された座談会での議論が参考になった。席上で本稿の趣旨も一部口頭発表している。その際、柿沼幹夫氏や清水康守氏からは有益な助言を受けた。古代の交通については井上尚明氏から多くの示唆を受けた。また、秋池武氏からは角閃石安山岩転石に分布について丁寧なご教示をいただいた。行田市域の自然堤防の状況については市教委の中島洋一氏にご教示いただいた。さらに勤務先である県立さきたま史跡の博物館の中村倉司・末木啓介・佐藤康二等学芸員諸氏との日常的な議論は本稿にとっても極めて有益であった。記して感謝したい。

#### 《註》

- (1) 地元伝承は別として学術的に埼玉古墳群を武蔵国造の墳墓とみなしたのは横浜市史(和島・甘粕1958)の記述が最初である。その後、齋藤忠氏による「さきたま古墳群は、いわば国造一家の墓地であると言える」(井上1978)等に代表されるように、国造制の成立に係る議論はなお決着してはいないにもかかわらず埼玉古墳群が武蔵国造とかかわりがあるとする見方が今日では通説化している。
- (2) 例えば、これまでに「狭い範囲に前方後円墳が規則的に築造されたこと」は、「埼玉古墳群に葬られた首長層の社会的関係」を反映する(坂本2001)や「独自の周堀形態が長期間、統一的に採用されている事実は、古墳の平面設計という可視的レベルにおいて、他集団との差異を表示しようとする意図が、歴代の古墳築造主体に受け継がれていたことを示すものだろう」(太田2007)等の解釈が試みられている。最近、井上尚明氏は、埼玉古墳群が立地する台地の微地形に注目して、古墳の集中性を解釈している(井上2009)。
- (3) 方位規制論や埴輪規格規制論には懐疑的な立場の見解も存在する。例えば、「前方部を西に向ける前方後円墳と埴輪の相対的小型化が埼玉古墳群の規制によるものと証明することはできない」(中村1999)など。
- (4) 埼玉古墳群の前方後円墳の方位が略同一方位であることを考古学者の立場から最初に指摘したのが昭和10年の後藤守一博士による発表であることを塩野博氏が明らかにしている(塩野2004)。また、「現存する8基の前方後円墳の全てが、前方部を南に向けている点は、これらの古墳群形成の過程に有機的な関係があり、互いに同じ意識がはたらいていたように思われる」(齋藤・大塚1980)に示されるように、埼玉古墳群の前方後円墳の方位の統一性が築造主体による意識の共有化にもとづくものであることについても早くから指摘されている。
- (5) 同一古墳群内における古墳の立地が、相対的な古墳の築造時期を考察する指標となりうることを実践的に示した先駆的な研究として白石太一郎氏による百舌鳥古墳群の分析がある(白石1969)。
- (6) 井上尚明氏は、埼玉古墳群では一定の墓域を意識しながら「都市計画的な占地計画に基づき各古墳を配置していった」ことが窺えると述べている。筆者は築造主体に存在したものは具体的な配置計画ではなく占地に対する規範や共通意識といった観念であったと考えている。
- (7) 埼玉古墳群の各古墳の概要や調査状況については、本文中で逐一の文献提示をしないが、特に例示しない限り、参考文献に提示した埼玉県教育委員会発行の一連の報告書に拠る。
- (8) 埼玉古墳群の編年については、既に多くの研究成果がある。中でも近年の代表的なものとしては、坂本

1996、増田1999、太田2007などがある。また、古墳群から出土した土器の変遷についても、岡本1997、利根川2003などで包括的に整理されている。本稿もそれらを参照している。

- (9) 稲荷山古墳の年代を巡る見解については、利根川章彦氏により丁寧に整理されている(利根川2002)。
- (10) 宮代栄一氏は、副葬品のアセンブリッジの検討からこれらの副葬品の年代はTK47型式期に位置づけることができ、須恵器の年代と一致することを述べている(宮代1996)。
- (11) 稲荷山古墳造出し付近出土の須恵器と調査された主体部との関係性については、いくつかの解釈が存在する。TK23～47型式に属する須恵器を築造当初に伴うものとした場合、調査された主体部を同一型式内とみる見解と須恵器よりも後出するMT15型式(古)段階とする見解があり、また、須恵器を追葬に伴うものとみる場合でも、未見の主体部を同一型式内に収まるものとする見解と須恵器の型式よりも遡る時期に想定する見解に分かれる。筆者の考えは以前に述べたことがあるが、須恵器が古墳築造当初のものか追葬に伴うものかは確定できないが、少なくとも発掘調査された主体部の年代は、TK47型式の枠に収まるものとするものである(関1991)。

後に述べるように、古墳群中の各古墳の造出しからはいずれも供献土器が出土しているが、同一古墳における土器のまとめには大きな時期差が認められない。つまり、造出しで複数回儀礼が執行された明確な痕跡は認められないのである。先行する土器類は全て取り片づけられて最終段階の供献土器のみが存在すると理解することも可能であるが、將軍山古墳の須恵器をみる限り、石室内の副葬品よりも造出しから出土した須恵器の方が相対的に古く位置づけられ、築造時の供献土器が残されているとみなすのが自然である。その一方で追葬時には造出しの供献儀礼は執行されずに石室内に須恵器が納められた可能性が大きい。稲荷山古墳についても、未知の埋葬主体部が存在するとして、初葬時の供献土器類は全て取り片づけられたとは想定し難く、やはり筆者は造出し上の供献土器は築造当初のものであろうと考えている。無論、仮にそのとおりだとしてもそのことが未知の埋葬主体部の存在を否定するものではないことは既に述べたところである。

- (12) 利根川章彦氏は、埴輪の作り置き説を提示し、埴輪型式の系統順が正しいとしても、それが必ずしも古墳の築造順とはならないと考えている。2011年4月県立さきたま史跡の博物館講座「人物埴輪配列の意味」発言要旨。
- (13) 丸墓山古墳では古墳築造前の旧地表面からHr-FAと推定される灰白層が報告されている。しかしながら、平成19年度に実施した奥の山古墳では墳丘下の旧地表面では肉眼による観察ではHr-FAを明確にとらえることができず、サンプリングによる土壌分析によって検出することができた程度の堆積状況であり、少なくとも旧地表面には層状に火山灰が堆積する状況は認められなかった。明確にHr-FA降下後の築造である將軍山古墳の旧地表面からもHr-FAは検出されていない。周堀については、降灰後に二次的に周囲から流れ込むことも想定されるし、旧地表面においても微妙な起伏によって、堆積状況は異なることも想定されるので一概には言えないが、古くに調査され肉眼観察によるのみの火山灰の同定には慎重な判断が求められよう。二子山古墳の周堀に堆積していたとされるHr-FAについてはその同定について既に懐疑的な見解が示されている(岡本1997)。
- (14) 奥の山古墳の須恵器の位置付けについては酒井清治・藤野一之両氏のご教示による。TK10型式(新)とは、TK10型式とTK43型式の間の未名型式を指す。
- (15) 出土した埴輪の突帯の扁平率を検討した岡本の分析によれば、鉄砲山古墳の埴輪は將軍山古墳の埴輪よりも、赤系・橙系ともに扁平度が大きいという結果が示されている(岡本1997)。
- (16) 埼玉古墳群の系列設定の代表的なものとして、墳丘規模と埴輪規模によって、100m級の大型前方後円墳である稲荷山古墳・二子山古墳・鉄砲山古墳・將軍山古墳、60m級の中型前方後円墳である愛宕塚古墳・瓦塚古墳・奥の山古墳、20m級の円墳群を含めた3系列区分(増田1987)や5条以上の凸帯を有する大型の円筒埴輪を有する稲荷山古墳・二子山古墳・鉄砲山古墳を中心とし丸墓山古墳・瓦塚古墳・將軍山古墳を

加えた「主系列墓」と3条もしくは4条の中型円筒埴輪をもつ天祥寺裏古墳・奥の山古墳・愛宕山古墳の「副系列墓」の2区分(城倉2011)、100m以上の古墳と90m以下の古墳の2系列(若松2011)などがある。指標は各々異なるものの結果的にそれらはほぼ同様の区分となっている。これらの前提として、「約百年の間に10基の古墳を築造したとしなければならない。一世代一古墳の世代累系墳とするとあまりに短すぎる」(増田1987)という基本認識が存在する。

(17) 平成20年度奥の山古墳現地説明会資料による。

(18) 造出しには、「造出し」、「造り出し」、「造出」等の表記方法がみられる。当館では「造出し」という表記に統一しており、本稿でもそれに従うが、引用部分についてはそれぞれ原典のとおりとしている。

(19) 正確には西北西～北西の方角に当たるが煩雑さを避けるために、以下、便宜的に西と表現する。

(20) 「墳頂の埋葬施設上面を方形に囲むために近づくことができない死者の霊魂に対し、現世に残された子孫や近親、近習たちが弔うための場として造り出しが創出され、そこで家形埴輪を配置して墳頂の家形埴輪に拠る死者の霊魂を呼び、実際に供物を捧げたり、それに替る土製品を供えたりして、共飲・共食する飲食物供献儀礼がおこなわれ」と述べている(小浜2005)。

(21) 共飲・共食を伴うかどうかについては横穴式石室の須恵器から類推されたような状況(白石1975)が現在なお造出し部において確認されているわけではない。供献の内容についてはなお不明な点が多いが、稲荷山古墳では、先に述べたように前方部隅に設けられた中堤への進入路となる土橋脇に土器及び神饌を模したと推測される土製品が出土しており、このような土器や土製品は通路に対する供献や避邪の行為に近いものではないであろうか。

(22) 造出しや土橋を墓への進入路とみなす見解には、「埴輪、土器類を用いた葬送儀礼に係る行為の場」[祭祀の道](白井1983)をはじめ、「方形周溝墓の溝の途切れた陸橋部の付近に土器が供献されることが多い。このことは、この場所が墳丘中央の埋葬部にいたる墓道であり、かつ死者の葬送における重要な儀式の場であることを示す」(都出1992)、「カミの出入り口と考えられる造り出しは4世紀末ごろから定着し」(広瀬2010)、などがあり、議論としては定着している。

(23) 塚田良道氏は、飲食物の供献が食物供献を体現した女性人物埴輪に転置してゆくと考えている(塚田1998)。また和田晴吾氏も高橋克壽氏の説を引用し、人物埴輪出現の意味を造出しの創出と結びつけて解釈している。確かに、一般に人物埴輪群は6世紀には造出しや墳丘裾の埴輪列に組み込まれてゆくが、堤上儀礼が形象埴輪列の初源的な姿としてとらえられるならば、後に造出し上に統合されたことで飲食物供献儀礼と人物埴輪の樹立による儀礼に有機的な関係が成立したとしてもそれは後天的な機能の転換もしくは変質を示すものであり、両者は本来は異なった場所を占める異なった内容を持つ儀礼として成立したものではないだろうか。

(24) 埼玉古墳群では西側を古墳の正面とする意識があったのではないかという考えは従来から存在した(岡本1997)。このことを最も早く指摘したのは、筆者の知る限り、稲荷山古墳の中堤造出しと土橋の位置関係から稲荷山古墳の正面を西側ととらえた白井久美子氏の見解である(白井1983)。高橋一夫氏も造出しの附設された方角が古墳の正面であったと理解している(高橋2005)。

なお、岡本氏は、その理由として群馬県の榛名山や赤城山といった自然地形を意識しつつ上毛野地域への意識の傾斜として解釈しているが、三方に山を望むこの地で、なぜ特別に榛名山や赤城山が意識されたのかといった理由を合理的に説明付けることは難しいであろう。また、古墳の方位を上毛野国との関係という地域政治性に根拠を求めることについても十分な類例の提示が求められるものであり、やはり憶測の域を出ないものと言わざるを得ない。

(25) 中島洋一氏から教示いただいた。

(26) 二子山古墳の南側が北側よりも優先された理由については、巨大な丸墓山古墳が西側に位置する二子山古墳の北側よりも西側からの眺望が開けていたからであると推測する。ここでも南北の方位よりも西側か

らの眺望性が優先していることがわかる。

- (27) 天祥寺裏古墳については詳細がなお不明であり、4条突帯の円筒埴輪が出土していることから前方後円墳とみる見解もある。
- (28) 埼玉古墳群以北に所在する前方後円墳が結果的に東西方向に主軸をそろえていることの多い理由は、その付近の河川が東西方向に流路をもつものが多く、自然堤防も結果として東西方向に発達しており、そうした地形上の制約を受けつつ、古墳の側面を河川流路に向けて築造する志向性があったことなどが影響していると考えている。
- (29) 前方後円墳を採用していない超大型円墳である丸墓山古墳の被葬者論はその特異性ゆえに極めて活発である。坂本和俊氏は、武蔵国造の乱の一方の主人公である小杵の墓に想定し(坂本1996)、中村倉司氏は反対に使主の墓と考えている(中村2010)。また、杉山晋作氏も丸墓山古墳と二子山古墳の関係にいわゆる「武蔵国造の乱」の状況を投影した見解を提示している。純粋に考古学の立場から丸墓山古墳の被葬者を特定することは困難であるが、立地からも窺える丸墓山古墳の特異性に対する解釈のひとつではあろう。筆者は具体的な被葬者像の推測よりも遺構や遺物の分析を優先する立場に立っているが、坂本氏が丸墓山古墳の築造位置について二子山古墳よりも稲荷山古墳の被葬者に血縁的に近いことを理由に挙げている点については、むしろこの場所に築造された理由は被葬者間の血縁の濃淡によるものではなく、立地条件を考慮すれば先に述べたとおり視界の遮蔽性にあると考えた方が合理的であるように思う。いずれにしても、丸墓山古墳の築造はこの古墳群にとっては、極めて波風の立つ行為だったに違いない。
- (30) 白石太一郎氏は、東国における6世紀における大型墳の集中について、「畿内王権から一定領域の支配権を認められた領域支配者としての「国造」とみるよりも、特定の名代、子代などの地方管掌者としてそれらを統括する畿内の有力豪族や伴造豪族などと結ばれていた在地豪族のあり方と対応する可能性が大きい。」と述べている(白石1991)。
- (31) だからといって、こうした中小の前方後円墳と埼玉古墳群の中核をなす大型墳との間に整然としたピラミッド構造を想定しているわけではない。
- (32) 行田周辺に後期の大型古墳が集中することの歴史的な解釈については別稿を用意している。
- (33) 百舌鳥古墳群では大阪湾を望む南北方向の各古墳のみならず、内陸の東西方向を主軸とする各古墳についても百舌鳥川・百済川の水上交通からの眺望を意識した立地であることが指摘されている(十河2003)。
- (34) 旧埼玉県史に記載された事例が最初である。考古学的な立場からは渡辺貞幸氏が埼玉古墳群と利根川の流路との関係に言及した最初であると思う(渡辺1987)。
- (35) 秋池武氏から調査資料の提供を受け、丁寧なご教示をいただいた。
- (36) 井上尚明氏のご教示による。

#### 《参考文献》

- 秋池 武 2000 「利根川流域における角閃石安山岩の分布と歴史的意義—榛名山給源の多孔質の角閃石安山岩転石—」『群馬県立博物館紀要』 第21号 群馬県立博物館
- 甘粕 健 1970 「武蔵国造の反乱」『古代の日本7 関東』 角川書店
- 石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一編 1979 「特集・火山堆積物と遺跡 I〈関東地方北部〉」『月刊考古学ジャーナル』 1
- 井上 尚明 2007 「さきたまの津を探る」 埼玉県立史跡の博物館紀要 創刊号
- 井上 尚明 2009 「埼玉古墳群と東国の古墳」『遺跡学研究』 第6号 日本遺跡学会
- 井上 尚明 2010 「考古学から見たさきたまの津」『さきたまの津を考えるシンポジウム資料』 野外調査研究所
- 井上 尚明 2011 「「さきたまの津」と將軍山古墳」『埼玉考古』 46 埼玉考古学会

- 井上光貞他 1978 『鉄剣の謎と古代日本』 新潮社
- 上田 宏範 1951 「前方後円墳の造出の推移」『考古学論攷』 檀原考古学研究所紀要 第1冊 檀原考古学研究所
- 内山 敏行 1992 「古墳時代後期の朝鮮半島系冑」『研究紀要』 1 (財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 内山 敏行 2011 「毛野地域における6世紀の渡来系遺物」『古墳時代毛野の実像』 季刊考古学別冊17 有山閣
- 大矢雅彦・高山 一・久保純子 1996 「荒川流域地形分類図」 建設省関東地方建設局荒川上流工事事務所
- 太田 博之 1994 「埼玉將軍山古墳出土馬冑資料の基礎研究」『日本考古学』 第1号 日本考古学協会
- 太田 博之 2007a 「武蔵北部の首長墓」『武蔵と相模の古墳』 季刊考古学別冊15 有山閣
- 太田 博之 2007b 「北武蔵における後期古墳の動向」 考古学リーダー12『関東の後期古墳』 六一書房
- 大塚 初重 1966 「古墳の変遷」 日本の考古学IV 古墳時代(上)
- 岡本 健一 1997 「將軍山古墳」 史跡埼玉古墳群整備事業報告書 埼玉県教育委員会
- 小浜 成 2007 「古墳における儀礼の場の変遷過程と倭王権」『埴輪群像の考古学』 大阪府立近つ飛鳥博物館編 青木書店
- 柿沼幹夫他 2011 「座談会 荒川の流路と遺跡—荒川新扇状地の形成と流路の変遷—」 熊谷市史研究 第3号 熊谷市教育委員会
- 加古川市教育委員会編 1997 「行者塚古墳発掘調査概報」 加古川市文化財調査報告15
- 門脇 伸一 1997 「市内遺跡確認調査報告—平成8年度調査—」 行田市教育委員会
- 加部 二生 2009 「太田市東矢島古墳群の再検討」『利根川』 31
- 檀本 誠一 1968 「岩橋千塚の前方後円墳—2 前方後円墳の造り出しについて」『岩橋千塚』 和歌山市教育委員会 『前方後円墳・墳丘構造の研究』 学生社2001に再録
- 菊地 隆男 1979 「関東平野中央部における後期更新世以降の古地理の変遷」 第四紀研究 17
- 菊地 隆男 1981 「先史時代の利根川水系とその変遷」 アーバンクボタNo.19 久保田鉄工株式会社
- 岸本 直文 2010 「倭国の形成と前方後円墳の共有」『史跡で読む日本の歴史2 古墳時代』 吉川弘文館
- 久保 純子 2004 「利根川中下流域における歴史時代の河道変遷—埼玉県東北部、幸手市周辺の微地形を手掛かりとして—」『国立歴史民俗博物館研究報告』 118
- 栗原文蔵他 1978 「鴻池・武良内・高畑」 国道17号熊谷バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第11集 埼玉県教育委員会
- 後藤 守一 1935 「考古学会第40回総会記事」『考古学雑誌』 第25巻 第6号 考古学会
- 小林 行雄 1955 「古墳発生の歴史的意義」『史林』 第38巻 第1号
- 近藤 義郎 1983 『前方後円墳の時代』 岩波書店
- 近藤 義郎 2000 『前方後円墳観察への招待』 青木書店
- 齋藤 忠他 1980 『埼玉稲荷山古墳』 埼玉県教育委員会
- 齋藤 忠・大塚初重 1980 『稲荷山古墳と埼玉古墳群』 三一書房
- 酒井 清治 1997 「関東の古墳時代須恵器編年」『古代関東の須恵器と瓦』 同成社
- 坂本 和俊 1981 「埼玉の前方後円墳」『歴史手帳』 第9巻 第5号
- 坂本 和俊 1996 「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帳6』 群馬県土器観会
- 坂本 和俊 2001 「考古学からみた稲荷山古墳の出自」『稲荷山古墳の鉄剣を見直す』 学生社
- 佐藤源之・渡邊 学・井上尚明 2010 「奥の山古墳の地中レーダー探査実験について」 埼玉県立史跡の博物館紀要 第4号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 塩野 博 2004 『埼玉の古墳 北埼玉・南埼玉・北葛飾』 さきたま出版会

- 清水康守・駒井 潔・小林健助・小川政之・堀口万吉・金子直行・加藤智江 2010 「荒川低地北部の地形発達—利根川の流路変遷を中心として—」『埼玉県立自然の博物館研究報告』 第4号
- 杉崎 茂樹 1985 「鉄砲山古墳」 埼玉古墳群発掘調査報告書 第2集 埼玉県教育委員会
- 杉崎 茂樹 1985 「愛宕山古墳」 埼玉古墳群発掘調査報告書 第3集 埼玉県教育委員会
- 杉崎 茂樹 1986 「瓦塚古墳」 埼玉古墳群発掘調査報告書 第4集 埼玉県教育委員会
- 杉崎 茂樹 1987 「二子山古墳」 埼玉古墳群発掘調査報告書 第5集 埼玉県教育委員会
- 杉崎 茂樹 1988 「丸墓山古墳・埼玉1～7号墳・将軍山古墳」 埼玉古墳群発掘調査報告書 第6集 埼玉県教育委員会
- 杉崎 茂樹 2004 「埼玉古墳群出現当時の地理的景観について」『調査研究報告』 第17号 埼玉県立さきたま資料館
- 杉崎 茂樹 2007 「埼玉古墳群陣場地区所在古墳についての覚書」『調査研究報告』 第19号 埼玉県立さきたま資料館
- 杉崎 茂樹 2009 「稲荷山古墳出土土器の器種構成と出土位置に関連して」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第2号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 杉山 晋作 1992 「有銘文鉄剣にみる東国豪族とヤマト王権」『新版古代の日本』 第8巻 関東 角川書店
- 白井久美子 1983 「小規模古墳の一類型について—ブリッジ付き円墳の検討—」『古代』 75・76合併号 早稲田大学考古学会
- 白石太一郎 1969 「畿内における大型古墳群の消長」『考古学研究』 第16巻 1号 考古学研究会
- 白石太一郎 1985 「年代決定論」『岩波講座日本考古学』 I 岩波書店
- 白石太一郎 1991 「常陸の後期・終末期古墳と風土記建評記事」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第35集 国立歴史民俗博物館
- 白石太一郎 1992 「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第44集 国立歴史民俗博物館
- 白石太一郎 2009 「百舌鳥・古市大古墳群展—巨大古墳の時代」『特別展図録』 大阪府立近つ飛鳥博物館
- 城倉 正祥 2011 「北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群」 2008年度～2010年度科学研究費補助金 若手研究 (B) 研究成果報告『古代工房の復原的研究—埴輪・須恵器・瓦の工房を中心に—』 奈良文化財研究所
- 関 義則 1991 「逆刺独立柳葉・三角形族の消長のその意義」 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団10周年記念論集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋 一夫 1991 「埼玉における古代窯業の展開」 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団10周年記念論集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋一夫・本間 岳 1994 「将軍山古墳と房州石」『埼玉県史研究』 第29号 埼玉県
- 高橋 一夫 2005 a 「墳丘造り出しと中堤張り出し—埼玉古墳群理解のために—」『考古学資料館紀要』 第21輯 國學院大學考古学資料館
- 高橋 一夫 2005 b 「鉄剣銘—一五文字の謎に迫る・埼玉古墳群」『シリーズ「遺跡を学ぶ016」』 新泉社
- 田中 広明 1989 「緑泥片岩を運んだ道—変容する在地首長層と労働差発権—」『土曜考古』 第14号 土曜考古学研究会
- 田中 広明 1990 「上毛野・北武蔵の古墳時代後期の土器生産—土器生産の展開と在地首長制—」『東国土器研究』 第2号 東国土器研究会
- 田中 広明 1991 「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給—有段口縁杯の展開と在地社会の動態—」『埼玉考古学論集』 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中 正夫 1994 「古墳から検出された火山灰と埼玉古墳群」『新屋敷遺跡(A区)』 (財)埼玉県埋蔵文化財

調査事業団 第104集

- 塚田 良道 1992 「東国の伽耶文化」『考古学ジャーナル』 第350巻 ニューサイエンス社
- 塚田 良道 1998 「女子埴輪と采女—人物埴輪の史的意義—」(上)・(下)『古代文化』 第50巻 第1・2号  
(財)古代学協会
- 都出比呂志 1992 「墳丘の型式」『古墳時代の研究』 雄山閣
- 天理市教育委員会 2000 「西殿塚古墳 東殿塚古墳」天理市埋蔵文化財調査報告 第7集
- 十河 良和 2003 「百舌鳥古墳群の立地に関する基礎考察」関西大学考古学研究室開設五拾周年記念 考古学論叢 上巻
- 利根川章彦 2002 「稲荷山古墳の築造年代に関する覚書」『調査研究報告』 第15号 埼玉県立さきたま資料館
- 利根川章彦 2003 「「武蔵国造の乱」はあったか」『調査研究報告』 第16号 埼玉県立さきたま資料館
- 中井 正幸 2005 「第3章 古墳の造営と儀礼の共有 第6節 古墳の築造と儀礼の変容」『東海古墳文化の研究』 有山閣
- 中村 倉司 1999 「妻沼低地(岡部町・深谷市)の古墳時代集落と埼玉古墳群」『岡部条里／戸森前』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第217集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中村 倉司 2010 「埼玉丸墓山古墳と大里甲山古墳—武蔵国造家内紛と大型円墳—」埼玉県立史跡の博物館紀要 第4号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 中山 浩彦 2003 「稲荷山古墳外堀の陸橋部について」『調査研究報告』 第16号 埼玉県立さきたま資料館
- 西口 正純 2009 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第3号
- 西口正純・佐藤康二 2010 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第4号
- 広瀬 和雄 2003 「前方後円墳国家」角川選書355 角川書店
- 広瀬 和雄 2010 「前方後円墳の世界」岩波新書
- 福田 聖 1998 「末野遺跡Ⅰ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第196集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 藤倉 明 2010 「万葉集における「埼玉の津」」『さいたまの津を考えるシンポジウム資料』 野外調査研究所
- 北条 芳隆 2009 「第二の「大和」原風景—佐紀古墳群と平城京条坊地割—」『日々の考古学2』 東海大学文学部考古学研究室編
- 穂積 裕昌 2005 「墳頂部方形区画と『東方外区』」『石山古墳』 三重県埋蔵文化財センター
- 堀口 万吉 1981 「歴史時代の沈降運動と低地の形成」『アーバンクボタ19』 株式会社クボタ
- 増田 逸朗 1980 「埼玉古墳群の立地と環境」『埼玉稲荷山古墳』 埼玉県教育委員会
- 増田 逸朗 1987 「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』 新人物往来社
- 増田 逸朗 1991 「埼玉政権の法量的分析」『埼玉考古学論集—設立10周年記念論文集』 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 増田 逸朗 1999 「辛亥銘鉄剣と武蔵国造—乎獲居臣と笠原直使主—」『國學院大学考古学資料館紀要』 第15輯 國學院大学考古学資料館
- 松田 度 2007 「造り出しにみる埴輪配置の構造」同志社大学考古学シリーズIX『考古学に学ぶ(III)』 森浩一先生傘寿記念献呈論集 松藤和人編
- 宮代 栄一 1996 「古墳時代における馬具の暦年代—稲荷山古墳出土例を中心に—」『九州考古学』 第71号
- 森田 克行 2008 「新・埴輪芸能論」大阪府立近つ飛鳥博物館編『埴輪群像の考古学』 青木書店
- 森田 悌 1992 『古代東国と大和政権』 新人物往来社
- 山本 靖 1991 「利根川南岸地域的前方後円墳の展開」『専修考古学』 久保哲三先生追悼号 専修考古学会



- 吉井 理 2009 「関東地方における前方後円墳の墳丘方位について」『日々の考古学2』 東海大学文学部  
考古学研究室編
- 吉川 國男 1998 「雄略紀所載の武蔵国直丁と稲荷山鉄剣銘について」『調査研究報告』 第11集 埼玉県立  
さきたま資料館
- 吉田 稔他 1997 「築道下遺跡Ⅰ」 行田南部工業団地造成事業関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ 埼玉県埋蔵文  
化財調査事業団報告 第188集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 吉村 公男 1999 「古墳の正面観」『考古学に学ぶ』 同志社大学考古学シリーズⅠ 同志社大学考古学シ  
リーズ刊行会
- 若狭 徹 2007 「第四章 首長居館と水の祭祀」『古墳時代の水利社会研究』 学生社
- 若松 良一 1993 「二子山古墳・瓦塚古墳」 埼玉古墳群発掘調査報告書 第8集 埼玉県教育委員会
- 若松 良一 1993 「からくにへ渡った東国の武人たち—埼玉將軍山古墳と房総の首長をめぐる—」 法政  
考古学第20集記念論文集 法政考古学会
- 若松良一他 2007 「武蔵埼玉 稲荷山古墳」 史跡埼玉古墳群稲荷山古墳発掘調査・保存整備事業報告書  
埼玉県教育委員会
- 和島誠一・甘粕 健 1958 「武蔵の争乱と屯倉の設置」『横浜市史』 第1巻
- 和田 晴吾 1996 「墓拡と墳丘の出入口—古墳祭祀の復元と発掘調査」『立命館大学考古学論集Ⅰ』 立命館  
大学考古学論集刊行会
- 和田 晴吾 2009 「古墳の他界観」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第152集 国立歴史民俗博物館

# 装飾馬具は下賜品か

—「威信財説」への疑義—

中村 倉 司

## はじめに

一般的に装飾馬具は、その華麗さと技術的な面から見て大王やそれを補佐する畿内豪族に管掌された工人によって製作されたと考えられている。そのため製作地は、必然的に畿内と想定されている。つまり全国各地から出土する装飾馬具は、大王や畿内豪族から地方豪族に下賜されたものと捉えられる傾向にある。それ故、これらは被下賜者にとって威信財としての側面も併せ持っていると考えられている。

装飾馬具とは飾りを付した馬具の総称であるが、それは実用馬具としての性格を否定するものではない。装飾馬具は多様であり胸繫に限っても馬鈴・馬鐸・杏葉などがある。更に杏葉に限っても剣菱形・心葉形・楕円形・花形・鐘形・棘葉形の他に鈴杏葉などがある。そして、これらは定型化しているとは言え、それぞれ細部には異なる文様が施されている。このような多様性(差異)を各氏族に管掌された工人の差にその原因を見いだそうとしたことがあった。つまり、馬鐸はA氏族、鈴杏葉はB氏族、心葉形杏葉はC氏族と言うように……。しかし、各畿内豪族の故地に特定の馬具が分布するような状況は見られず私の夢想は霧消してしまった。20数年前のことであるが、今も装飾馬具の多様性の意味を解明する見通しは立っていない。にも関わらず本稿を草するのは、当時集成した各種馬具を概観することによって、何かが見えて来るのではないかという淡い期待があるからである。

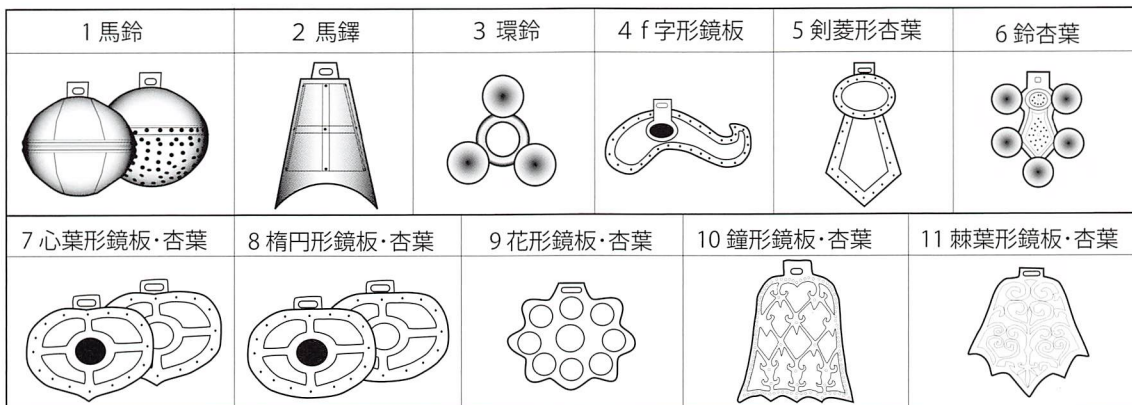
## 1 装飾馬具の種類

### 1 各 論

ここでは馬鈴や馬鐸・環鈴・鈴杏葉などの鑄造馬具の他、f字形・剣菱形・心葉形・楕円形・花形・鐘形・棘葉形の鏡板・杏葉などの金銅製の板物馬具を対象とし、その分類・展開・分布などの概要を記す。

#### (1) 馬 鈴

馬鈴は、最も普遍的な馬装の一つである。通常胸繫に複数装着される。鈴は、馬具以外に帯



第1図 装飾馬具

金具などに付けられるものもある。これらの識別は容易ではなく、以下の統計処理において両者が混在していることをお断りしておきたい<sup>(1)</sup>。156古墳などで337個<sup>(2)</sup>が出土している。

### a 分類

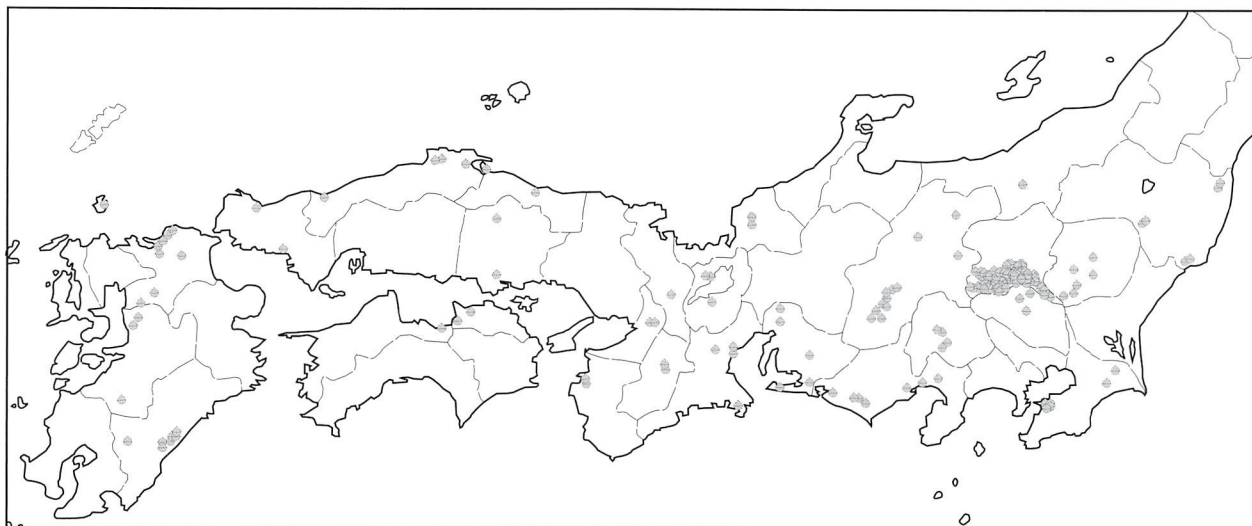
材質的には金製・銀製・銅製・鉄製があり、その多くは鋳造製である。銅製のなかには鍍金されたものもある。形態的には、球鈴が主流であるが角鈴の他に扁平鈴もある。また、片鈴口が突出した鱗付・花卉付の鈴も存在する。

### b 展開

馬鈴は、5世紀後半に朝鮮半島から搬入され、同末以降は日本でも製作が開始される。

### c 分布

群馬県、長野県伊那谷・福岡県北部・宮崎県に集中する傾向がある。



第2図 馬鈴

### d まとめ

墳形で見ると円墳<sup>(3)</sup>が前方後円墳の出土例の約2倍を示す。また、横穴からの出土率も他の馬具に比較すると高くなっている。

一括出土数について記す。15個：静岡県賤機山古墳、12個：群馬県前山古墳・千葉県金鈴塚古墳・千葉县城山1号墳、6個：栃木県桑57号墳・群馬県小泉大塚越3号墳・静岡県宇洞ヶ谷横穴・島根県岡田山1号墳、5個：栃木県天王塚古墳・栃木県助戸十二天塚古墳・群馬県四ツ谷古墳・埼玉県広徳寺所在古墳・大阪府南塚古墳、4個：群馬県綿貫観音山古墳・埼玉県將軍山古墳、長野県飯沼雲彩寺古墳・和歌山県大谷古墳・島根県上塩冶築山古墳などがある。

内容 遺構	遺構数	割合 (%)	点数	割合 (%)	1遺構当たり出土数												遺構数
					1点	%	2点	%	3点	%	4点	%	5点	%	6点	%	
前方後円墳	40	26	113	34	23	58	2	5	4	10	4	10	2	5	5	13	40
円墳	83	53	137	41	64	77	8	10	5	6	1	1	3	4	2	2	83
横穴	12	8	17	5	11	92	0	0	0	0	0	0	0	0	1	8	12
その他	1	1	1	0	1	100	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
不明	20	13	69	20	12	60	2	10	1	5	1	5	0	0	4	20	20
合計	156	100	337	100	111	71	12	8	10	6	6	4	5	3	12	8	156

○墳形不明は、円墳に含めた。○その他は土壙?である。

第1表 馬鈴

## (2) 馬 鐸

### a 分 類

馬鐸は、66遺跡146点が確認されている。

### b 展 開

馬鐸は5世紀前半に出現するが、盛行するのは我が国独自の形態の成立する6世紀代になってからである。7世紀初頭まで存続する。

### c 分 布

5世紀代では、宮城県から宮崎県までの広範な地域に散発的に分布し、それぞれの地域の代表的な初期古墳に副葬されている。副葬される馬鐸の数は、1～3点のものが多く、宝器的な意味合いが強い。6世紀前半になると若干分布範囲を狭めるが各地に散在し、特に集中する地域はみられない。各地域の代表的な前方後円墳の他に小規模な円墳にも副葬されるようになる。6世紀後半になると四国・九州には認められず、分布範囲を更に狭める。しかし千葉県北部や長野・静岡県などの特定の地域に集中する傾向が認められる。

全般的には埼玉県北部から群馬県にかけての地域に集中し、東京湾東岸(木更津市周辺)、千葉県北部(佐原市周辺)、福島県浜通りに分布する。



第3図 馬鐸

### d まとめ

馬鐸出土の前方後円墳は各地域の代表的なものであるが、円墳は特に際立った規模を有していない。一括出土点数で見ると、1点は出土数不明なものを1点と数値化したために31件(45%)でありその割合が極めて多いが、馬形埴輪の馬装から類推すると胸繫には3～4個、尻繫には2～4個が装着されている。なお2点は14古墳、3点は15古墳である。初期の馬鐸は鈴と共伴する例が多く、胸繫に鈴、尻繫に馬鐸を装着することを基本にしていた可能性がある。

内容 遺構	遺構数	割合 (%)	点数	割合 (%)	1 遺構当たり出土数												遺構数
					1点	%	2点	%	3点	%	4点	%	5点	%	6点<	%	
前方後円墳	14	20	39	27	4	29	2	14	4	29	2	14	1	7	1	7	14
円墳	34	49	75	52	13	38	6	18	11	32	3	9	1	3	0	0	34
横穴	4	6	6	4	2	50	2	50	0	0	0	0	0	0	0	0	4
その他	4	6	5	3	3	75	1	25	0	0	0	0	0	0	0	0	4
不明	13	19	20	14	9	69	3	23	0	0	0	0	1	8	0	0	13
合計	69	100	145	100	31	45	14	20	15	22	5	7	3	4	1	1	69

○不明は、円墳に含めた。○その他は方墳2、住居跡2である。

第2表 馬鐸

### (3) 環 鈴

45古墳などで61点が確認されている。

#### a 分 類

三環鈴が基本であるが、二環鈴(千葉県矢那大原古墳)と四環鈴(福岡県小田茶臼塚古墳)が1例ずつ存在する。

#### b 内 容

1古墳から出土数は、1点が大多数を占めるが複数出土する例も存在する。例示すると3点が茨城県上野古墳・長野県竹原笹塚古墳など、2点が千葉県矢那大原古墳である。



第4図 環鈴

#### c 展 開

5世紀前半に出現し、6世紀前半には終焉を迎える。主に5世紀代に盛行する馬具である。

#### d 分 布

新潟県から宮崎県までの範囲で散在的に出土している。しかし島根県めんぐる古墳を除くと中国・四国の出土例は無い。なお、有銘鉄剣(刀)を出土した埼玉県稻荷山古墳と熊本県江田船山古墳の両者から出土した点は特筆される。

#### e ま と め

環鈴が馬具であるかは検討を要する。桐原健は、「環鈴は馬鈴として胸繫などに垂下されたものかとも考えられるが、金鎧山古墳以外は金銅製馬具が伴っていないことから馬装の一つでは

ない」とし、更に「大阪府南天平古墳での棺内の腰のあたりに副葬されていたと云うから、鈴鏡の様に平常は巫女の腰につけられていたのかもしれない」(桐原1974)としている。いっぽう関義則は「(環鈴に)馬具が伴っていないことだけを理由に馬具以外の用途を推測することの危険性」を指摘した上で、出土状態などから「中・大型の環鈴は、ほぼ手綱に通されていたとみて疑いがないであろう」(関1998)としている。

遺構	内容	遺構数	割合 (%)	点数	割合 (%)	1遺構当たり出土数												遺構数
						1点	%	2点	%	3点	%	4点	%	5点	%	6点<	%	
前方後円墳		15	33	17	28	14	93	0	0	1	7	0	0	0	0	0	0	15
円墳		26	58	32	52	22	85	2	8	2	8	0	0	0	0	0	0	26
横穴		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他		2	4	2	3	2	100	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
不明		2	4	10	16	2	100	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
合計		45	100	61	100	40	89	2	4	3	7	0	0	0	0	0	45	

○不明は、円墳に含めた。○その他は、方墳・土墳各1である。

第3表 環鈴

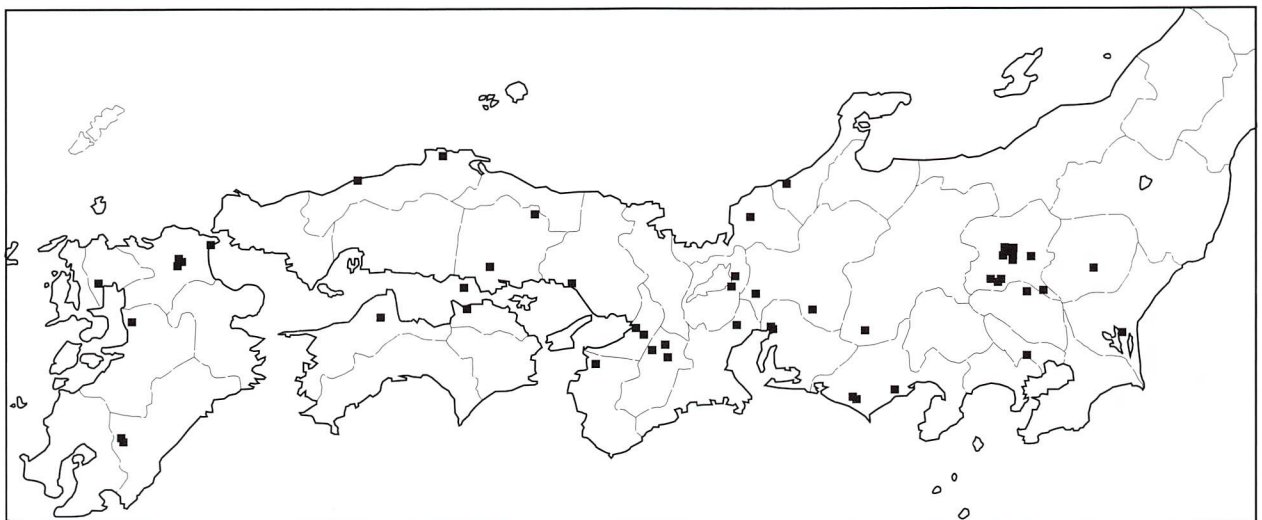
#### (4) f字形鏡板

52古墳などで103点が確認されている。

##### a 分類

和歌山県大谷古墳例に見るように当初は、両端とも尾(末端)が跳ね上がるが、やがて頭部(前方部)が丸く表現され典型的なf字形鏡板が出現する。また、山口県上ノ山古墳・和歌山県大谷古墳例などのように鈴付のものや福岡県寿命王塚古墳例のような鱗付のものも存在する。熊本県江田船山古墳例は、尾の両端が同方向に配された特異な型である。本例は、一般的に加飾されたものが多いが、群馬県白石二子山古墳例は細板状で紋様の見られないシンプルなものも存在する。群馬県上滝古墳例は唯一の杏葉である。形態は、白石二子山古墳例と類似する。

なお、新しくなるにつれてf字の屈曲が弱くなり大形化するとともに縁金を取り付ける銚の数が増加する。また、引手が鏡板の内側で連結するようになる。これは鏡板の装飾性を損なわないような工夫の表れである。



第5図 f字形鏡板

b 展 開

5世紀中葉から7世紀初頭まで存続する。

c 分 布

栃木県から宮崎県にかけての範囲で検出されている。5世紀代では大阪府の1点の他、栃木・群馬・長野の東国で各1点ずつ出土している。6世紀代は、全国に散在する傾向にある。

d まとめ

53古墳などで70点以上が出土している(うち3件・4点は出土地不明)。墳形の判明している古墳の割合で見ると前方後円墳18基・円墳26基・方墳2基・横穴2基の計48基である。剣菱形杏葉との共伴例は、19古墳であり約40%を占めるに過ぎない。両者の組成を否定するものではないが、剣菱形杏葉を共伴しない古墳も相当する存在するのは事実である。

なお出土点数は、対で使用される事から2個の検出例が多い。

内容 遺構	遺構数	割合 (%)	点数	割合 (%)	1遺構当たり出土数												
					1点	%	2点	%	3点	%	4点	%	5点	%	6点<	%	遺構数
前方後円墳	18	34	35	34	1	6	17	94	0	0	0	0	0	0	0	0	18
円墳	26	49	52	50	2	8	23	88	0	0	1	4	0	0	0	0	26
横穴	2	4	4	4	0	0	2	100	0	0	0	0	0	0	0	0	2
その他	3	6	6	6	0	0	3	100	0	0	0	0	0	0	0	0	3
不明	4	8	6	6	2	50	2	50	0	0	0	0	0	0	0	0	4
合計	53	100	103	100	5	9	47	89	0	0	1	2	0	0	0	0	53

○不明は、円墳に含めた。○出土点数が不明なものについては、2点として数えた。○その他は、方墳2・土墳1である。

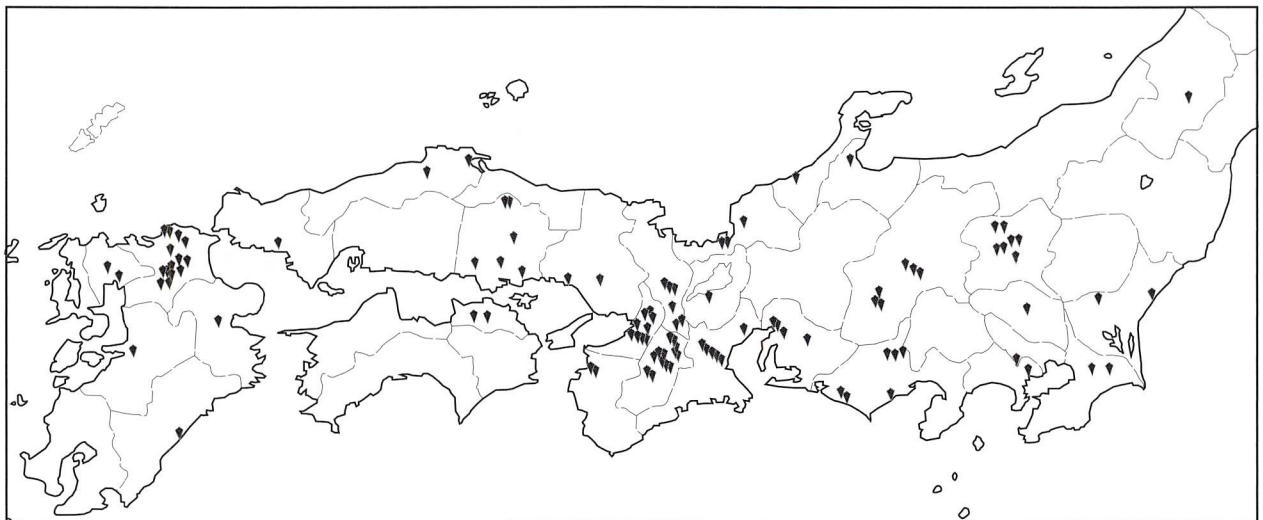
第4表 f字形鏡板

(5) 剣菱形杏葉

102遺跡、178点が存在する。

a 分 類

楕円形、或いは心葉形に剣菱形を組み合わせた2系統の形態が主流である。しかし、岡山県西郷面古墳や群馬県前二子古墳・同恵下古墳例のような変形型も存在する。また、和歌山県大谷古墳出土例は別作りの鈴7個、大阪府愛宕塚古墳では鱗を周囲に付している。



第6図 剣菱形杏葉

## b 展開

5世紀代では舶載品が多くを占めるが、同後半からは国内でも生産が開始されるようになる。新しくなるにつれて剣菱先端の尖りが強くなる・縁金具を留める鉾が密になる・飾り板を付したものが出現するなど装飾性が豊かになる。

## c 分布

群馬・近畿圏・岡山・福岡で集中的に分布している。

## d まとめ

102件の古墳の内訳は、前方後円墳39基・円墳55基・方墳1基である。出土数についても、前方後円墳と円墳の割合は近似している。1遺構あたりの出土数は、3点が47%でありほぼ半数を占め、次いで2点が22%となる。

なお、本例と組成となると言われているf字形鏡板を共伴する古墳は13古墳を数える。しかし剣菱形杏葉出土古墳は約97基存在するので、その共伴率は13%に過ぎない。これから見る限り、厳密な組成関係にはないことが伺われる<sup>(4)</sup>。

内容 遺構	遺構数	割合 (%)	点数	割合 (%)	1遺構当たり出土数												遺構数
					1点	%	2点	%	3点	%	4点	%	5点	%	6点<	%	
前方後円墳	39	38	84	47	0	0	6	32	8	42	1	5	2	11	2	11	19
円墳	55	54	85	48	3	19	1	6	9	56	1	6	2	13	0	0	16
横穴	2	2	3	2	0	0	1	100	0	0	0	0	0	0	0	0	1
その他	2	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明	4	4	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	102	100	178	100	3	8	8	22	17	47	2	6	4	11	2	6	36

○不明は、円墳に含めた。○出土点数を特定できないものについては1点として数えた。○その他は、方墳・土壇各1である。

第5表 剣菱形杏葉

## (6) 鈴杏葉

89古墳などから150点が確認されている。これには、出土地不明な資料43件55点が含まれている。

### a 分類

鈴杏葉は、剣菱形杏葉に3ないし5個の鈴を付与したものである。初期には二鈴杏葉も存在



第7図 鈴杏葉



したようである。鈴数は三鈴杏葉が26点、五鈴杏葉が11点であり前者が圧倒的に多い。

## b 展開

5世紀後半に出現し、6世紀後半には消滅する。剣菱形杏葉に5個の鈴を付したものが祖型となろうが、直ぐに3鈴のものが出現した。五鈴杏葉に比して三鈴杏葉が遅くまで存続した。

## c 分布

福島県から佐賀県までに存在しているが、関東北部および東海に比較的集中して分布している。畿内を含め西日本では、極めて希薄な分布となっているのが特徴である。

## d まとめ

鈴杏葉については、永沼律朗の「鈴杏葉考」(永沼1983)と斉藤弘の「鈴杏葉の分類と編年について」(斉藤1984)に詳しい。両者は主に形態や珠文の数やその配される位置に注目して編年を組み立てているが、結果として両者の編年観は整合していない。変遷の概要は、新しくなるにつれて(1)下半部が長くなる。(2)珠文の数が増加する。(3)鈴にも文様が付される。これが認められるとするならば、永沼案が有利と思われる。

鈴杏葉、特に五鈴杏葉が鈴付の剣菱形杏葉を祖型としたことは十分に考えられる。鈴杏葉の大多数を占める三鈴杏葉がその影響を強く受けていることは間違いのないであろうが、鑄造馬具という視点で捉えれば、三環鈴を強く意識したものと思われる。三環鈴が馬具として装着されるとき、装着を容易にするために立間を追加したものであり、用途を代替しているものと考えられる。

鈴杏葉は福島県いわき市から佐賀県武雄市の範囲に認められる。しかし、均一に認められる訳ではなく、茨木・栃木・群馬の北関東と長野南部・静岡西部・愛知の中部高地から東海にかけて濃密に分布している。1遺跡から出土する数は1～5個であり、鈴の数は大多数が3個である。なお、1古墳から出土する鈴杏葉には、同范のものがある(さきたま稲荷山古墳3例のうち2例)。

内容 遺構	遺構数	割合 (%)	点数	割合 (%)	1遺構当たり出土数												遺構数	
					1点	%	2点	%	3点	%	4点	%	5点	%	6点<	%		
前方後円墳	16	18	32	21	3	25	2	17	7	58	0	0	0	0	0	0	0	12
円墳	27	30	58	39	7	30	3	13	12	52	0	0	1	4	0	0	23	
横穴	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
その他	2	2	4	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
不明	43	48	55	37	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
合計	89	100	150	100	10	29	5	14	19	54	0	0	1	3	0	0	35	

○不明は、円墳に含めた。○出土数を特定できないものについては1点として数えた。○1遺構あたりの出土数は点数が確定しているのみの数である。○その他は、方墳と土壙各1である。

第6表 鈴杏葉

## (7) 心葉形鏡板・杏葉

93古墳などで鏡板28点・杏葉157点の計185点が確認されている。

### a 分類

ハート形とも言われている。十字文・三葉文・忍冬文などの模様が表現され、それぞれ系譜を異にしている。また、終末期には仏像の光背と同様な意匠を施したものもある。

### a 分類

忍冬文を主なモチーフとするがその形態は極めて多様である。鐘形との分類が明確ではない。

### b 展開

6世紀中葉から7世紀前半まで展開する。

### c 分布

北関東に集中する傾向がある。中国・四国及び北部九州では確認されていない。比較的馬具出土例の多い長野や静岡での検出例が少ないのが特徴であろうか。

### d まとめ

29古墳などで確認されているが、このうち鏡板と杏葉を共伴したのは1基のみである。出土点数で見ると鏡板1点と杏葉80点の計81点が確認されているが、後者が圧倒的に多い。その理由は前述したとおりであるが、それ以外にも鏡板の装飾が胸繫・尻繫のそれよりも早く廃れた為だと思われる。

墳形	種類	遺構数	計	割合%	点数	%	合計	%
前方後円墳	鏡板	0	7	24	1	1	23	28
	杏葉	6			22	27		
	鏡・杏	1			—	—		
円墳	鏡板	0	16	55	0	0	47	58
	杏葉	16			47	58		
	鏡・杏	0			—	—		
横穴	鏡板	0	0	0	0	0	0	0
	杏葉	0			0	0		
	鏡・杏	0			—	—		
その他	鏡板	0	2	7	0	0	7	9
	杏葉	2			7	9		
	鏡・杏	0			—	—		
不明	鏡板	0	4	14	0	0	4	5
	杏葉	4			4	5		
	鏡・杏	0			—	—		
合計	鏡板	0	29	100	1	1	81	100
	杏葉	28			80	99		
	鏡・杏	1			—	—		

○墳形不明は、円墳に含めた。

第11表 棘葉形鏡板・杏葉

## 2 まとめ

### (1) 遺構別各種装飾馬具の出土割合(第12・13表)

第12表は、遺構別各種装飾馬具の出土割合を示したものである。装飾馬具は、伝世品が多く出土地を特定できないものが多い。特にその数が顕著なのが鈴杏葉の55点であり全体の37%を占める。馬鐸の20点も比較的多く14%を占める。第13表は第12表の「横穴・その他・不明」を削除して、前方後円墳と円墳だけの割合を示したものである。これによれば各装飾馬具の出土割合は、前方後円墳が27%~47%、円墳が53%~73%の範囲に収まる。平均すると前者が36%、後者が64%であり各種装飾馬具全体の出土割合は、前方後円墳が円墳の1/3程度である。これは前方後円墳と円墳の総数の差に起因するが、それでも円墳が前方後円墳の約2倍の装飾馬具を出土する事実は注目しておいて良いように思われる。

特に前方後円墳からの出土率が低い、換言すれば円墳からの出土率が高いのは馬鐸と鐘形・棘葉形である。馬鐸は、出土遺構不明の資料が多いのが影響していることも考えられるが、より多くの出土遺構不明の鈴杏葉が相応の割合を示していることを考えると理解できない。馬鐸は、どちらかと言うと円墳に多く副葬された遺物と言う事になるのであろうか。それに対し鐘形と棘葉形は、前方後円墳の築造がピークを過ぎた後に展開した資料の故の現象なのであろう。

何れにしろ、前方後円墳と円墳によって各種装飾馬具がそれぞれ副葬される割合に変化が見られるようなデータは得られない。

### (2) 各種馬具と出土古墳の規模(第13図・第14表)

各装飾馬具が出土する前方後円墳の最小は17m~45m(平均28m)・最大が95m~120m(平均105m)、円墳の最小は8m~17m(平均12m)・最大が35m~84m(平均57m)である。

遺構	種類	遺構数	割合%	点数	割合%
前方後円墳	(1) 馬鈴	40	26	113	34
	(2) 馬鐸	14	20	39	27
	(3) 環鈴	15	33	17	28
	(4) f字形鏡板	18	35	35	34
	(5) 剣菱形杏葉	39	38	84	47
	(6) 鈴杏葉	16	18	32	21
	(7) 心葉形鏡板・杏葉	29	31	62	34
	(8) 楕円形鏡板・杏葉	28	31	74	41
	(9) 花形鏡板・杏葉	9	43	26	51
	(10) 鐘形鏡板・杏葉	7	24	23	28
	(11) 棘葉形鏡板・杏葉	6	21	21	26
小計		221	29	526	34
円墳	(1) 馬鈴	83	53	137	41
	(2) 馬鐸	34	49	75	52
	(3) 環鈴	26	58	32	52
	(4) f字形鏡板	26	50	52	50
	(5) 剣菱形杏葉	55	54	85	48
	(6) 鈴杏葉	27	30	58	39
	(7) 心葉形鏡板・杏葉	51	55	107	58
	(8) 楕円形鏡板・杏葉	49	55	88	49
	(9) 花形鏡板・杏葉	10	48	22	43
	(10) 鐘形鏡板・杏葉	16	55	47	58
	(11) 棘葉形鏡板・杏葉	16	55	46	58
小計		393	51	749	48
横穴	(1) 馬鈴	12	8	17	5
	(2) 馬鐸	4	6	6	4
	(3) 環鈴	0	0	0	0
	(4) f字形鏡板	2	4	4	4
	(5) 剣菱形杏葉	2	2	3	2
	(6) 鈴杏葉	1	1	1	1
	(7) 心葉形鏡板・杏葉	3	3	6	3
	(8) 楕円形鏡板・杏葉	0	0	0	0
	(9) 花形鏡板・杏葉	0	0	0	0
	(10) 鐘形鏡板・杏葉	0	0	0	0
	(11) 棘葉形鏡板・杏葉	2	7	3	4
小計		26	3	40	3
その他 (土壙・方墳・祭祀 遺跡・住居跡など)	(1) 馬鈴	1	1	1	0
	(2) 馬鐸	4	6	5	3
	(3) 環鈴	2	4	2	3
	(4) f字形鏡板	3	6	6	6
	(5) 剣菱形杏葉	2	2	2	1
	(6) 鈴杏葉	2	2	4	3
	(7) 心葉形鏡板・杏葉	0	0	0	0
	(8) 楕円形鏡板・杏葉	4	4	9	5
	(9) 花形鏡板・杏葉	1	5	1	2
	(10) 鐘形鏡板・杏葉	2	7	7	9
	(11) 棘葉形鏡板・杏葉	0	0	0	0
小計		21	3	37	2
不明	(1) 馬鈴	20	13	69	20
	(2) 馬鐸	13	19	20	14
	(3) 環鈴	2	4	10	16
	(4) f字形鏡板	3	6	6	6
	(5) 剣菱形杏葉	4	4	4	2
	(6) 鈴杏葉	43	48	55	37
	(7) 心葉形鏡板・杏葉	10	11	10	5
	(8) 楕円形鏡板・杏葉	8	9	8	4
	(9) 花形鏡板・杏葉	1	5	2	4
	(10) 鐘形鏡板・杏葉	4	14	4	5
	(11) 棘葉形鏡板・杏葉	5	17	10	13
小計		113	15	198	13
合計	(1) 馬鈴	156	100	337	100
	(2) 馬鐸	69	100	145	100
	(3) 環鈴	45	100	61	100
	(4) f字形鏡板	52	100	103	100
	(5) 剣菱形杏葉	102	100	178	100
	(6) 鈴杏葉	89	100	150	100
	(7) 心葉形鏡板・杏葉	93	100	185	100
	(8) 楕円形鏡板・杏葉	89	100	179	100
	(9) 花形鏡板・杏葉	21	100	51	100
	(10) 鐘形鏡板・杏葉	29	100	81	100
	(11) 棘葉形鏡板・杏葉	29	100	80	100
合計		774	100	1,550	100

第12表 遺構別出土装飾馬具の割合

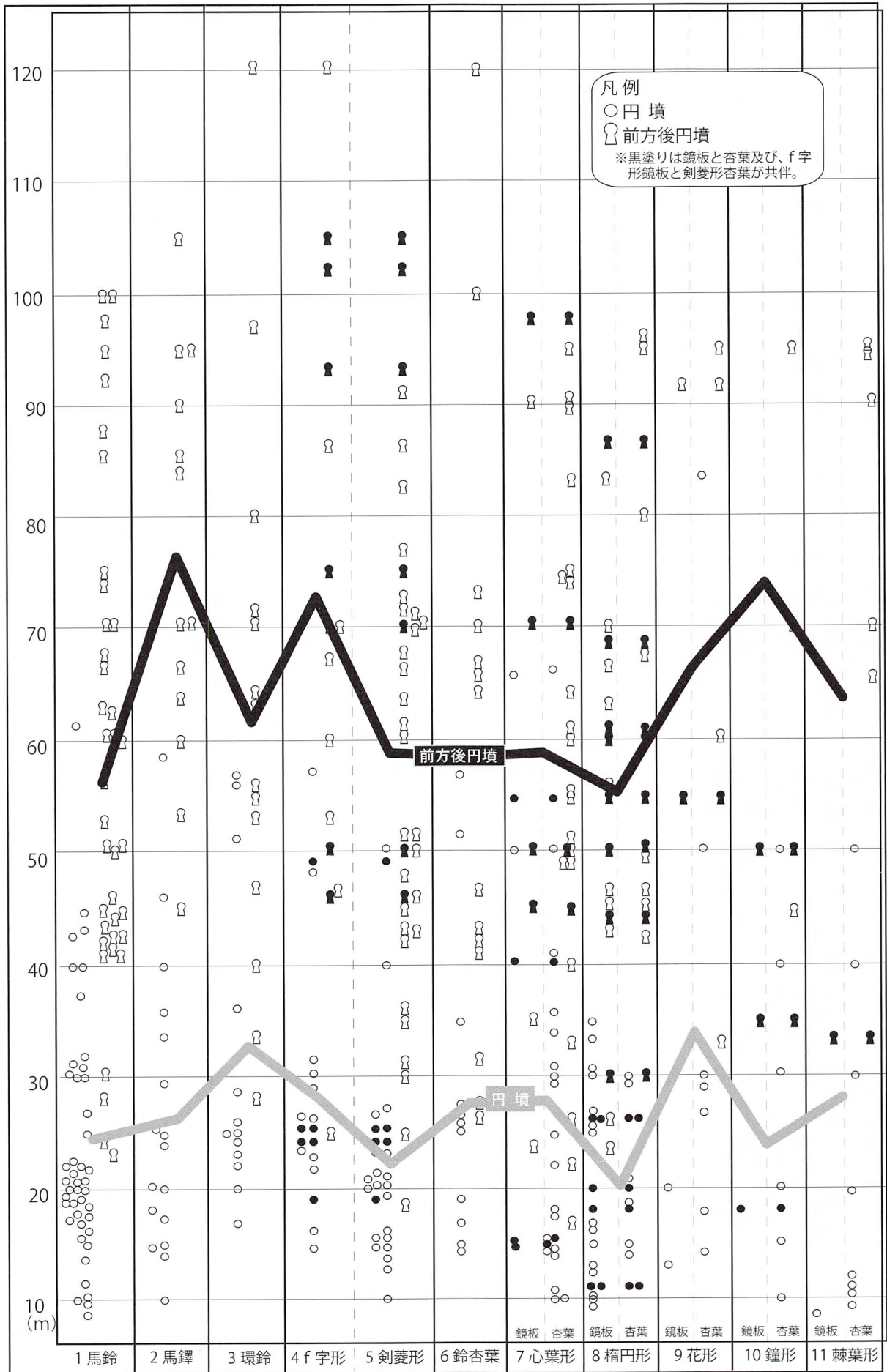
遺構	種類	遺構数	割合%	点数	割合%
前方後円墳	(1) 馬鈴	40	33	113	45
	(2) 馬鐸	14	29	39	34
	(3) 環鈴	15	37	17	35
	(4) f字形鏡板	18	41	35	40
	(5) 剣菱形杏葉	39	41	84	50
	(6) 鈴杏葉	16	37	32	36
	(7) 心葉形鏡板・杏葉	29	36	62	37
	(8) 楕円形鏡板・杏葉	28	36	74	46
	(9) 花形鏡板・杏葉	9	47	26	54
	(10) 鐘形鏡板・杏葉	7	30	23	33
	(11) 棘葉形鏡板・杏葉	6	27	21	31
小計		221	36	526	41
円墳	(1) 馬鈴	83	67	137	55
	(2) 馬鐸	34	71	75	66
	(3) 環鈴	26	63	32	65
	(4) f字形鏡板	26	59	52	60
	(5) 剣菱形杏葉	55	59	85	50
	(6) 鈴杏葉	27	63	58	64
	(7) 心葉形鏡板・杏葉	51	64	107	63
	(8) 楕円形鏡板・杏葉	49	64	88	54
	(9) 花形鏡板・杏葉	10	53	22	46
	(10) 鐘形鏡板・杏葉	16	70	47	67
	(11) 棘葉形鏡板・杏葉	16	73	46	69
小計		393	64	749	59
合計	(1) 馬鈴	123	100	250	100
	(2) 馬鐸	48	100	114	100
	(3) 環鈴	41	100	49	100
	(4) f字形鏡板	44	100	87	100
	(5) 剣菱形杏葉	94	100	169	100
	(6) 鈴杏葉	43	100	90	100
	(7) 心葉形鏡板・杏葉	80	100	169	100
	(8) 楕円形鏡板・杏葉	77	100	162	100
	(9) 花形鏡板・杏葉	19	100	48	100
	(10) 鐘形鏡板・杏葉	23	100	70	100
	(11) 棘葉形鏡板・杏葉	22	100	67	100
合計		614	100	1,275	100

第13表 前方後円墳と円墳における出土装飾馬具の割合

前方後円墳の最小のなかで特に小規模なのは心葉形杏葉を出土した17mの岐阜県昼前車塚古墳と剣菱形杏葉を出土した18mの大阪府軽里4号墳である。最大なのは、馬鐸を出土した45mの京都府物集女車塚古墳であり、他の装飾馬具を出土した最大前方後円墳の規模を圧倒している。

円墳の最小のなかで特に小規模なのは、10mにも満たないものもある。最大なのは、花形杏葉を出土した84mの栃木県愛宕塚古墳である。しかし本古墳と2番目に大きい栃木県飯塚2号墳(51m)は共に帆立貝式であり、平均墳長を押し上げている。

各種装飾馬具を出土した前方後円墳の平均で見ると馬鐸・f字形鏡板・鐘形が70m以上であり、円墳では環鈴・花形が30m以上であり、それぞれ共に他の馬具に比較して大規模な古墳で出土している。いっぽう剣菱形杏葉



第13図 各種馬具と出土古墳の規模 ※折線は各裝飾馬具を出土した古墳の平均規模である。

を出土した大阪府軽里4号墳や心葉形杏葉を出土した岐阜県昼前車塚古墳は墳長20mに満たない小規模前方後円墳である。また円墳に関しては10m程度の小墳から馬鐸・心葉形杏葉・楕円形杏葉・鐘形杏葉・棘葉形杏葉などが出土している。以上のことから墳形・規模に「ランク付け」があったとは思われない。

各種馬具	墳形	最 小		最 大		平均 墳長(m)
		墳長(m)	古墳名	墳長(m)	古墳名	
(1) 馬鈴	前方後円墳	21	福島県高松山古墳	100	千葉県金鈴塚古墳	57
	円墳	9	群馬県坂古墳	61	群馬県雷電神社古墳	24
(2) 馬鐸	前方後円墳	45	京都府物集女車塚古墳	105	群馬県保渡田薬師塚古墳	76
	円墳	10	福島県小池原8号墳	58	長野県塚原6号墳	26
(3) 環鈴	前方後円墳	28	福岡県森原1号墳	120	埼玉県稲荷山古墳	60
	円墳	17	長野県金鎧山古墳	57	栃木県雀宮牛塚古墳	33
(4) f字形鏡板	前方後円墳	25	大阪府七ノ坪古墳	120	埼玉県稲荷山古墳	72
	円墳	15	島根県上島古墳	57	栃木県雀宮牛塚古墳	28
(5) 剣菱形杏葉	前方後円墳	18	大阪府軽里4号墳	105	群馬県保渡田薬師塚古墳	59
	円墳	10	福岡県浦谷c-6号墳	50	福井県円山塚古墳	23
(6) 鈴杏葉	前方後円墳	26	群馬県洞山古墳	120	埼玉県稲荷山古墳	58
	円墳	15	石川県滝4号墳	57	栃木県雀宮牛塚古墳	27
(7) 心葉形鏡板・杏葉	前方後円墳	17	岐阜県昼前車塚古墳	97	群馬県綿貫観音山古墳	59
	円墳	10	京都府西外古墳	66	長崎県笹塚古墳	27
(8) 楕円形鏡板・杏葉	前方後円墳	24	島根県岡田山1号墳	95	千葉県金鈴塚古墳	55
	円墳	10	岐阜県熊田山北4号墳	35	愛知県岡崎市内2号墳	20
(9) 花形鏡板・杏葉	前方後円墳	33	群馬県五代大日塚古墳	95	千葉県金鈴塚古墳	67
	円墳	14	群馬県松林山台14号墳	84	栃木県愛宕塚古墳	34
(10) 鐘形鏡板・杏葉	前方後円墳	35	奈良県三里古墳	95	千葉県金鈴塚古墳	64
	円墳	10	京都府西外古墳	50	福井県丸山塚古墳	28
(11) 棘葉形鏡板・杏葉	前方後円墳	34	栃木県足利公園3号墳	99	千葉県金鈴塚古墳	75
	円墳	8	群馬県池田村史2号墳	50	福井県円山塚古墳	23
平 均	前方後円墳	28		105		64
	円墳	12		57		27

第14表 装飾馬具と古墳の種類と規模

## 2 装飾馬具の様相

### (1) 装飾馬具の製作地

装飾馬具は多様性を極めている。つまり、強い規格性を認めることができないことから排他的で一元的な工房の存在を想定しがたい。

それでも、原材料の入手・技術に裏打ちされた華麗さからその製作地は畿内と考えるのが合理的である。しかし実用馬具についての見解であるが松尾充晶は「今日では舶載品と国産品とといった大別2系列論では理解尽くせないことが自明である。例えば舶載される馬具は朝鮮半島の政治的変動を反映して故知が変化していくし、その半島内での地域性ですら排他的な独立性をもつわけではなく複雑な要素錯綜がみられる。かたや列島内で製作された馬具であっても、渡来系技術者による直接製作品、その技術系譜による二次製作品、さらに技術継承のない列島内既成技術での模倣品、列島内で創出された国産品、と様々なケースが想定される。もちろん列島内の技術系統も一つではない」(松尾2005)と言う。

また大刀を分析した滝瀬芳之は、飾大刀の製作地・製作集団は「そのすべてが畿内に存在したとは判断しにくい。需要の拡大にともない、地方に拠点を設けたと考えたい」(滝瀬1984)とした。また甲冑についても「畿内で集中的に生産した品が配布されたのか、ヤマト王権のコントロールのもとに各地の生産が展開したかのどちらかであろう」(文献失念)とその製作地の可能性を広い範囲で捉える考えも存在する。仮に倭王権の管理下に生産されていたとしても、その規制は決して強固なものではないと言えそうである。

## (2) 馬具と馬形埴輪の関係

以前、馬鐸と馬鐸装埴輪との関連を検討したことがあった。しかし両者の有機的な関連は、極めて希薄であるとの結論に至った。つまり馬鐸を副葬している古墳に造立されている馬形埴輪に馬鐸が表現されていないのである。その逆の例も多数存在した。このことから埴輪工人は、依頼主から「飾り馬を2体・馬子2体・農夫1体云々」程度の発注を受けて生産していたものと思われる。つまり馬装などの細部にまで指示を受けていた様子は見られない。工人が「飾り馬」を製作しようとして胸繫に「馬鐸」をとイメージすれば、馬鐸装埴輪が製作されたのである。更に云えば馬形埴輪に表現された馬鐸は、その殆どが忠実に表現されてはいない。工人は馬鐸を実見していないのである。

装飾馬具が威信財としての役割を有するのであれば、馬形埴輪に表現された馬装と出土馬具の不一致は何を意味するのであろうか。もし、その馬鐸が威信財として権威の象徴に成り得たのであれば埴輪にそれを表示し、誇示したのではないだろうか。しかしそのような事実はない。つまり、被葬者は自らの墓(寿陵)に樹立される埴輪のディテールに頓着しなかったのである。つまり埴輪を通して見るかぎり装飾馬具に威信財としての役割は、感じられないのである。

しかし、埴輪は単に概念化されたものかと言うと、そうでもなく忠実に再現されたと考えられる例も存在する。例えば群馬県成塚石橋2号墳出土の馬形埴輪の鏡板は星形で細部まで精緻に表現されおり、あたかも実物を模したように見受けられる。実際に同様な鏡板は確認されていないが、福岡県壱山古墳の彎曲のある楕円形鏡板が比較的類似している。また、群馬県諏訪下30号墳の馬形埴輪は方形鏡板を表現しているが、同白石二子山古墳ではこの稀少な方形鏡板が出土している。更に、蛇行状鉄器を表現した馬形埴輪を出土した埼玉県酒巻14号墳例も挙げることができる。本古墳に蛇行状鉄器が副葬されているのかは不明であるが、その寡少性を勘案すると存在しない可能性が高い。しかしこの馬形埴輪に表現された蛇行状鉄器は、鞍への取り付けなどが的確に表現されており、埴輪製作工人がこの馬装を実見した可能性は高い。当古墳から至近距離(約8km)にある埼玉將軍山古墳からは蛇行状鉄器が出土していることから、少なくとも酒巻14号墳主は、先の古墳主が蛇行状鉄器を設えた馬装を見知っていたのである。つまり、自らの儀式でそれを借用したり、あるいはそれを装着した將軍山古墳主の儀式に参列した事があったのかも知れない。只単に憧れの馬装を埴輪群に表現しただけかも知れない。何れにしても酒巻14号墳主は、蛇行状鉄器を表現した馬装に強い拘りがあったことがわかる。当古墳に樹立されていた盤領・筒袖を着た渡来人を模した埴輪の存在が気にかかる。彼が蛇行状鉄器の招来に関わっていたのであろうか。

また馬装に限らず、人物を忠実に表現したと思われる埴輪群像に千葉県姫塚古墳例がある。ここに表現された人物埴輪群は、細部を違えて表現されており個人を特定しているかのように見受けられる。

## 3 装飾馬具は威信財と成り得るか

倭王権は、大王を中心とした豪族連合である。大王は有力氏族によって擁立された。そして有力氏族は、畿内各地の氏族によって輪番されたと捉えられている。更に大王は諸国の豪族関係者を上番させ、支配組織を確立させ全国統一を図っていった。各地方豪族は、許可されて大

王と同じ前方後円形の墳墓を採用したと考えられていることから、支配関係を“前方後円墳体制”と呼んでいる。

### (1) 下賜と威信財

卑弥呼に銅鏡などを下賜した魏帝曹芳は「国中の人にしめせ」と指示した。卑弥呼もそれや何らかのものを同様な意図で地方の首長に下賜したのであろうか。だとすれば卑弥呼は地方の首長に魏帝、地方の首長は在地民に卑弥呼が後見人として存在することを顕示し、自らの政治活動を優位に行うのに有用な道具として下賜品を利用したことになる。つまりこの場合、下賜品は威信財となったことになる。

「威信」とは、「畏敬の念を起こさせる徳の力を信じて任せること」つまり「威厳があつて忠実なこと」(上田1993)である。つまりそのものが共同幻想によってそのように感じられるのであれば、それは何でも良いのである。つまり下賜品でも能動的に入手したものであれば特異なものであれば威信の効果は期待できるのである。「俺は金製の馬具を持っている。すごいだろう」と見せびらかせ、「あの人は何て素晴らしい物を持っているのだろう」と感嘆し、その人を羨望すればそれは威信のアイテムになろう。しかし、本稿では「威信財」を次のように狭義に定義する。「威信財とは大王ないし畿内豪族から下賜されたが故に、被下賜者はそれを在地での政治活動において実用的で有意なものとする」。「政治活動」や「実用的」についても定義する必要があるが、ここでは問わないことにする。つまりあるモノが威信財となるには、それが下賜品であることが条件であり、そのモノの背景に上位の支配者の存在を感じさせるものでなければならない。単に、それが稀少・貴重な物であるだけならばそれは「威儀具」とし、便宜的に「威信財」とは区別しておきたい。もし鏡の分有が下賜によるものだとすればそれは威信財となるが、だとすれば古墳時代の当初より相応の関係が存在したことになる。

### (2) 装飾馬具は下賜品か

馬具生産工人を管掌していたのは畿内豪族だと仮定しているが、4世紀代の初期倭王権を支えていたのは大伴・物部・葛城の各氏である。このうち大伴・物部氏は6世紀まで権勢を誇っていたが、葛城氏は5世紀中頃には衰退した。この頃、平群氏は台頭したが5世紀末には衰退する。また巨勢氏は、その後台頭し6世紀初頭に活躍する。新興蘇我氏は、6世紀代に活躍した。このような状況と各馬具の変遷から該当する氏族と馬具の関連を想定しても彼らの本願地に特定の馬具の分布は見られない<sup>(5)</sup>。

ところで装飾馬具に限らず古墳に副葬されるような優品が下賜品であり、威信財であるという代表的な説を紹介しておこう。威信財のなかでも特に冠・帯金具・履などの服飾、挂甲など武具や馬具など貴重な文物は、倭王権から下賜されたものであるとの見解が存在する。石山勲は「(九州出土の環鈴に限れば、渡海軍の一隊を率いる将に対して)中央政権から、その地位の証・象徴として与えたものと推定したい」(石山1980)とし、永沼律朗は「東国に分布する鈴杏葉や鏡板は、東国首長が若き日に王宮におもむき奉仕した際に賜わったもの」と考えている(永沼1983)。また、坂本美夫は「f字形鏡板付轡+剣菱形杏葉は、ヤマト政権の支配圏の伸長が地域勢力との同盟、抗争を経て確立された状況を裏付けたもので、権力側から従属勢力への馬具の供与が確認される威信財中の威信財である」と考えている(坂本1996)。また冠帽を検討した高橋直美は、「有力首長たちが力量を示すための威信財」(高橋1995)とした。また、桐原健は鳴り物

の鑄造馬具の地方への流通を次のように考えている。「国造の子女であり巫女である采女が宮廷の神及び天子に奉仕をする。そして任期満了後帰国するに際してはそれぞれの国で宮廷の神を祀る事を強請され、その神を祀る採物を与えられた。それが鈴鏡であり鈴釧であり環鈴の類である」(桐原1974)とした。これも下賜説の一種であろうか。

一方、非下賜・非威信財説も存在する。威信財であるとするれば最も価値の高いと考えられる渡来文物について小林行雄は「異国の器物は異国の文化との結びつきにおいて憧憬の的となり、畿内の大王も地方の首長も、ともに協力してその確保に奔走した」(小林1962)とした。装身具について検討した安井良三も朝鮮半島の事例とは異なり日本ではセットとして存在しないことから、日本での装身具は、宝器的・記念品的なもの(安井1967)として威信財としての役割に否定的な考えを示した。更に高田貫太も垂飾付耳飾などの渡来文物の入手方法について「少なくとも倭王権が一元的に朝鮮半島系装身具を入手し、それを各地域社会に分与したとみる考古学的根拠は希薄である」とし、更に「各地域権力は多様かつ錯綜した交渉ルートを駆使してその受容に努めたはずである」(高田2006)としている。本説を容認する例として全国で2例しか発見されていない馬冑や同10例程度の蛇行状鉄器などの稀少な渡来系文物がある。これらは畿内中枢からの出土例はないことから、倭王権からの下賜とは考えられない。在地首長による独自のルートによって入手したことを推定させる<sup>(6)</sup>。

### (3) 装飾馬具は下賜品ではない

ここで装飾馬具が下賜されたものではないこと、つまり威信財とは成り難い可能性を指摘しておく。

①同種の鏡板と杏葉が共伴しない例が多い。以下、共伴割合を提示するとf字形鏡板と剣菱形杏葉が40%、心葉形の鏡板と杏葉が14%、楕円形のそれが21%を示すに過ぎない。共伴例は、極めて低いのである。もし下賜品であるならば、セットで下賜するのが原則ではないだろうか。製作者は、組成を意識したことは間違いないであろう。参考までに馬鐸と共伴した例を提示すると以下ようになる。馬鐸と組成となる馬具は、生産時期の異なる花形・鐘形・棘葉形を除くと何でも良かったのであり、厳密な組成関係は認められない。

遺構	1 鈴	2 馬鐸	3 環鈴	4 f字	5 剣菱	6 鈴杏	7 心葉	8 楕円	9 花形	10 鐘	11 棘葉	合計
前方後円墳	2	／	3	2	4	1	1	3	1	0	0	17
円墳	5	／	3	2	2	4	1	0	0	0	0	17
他	0	／	1	1	0	1	2	0	0	0	0	5
合計	7	／	7	5	6	6	4	3	1	0	0	39

第15表 馬鐸と共伴した馬具

②「前方後円墳体制」の秩序に基づいて古墳が存在するのであれば、円墳より前方後円墳主、小古墳より大古墳主により優品が下賜されると思われるが、必ずしもそのような出土状態は認められない<sup>(7)</sup>。

③各装飾馬具の分布は偏向・粗密の地域差はそれぞれ存在するが、大局的には全国に散在する。それでもこれは各地にそれぞれの製作地があると捉えるよりも、その多くは畿内にあると捉えるのが合理的であろうか。それを各地の豪族が畿内に参内する機会を得て入手したものと考えたい。但し、装飾馬具の種類はそれぞれ多様性を究め、官営工房で排他的に一括管理・集中生産をしているようには感じられない。

④副葬された馬具とそこに樹立された馬形埴輪の馬装が一致しない場合が多い。装飾馬具が



下賜品・威信財であるならば、馬形埴輪にもその馬装を表現しその事実を顕彰するものと思われるがそのような事象は希薄である。つまり仮に馬鐸を下賜されていないとしても馬鐸装馬形埴輪を樹立しているような状況も想定される。これについても何らお咎めはないのである<sup>8)</sup>。

以上の事から装飾馬具は下賜品、つまり威信財であると言う見解には疑問を感じざるを得ない。むしろ、自らの顕彰を文字に刻んだ国宝金錯名鉄剣と同様に、装飾馬具などは何らかの機会を得て能動的に入手した可能性を指摘したい。つまり、これらの品々は思い出や自慢の品以上の物ではなかったが、稀少性故に結果的には威信の効果も期待できたであろう。

#### (4) 身分を表徴するもの

古墳時代前期、邪馬台国は必要に応じて諸国に「長官」などを置き行政に当たさせた。そして同後期には国造制が成立すると考えられる。大王は、諸国に国造を配することになるが、これらの官人には当国の最有力者が任命された。卑弥呼、あるいは大王は任命に際し、その証として何かを授与したのであろうか。恐らく、宣旨だけではないだろうか。もし仮に下賜品が存在したとすれば、卑弥呼は当時最も価値が高かった銅鏡を授与したことが考えられる。大王の時代には、神仙思想は下火となり必然的に銅鏡への憧憬も薄らぐが、何らかの下賜品は存在するものと思われる。その意図は、当時の支配形態が直接支配とは考えられないことから、有事の際の協力関係、消極的には非敵対関係を維持するための下賜に留まったものと思われる。

ところで甲斐貴光によれば「環頭大刀は、中国大陸の漢代に官人の身分を象徴するものとして発達してきた」(甲斐2011)と言う。また、新納 泉は「奈良時代や平安時代には天皇から将軍が『節刀』を授与されていた。節とは竹の節に由来する割符であり、中国では王が将軍に全権を委ねるシンボルのようなものであった。(改行) 古墳時代の支配者層は、『節』の原理をよく知っていたはずである。(中略) 古墳時代に刀と節が結びついていた確実な証拠はないが、権力を委ねるという意味で刀が用いられていたことは、十分に考えられる」(新納2011)と指摘している<sup>9)</sup>。また、瀧瀬芳之は、方頭大刀については古墳時代終末期に地方豪族が「官僚」として身分保証された証として授与されたものとして注目している(瀧瀬2102)。

#### (5) 副葬品の変遷と道教

死者に種々の品物が副葬されるのは、墓主が死後の世界においてそれを必要としたからである。副葬品、それは壺型を模した不老不死の世界で理想的な生活を営むための必需品であり、それは現世において墓主が最も大事にしていた品々であった<sup>10)</sup>。

始皇帝が不老不死の仙薬を求めて東海に浮かぶ神山に徐福を遣わせた時から暫く経った頃、北九州では甕棺墓が展開する。世界に類を見ない大きさを誇る甕棺は、亡骸をすっぽりと納めることができる。そして、後に我が国において三種の神器と称された鏡・剣・玉が副葬され、棺内には朱が撒かれた。これらの副葬品は、不老不死を実現するための神仙アイテムである。特に神仙曼陀羅を表現した鏡背の画像は、不老不死を実現するための重要なものであり、倭人垂涎の宝器であった。倭人は、これを求め甕棺に納めた。福岡県三雲南小路1号甕棺から35面、同須玖岡本甕棺から32面が出土しており、収集への狂信ぶりには驚かされる。更に甕棺には、天と地を結ぶ「生命の樹」を思わせる放射状文や家屋と推定される線刻が描かれることがある(大庭2011)。これも神仙思想の影響であろう。つまり壺の中には別世界が存在するという神仙

思想を倭的に具現化した甕棺の導入は、第1次道教的宗教改革であったのである<sup>(11)</sup>。棺に「壺」を採択した段階である。

次いで古墳時代になると第2次道教的宗教改革が行われることになる。それを行ったのが卑弥呼であり、彼女は前方後円形の墓を最初に採用した人物でもある。世界の王墓が幾何学的な方形を呈することを考えると、この複雑な形態は何かを具象化したものと考えた方が理解し易い。道教世界において壺の中には現世とは別の理想的な世界(「壺中の天」)が存在したこと、不老不死の仙人が住む島が壺の形であったこと(蓬壺と呼ばれた)から、前方後円形はこの壺を模したものと理解している。墓所に「壺」型を採択した段階である。

卑弥呼の「鬼道」は、暗闇に包まれた死後の世界しか知らなかった倭人に不老不死の世界が存在することを説く新興宗教であった<sup>(12)</sup>。卑弥呼は宗教改革を行ったのである。瞬く間に全国に波及した前方後円墳は、この宗教観・世界観の普及を意味する。

ところで古墳への副葬品は、時期によって変化が見られる。前期古墳には弥生甕棺墓と同様な鏡を中心とした祭祀遺物が副葬され、墳丘には円筒埴輪や器台に載せた壺を模した朝顔型埴輪が樹立される。これは壺形の前方後円墳に埋葬され、神仙になるためのアイテム(銅鏡など)を所有していれば不老不死を実現できると観念されていた段階(第2 a 段階)である。その後、馬具<sup>(13)</sup>や武器・武具などの鉄製品が副葬され、新たに器材埴輪が樹立される。神仙世界での生活が具体的にイメージされはじめ、種々の資材も必要であると意識されてきた段階である(第2 b 段階)。そして最後には、現世での生活をそのまま神仙世界でも再現できるように意図するのである。現世と同様な生活財が副葬され、現世でも実際に行った夢のような理想的な場面を再現した人物や動物群などの埴輪群が樹立される。なかには古墳主さえも表現したものがあり、来世での生活を夢想する段階である(第2 c 段階)。神仙思想に伴う抽象的な他界観が具象(具体)化する経過が、副葬品の変遷の過程である。

つまり、第2 c 段階は、神仙思想における他界観念の一つの到達点である。副葬品は来世における生活の必需品であり、埴輪群像はあるべき生活場面(現世における理想、あるいはメモリアルな場面)を表現しているのである。神仙世界での生活を目途した埴輪群像は、観念化・固定化していったであろうが、基本的には墓主の要望により何をどのように配置されるかは個々に任されていたのである。それが埴輪群像である。始皇帝が地下王宮を設え、兵馬俑を構築したのと同様な意図によるものである。古墳時代を象徴する前方後円墳の形、副葬品、埴輪群像の意味は、一体化されたものであり統一的に捉えなければならない。

前方後円墳の諸事象を政治的な意味合いで理解しようとするのが一般的な見方である。そして、大きな成果を上げているのも事実であろう。しかし、前方後円墳は墓であり一次的には文化的な事象であり、政治的な産物のみではないことを意識しておかなければならない。「前方後円墳の時代」は理解できるが、「前方後円墳体制」は容認しがたい。

前方後円墳の終焉は、新たな他界観の出現を意味する。継体16年(522)、『扶桑略記』によると渡来系氏族が「草堂に仏像を安置・礼拝した」(廣岡2011)ことが知られている。仏教伝来である。道教アイテムの粹であった銅鏡にも古くより仏獣鏡<sup>(14)</sup>が存在した。そして奈良時代になると400年以上続いた古墳時代の事象や伝承を集成して神話などが編まれた。古墳時代は前方後円墳に象徴されるような道教思想に席卷され、それを倭的に取り入れた時代である。その時代を記

した神話は、道教の影響を色濃く残している。神話、つまり「神道」は道教と同化したために両者を区別することは容易でなくなってしまった。今日、道教が私達の意識から脱落してしまったのは、神道に取って代わってしまったからなのである。

## おわりに

本稿を草するにあたり利根川章彦・関義則の両氏には基礎的な知識から細部に至るまで様々なご教示を頂いた。しかし、それに応える能力も気力もないのは、何とも申し訳ない。また下記の方々にもご協力・ご教示を賜った。20数年前にお世話になった方は、その事実をお忘れの事と存じます。当時のご厚意に対し、ご芳名を掲示させて頂き謝意を表することができ安堵している。改めて、厚くお礼申し上げます。

畏友新屋雅明氏が逝去された。病床に原稿を持ち込んで苦闘した氏の生き様をしっかりと胸に刻みたい。愛娘を遺して逝った氏を思うと胸が苦しい。

伊賀高弘・泉 武・大谷 徹・久保哲正・佐藤晃一・末木啓介・外尾常人・滝瀬芳之  
中村杏葉・日栄智子・福田 昭・藤田三郎・水谷壽克・山内紀嗣・Nгуêñ Dỉa Đôí

## 《註》

- (1) 径1cm以下の小鈴は、馬鈴からは除外した。
- (2) 馬鈴に限らず鏡板を除いた馬具出土の遺跡数や個数の集成は、複数の文献から一覧表を作成して基礎資料とした。遺跡数には、収集者数(遺跡名不明)もそれに加えて数値化している。また個数については、その数を記していない場合は「1個」と換算して数値化した(他の馬具についても同様)。よって実際の出土は、相当数増加するものと思われる。
- (3) 帆立貝式古墳は、「円墳」に含めた。また墳形不明なもの多くは、円墳の可能性が高いものと考え「円墳」とした。以下同様である。
- (4) f字形鏡板と剣菱形杏葉は、その故地である加耶でも共伴しない例が多数存在する。
- (5) 畿内有力氏族と馬具との関わりについて、積極的に論じているのが桃崎祐輔氏である(氏の文献を入手できなかったため、これを紹介した松尾充晶「技術論からみた馬具研究史」[(松尾2005)]を参考に引用する)。以下、改変して孫引きしたために、誤謬の恐れがあることをお断りしておきたい。

○5世紀代：斉一性と規格化(大王権のもとで一元的に近い生産体制) ○6世紀代：多様化と新形式の創出(政権中枢の有力主要豪族[大伴・物部・蘇我・紀・巨勢])が個別の交渉ルートや工人編成を背景に生産。更にそれを関係の深い地方首長や傘下集団に贈与。大形f字は大伴氏主導、鐘形の国産化・花形の出現は物部氏主導) ○6世紀末～7世紀前葉：製作技法の斉一化(馬具生産は、親蘇我勢力に統合)であるとしている。

- (6) ここで埼玉古墳群を具体例にして記しておきたい。舶載品と考えられる馬冑と蛇行状鉄器を出土した唯一の古墳が埼玉将軍山古墳である。この古墳から僅か7km離れた場所に酒巻14号墳があり、本古墳からは半島系の筒袖衣を着た人物埴輪と蛇行状鉄器装着の馬形埴輪が出土している。この筒袖衣の人物は渡来人である。古墳主、或いは渡来人が将軍山古墳出土渡来品の将来に何らかの関わりをもったものと思われる。

ところで蛇行状鉄器を装着した馬形埴輪が出土した酒巻14号墳主は、それを所有していたのであろうか。儀式などにおいて馬装を整えるために将軍山古墳主から借用して挙行したことは考えられる。しかし、その真偽はどちらでも良い。ただ他界で理想的な生活するために、理想的な馬装を表現した馬形埴輪を必要としたのであろう。馬鐸に限らず実際の馬具より、それを表現した馬形埴輪が多いのはそのためである。

なお埼玉古墳群の始祖墳稲荷山古墳主の関係者を葬った礫床木棺墓から舶載品の帯金具や鉾が出土している。礫床墓主乎獲居は「武」の遣仕、或いは杖刀人首として大陸・半島に出仕したことがあったのであろうか。当古墳群は、成立の初期より半島との関わりを強く感じさせる。また酒巻古墳群周辺のとやま古墳(斎条古墳群)や大稲荷古墳群は埼玉稲荷山古墳に先行、つまりその故地になる可能性がある。

- (7) 装飾馬具などの優品が墳形や規模とは整合性が無いような状態で副葬されている事について関義則氏に次のようなご教示を得た。氏によれば「大王の元に上番する地方豪族の「格」が違うからである。つまり上番者達は、その報償として等しく同様な馬具などが授与される訳であるが、彼らは死後「格」に応じた墳形と規模の古墳を築造し、授与品が副葬されるためではないだろうか」と言う。
- (8) 墓主が樹立したかたのは馬そのものであり、馬装にはこだわる必要もない程、些末な問題であったのである。
- (9) 現在では、両刃を剣、片刃を刀と称して区別している。古墳時代には、8振(6振は刀・2振は剣)の銘文刀剣がある。しかし「剣」と記した例はなく、判読できる6振は全て「刀」と表しているが、国宝辛亥銘鉄剣は唯一の剣である。出現時期は、剣が先出し刀は後出する。大陸では、後世まで武官が携帯するのは「剣」であることから、これがその象徴であったことがわかる。
- (10) 明器、つまり副葬するためにだけ製作されたものは古墳時代には基本的に存在しない。副葬品は全て実用品である。ミニチュアの明器などは存在するが、これは渡来人によって将来したものと考えられる。古墳出土の特殊な器種の須恵器などは、集落からの出土例が稀少なことから明器とする考えもあるが、詳細に観察すれば使用痕跡を観察できる場合が多い。また副葬品として出土する鏡や武器・武具などは、集落から出土する事は基本的にないが、これらも紛れもなく現実の世界で使用されていた品々なのである。
- (11) 紀元前後、亡骸をそのまま甕に納めるという風習は、インドシナ半島やフィリッピンなどでも行われた。特にベトナム北部のドンソン期には青銅製の棺、中部のサーフィン期には100cmを越える大形甕棺が盛行している。漢帝国周辺での共通した事象である。また、弥生時代の墓は方形を基調とするが、これについても四神、つまり神仙思想を意識したものであるとの説がある。
- (12) この世界観は、甕棺の時代に獲得したが、それが列島に広く流布することはなかった。しかし、卑弥呼は巨大な前方後円形の塚を築造した。遣使の返礼として魏の皇帝から「汝好物」を与えられた。その中に銅鏡がある。ここで言う「汝」とは、卑弥呼個人ではなく甕棺に鏡などを副葬していた北九州に代表される倭人を指すのであろう。
- (13) 一義的に金びかの装飾馬具を副葬しなかった訳ではない。墓主が持っていきなかったのは馬そのものであった。馬は高速大量輸送が可能なるものであり、当時の人々にとって最も入手を希望したものであった。馬は垂涎の道具であり、その所有は最高のステータスであった。馬具に限らず武具・武器・工具などの鉄製品をおしげもなく副葬することはあってもさすがに馬を副葬するのは勇気はなかったようだ。
- (14) 仏像を表現した鏡は、三角縁神獸鏡(3世紀)にも見られる。しかし鏡は道教のアイテムであるために、それが普遍化することはない。

#### 《引用・参考文献》

- 尼子奈美枝 1991 「古墳時代後期の馬装の性格」『関西大学考古学等資料室紀要 第8号』 関西大学考古学等資料室
- 尼子奈美枝 2005 「馬具研究からみた古墳時代後期の階層性—馬具の所有形態と石室規模の相関関係から—」『馬具研究のまなざし』 古代武器研究会ほか
- 安藤 鴻基 1988 「房総古墳出土の馬具」『小台遺跡発掘調査報告書』 芝山墳輪博物館
- 青木 豊昭 1990 「丸山4号墳と馬具等出土遺物について—越前・若狭の馬具出土古墳の中での位置づ

けー』『福井県考古学学会 福井県考古学会誌』 第8号

- 石田 大輔 2011 「一夜塚古墳出土馬具の検討」『一夜塚古墳出土遺物調査報告書』朝霞市教育委員会
- 石橋 宏 2011 『柴又八幡神社古墳Ⅷ(2分冊 考察編)』葛飾区郷土と天文の博物館
- 石山 勲 1967 「環鈴の形態・年代と用途について」『金鈴 第20号』早稲田大学考古学研究会
- 石山 勲 1980 「九州出土の環鈴について」『古代探叢』一滝口宏先生古希記念考古学論集 早稲田大学出版部
- 岩崎 卓也 1990 『古墳の時代』歴史新書46 教育社
- 植田 隆司 1999 「内彎楕円形鏡板付轡の馬装」『龍谷史学』第111号
- 上田 万年 1993 『新大字典』講談社
- 宇野 慎敏 1991 「日本出土の冠帽とその背景」『九州上代文化論集』
- 内山 敏行 1996 「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』八雲立つ風土記の丘資料館
- 大庭 孝夫 2011 「弥生時代葬送儀礼の様相」『研究論集 36』九州歴史資料館
- 太田 博之 2010 「朝鮮半島起源の服飾・器物を表現する埴輪について」『古代 第123号』早稲田大学考古学会
- 大谷 宏治 1999 「静岡県内古墳出土の馬具の集成」『石ノ形古墳』袋井市教育委員会
- 岡林 孝作 1991 「冠帽」『古墳時代の研究 8古墳Ⅱ 副葬品』雄山閣
- 岡本 健一 1997 『企画展 さきたまに馬がやってきた!』埼玉県立さきたま資料館
- 岡安 光彦 1985 「6～7世紀の馬具」『考古学ジャーナル』No.257
- 岡安 光彦 1988 「心葉形鏡板付轡・杏葉の編年」『考古学研究』第35巻 第3号 考古学研究会
- 岡安 光彦 1995 「馬具一副葬古墳分布からみる一」『古墳はなぜつくられたのか』朝日新聞社
- 岡安 光彦 2003 「馬具生産と流通の諸画期」『七世紀研究会シンポジウム 武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会
- 小沢 洋 1984 「木更津市矢那大原古墳出土の二環鈴」『君津郡史文化財センター研究紀要』Ⅱ 君津郡市文化財センター
- 小野山 節 1979 「鐘形裝飾付馬具とその分布」『MUSEUM』No.339
- 小野山 節 1990 『日本馬具大鑑 第1巻古代上』日本中央競馬会
- 甲斐 貴充 2011 『国際交流展 覇者の愛した煌めき 一六世紀代の日韓金銅製品一』宮崎県立西都原考古博物館
- 片平 雅俊 1998 「馬具集成をおえて」『十王町民俗資料館紀要』第7号 十王町民俗資料館
- 上林 史郎 2003 「古墳出土の冠一広帯二山式冠を中心に一」『古代近畿と物流の考古学』学生社
- 河原 隆彦 1982 「第3節 馬鐸の出土地及びその編年と考察」『長尾・タイ山古墳群』龍野市文化財調査報告書Ⅲ 兵庫県龍野市教育委員会
- 川江 秀孝 1992 「馬具」『静岡県史』資料編3 考古3 静岡県
- 川江 秀孝 1993 「静岡県下出土馬具の構造について」『静岡県の考古学』植松章八先生還暦記念論文集『静岡県の考古学』編集委員会
- 鹿野 吉則 1987 「大和における馬具の様相一鉄製楕円形鏡板付轡を中心に一」『同志社大学考古学シリーズⅢ 考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 桐原 健 1974 「鎮魂の鈴 一信濃後期古墳出土の馬鈴の性格一」『信濃』第26巻 第4号
- 木許 守 2003 「鉄地金銅装楕円形鏡板の性格」『榎原考古学研究所論集』第14 八木書店
- 木許 守 2003 「馬具の流通についての一視点」『古代近畿と物流の考古学』学生社
- 久保 智康 1988 『知られざる古墳時代一その生産・技術を探る一』福井県立博物館
- 車崎 正彦 2011 「魏晋鏡その他」『シンポジウムくものゝとくわぎ』発表要旨料 東北・関東前方後円墳研究会

- 黒田 恭正 1988 「馬具の出土状態について」『日野昭博士還暦記念論文集 歴史と伝承』 永田文昌堂
- 群馬県古墳時代研究会 1996 『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』 群馬県古墳時代研究会資料集 第2集
- 小林 行雄 1962 「古墳文化の形成」『岩波講座 日本歴史1 原始および古代1』 岩波書店
- 国学院大学考古学資料館 1977 『考古学資料館要覧』 1976 関東の古墳時代文化 国学院大学
- 斎藤 弘 1984 「鈴杏葉の分類と編年について」『日本古代文化研究』 創刊号 古墳文化研究会
- 斎藤 弘 1990 「鈴杏葉の編年」『後期古墳出土共伴遺物複合編年発表要旨』 古墳文化研究会
- 斎藤 優 1970 『若狭上中町の古墳』 上中町教育委員会
- 早乙女雅博 1992 『伽耶文化展』 東京国立博物館
- 坂本 真鈴 1933 「環鈴に就いて」『考古学雑誌』 第23巻 第10号 日本考古学会
- 坂本 美夫 1985 『馬具』 考古学ライブラリー34 ニュー・サイエンス社
- 坂本 美夫 1996 「剣菱形杏葉類の分布とその背景」『考古学の諸相』 坂詰秀一先生還暦記念論集
- 坂本 美夫 1996 「剣菱形杏葉類と階層制とその背景」『研究紀要12』 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 澤村雄一郎 1996 『愛知県・岐阜県内古墳出土馬具の研究』 大学院考古学研究報告 第5冊 南山大学大学院考古学研究室
- 塩入 秀敏 1994 「長野県の馬具副葬古墳について」『長野県考古学会誌』 第74号 長野県考古学会
- 篠宮 正・小林基伸 1996 『特別展 大王の世紀 一兵庫の古墳と遺跡一』 兵庫県立歴史博物館
- 島田孝雄・金沢 誠 1996 「2. 旧山田郡」『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』 群馬県古墳時代研究会資料集 第2集 群馬県古墳時代研究会
- 志村 哲 1996 「3. 馬形埴輪の形態について」『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』 群馬県古墳時代研究会資料集第2集 群馬県古墳時代研究会
- 白井 宏子 1988 「冠」『物集女車塚古墳』
- 白石太一郎 1986 「巨大古墳にみる大王権の推移」『王権の争奪』④ 日本古代史 集英社
- 白石太一郎 1999 『古墳とヤマト政権』 文春新書036 文芸春秋
- 白木原 宜 1997 「古墳時代の鈴 一主として铸造鈴について一」『HOMINIDS』 vol.001 CRA
- 白木原 宜 2002 「铸造馬具の地域性一特に馬鈴について一」『月刊 考古学ジャーナル』 No.496 ニュー・サイエンス社
- 鈴木一有・斎藤香織 1996 「剣菱形杏葉出現の意義一伝岡崎出土資料をめぐる問題一」『三河考古』 第9号 三河考古刊行会
- 鈴木普二男 1983 『企画展 古墳時代の武具・馬具』 展示図録No.11 千葉県立房総風土記の丘
- 関 義則 1998 「環鈴についての覚書」『紀要』 23 埼玉県立博物館
- 関 義則・宮代栄一 1998 「県内出土の古墳時代の馬具」『紀要』 23 埼玉県立博物館
- 高崎 光司 1994 「環鈴研究の一視座」『日本と世界の考古学』 岩崎卓也先生退官記念論文集編集委員会 雄山閣出版
- 高田 貫太 2006 「5,6世紀の日朝交渉と地域社会」『考古学研究 第53号第2号』 考古学研究会
- 高橋 直美 1995 「冠帽考」『滋賀史学会誌』 第9号 滋賀史学会
- 高野 政昭 1995 「天理参考館所蔵の異形鏡板付轡について」『天理参考館報』 第8号 天理大学附属天理参考館
- 瀧瀬 芳之 1984 「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』 創刊号 古墳文化研究会
- 瀧瀬 芳之 1990 『東川端遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第94集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 瀧瀬 芳之 2012 「裝飾付大刀からみた武蔵・相模の後期古墳」『武蔵・相模の後期古墳』 東京都埋蔵文化

財センター

- 辰巳 和弘 1972 「平群氏に関する基礎的考察(上・下)」『古代学研究』 第64・65号 古代学研究会
- 辰巳 和弘 2004 「他界はいずこ」『王の墓と奉仕する人びと』 国立歴史民俗博物館編 山川出版社
- 田中 祐樹 2011 「造り付け立耳環状鏡板付轡の出現と展開」『歴史民俗研究第8輯』 板橋区教育委員会
- 玉城 一枝 1987 「中国・朝鮮系の文様をもつ馬具について」『同志社大学考古学シリーズIII 考古学と地域文化』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 千賀 久 1991 「3馬具」『古墳時代の研究8古墳II 副葬品』 雄山閣
- 筒井 由香 1997 「3弓田遺跡第2次」『京都府遺跡調査概報』 第74冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 都出比呂志 1989 「古墳時代の中央と地方」『古墳時代の王と民衆』 古代史復元6 株式会社講談社
- 東京国立博物館 1992 『よみがえる古代王国 伽耶文化展』
- 永沼 律朗 1983 「鈴杏葉考」『古代』 第75・76合併号 早稲田大学考古学会
- 中村 潤子 1983 「広帯二山冠について」『古代学研究』 101号 古代学研究会
- 南雲 芳昭 1991 「群馬県における馬形埴輪の様相」『成塚石橋遺跡II』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 南雲 芳昭 1993 「馬形埴輪における騎馬の基礎的研究」『研究紀要11』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 西田 健彦 1995 「世良田諏訪下」『発掘された日本列島 '95新発見考古速報 朝日新聞社
- 中川 駿 1991 「III. 馬に関する遺物、とくに馬具に関する調査研究—古墳時代を中心に—」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』 平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書 鹿児島大学農学部獣医学科
- 新納 泉 2011 「装飾付大刀分布の歴史的背景」『国際交流展 覇者の愛した煌めき —六世紀代の日韓金銅製品—』 宮崎県立西都原考古博物館
- 土生田純之 2010 「始祖墓としての古墳」『古文化談叢 第65集』 九州古文化研究会
- 樋口 隆康 2000 『大古墳展—ヤマト王権と古墳の鏡—』 東京新聞
- 廣岡 孝信 2011 『秋期特別展 仏教伝来』 檀原考古学研究所附属博物館
- 藤田奈美枝 1991 「古墳時代後期の馬装の性格」『関西大学考古学資料室紀要』 第8号
- 藤井 利章 1979 「家形石棺と古代氏族」『檀原考古学研究所論集』 第四 吉川弘文館
- 堀田 啓一 1967 「冠、垂飾耳飾の出土した古墳と大和政権」『古代学研究』 49 古代学研究会
- 松尾 昌彦 2005 「馬具研究と『分布論』」『馬具研究のまなざし』 古代武器研究会ほか
- 松尾 充晶 2005 「技術論からみた馬具研究史」『馬具研究のまなざし』 古代武器研究会ほか
- 水野 敏典 2003 「古墳時代中期の武器・武具にみる交流の諸相と斉一性」『古代近畿と物流の考古学』 学生社
- 宮代 栄一 1993 「5・6世紀における馬具のセットについて —f字形鏡板付轡・鉄製楕円形鏡板付轡・剣菱形杏葉を中心に—」『九州考古学』 第68号
- 宮代栄一・谷畑美帆 1996 「続・埼玉県内出土の馬具」『埼玉考古第32号』 埼玉考古学会
- 茂木 雅博 1993 『常陸白方古墳群』 東海村教育委員会
- 桃崎 祐輔 2004 「倭国への騎馬文化の道」『考古学講座講演集』『古代の風』 特別号No.2 市民の古代研究会・関東
- 安井 良三 1967 「我が国発見の金、銀製垂飾付耳飾り—装身具のセットについての試論—」『史想』 13
- 山田 良三 1974 「古墳出土の馬具」森浩一編『日本古代文化の探求 馬』 社会思想社
- 山田 昌久 1989 「日本における古墳時代牛馬耕開始再論」『歴史人類』 第17号 筑波大学
- 山尾 幸久 1986 『日本古代の国家形成』 大和書房
- 吉村 和昭 2003 「地下式横穴墓出土の甲冑」『古代近畿と物流の考古学』 学生社

# 平成22年度 埼玉古墳群周辺確認調査の報告

— 埼玉 8・9・10号墳の確認調査 —

佐藤 康二

## 1 はじめに

さきたま史跡の博物館では、埼玉古墳群の範囲を確定し、指定範囲の拡大を検討するための基礎資料を得るため、行田市教育委員会の協力のもと、平成19、20年度に「埼玉古墳群範囲確認調査」を実施した。微地形の確認、古墳所在の伝承がある地点の調査、将軍山古墳の周堀の位置の確認等の成果があった(西口2009、西口・佐藤2010)。

平成21年度からは、埼玉古墳群と周辺遺跡群との関係を解明し、今後の史跡整備及び調査・研究の基礎資料を得るために、周辺遺跡の分布や立地・地形などの調査を目的とした「埼玉古墳群周辺確認調査」を開始した。平成21年度は埼玉古墳群の南西側の水田域を集中して調査した。ここは塚もしくは古墳の所在の記録が残る箇所であったが、調査の結果、古墳の痕跡は検出されなかった(佐藤2011)。

平成22年度は、稻荷山古墳東側にある円墳跡の調査を行った。なお、この「埼玉古墳群周辺確認調査」は国庫補助事業である。

## 2 調査箇所の選定及び古墳名称について

今回の調査対象地の円墳跡については、昭和44年1月28日に当館が撮影した航空写真にクロップマークとして写っていたものである(第1図参照)。この航空写真は稻荷山古墳の外・内堀や失われた前方部の輪郭がはっきり映し出されたことから有名な写真である。今回調査した円墳跡も墳丘がなく、かつ調査履歴もないまま航空写真のみを根拠に遺跡台帳に記載された珍しい古墳である。

稻荷山古墳及び埼玉5号墳等の円墳跡の調査成果も、ほぼクロップマークが遺構を示していることを証明したが一つの疑念があった。今回調査対象の円墳跡が所在する水田は、将軍山古墳周辺と比較すると土取りにより数十cm削平されており、さらにはその後の耕作等の影響も懸念され、遺存状況は極めて悪い可能性があった。

これら円墳跡については、現在民有地であるが、埼玉県教育委員会が策定した「史跡埼玉古墳群保存整備基本計画」においては将来的には墳丘・周堀を復原することが望ましいとされている。そこで、遺構や確認面の遺存状況を把握すること、出土遺物により時期を確定すること、という二つの調査目標を立てて調査箇所の選定を行った。また調査方針としては、保存目的の確認調査であり、かつ将来的に整備する可能性もあることから、覆土の除去は最低限とした。

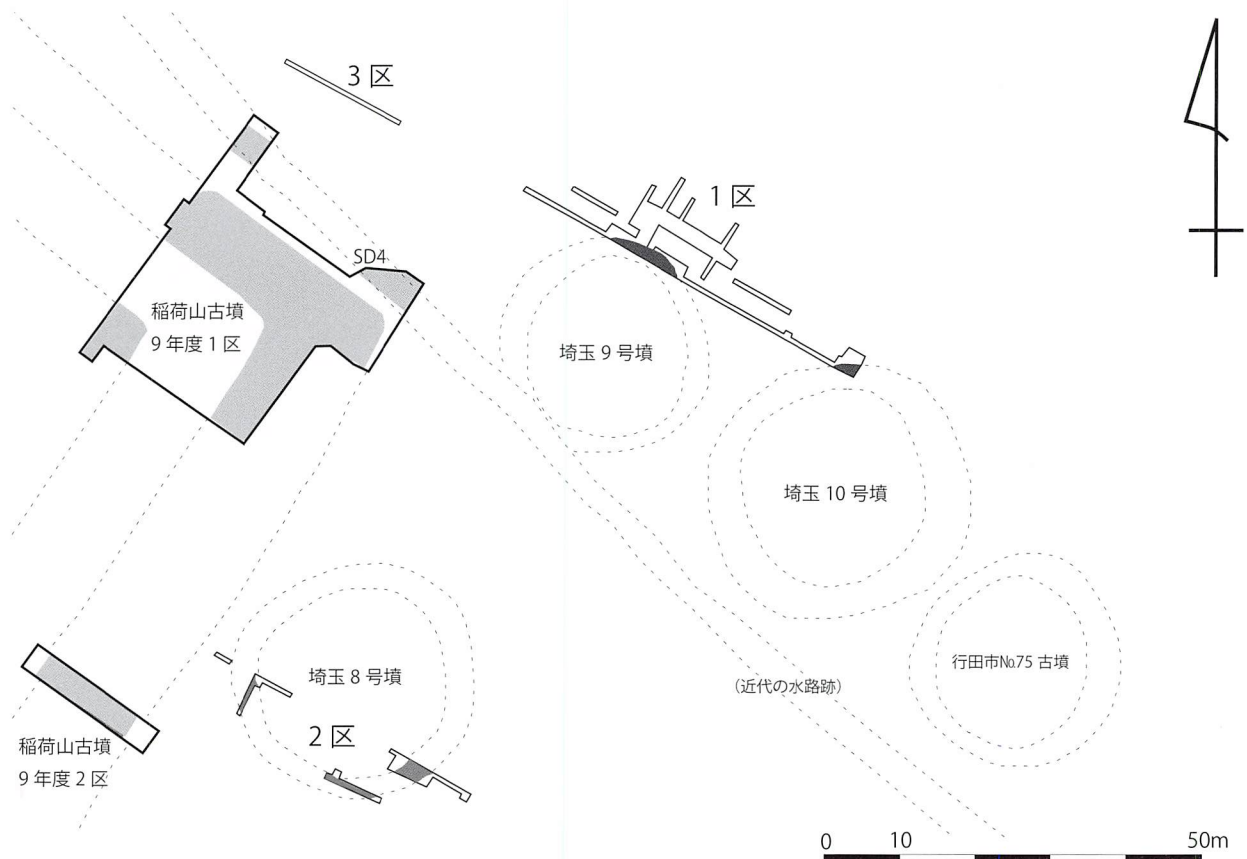
トレンチの設定については、円墳跡はすべて民有地に所在し、さらにそのほとんどが現在も水田として利用されているため、休耕田及び県有地に絞って調査を実施する方針をとり、地権者及び行田市土整備事務所の承諾を得て調査に着手した。

なお、この調査箇所の選定については、考古学の専門家、地元有識者などで構成する史跡埼玉古墳群保存整備協議会に諮り、平成22年3月4日に了承された。





第1図 トレンチ配置とクロープマーク(昭和44年航空写真と合成)



第2図 トレンチ配置図と各古墳周堀推定線

今回対象とした円墳跡の名称は、従来は行田市No.72、73、74古墳であったが、今回の確認調査により古墳と確定したため、今後の調査・研究を鑑みて県生涯学習文化財課及び行田市教育委員会と協議し、埼玉8号～10号墳の名称を付した。以下、新名称を用いて報告する。

### 3 平成22年度周辺確認調査

平成23年2月16日～3月2日の間の計10日間で調査を実施した。調査はいずれも人力により表土掘削を行い、遺構の有無及び地形確認、記録写真撮影、断面図作成、人力による埋め戻しを行った。なおトレンチ平面図は専門業者に委託してGPSデータ計測により測定した。

調査区については、第1、2図のとおり旧忍川堤防に接し、9、10号墳所在箇所を第1区、南側の8号墳所在箇所を第2区、さらには稻荷山古墳外堀北側の県有地を第3区とした。

#### (1) 第1区 概況

第1区にはクロップマークにより2基の古墳跡が所在することが推定されてきた。「埼玉県古墳詳細分布調査報告書」に記載された古墳名と規模は西側がNo.73古墳、推定直径24mである。東側がNo.74号墳、推定直径は同じく24mである。位置的には旧忍川右岸の堤防に接しており、現況は休耕田である。

現表土の標高は約16.5～16.6m、確認面はローム面で標高16.3～16.4m前後であった。すなわち現地表から10～20cmの深さで検出されるソフトローム層が確認面であった。

なお(6)でも触れるが、航空写真には9号墳西側に隣接し、白い円形のクロップマーク状のものがあるため、その範囲にもかかるようにトレンチを設定した。

#### (2) 埼玉9号墳(旧No.73古墳)

調査区際に設定した第1トレンチで周堀覆土が確認されたため、トレンチを拡げてプラン確認を実施した。墳丘側の立ち上がりは調査区外のため検出できなかった。

堀底底面の最深部の標高は15.98mで現地表から60cm、確認面から42cmの深度を測る。検出できた最大幅はおよそ1.5mであった。

覆土の状況は第5図のとおりは概ね三角堆積を呈しているが、墳丘側が調査区外となるため内側からの流入は認められなかった。覆土最上層は堅緻な黒褐色土が堆積する。古墳外側からの堆積状況は周堀法面崩落等に伴う崩壊ロームブロック等が観察されることから、自然堆積と想定する。肉眼観察の結果は、最下層にも水性堆積を示す状況は認められなかった。

出土遺物は確認面(第5図2層)から時期不詳の土師器小片が1点検出されたのみである。

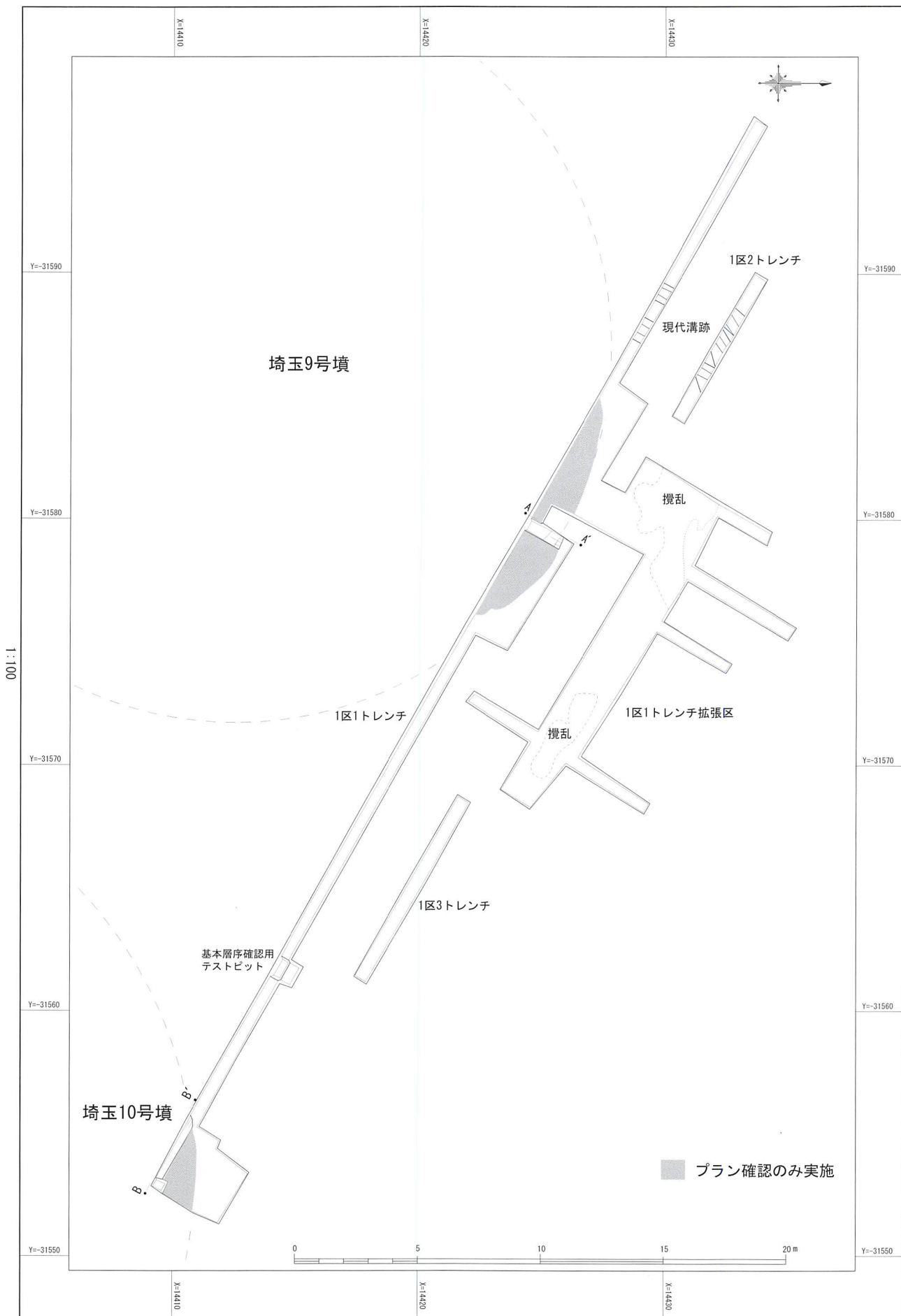
第1図のクロップマークから、今回検出された箇所よりやや北側に周堀が所在すると想定していた。そのために1区1トレンチ拡張区を設定したが、写真6、7のとおり不定形な落ち込みを検出した。念のために一部調査したところ、立ち上がりはシャープな壁面をもちオーバーハングしていることから、現代の機械掘削の痕跡であることが判明した。

また古墳跡西側で検出された溝跡についても覆土の状況等から近・現代の所産と考えられる。

墳丘側の立ち上がりが検出できなかったため、墳丘径は不明とせざるを得ないが、クロップマークとの照合で周堀外寸径は約31mと推定する。

#### (3) 埼玉10古墳跡(旧No.74古墳)

第1トレンチ西端で一部検出されたため、トレンチを拡げてプラン確認を実施した。堀底レ



第3図 1区全測図

ベルを把握するため、底面を精査した。湧水のため、堀底底面までは調査することができなかった。

プラン確認段階から平安時代の土師器小片及び数mm程の炭化物片が散見されたため、古墳周堀の上に平安時代の遺構が構築されている可能性を考慮して精査を行ったが、古墳周堀を壊す掘り込みは認められず、断面観察からも重複する状況はないことから、平安時代の遺物が古墳周堀に流れ込んだものと推定する。

なお本周堀は確認面から40cmで湧水が始まり、底面を検出することはできなかった。確認面からの深度は50cm以上を測り、隣接する9号墳よりも深い。

9号墳同様、墳丘側の立ち上がりが見出できなかったため、墳丘径は不明とせざるを得ないが、クロップマークとの照合で周堀外寸径は約35mと推定する。

出土遺物は小破片のため図化できなかったが、平安時代の土師器、須恵器、羽口の可能性がある被熱痕の顕著な土師質の遺物及び鍛冶滓の可能性が高い遺物等が出土した。出土した層位は覆土最上層の2層が一番多かったが、第4層まで少数ながら確認された。確実に古墳時代に帰属する遺物は検出されなかった。

#### (4) 第2区 概況

第2区にはクロップマークにより1基の古墳跡が所在することが推定されてきた。「埼玉県古墳詳細分布調査報告書」に記載された古墳名と規模はNo.72古墳、24mである。クロップマークにより西側の稲荷山古墳外堀に極めて近接する。なお本調査区は南に位置する將軍山古墳周辺からは一段低い水田面である。これは昭和になってから大規模に土取りした結果であることを近隣にお住まいの方からお聞きした。

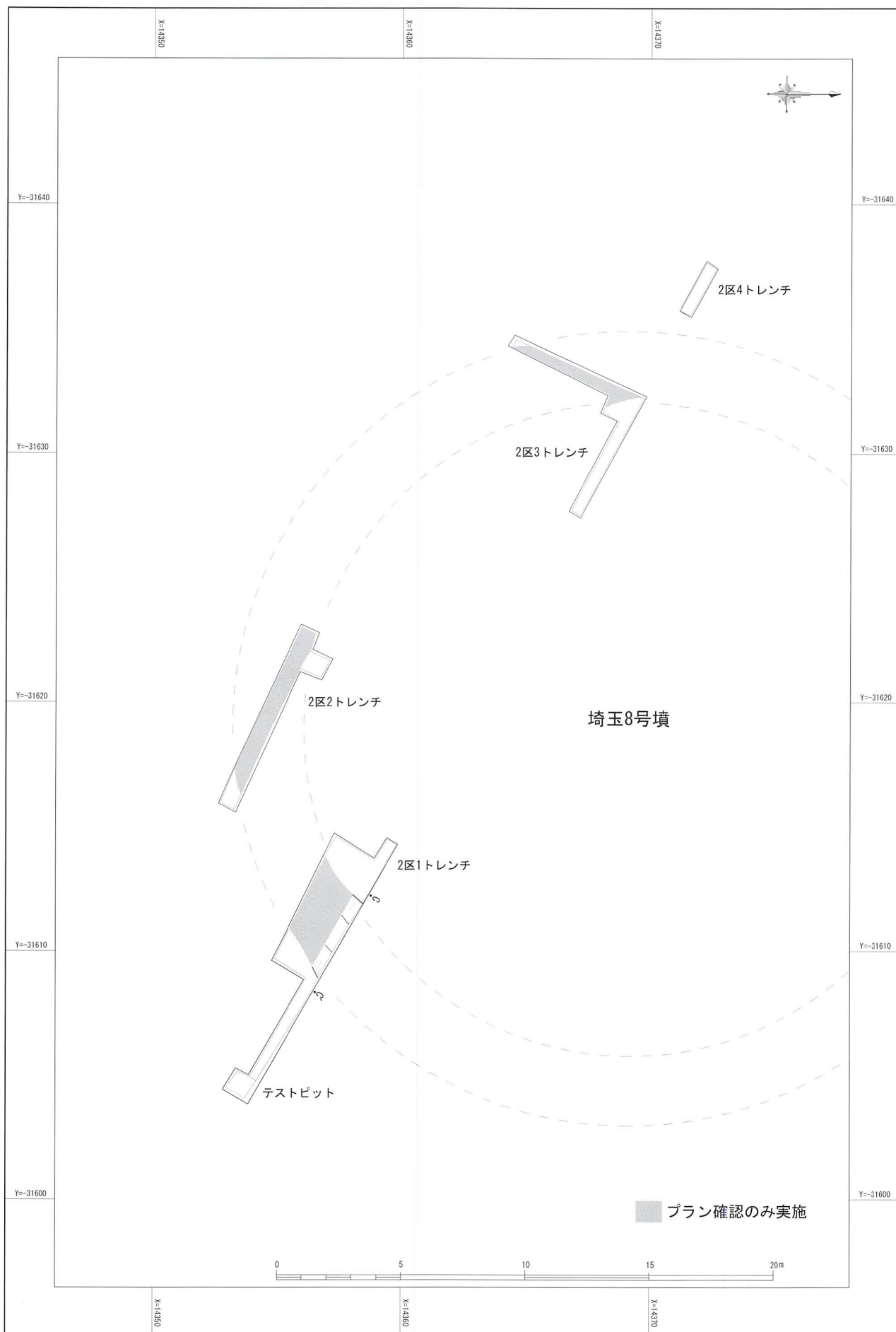
現表土の標高は約16.7～16.8m、確認面はローム面で標高16.4～16.5m前後であった。すなわち現地表から20～30cm下のソフトローム層が確認面であり、第1区とほぼ同様であった。

#### (5) 埼玉8号墳(旧No.72古墳)

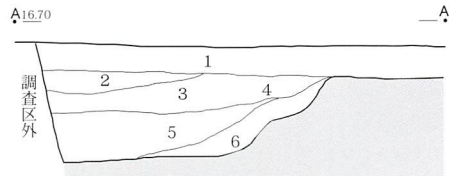
第4図のとおり、クロップマークを参考に1トレンチから順次調査を行い、古墳周堀のプランを狙い計4箇所トレンチ調査を実施した。結果として第1図のとおり、クロップマークと対応して周堀プランが検出された。なお3トレンチと4トレンチの間には行田市道が所在するため、稲荷山古墳外堀と埼玉8号墳周堀の間の正確な距離は計測できなかったが、クロップマークと稲荷山古墳9年度1,2区調査成果から、最も接近する箇所約4mの間隔であると想定される。

第5図のとおり、確認面から約40cm下で堀底が検出された。覆土の状況は三角堆積を示していた。墳丘側に対応する方向からは崩壊ロームブロックを多量に含有する5層が流入している状況であった。なお底面の検出前から湧水が始まった。

出土遺物は第6図1の土師器甕の口縁部が2区3トレンチの遺構確認面から出土した(写真16参照)。残存率は20%、推定口径15.4cm、残存高5cm。鈍い黄色を呈する。胴部外面は横ケズリで口唇に端面を有する。胎土に石英、赤色粒子、半透明の灰色粒子を含有する。なお同一個体と思われる胴部破片も出土している。平安時代に帰属するものである。第6図2の円筒埴輪片は2区4トレンチの表土中から出土したもので、帰属する古墳は不明である。外面は縦位のハケメ、内面は斜位ハケメで一部指頭痕を残す。明赤褐色を呈し、胎土に粗砂を含有する。

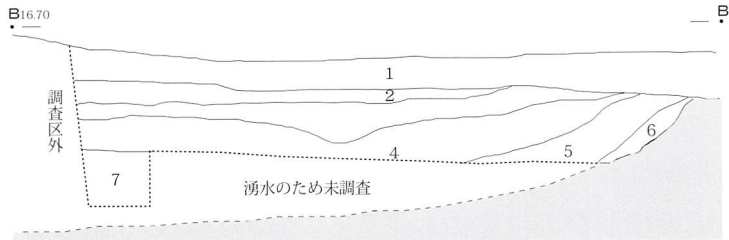


第4図 2区全測図



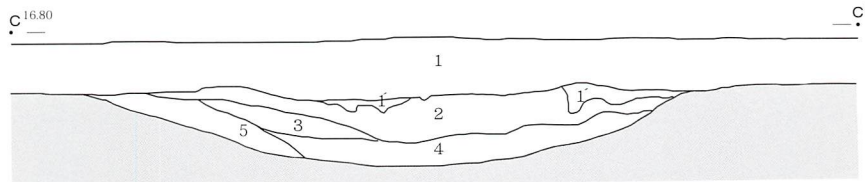
1区 第1トレンチ (埼玉9号墳) 土層註

- 1 水田耕作土 (2.5YG5/1)
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒子微量含む。しまり強し。
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒子少量含む。
- 4 褐色土 (10YR3/4) 5mm前後のローム粒子多量に含む。軟質。
- 5 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒子少量含有。暗褐色ローム(黒色帯)崩壊ブロックを多量含む。
- 6 黒褐色土 (10YR2/2) 暗褐色ローム(黒色帯)ブロックを少量含有。5層より色調暗し。土質均一。



1区 第1トレンチ (埼玉10号墳) 土層註

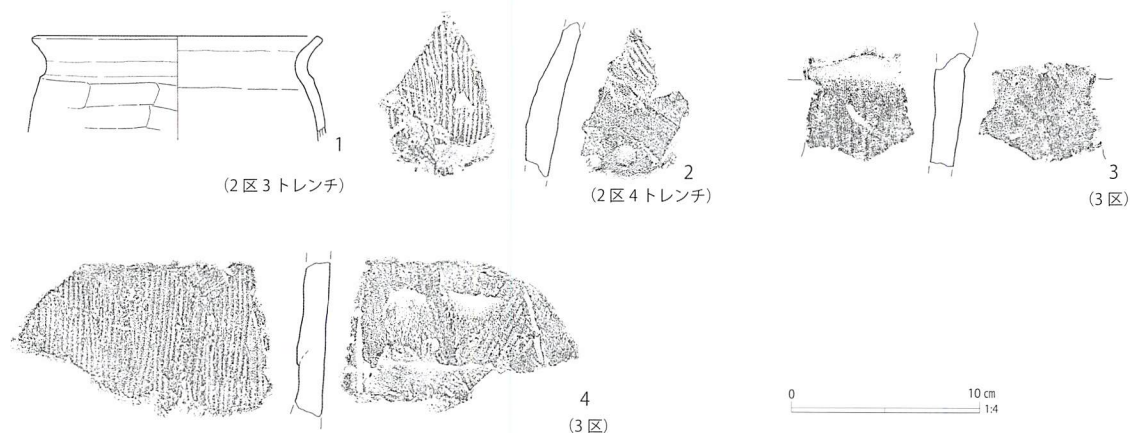
- 1 水田耕作土 (2.5YG5/1) A 軽石多量含有。
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) 非常に硬緻。5mm前後の炭化物多く含有。径2~3mmの橙色粒子(土器粒子状)多く含有。平安時代土師器片含有層。
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) 2層より軟質。炭化物、橙色粒子とも少量含有するが、2層土の1/10程度の量。
- 4 黒褐色土 (10YR2/2) 3層土に近似するが、橙色粒子極微量含有、炭化物なし。2、3層より軟質。
- 5 暗褐色土 (10YR3/3) 径2~3mmのローム粒子を少量含有。
- 6 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒子微量含む。軟質。
- 7 黒褐色土 (10YR3/2) 3、4層より茶色味強い。土質ほぼ均一だが、極微量橙色粒子含有。



2区 第1トレンチ (埼玉8号墳) 土層註

- 1 水田耕作土 (2.5YG5/1) A 軽石多量含有。1層土に2層土混入。
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒子微量含有。しまり強し。
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) ロームブロックを少量含む。2層土より軟質。
- 4 褐色土 (10YR4/4) 崩壊ロームブロック(暗褐色)多量含む。軟質。
- 5 褐色土 (10YR4/6) 崩壊ロームブロック、ローム粒子を極多量含む。軟質。

第5図 セクション図



第6図 出土遺物

### (6) 第3区

調査着手に先立ち、第1図の航空写真を観察した結果、埼玉9号墳の西側に隣接して周辺の円墳跡と同規模の丸いクロープマークが認められた。他の円墳跡のそれとは異なる陰影であり、従来も古墳跡の可能性を指摘されたことはないと思うが、規模的には直径40m前後かつ埼玉9、10号墳及び行田市No.75古墳と横並びの位置にも見える。念のため第3区としてトレンチ調査を実施した。

現況地面下約60cmまでは公園造成に起因する客土、その下に約10cmの水田耕作土があり、その下がローム層であった。遺構は検出されなかったが、水田耕作土から埴輪片が検出された。

第6図3の円筒埴輪は透孔は、突帯下端に切り込まれる上部が直線となることから半円形を呈すると思われる。器面の摩耗顕著で詳細は不明だが外面に縦位のハケメが認められる。浅黄色橙色を呈し、胎土に赤色、灰色粒子を含有する。第6図4の円筒埴輪は外面は縦位ハケメ、内面斜位のハケメ。内面に成型痕が残る。明赤褐色を呈する。灰色粒子を胎土に含有する。

上記2点の埴輪以外にも埴輪片が数点出土した。いずれも水田耕作土からの出土で、帰属する古墳は不詳であるが、第6図3については、透孔の形態及び色調から稲荷山古墳に帰属する可能性が高い。

## 4 確認調査の成果と課題

### (1) 考古学的課題

今回の調査で残念なことは、各古墳に確実に帰属する遺物が検出されなかったことにつきる。埼玉古墳群内の既調査の小円墳跡については、二子山古墳と前後する時期のものが主体を占める。地点の離れた8～10号墳の帰属時期が判明すれば、小円墳跡を含めた埼玉古墳群の構成原理の解明、あるいは旧忍川対岸の白山古墳群との関係を考察する上でも重要なデータとなる。将来、整備等の構想が具体化した場合は、再度の調査が必須と考える。帰属する時期を確定すること、埼玉2号墳(梅塚古墳)、同4～7号墳において確認されたブリッジの有無等、クロープマークからは読み取れない詳細な情報を把握するためである。今回の調査で判明した各古墳周堀の遺存状況からすれば、面的な調査を実施すれば解明することは難しくないだろう。

### (2) 史跡整備に関する課題

8、10号墳から平安時代の遺物が出土した。今回のごく狭いトレンチ調査かつ地点の離れた

2カ所で発見されたことを考えると、近接して平安時代の遺構が存在する可能性が極めて高いと考える。このことは埼玉古墳群の整備に大きな影響は与えないが、遺跡保護の目的からすれば、平安時代に目をつぶるのではなく、遺構の所在等を確認した後に古墳整備の方針を検討する必要がある。

次に将来的に今回調査した円墳の整備に関する問題点を挙げると、円墳の面的なプラン確認の必要性は当然として、確認面までの深度の問題が浮上した。いずれの古墳周堀も現地表面下20cmで遺構面となる。仮に周堀を30cmの深度で復原する際に、確認面との間に30cmの保護層を確保する場合、60cmの盛土後に掘削工事を行わないと遺構に影響を与えてしまうことが判明した。

埼玉古墳群の整備において、墳丘下の旧表土の標高と現況地表の標高との乖離が常に問題視される。墳丘下の旧表土の標高より周辺の標高が概して低い点については、昭和の耕地整備等による後世の土地開発にのみ起因するのか、あるいは古墳時代の墳丘造成に係り、周堀の土量のみでは不足することから、周辺表土を削り取って使用(高橋2005)したかは、諸説あり、ここでは立ち入らないが、平成22年度から開始した奥の山古墳の整備に際しても常に頭を悩ませた問題である。埼玉古墳群の整備に際し、古墳群造営時の地形の復原は避けては通れない重要課題である。今後も継続的な確認調査を実施し、微地形の把握を端緒に、旧河道等の地形変換点を探り、埼玉古墳群の成立時の選地の要因や、石室石材、埴輪等の具体的な搬入ルート of 解明に努めていく必要がある。

#### 《引用・参考文献》

- 西口 正純 2009 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第3号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 西口正純・佐藤康二 2010 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第4号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 佐藤 康二 2011 「平成21年度 埼玉古墳群周辺の確認調査報告」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第5号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 埼玉県教育委員会 1994 『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』
- 高木豊三郎 1936 『史蹟埼玉』 埼玉村教育委員会
- 高橋 一夫 2005 『鉄剣銘一一五文字の謎に迫る』 新泉社
- 埼玉県教育委員会 2007 『武蔵埼玉 稲荷山古墳』
- 埼玉県教育委員会 2007 『史蹟埼玉古墳群保存整備基本計画』





写真1 調査区 遠景(稻荷山古墳上から撮影。左が1区、右が2区)

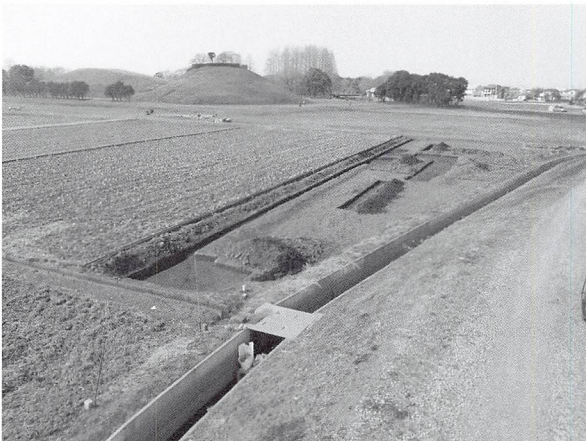


写真2 1区全景(東から)

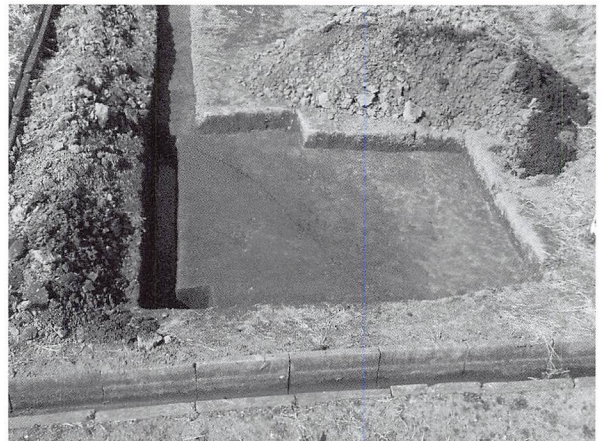


写真3 1区埼玉10号墳 プラン

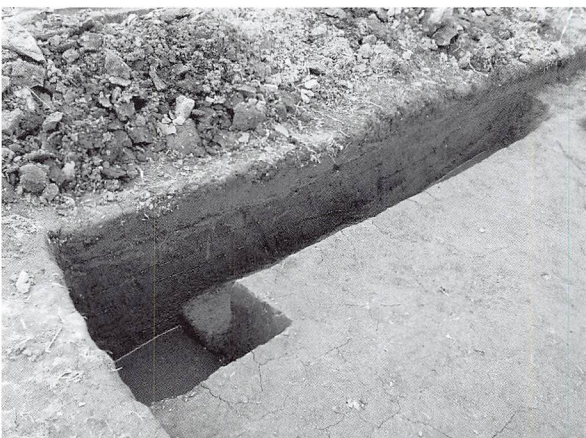


写真4 1区埼玉10号墳 セクション

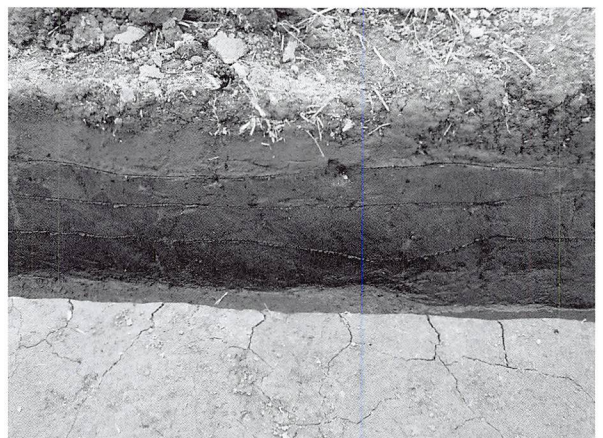


写真5 1区埼玉10号墳 セクション(アップ)



写真6 1区埼玉9号墳 プラン(東から)

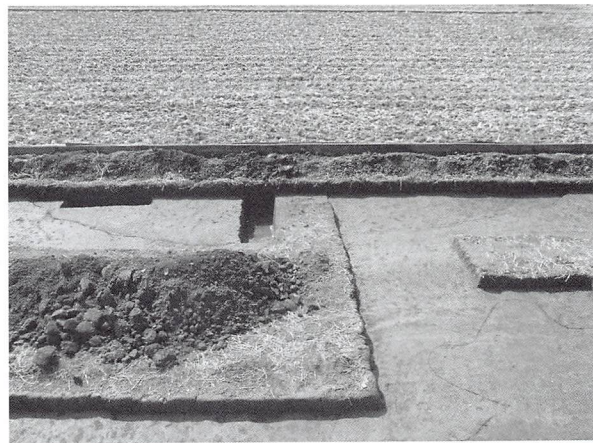


写真7 1区埼玉9号墳 プラン(北から)



写真8 1区埼玉9号墳 セクション

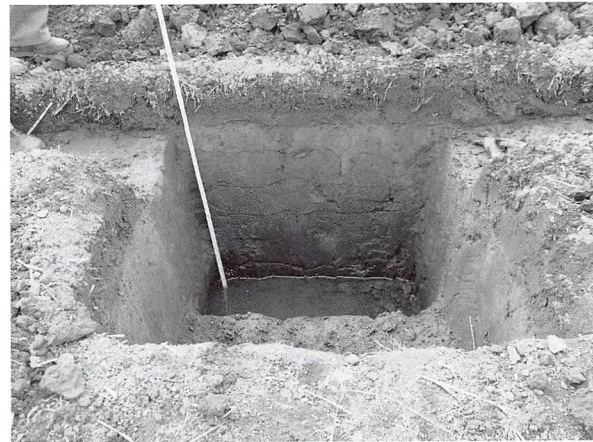


写真9 1区 テストピット



写真10 2区 調査区全景(奥に見えるのが稲荷山古墳)



写真11 2区1トレンチ埼玉8号墳 調査風景

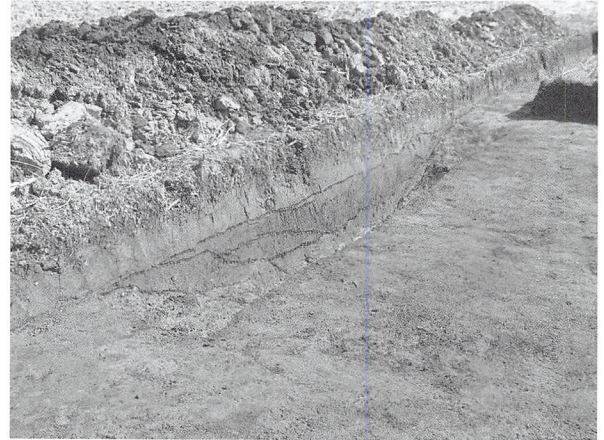


写真12 2区1トレンチ埼玉8号墳 セクション

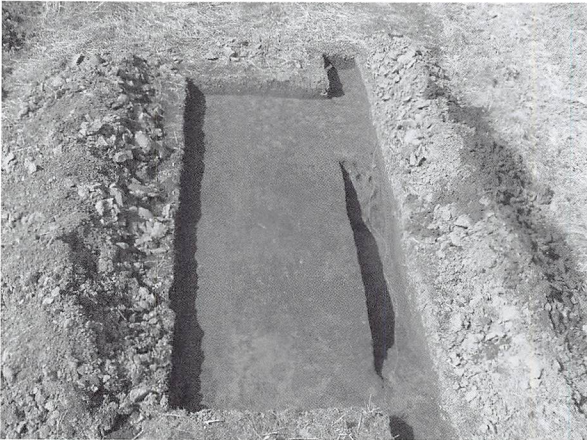


写真13 2区1トレンチ埼玉8号墳



写真14 2区2トレンチ(奥は1トレンチ)

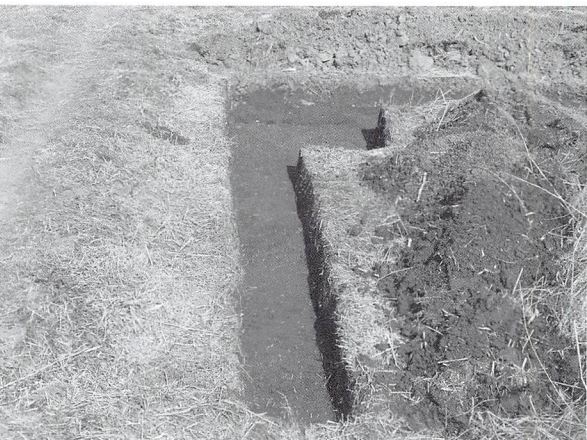


写真15 2区3トレンチ埼玉8号墳



写真16 2区3トレンチ 遺物出土状況

# さきたま講座のアンケート分析

西口正純

## 1 はじめに

さきたま講座は、さきたま史跡の博物館の学習支援事業として行われ講師は、外部講師と当館学芸員が担当している。平成22年度の講座構成は第1表のとおり、「企画展関連講座」「世界遺産関連講座」「学芸員の視点」とから構成され平成22年度は合計12回実施され、毎月いずれかの講座が開催されている。

さきたま講座は毎回多くの受講者の参加があり、平成22年度には12回の講座で合計996人の参加があった。今後開催する講座の在り方の参考とするため、受講者に毎回アンケート調査を実施しており、その回収率は70%であり本講座も一定程度定着した感があることから、平成22年度実施アンケートの分析を行いそれぞれの傾向を把握したい。

## 2 実施講座の概要

企画展関連講座は、企画展「稲荷山出現以前の古墳」・企画展「祈りとまじない」に合わせて各2回ずつの計4回開催された。「埼玉における古墳の出現」では、埼玉県における弥生時代の墓制と初期古墳の登場の様子を通して、吉見町の前方後方墳「山の根古墳」が埼玉県最古の古墳となる可能性が高いとする考えを示した。

「関東の前期古墳」では、東海大学教授北條芳隆氏にご講義をいただいた。講義の概要は、前方後円墳の被葬者が古墳築造と耕地開発との密接な関わりがあるとの前提でとらえて、前期古

No.	講座タイトル	講師	所属	その他
1	埼玉における古墳の出現	利根川章彦	当館職員(当時)	企画展関連講座1
2	関東の前期古墳	北條芳隆	東海大学教授	企画展関連講座2
3	金太郎は、なぜ斧を担いでいるのか	田中英司	当館職員	学芸員の視点①
4	埼玉の玉	石岡憲雄	当館職員	学芸員の視点②
5	国宝鉄剣を科学する	野中仁	当館職員	世界遺産関連講座1
6	北京原人の骨はどこに	井上尚明	歴史と民俗の博物館	学芸員の視点③
7	遺跡と文献から見た古代のまつり	平野卓司	横浜市歴史博物館	企画展関連講座1
8	祈りとまじないの考古学	君島勝秀	当館職員	企画展関連講座2
9	身を飾る縄文人	栗島義明	当館職員	学芸員の視点④
10	竜宮城と前方後円墳	中村倉司	当館職員	学芸員の視点⑤
11	埼玉古墳群から東国の古墳文化を考える	関義則	埼玉県平和資料館	世界遺産関連講座2
12	激動の弥生終末	佐藤康二	当館職員	学芸員の視点⑥

第1表 平成22年度さきたま講座一覧

墳は「開拓に向けた前進拠点ないし玄関口として、新たな時代への導引役を担う事となった人々の採用した墓」として築かれると言う話であった(北條2010)。

横浜市歴史博物館の平野卓治氏による「遺跡と文献から見た古代のまつり」では、古代の人々の日常生活空間である「村」におけるまつりの様相を文献から探るもので、大規模な祭祀遺跡として注目される島根県青木遺跡を例に上げ、農耕儀礼に伴う共同体的飲食儀礼を推察された。

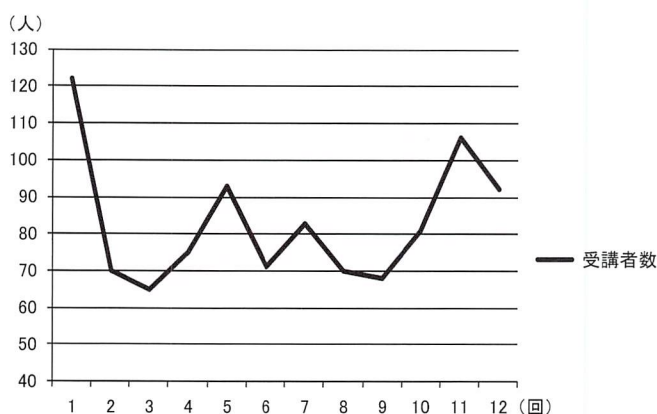
世界遺産関連講座は、行田市と埼玉県が推進する埼玉古墳群の世界遺産への登録推進に関連して行われた講座で2回行われている。1回目は、九州国立博物館で行われた、『古代九州の国宝』展へ金錯銘鉄剣が貸出出品された際に実施された、「X線 CT スキャナー」による解析結果について報告が行われ、「銘文以外の柄元の部分にも銘文と同様の金属反応を示す個所が見つかった」(野中・田中2011)事が新しい知見として示された。

2回目は、埼玉古墳群の群構成の配置論について特に造出しの位置に注目して、古墳の正面観を考察したもので、台地上に展開する古墳群を水上交通との関係で通行する者には埼玉古墳群が視覚的にもとらえられたのではないかとするものであった。

「学芸員の視点」は、学芸員が日ごろ調査や研究のテーマとしている事を一般向けに紹介・解説するもので、考古学を多角的に見た報告がなされた。

### 3 アンケートの結果

#### (1) 受講者数の推移



第1図 受講者数の変化

アンケートの項目は、受講者の居住地・年齢層・来館回数・受講回数・講座の開催を知った媒体・講座の感想などを問うものであり、回収率は毎回参加者の内約70%と比較的高い回収率であるため、一定の傾向はつかめるものと考えられる。

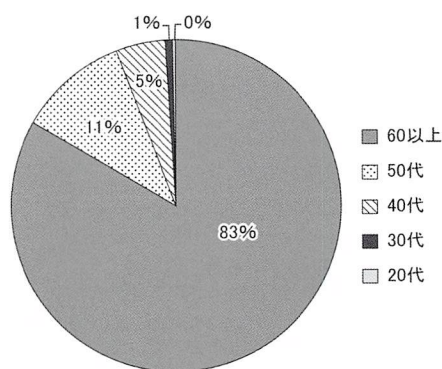
まず、受講者数の年間推移を見てみたい。講座の定員は、外部講師による企画展関連講座が100名で、それ以外の講座は毎回70名としているが、年間を通して見ると平均83

名で定員以上の参加があり、企画展関連講座も受付上は100名を超えており、毎回事前受付でお断りしている状態である。通常80名前後で推移する中で受講者が100名前後となる大きな山が世界遺産関連講座において2回ある。この事は、埼玉県と行田市で共同提案している「埼玉古墳群～古代東アジア古墳文化の終着点～」をコンセプトとした、埼玉古墳群の世界遺産登録推進運動への関心の高さを表したものと考えられる。

#### (2) 受講者の居住地と年齢層

居住地域は、県内居住者が94%を占める。その中でも行田市と熊谷市・鴻巣市など近隣市とさいたま市に集中する傾向を見る事ができる。

受講者の年代層を見ると、60歳以上が83%と最も多く次いで50歳代の11%で50歳以上の受講

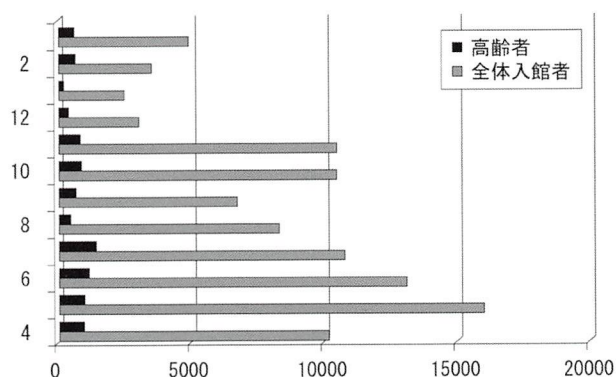


第2図 受講者の年齢

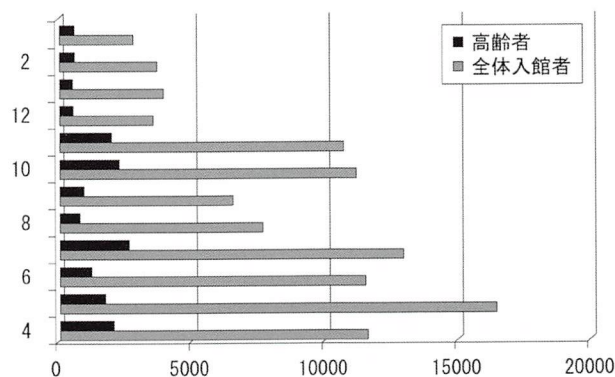
者を合わせると94%となることから、受講者の大半が高年齢者であると言える。

ここで、全体入館者の中での高齢者<sup>1)</sup>数の傾向を見ると、平成16年度が10%前後であるのに対して、平成22年度は、各月10%から20%で推移している事がわかり、平成16年度と比較すれば図3・4のとおり全体入館者数には大きな変化がない中で、高齢者の入館者数は2倍近く夏から秋にかけて大きく増加している事がわかる。

入館者動向から当館の利用形態について分析した村田氏は、「今後、社会の高齢化が進展する中で、人文系の博物館施設が高齢者のニーズにこたえていくことは、必然的に要請されるものと思われる。(中略)入館者における高齢者の利用があまり伸びているとはいえないことは、今後の事業計画を考える上で考慮に入れなければならないデータであると考えられる。」(村田2006)と指摘しているが、平成22年度に行われた講座での高齢者数の割合と比較すると、この課題には一応対応できているのではないかと考えられる。

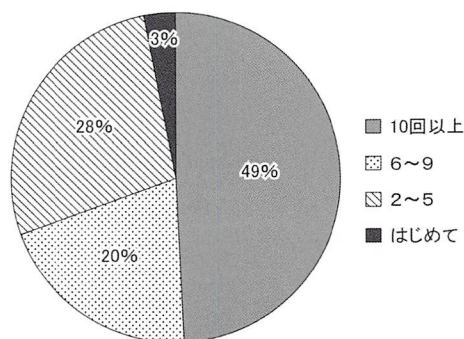


第3図 平成16年度全体入館者と高齢者

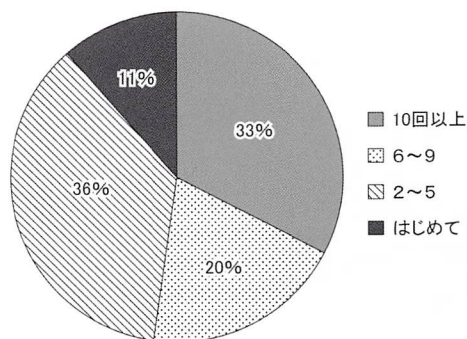


第4図 平成22年度全体入館者と高齢者

### (3) 来館回数と受講回数



第5図 来館回数



第6図 受講回数

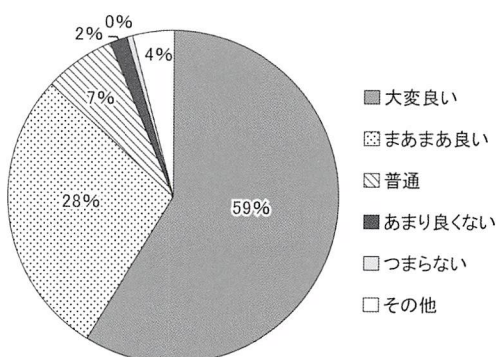
受講者の中での来館回数を見ると、10回以上が49%と半数近くに上り、6～9回が20%、2～5回が28%で複数回来館者を含めると97%を占めている。来館者においてもリピーターの率が極めて高い事がわかる。

また、受講回数を見ると10回以上の受講が33%と最も高く、次に2～5回の36%、6～9回の20%と続く、こちらも複数回受講者を含めると89%となることから、さきたま講座の受講者においてもリピーターが多いのが特徴と言える。

#### (4) 講座の満足度について

講座の満足度については、大変良いとまあまあ良いとを合わせた値は80%以上と非常に高く受講者の講座の質的な面での期待やニーズにもこたえられているようだ。それは講座の受講回数にも表れており、1年間の講座をとおして見れば10回以上が33%で複数の回受講を含めると受講者の約9割に達している点からも証明される。この事から、受講者は圧倒的にリピーターが多く、講座を受講することが年間のメニューとして定着している結果と考えたい。

これは、来館回数にも共通する点でもあり、来館者の約5割が10回以上の来館で、複数回の来館者割合は97%となる。



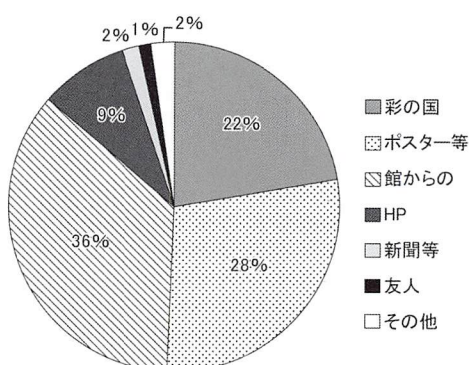
第7図 満足度

アンケート回答者の感想には、講座の満足感が次回の講座への参加意欲につながっている事がうかがえる。講座アンケートから満足感へつながる感想として上げられているものには、高度で通説とはやや異なる新しい視点に立った新説に興味を多く持つ人が多い一方で、基礎的な情報を要求している感想もあり両者は相反する面を持っており、今後講座のテーマを設定する上で、考慮に入れなければならない点であると感じている。

#### (5) 広報媒体について

講座の開催が周知された媒体として、「館からのお知らせ」を挙げた人が36%で最も多かった。館からのお知らせは、関東各県の各博物館施設・県内自治体の教育委員会等に配布した催物案内や館で作成し館内のラックにおいた年間講座案内のチラシなどである。これを見た人が多いと言う事は、来館時に講座の開催を知った可能性が高く、来館して再度講座を受講する事によるリピーター率の高さに関連しているものと思われる。つまり当館においては、館内での配布物(お知らせ)はかなり広報効果が高い事となる。

次いで多いのがポスター等の28%であるが、企画展関連講座の場合はポスター中に講座の案内がある事から、それを見ての受講が多い事が企画展関連講座の場合、講座のアンケート統計からも推察する事ができる。



第8図 広報媒体

催物案内やポスターは、博物館にとっては最も基本的な広報媒体であり、アナログでありながらその有効性はまだ高い事が裏付けられる。

また、県の広報誌で県内全域に新聞の折り込みとして全戸配布される「彩の国だより」の割合も22%と3番目に大きい。講座によっては最も大きな割合を占めているが、

紙面の都合により掲載されない場合があり、掲載された時とされない場合の差が大きく出る結果となっている。

さらに、1割近いのがインターネットのホームページからである。特に、22年度後半からはホームページ上からの電子申請も可能となり、その申請数は次第に増えつつある。受講世代が高年齢に集中している事もあり、大きな割合は占めていないが今後の広報媒体としてはインターネットの更なる普及とともに有効な手段となるものであり、積極的に利用と工夫をしていかなければならない。

#### 4 さいごに



今回は、平成22年度のさきたま講座アンケートから受講者の傾向を考察してきたが、データの分析が表面的なところにとどまってしまった。本来ならば過年度との比較が必要であろうが、一定の傾向はとらえられたものとする。

特に平成16年度と平成22年度の高齢者入館者の比較では、約2倍の伸びが見られており、その要因には社会的な高齢化率の増加が背後にあると思われるが、それを吸収するだけの講座の内容が必要である。今後の講座の在り方にとどまらず他のイベント等の計画を考える上において、十分考慮しなければいけない点であろう。

#### 《註》

(1) 高齢者とは、65歳以上の無料入館者で統計を行った。

#### 《引用・参考文献》

埼玉県立さきたま史跡の博物館 2010 『官報』 No.5

野中 仁・田中英司 2011 「国宝金錯銘鉄剣の貸出と最新分析」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第5号

北條 芳隆 2010 「関東の前期古墳」企画展関連講座2 資料

村田 章人 2006 「入館者から見たさきたま資料館の利用形態」『調査研究報告』 第19号



# さきたま講座アンケート

お手数ですがアンケートにご協力をお願いいたします。

1 どちらからいらっしゃいましたか。

( ) 市・町・村 県外 ( )

2 年齢についてお教えてください

ア 19才以下 イ 20～29才 ウ 30～39才 エ 40～49才  
オ 50～59才 カ 60才以上

3 さきたま史跡の博物館 にいらっしゃるのは、何回目ですか。

ア はじめて イ 2～5回 ウ 6～9回 エ 10回以上

4 「さきたま講座」に参加するのは、何回目ですか。

ア はじめて イ 2～5回 ウ 6～9回 エ 10回以上

5 今回の催し物をどのようにしてお知りになりましたか。

ア 彩の国だより イ ポスター、チラシ、パンフレット等 ウ 館からのお知らせ  
エ 友人から聞いた オ 新聞・テレビ・ラジオ カ ホームページ  
キ その他 ( )

6 今日の催し物はどうでしたか。

ア 大変良かった イ まあまあ良かった ウ ふつう  
エ あまり良くなかった オ つまらなかった

(エ・オに○の場合、その理由 )

7 職員の対応は、いかがでしたか。

ア たいへんよい イ よい ウ ふつう エ あまりよくない オ 悪い

8 あなたが興味のある催し物は何ですか。

ア 考古学の講座 (さきたま講座) イ 考古学のテーマ展示 (開催中)  
ウ 最新出土品展 エ さきたまこふんぐんけんがくかい  
オ 史跡探訪 カ その他 ( )

9 今回の講座に参加されたご感想・ご意見があればお願いします。

-----  
-----  
-----

ご協力ありがとうございました

## さきたま風土記の丘整備事業と柳田敏司氏

関 義 則

当館の保存整備協議会委員を長らく務められた柳田敏司氏が平成23年8月17日に逝去された。享年85歳であった。

柳田氏は、約半世紀にわたり史跡埼玉古墳群の保存整備や古墳公園の設置・運営に尽力され、その功績は計り知れない。そこで、古墳公園の歴史と氏の足跡を簡単に御紹介し哀悼の意を表すこととしたい。

埼玉古墳群は、昭和13年に国の史跡に指定されたが、指定後も指定を示す標識の石柱が設置されただけで、しばらくは特に手を加えられることもなく、水田の中で樹木に覆われてひっそりと佇んでいた。

戦後しばらくは県北地域も長閑な田園風景が広がっていたが、昭和30年代も後半になると高度経済成長による開発の波が急速に押し寄せた。

当時、新進の中学校教員であった柳田氏はその専門を請われて、昭和31年度に県教育局社会教育課の中に新たに設置された文化財保護係の勤務となり、その後も学校現場に戻ることもなく、昭和36年度からは文化財保護係長として高度経済成長に伴い急増した開発行為と文化財の調整に奔走されていた。その一方で、柳田氏は指定文化財の保護・活用にも意をそそぎ、とりわけ早くから国の史跡になっていた埼玉古墳群について保存整備の必要性を痛感されていた。

昭和39年12月4日には当時の文化庁記念物課の柳川覚治課長を埼玉古墳群に招いて自ら案内する傍ら古墳群の整備と活用を強く訴え、その熱意によって整備の必要性について言質を引き出すことに成功したことは、その後の埼玉古墳群の方向性を決定づけた。



風土記の丘整備前の埼玉古墳群

当時、史跡整備といえば、膨大な時間と経費また専門的な知識や技能を必要としたことから、奈良の平城宮跡や太宰府跡など全国的にも有名な史跡に限られ、しかもそれらの大半は国が主導するもので自治体が主体となっていくことなどは夢物語に近かった。

しかしながら、昭和30年代後半からの国土開発が急速に進展する中で、文化庁においても多様な文化財を各地域において一体的に保存と活用を図る必要があるとの認識が強まりつつあり、昭和41年度の概算要求に新規事業として用地の買い上げと整備が一体となった「風土記の丘」建設を盛り込むこととなった。県では、国の動向を睨みつつ埼玉古墳群の整備計画を立案するとともに、昭和40年12月には「風土記の丘」採択に向けて知事・教育長連名の陳情書を作成し、関係省庁及び県内選出国會議員への働き掛けを開始した。陳情にあたっては柳田氏は文字どおりその先頭に立って奔走された。その結果、年1件の風土記の丘建設補助が大蔵省において認められることとなったが、残念ながら初年度の採択は諸般の事情から宮崎県西都原古墳群に決定し、埼玉古墳群は涙を飲むこととなった。

柳田氏の回想録によれば、決定直後に文化庁記念物課に押し掛け、決定を覆すためには梃子でも動かないと言って、当時の関係者を大いに困惑させたという。氏の史跡整備に対する熱意と執念を感じさせる逸話である。その甲斐あってか、埼玉古墳群については用地買収のみ昭和41年度から先行して認められることとなった。

翌年度にはめでたく「風土記の丘」建設事業の第2号として国庫補助事業が採択された。県が計画した整備予定面積は約40haであり、当時としては破格ともいえる広大な規模であった。

採択に伴って、各古墳の整備事業が順次開始されるとともに、昭和44年秋には公園内に県立さきたま資料館も開館することとなった。開館にあたっては、古墳群内から出土したものをぜひ展示するとともに主体部も見学できるようにしたいとの機運が高まり、慎重に検討を重ねた結果、古墳群中で土取りによって半壊している稲荷山古墳が選ばれ、後円部の発掘調査が実施された。発掘調査にあたっては、柳田氏等が調査担当者となり、調査指導を東京大学教授齋藤忠先生等3人の専門家をお願いをして万全を期した。稲荷山古墳の調査は大型古墳の学術調査



昭和43年 稲荷山古墳発掘調査の現地説明会

として県内最初の事例となった。

古墳の調査からちょうど10年後の昭和53年に、稲荷山古墳から出土していた鉄剣から115文字の金錯銘文が発見されたことが契機となり、稲荷山古墳出土品の保存対策を検討する埼玉古墳群・同出土品保存対策協議会が設置された際にはその幹事を務め、辛亥銘鉄剣の地元での管理・公開を強



平成9年度 将軍山古墳保存整備協議会

く主張され、紆余曲折はあったものの県立さきたま資料館に国宝展示室を増設して異例ともいえる国保有のまま地元での公開にこぎつけた。

昭和40年代初頭に整備された「さきたま風土記の丘」も10数年が経過し、既往の整備の再整備や新たな整備の推進が望まれるようになり、昭和57年度から国庫補助を得て古墳群の保存整備事業が再び開始された。整備に当たっては保存整備協議会を設置し、有識者の指導を得ながら進めることとなり、県内の状況やこれまでの経緯に精通していることを踏まえ当時県史編さん室長の柳田氏にも委員をお願いし、以来永らく座長を務められた。さらにまた、平成5年度には老朽化した資料館施設を見直す施設改善検討委員会の委員長もお引き受けいただいた。

このように柳田氏は、昭和39年度の風土記の丘建設計画当初から平成18年度に保存整備協議会委員を退任されるまで、40年以上にわたり史跡埼玉古墳群、さきたま風土記の丘(さきたま古墳公園)、さきたま資料館(現さきたま史跡の博物館)の整備と運営に関わり、事業推進を指導されてこられた。史跡埼玉古墳群の歩みは柳田氏とともにあったといっても過言ではない。

また、文化財専門職の先駆けとして、県内の文化財保護行政を主導し、多くの後進を育て、文化財の調整や保護、整備、活用に活躍する道を切り拓いたことも特筆されるべき事績である。

風土記の丘構想が端緒となった自治体による史跡整備事業は、近年ますます隆盛となり、各地でさまざまな規模の整備が進められている。歴史文化基本構想など、近年ではよりスケールの大きい整備の枠組みも整えられつつある。

このことは、文化財の価値を目に見える形にしなければ守ることがままならなくなったとい



平成5年度 施設改善検討委員会

うことと表裏の関係でもあり、関係者としては手放しでは喜べない。

けれども、保存整備に伴う学術調査によって各古墳の様相が次々と明らかになり、さらにその成果が展示や普及事業等に活用され、あるいはまた整備された古墳群を多くの方々が訪れ、憩いの場として大いに活用されている姿を目の当たりにするにつけ、その端緒を切り開いた先人の途方もない労苦を偲ばずにはいられない。

今日、さきたま古墳公園が約100haの計画決定区域を有し、未だ整備区域が全体の半分にも満たないものの、年間100万人の推定入れ込み数を誇り、公園内の博物館にも毎年10万人を超える来館者をお迎えできるのも、ひとえに柳田氏をはじめとする先人達が大変な熱意と御尽力によってその礎を築いてこられた賜物である。

職員一同、氏の御冥福をお祈りするばかりである。

埼玉県立史跡の博物館紀要  
第 6 号

---

平成24年3月2日 発行

発行 埼玉県立さきたま史跡の博物館

〒361-0025 埼玉県行田市埼玉4834  
TEL048-559-1111

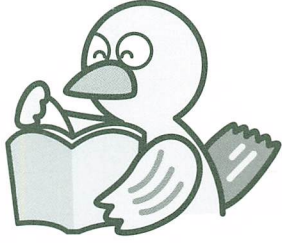
埼玉県立嵐山史跡の博物館

〒355-0221 埼玉県比企郡嵐山町菅谷757  
TEL0493-62-5896

印刷 朝日印刷工業株式会社

〒371-0846 群馬県前橋市元総社町67

---



埼玉県のマスコット  
コバトン

